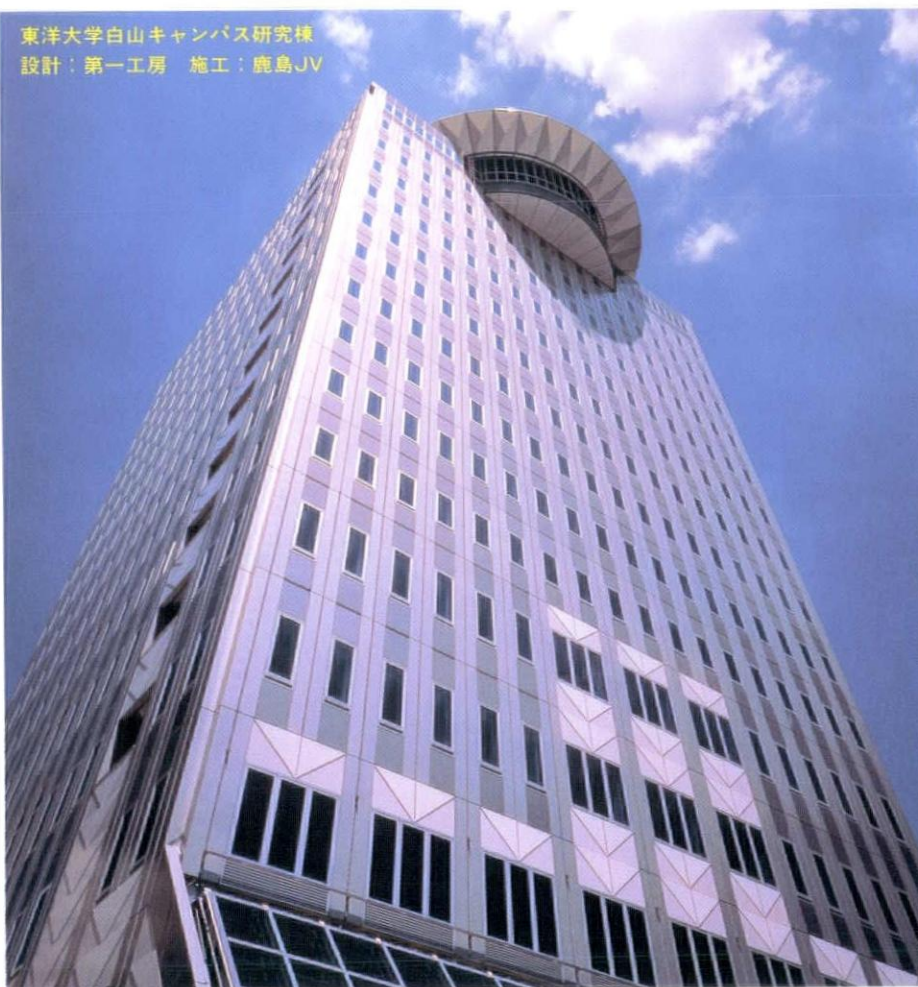


東洋大学白山キャンパス研究棟
設計：第一工房 施工：鹿島JV



外壁カーテンウォール：フッ素樹脂メタリック塗装CFRC（化粧目地切・塗り分け）

電力中央研究所横須賀研究棟
設計・施工：鹿島横浜支店



独立柱梁（現場打込み永久型枠）：フッ素樹脂メタリック塗装CFRC

新素材が語る、 都市芸術論。

インテリジェント、シンボライズ、複合都市開発と建築へのニーズが複雑をきわめるなかで、設計者の創造力は、より自由な表現手段を求めています。CFRC（炭素繊維補強コンクリート）をはじめ、わたしたちが開発した新素材は、高剛性、耐候性、軽量化とともに豊かな表現力をも達成。その加工の自由度は、設計者の思想が図面へと昇華していくなかで確かなポテンシャルを発揮します。未来への都市芸術論。それはきっと、あなたの感性とこの新素材から始まります。

- 優れた高引張・曲げ強度・高靱性・耐久性を同時に発揮。●エクステリア部材、屋上ルーバーなどシビアな耐久性を要求される部材に最適。●従来のPCより1/3～1/2も軽量。●CFRCをベースに、本石打込み・タイル打込み・フッ素樹脂のメタリック塗装など、各種テクスチャーを自由に表現。

- TV電波障害防止壁を新たに開発

株式会社 エフ・アール・シー

〒135 東京都江東区東陽6-3-2 TEL. (03)5632-6770 FAX. (03)5632-6765

SD

9510 | space
Design

スペースデザイン ISSN 0563-0991
第373号1995年10月1日発行
毎月1回1日発行
昭和40年2月5日第三種郵便物許可

環境に呼応する建築： シーザー・ペリの最新作

Architecture of Responce:
Recent Works of Cesar Pelli

すべての条件を高水準でクリアー

水槽には、耐震性、保温性、止水性、さらに高い衛生性など、様々な要素をハイレベル水準でクリアーし、メンテナンスも一段と容易にしたのが、ブリヂストンのFRP製スーパーウォータータンクです。

藻の増殖がなく衛生的

藻の増殖は光透過が原因ですが、設計用水槽照度率を0.06%以下にコントロールした《スーパーウォータータンク》は、藻の増殖がなく、非常に衛生的です。

■製品仕様

標準サイズ (高さ)	1.0m, 1.5m, 2.0m, 2.5m, 3.0m
標準仕様 (縦×横)	1m×1m～5m×5m
耐震仕様	3/5G仕様、1.0G仕様、1.5G仕様
保温仕様	単板型、保温型
標準色	クリム(フッセルNo. = 2.5Y%)
用途	飲料水槽、工業用水槽など

■設計条件

地震	水槽設計用水平震度 K_h : 7/5, 1.0, 1.5			
風圧	風速60m/秒			
積雪	積雪60kg/m ² を超えない構造仕様の場合は別設計となります) (積雪60kg/m ² を超えない構造仕様の場合は別設計となります)			
水圧	水槽高さ(m)	1.0	1.5	2.0
	パネル強度(kgf/cm ²) [※]	0.6以上	1.0以上	1.3以上
	常用水圧(kgf/cm ²)	0.07	0.12	0.16

※ノベル強度(水圧による破壊強度)

FRPパネル水槽
スーパー
ウォータータンク

株式会社ブリヂストン

建築用品販売部

東京都中央区京橋1-10-3 〒104 TEL.(03) 3563-6926

BRIDGESTONE

National/Panasonic

AV&C FTAP S

AUDIO
音響システム

VISUAL
映像システム

COMMUNICATION
通信システム

COMPUTER
コンピューターシステム

FOOD
食品流通システム

LIGHT
照明システム

AIR&AQUA
空調・水管理システム

PASSAGE
搬送システム

SOFTWARE&
SYSTEM
ソフトウェア・
システム

ここにはあります人と自然と技術の調和が

松下電器産業の建設エレクトロニクス技術は人に優しい環境創造を目指してシステム開発に取り組んでいます。そこには人と人・情報・空間をコンセプトに、明日の夢を描くまちづくりの思いがあります。

松下電器産業(株)システム営業本部
建設システム営業部

☎03-5460-2809

北海道支店 ☎011-222-5815

東北支店 ☎022-223-5111

首都圏建設
システム支店 ☎03-3436-5045

神奈川支店 ☎045-682-3701

中部支店 ☎052-951-6010

関西支店 ☎06-949-2251

中国支店 ☎082-247-5272

四国支店 ☎0678-21-3133

九州支店 ☎092-431-1100

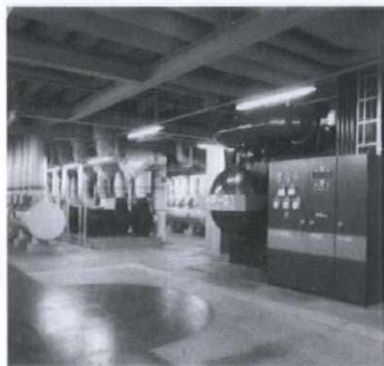
沖縄支店 ☎0988-53-2826

KANDENKO



快適な環境をお届けするのも ——関電工の技術です。

個別のビル・工場・住宅の空調から地域冷暖房まで



生活の場、生産の場、ビジネスの場、憩いの場…
…。人々の営みの場で、いま求められているのが、
省エネルギー、省資源を追求した快適環境です。
その施設の構築とメンテナンスで関電工の技術が
活躍しています。割安な夜間電力や都市廃熱・河
川水等を利用した「蓄熱式ヒートポンプシステム」、
発電の際に発生するエネルギーを有効利用する
「コージェネレーションシステム」、複数の建物のエ
ネルギーを集中的に取り扱う「地域冷暖房システ
ム」などの技術で、関電工はお客様に経済的で快
適な環境の場をお届けしています。

関電工

お問い合わせは/環境設備部

本社：〒108 東京都港区芝浦4丁目8番33号

☎：NTT 03(5476)2111 TNet (4431)2111

時代が求める快適空間へ。

より経済的に、最適なリニューアルを実現する 確かな診断技術。

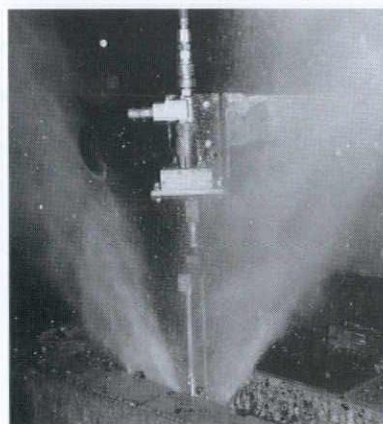
綿密な調査・診断により、リニューアルが必要な部位を的確に把握。リニューアル効果確認のためのプログラム、高効率な施工法の採用などにより、最少限の費用で、また短期間でご要望通りのリニューアルを実現します。



配筋非破壊システム

静かに、クリーンに、リニューアルをすすめる カームジェット工法。

高速水噴流により、床や壁のコンクリートのみを破碎。破碎したコンクリートやジェットの排水を完全回収するカームジェットシステムは、無振動、低騒音で粉塵も発生しません。静かで、クリーンなカームジェット工法なら業務を続けながらのリニューアルも可能です。



超高圧水を噴射するカームジェットのノズル

快適度を高める

アメニティの総合診断。

室内の温湿度分布、気流、粉塵、CO₂濃度、振動、照度など。快適性にかかわるさまざまな要素を系統的に診断。さらに問診からそれぞれの設備機器の性能診断にいたるまで、きめ細かに収集、解析、症状ごとに総合的に診断します。そしてトータルコンサルテーションを通し、設備機器や照明のオペレーションを実施、より快適な環境を実現します。

未来も快適に——リニューアル後の

事業収支評価システム。

リニューアル後の事業をさらに活性化、発展させるためには、綿密かつ複合的な視点をもつプログラミングが必要です。カジマでは、土地の所有形態から事業手法、建物規模、用途、資金調達など、さまざまな角度から検討でき、またビルオーナーとテナントといった異なった立場からも検討できる事業収支評価システムを採用。リニューアル後の事業の採算も予測したうえで、最適なプログラムで実行します。

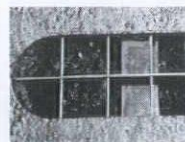
リニューアルならトータルな技術力と

豊富な実績をもつカジマにお任せください。

私たちは、単なる改修・補修ではなく建物そのものの活性化を図り、新たなビジネスチャンスを生み出す付加価値の高い空間づくりをご提案いたします。リニューアルなら多様なニーズに高度な技術と豊富な実績・ノウハウでお応えするカジマに、ぜひ一度ご相談ください。



床コンクリート破碎状況(カバー内)



鉄筋・配管が残された破碎後の床



多彩なニーズに応えるカジマのリニューアル技術。

R

E

N

E



in 鹿島

KAJIMA CORPORATION

本社：〒107 東京都港区元赤坂1-2-7

お問い合わせは

技 術 営 業 部 03(3404)2011

W

A

L

四季宴会

KARUIZAWA
MEETING
& PARTY



軽井沢

ホテル 鹿島/森

ホテルオークラチェーン

ご予約・お問い合わせ:

ホテル 鹿島/森 予約係

☎ 03(3478)6220

現地 ☎ 0267(42)3535(代)

FAX: 0267(42)5335

大興物産の海外建材シリーズ

No.4 ガラス



埼玉・バイオニア鶴ヶ島総合研究所

大興物産では、米国・ガーティアン社の製品をはじめガラスの国際調達を推進しています。

この製品のお問い合わせは、大興物産株式会社・海外建材事業本部へどうぞ
〒107 東京都港区元赤坂1-3-4 TEL.03-3423-2511 FAX.03-5474-6386

建設資機材の総合商社

鹿島グループ

大興物産株式会社

本店 〒107 東京都港区元赤坂1-6-4 安全ビル

本店 ☎(03)3423-2511 FAX(03)5474-6076
東京支店 ☎(03)3423-2511 FAX(03)3423-1915
横浜支店 ☎(045)212-3925 FAX(045)212-3996
名古屋支店 ☎(052)961-6171 FAX(052)961-6179
大阪支店 ☎(06) 762-5661 FAX(06) 762-1074

札幌営業所 ☎(011)231-6841 FAX(011)222-4074
東北営業所 ☎(022)219-6861 FAX(022)219-6867
関東営業所 ☎(048)668-0861 FAX(048)668-0863
関東営業所 (東京事務所) ☎(03)5632-6717 FAX(03)5632-6719

北陸営業所 ☎(025)247-2286 FAX(025)243-5248
広島営業所 ☎(082)249-9221 FAX(082)249-9270
四国営業所 ☎(0878)39-3191 FAX(0878)35-4722
九州営業所 ☎(092)441-2624 FAX(092)471-7996
シンガポール支店 ☎65-3440590 FAX65-3446714



ロビーラウンジ

ようこそ、クラシカル・エレガントな世界へ。

19世紀初頭のヨーロツパ様式で統一された本格的都市型ホテル。

すべてのファシリティに調度品に、そしてきめ細やかなおもてなしに漂う欧州の美意識。

ドアマンに迎えられホテルに一步脚を踏み込めば、

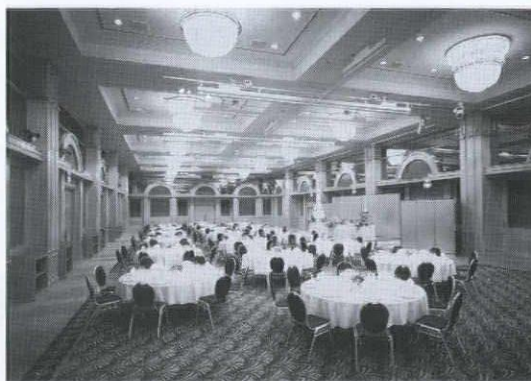
あなたの新しい物語がはじまります。

(客室&施設)

●ビジネス向き、女性向き、観光、ファミリー、個人滞在用と、目的に応じて選べる全404室。
(シングル¥15,000〜 ツイン¥25,000〜) ●ジャグジー、ヒーティングルームなどを付帯した
2,000㎡の“ガーデンプール”。●クラシカルなインテリアや絵画で統一された趣のあるロビー。
●個性的なステンドグラス、パイプオルガンを配したチャペル(3F)。ガーデンプールの一角
に設けられたガーデンチャペル(5F屋外)。厳肅な神殿(八幡殿=やひろでん)(3F)。●最
大800名様まで可能な大宴会場(永代)、中、小、さまざまな8つの宴会場。●最新設備を完
備したビジネスセンター。●心身の健康管理と増進、心の交流を目的とした新しいタイプの
ヘルスクラブ“ジ・イースト”。●都内初のホテル直結型多目的ホール“イースト21ホール”。

(レストラン&バー)

●フランス料理を主としたコンチネンタル料理……………【ブラスリー ハーモニー(2F)】
●本格的広東料理……………【中国料理 桃園(2F)】
●アフリカムードのメインバー……………【バー エレファント(2F)】
●旬の素材が織りなす食の芸術……………【日本料理 さざんか(21F)】
●四季折々の味覚…【鉄板焼 木場(21F)】 ●心に残る夜景…【カクテルラウンジ パノラマ(21F)】



大宴会場 永代

HOTEL
East
21
TOKYO

地下鉄東西線「東陽町駅」より徒歩7分。
東陽町駅〜ホテル間、ホテル専用シャトルバス運行。

株式会社 鹿島ホテルエンタプライズ
KAJIMA HOTEL ENTERPRISES, LTD.

ホテル イースト21東京

〒135 東京都江東区東陽6-3-3

TEL 03(5683)5683(代) FAX 03(5683)5775



欲しかったのは、この速さ。

世界最高クラスの2次元グラフィックス描画スピード

2D/3,800,000 shortvectors/s*

驚異の3次元グラフィックス能力

3D/750,000 polygons/s*

エンジニアのひらめきを世界最高クラスのグラフィックススピードでカタチにする、こんどのヨンパチ。



さらに快適なグラフィックス環境の実現をめざして、描画性能を一段と強化した48PXシリーズ。世界最高速領域の2次元グラフィックスをはじめ、3次元グラフィックスでは、エントリーマシンにおいても75万ポリゴン/秒という驚異のスピードを達成。CADや解析処理などの、2Dや3Dグラフィックスを駆使するアプリケーションソフトウェアもストレスなく走らせます。

◎世界最高速の2次元描画領域へ。業界標準のPCIバスを採用した48PXシリーズに2Dグラフィックスボードを接続することで、380万ショートベクトル/秒という群を抜く2次元グラフィックス描画スピードを駆使できます。

◎待望の3次元ワールドへ。3Dグラフィックスボードには、NECの最先端LSIテクノロジー(CMOS9)や最新のDSPをジオメトリエンジンとして搭載し、パイプライン構成などにより並列処理を効

率よく行えます。Open GL仕様を高速/高品質に実現するためにこのような最適なハードウェアアーキテクチャーを積極的に採用することでハイエンド3Dクラスの性能を実現します。

*それぞれ2次元及び3次元グラフィックスボード装着時のEWS 4800/320PXの数値です。shortvectors/s(ショートベクトル/秒):2次元、3次元グラフィックスの描画性能として使用されており、1秒間に何本の線分を描画することができるかを表す数値です。polygons/s(ポリゴン/秒):3次元グラフィックスの描画性能として使用されており、1秒間に幾つの多角形を描画することができるかを表す数値です。

UNIXワークステーション/サーバ

48
ヨンパチ
シリーズ

(グラフィックス新基準、^{ヨンパチ}48PXシリーズ登場。)

*UNIXはX/Openカンパニーリミテッドが独占的にライセンスしている米国ならびに他の国における登録商標です。
*X/OpenおよびXマークはX/Openカンパニーリミテッドの商標です。

X/Open
COMPONENT

X/Open
BASEPROFILE

お問い合わせは NECワークステーション・サーバ販売推進本部 TEL.03 (3798) 6282 〒108-01 東京都港区芝5丁目7-1

日本アス仕様

それぞれの味を生かし

防水仕様をすべて濃縮!!

メルタン21

カスタムEE

NPシート

ベストロン

NS防水

カナート



総合防水メーカー

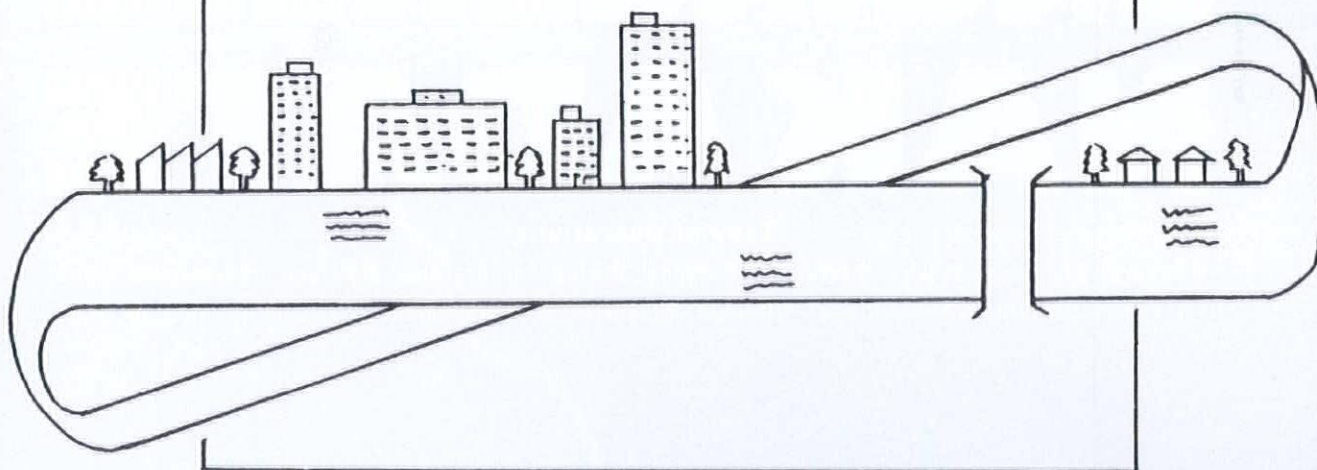
日新工業株式会社

営業本部 ■103/東京都中央区日本橋久松町9-2 ☎03(5644)7211(代表)

東京	☎03(5644)7221 (代表)	福岡	☎092(451)1095 (代表)
千葉	☎043(245)0201 (代表)	札幌	☎011(281)6328 (代表)
横浜	☎045(316)7885 (代表)	仙台	☎022(263)0315 (代表)
大阪	☎048(642)5811 (代表)	広島	☎082(294)6006 (代表)
名古屋	☎06 (533)3191 (代表)	松山	☎0878(34)0336 (代表)
	☎052(933)4761 (代表)	金沢	☎0762(22)3321 (代表)

水環境を

クリエイトする



株式会社
西原
衛生工業所

東京都港区芝浦3-6-18
TEL.(03) 3452-7441 大代

支店/札幌・東北・新潟・東関東・横浜・名古屋

あなたのそばに、
私はいます。

HUMAN ELECTRIC ENGINEERING NAKADATE

Type of Operations

●General Electrical Work ●Internal / External Wiring for Lighting & Power ●Electrical Work
for Power Stations & Substations ●Design, Execution & Management of Telecommunication Work

テクノロジー&システム

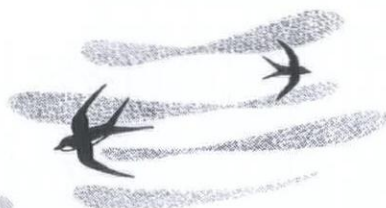


中立電気株式会社

〒150 東京都新宿区新宿1丁目13番12号 電話 03(3356-2511)代

空気の歳時記

ツバメが渡ってきたか確かめたくて
入り江に近い河原を歩く。
頬に当たる風は冷たいが、
水面の眩さはもう紛れもなく春だ。



春

目をこらすと
何の稚魚だろうか
スイスイと元気である。
何万年も繰り返されてきた
自然の鼓動を体の奥に
感じる瞬間。
ビューイ、ビューイ。
澄みわたった空気に、
待望の囁りを聞いた。

林道を逸れて、森へ深く入る。
額に汗をにじませながら、
一步一步標高を稼ぐ。

セミの合唱に負けじと

梢で声を

張り上げているのは

クロツグミだろうか。

樹齢は数百年に

及ぶだろう、

ブナの巨木を見上げると、



夏

突然、時間の感覚が薄れていく。
鬱蒼とした空気のなかで
息もつまるような濃緑の季節。

尾根を越えてくる風の冷たさで
季節の深まりを知る。

山の秋は短い。

頂から麓へ向かつて

早くも赤や黄に色つきはじめた

林の中を歩くと、

よく南へ旅する渡り鳥に出会う。



秋

例えば、エゾビタキ。
ヒラリヒラリと木の葉のように
舞いながら
フライ&キャッチを繰り返す
この鳥が姿を消す頃、
あたりは冬の長い眠りに入るのだ。

休日。ちやうと早起きして

近くの山に足を運んでみた。

枯れ落ちた木の葉を

踏むたびに

ガサッガサッという音が

林全体に響き渡る。

見上げると

餌を探しているのだろうか、

シジュウカラの仲間の群れが

盛んに鳴き交わしながら

枝から枝へ飛び回っている。



冬

凍てついた空気のなかで
精一杯生きている小さな命。

日本の四季の空気を、ずっと考えてきています。

◆新菱冷熱

SHINRYO CORPORATION

本社：〒160 東京都新宿区四谷2-4 ☎03-3357-2151 代 支社：札幌・仙台・千葉・横浜・名古屋・富山・大阪・広島・福岡

個性が集まって大きなエネルギー

サッシ・カーテンウォールの総合メーカー



私たちは、今、ひと昔前の科学技術の進歩を強調するだけの時代から
“テクノロジーとヒューマニズムの調和”をめざす新しい時代をつくろうとしています。

とくに人間の生活空間を創造する建築業界においては、
こうした先進性が強く要求されていますが、その中で、生活空間としてのアメニティ（快適さ）や、
建築物内外の両面にわたるデザイン・外観・色彩など
美的付加価値の重要性もますますそのウェートを高めています。

弊社は斬新で、確かな品質の製品を供給することを通して、
社会へ大きく貢献していきたいと考えています。



昭和サッシ

昭和鋼機株式会社

本社 ▶ 〒174 東京都板橋区前野町 6 丁目 1 番 10 号
☎ 東京 (03) 3969-1101 (代表)

所沢工場 ▶ 〒354 埼玉県入間郡三芳町大字上富 1163

明石工場 ▶ 〒673-01 明石市二見町南二見 21 番 3 号

昭和鋼機サービス株式会社 ▶ 〒174 東京都板橋区前野町 6 丁目 1 番 10 号

大阪支店・札幌営業所・仙台営業所・横浜営業所・名古屋営業所・九州営業所

人とエネルギーの間に私たちの技術があります。

TOENEC

21世紀をリードする総合設備企業

私たちトーエネックは、先進の総合設備企業として、
電気工事・情報通信・冷暖房空調事業の分野を
通じて豊かな環境づくりの提案をしております。

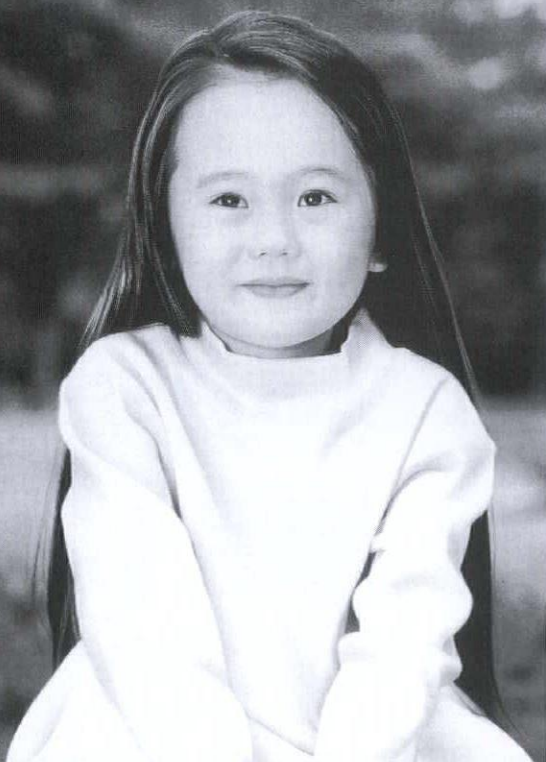
株式会社 トーエネック

(旧東海電気工事株式会社)

本店／名古屋市中区栄1-20-31 〒460 ☎052-221-1111

支店／東京・大阪・名古屋・岡崎・静岡・三重・岐阜・長野・飯田

自然より自然に、
あなたを包みたい。



あなたの、いちばん心地良い場所はどこですか。

きっと、多くの方が、

大自然の中をイメージされることでしょう。

私たちは、そんな快適さをあらゆる建物の内に
創造していきたいと考えています。

人間は、あくまでも自然の一部。その事実を大切に、
新しい最適環境を創造していきたい。

もっとナチュラルに、

いつもあなたのそばに、ダイダンです。

Always With You.

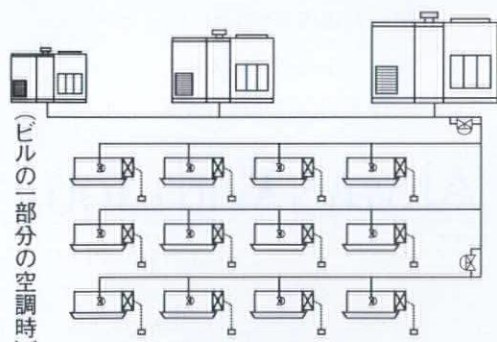


あつ
もつたない。



ひと部屋だけの空調に
全てのアロエースが
稼働するのは

必要な台数しか稼働しません。



矢崎のスーパーアロエース、アロエース・タフはともに高効率COP1.02。この高効率をい
かんなく発揮するのが異容量アロエースの組み合わせによる集中設置です。デジタルコン
トロールパネル[DCP]のご利用により部分空調時には小さな「アロエース」が運転。建物
全体を空調すれば自動的に全ての「アロエース」が運転、経済性の優れた空調が実現。

20%負荷運転でもCOP1.02を維持。



デジタルコントロール
パネル



スーパーアロエース



アロエース・タフ

矢崎総業株式会社

本社：〒108 東京都港区三田1-4-28 三田国際ビル17F TEL.03-3455-8812
空調機器営業事業部：〒435 静岡県浜松市子安町1370 TEL.0534-61-5112

札幌支社 TEL.011-852-2914 名古屋支社 TEL.052-833-8415 中国支社 TEL.0829-23-2115
仙台支社 TEL.022-284-9115 大阪支社 TEL.06-458-4825 四国支社 TEL.0878-33-3336
東京支社 TEL.03-3298-3140 北陸支社 TEL.0764-41-6516 九州支社 TEL.092-411-4835

鹿島出版会
東京都港区赤坂6-5-13
電話:03-5561-2111(代)
振替:00160-2-180883

年間定期購読料
25,000円(特別定価号+送料込み)

SDバックナンバー常備店
[東京]
八重洲ブックセンター
03-3281-8203
三省堂本店(神田)
03-3233-3314
書泉ブックマート
03-3294-0011
紀伊国屋本店 03-3354-0131
大盛堂書店 03-3463-0511
[大阪]
旭屋書店本店

柳々堂 06-443-0167
[札幌]
旭屋書店 011-241-3007
[横浜]
有隣堂本店 045-261-1231
[京都]
大龍堂書店 075-231-3036
[大学生協内書店]
東北工業大学 東京工業大学
法政大学工学部 早稲田大学
理工学部 関東学院大学

9310 リカルド・ボフィール 3000円
スペインやパリに建てられた新作を中心に、テクノロジーと古典主義スタイルの融合した新しい建築空間を紹介する。作品バルセロナ空港ターミナルビル、マドリッド・コンGRES・パレス、他

9311 アンソニー・ラムズデン/DMJMの新作 1950円
アメリカの大組織事務所DMJMの新作を紹介。細江勲夫の新作。ブルーノ・タウト再発見。ウィットゲンシュタインのストンボロー邸。田窪恭治/サン・ヴィゴール・ソ・ミュー礼拝堂プロジェクト

9312 SDレビュー1993 2400円
第12回SDレビュー誌上発表。クライン・ダイサム・アーキテクト、和田克明、計画意匠研究所/片木篤十有馬立郎、吉本剛/吉本剛建築研究室、他。関西国際空港旅客ターミナルビル

9401 原 広司 3500円
地球外建築、空中都市、梅田スカイビル、JR京都駅、原邸、グラーツ・影のロボット、ヤマトインターナショナル、他。論文:原広司、B.ボグナー、三宅理一、他。写真:宮本隆司、大野繁

9402 台湾現代設計観察 1950円
建築と都市を中心とした台湾現代デザインを紹介。台湾建築:李祖原、呉増榮、潘冀、陳瑞憲、他。グラフィック:劉開、陳龍宏。写真:陳春緯。取材・監修:村松伸、小嶋一浩

9403 バイオクライマティックタワー 1950円
自然環境との適合を課題とした高層建築を模索するマレーシアの建築家ハムザ&ヤング。文:池田武邦、ケン・ヤング、他。[都市を考える—The Cell Cityの提案] 大都市を複数の細胞に区分する新提案

9404 堂夢の時感/木島安史の世界 3000円
作品:寿聖庵、孤風院、YAS居、球泉洞森林館、折尾スポーツセンター、設計競技作品、他。文:木島安史、桐敷真次郎、木村俊彦、高橋青光一、橋本文隆、他。略年譜、作品データ、執筆一覧

9405 東ドイツの近代建築 1950円
旧東ドイツの近代を席巻した表現主義建築を、35都市にわたる調査をもとに紹介。クリンゲンベルクのダム(H.ヘルツィヒ)、アインシュタイン塔(メンデルゾーン)、他。文+写真:長谷川章

9406 アートがつくるワークプレイス 2500円
「働く人々のための空間とアート」に着目し、海外の事例を紹介。文:南條史生、D.F.ハンセン。アーティスト:アンドレア・ブラム、他。企業等:IBM、プリティッシュ・カウンシル、他

9407 ビーター・ウォーカーの世界 2200円
アメリカ・ランドスケープ・アーキテクトとしての彼の初期から現在にいたるまでの主要作品を紹介。東京海上東日本研修センター、IBMクレアレイク、バーネット・パーク、ロングエーカー公園、他

9408 マッシミリアーノ・フクサス 1950円
フランスを中心に展開する近作を紹介。ロアン・ヨーロッパ建築研究所、他。文:D.マンドレリ、堀池秀人、他。[異界の僧院—モルドバのルーマニア正教会堂] 写真:平剛、文:山崎揚史

9409 思考と建築・都市:アメリカ東海岸の新たな動向 1950円
B.シャーデル&キブニス、マイケル・ソーキン、他。文:松嶋強、他。[「手法」から「縁起」へ/吉川油脂寄居舎] TAO ARCHITECTS/野田俊太郎、写真:堀内広治



9410 トロハの遺した構造と空間
鉄筋コンクリートを自在に使い、表現の素材として追求した、エドアルド・トロハの遺作を紹介。[芸術都市への蘇生/イタリア・ジベリーナの試み] 地震で全壊した同市の復興プロジェクト
1950円



9411 シティ・ターミナルの空港建築
世界22の空港を挙げ、ターミナルビルの技術的、デザイン的可能性を探る。シャルル・ド・ゴール、スキポール、ヒースロー、ソウル・メトロポリタン、関西国際空港、他。文:ディヤン・スジック、他
3500円



9412 SDレビュー1994
第13回SDレビュー誌上発表。荒木正彦、J.ビザル+P.ルーゲ、吉松秀樹、石黒由紀+田堀繁、遠藤秀平、城戸崎和佐、中村勇大、他。[国際競作プロジェクト/オシヴィエンチム孤児院]
1950円



9501 山本理顕
作品:緑園都市、岩出山町立統合中学校、痴呆性老人デイケアセンター、保田窪第一団地、他。写真:北嶋俊治、大野繁。論文:山本理顕、宇野求、T.ヘネガン。開談:横田彦+植田実+山本理顕
3000円



9502 南イタリアのバロック建築
地中海の島シチリアとプーリア地方サレント半島のレッツェを中心に、南部イタリアのバロック建築を紹介。掲載都市:パレルモ、シクリ、他。写真:小野一郎。文:竹山博英、長谷川正次、岡田哲史
1950円



9503 集合住宅の現風景
近年、集合住宅を多く手掛けてきた建築家たちの代表作・近作を紹介する。文・作品:荒木正彦、遠藤剛生、大野秀敏、富永謙、松永安光、元倉真琴。座談会:植田実+室伏次郎+松隈洋
1950円



9504 テクノスケープ
テクノロジーが作り上げた造形や景観を通して、建築・都市デザインへの新たな視線を提示する。文:宇野求、岡河貢、永瀬雅、A.ロジェ、他。座談会:中村良夫+三谷徹+宇野求。東京湾マップ
3000円



9505 メガ・アーキテクチャ
巨大建築を多く手掛けたポール・アンドルーの新作を紹介。シャルル・ド・ゴール空港、TGV-RER駅、他。対談:安藤忠雄+P.アンドルー。[神戸外国人居留地の形成とその展開] 文+構成:坂本勝比古
1950円



9506 デジタル・アーキテクチャの可能性
インタビュー:原広司、伊東豊雄、N.M.ディナリ、他。CAD研究室 将来の可能性:笹田研究室、両角・位寄研究室、他。[自然と共存する家具] 写真:浅川敏
1950円



9507 柳澤孝彦/美術館の空間とディテール
作品:東京都現代美術館、富岡市立美術館、郡山市立美術館、他。文:鈴木博之、内藤廣、青木淳、大野秀敏。座談会:宇佐美圭司+杉木博+柳澤孝彦。写真:村井修
2700円



9508 まちのパブリックスペース
人々の日常生活と密着した公共施設である文芸・公衆トイレ・駐車場・橋・公園などを、アトリ作家の近作からみる。作品21点。文:中川理、仙田満。オンライン座談会:青木淳+中川理+花田佳明
1950円



9509 丹下健三
最新作シンガポールの超高層ビル[UOBプラザ]、新宿の新たなスカイラインを構成する[新宿パークタワー]を中心に、東南アジア、ヨーロッパ、国内のプロジェクトを通して丹下健三の現在を紹介。
3800円



アルヴァ・アアルト

巨匠A.アアルトの全主要作品を掲載した総特集。A.アアルトのデザイン・ヴォキャブラリー：武藤 章、アアルトの年表1899-1976、アアルト建築所在一覧。

3090円



菊竹清訓

メタポリスト菊竹清訓の初期から1980年までの作品集。第三世代の建築/とりかえ論1950-1960年/方法論の時代1960年-1970年/私の中の菊竹清訓の作品：内井昭蔵、他/作品データ・主要作品分布図。年表、他。

3090円



白井晟一

孤高の建築家・白井晟一の珠玉の作品集。懐徳館、ノアビル、聖アキラ館、昨雪軒、屏別山家、虚白庵、他。論文=磯崎新、針生一郎、浅野敏一郎、白井昱磨。座談=大江宏+藤井正一郎+宮内嘉久。作品文獻年表1935-1975年。

3605円



象設計集団

独自の造形理念により常に新鮮な作品を生み出し続ける象設計集団の初めての作品集。そのユニークな建築群の生々しい姿を捉える。安佐町農協市民センター、名護市庁舎、宮代町立笠原小学校、進修館、他。論文=荒俣宏、宇佐美圭司、他。

4000円



横 文彦 ②

横文彦の80年代の活動を知る第2作品集。そこには増々精緻さと多彩さを加えた作品群が見て取れる。スパイラル、藤沢市秋葉台文化体育館、前沢ガーデンハウス、慶應義塾日吉図書館、電通大阪支社、京都国立近代美術館、他全21作品。

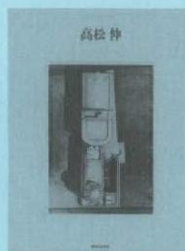
4326円



伊東豊雄

風のように、光のように変化する建築。独自の感性で育まれた作品群、その初期から1986年までの軌跡。中野本町の家、シルバー・ハット、レストランノマド、馬込沢の家、風の塔、東京遊牧少女の家具、ホンダクリオショールーム他。

3914円



高松 伸

高松 伸

88年度建築学会賞受賞作のキリンプラザ大阪を中心とし、1988年までの全主要作品を一挙掲載。精緻なる細部と大胆な素材の扱い、独特な造形により、延ぎ込まれた独自の作品を創り続ける高松伸の世界を紹介する。織坪 I、III、他。

3800円



早川邦彦

プロジェクト、商業施設、都市型複合建築、集合住宅、住宅、コンペ案まで、初期の作品から1988年までの全主要作品を一挙に紹介した早川邦彦の初作品集。SKY VILLAGE、ラビリンス、成城交差点の家、アトリウム、他。

4300円



ドイツ表現主義の建築

1920年代のドイツを席捲した表現主義の嵐。そこにはレンガとガラスを素材とした自由奔放な造形と多様な表情をもった建築が生まれた。近代建築誕生の母体となり、現代にも影響を与える表現主義建築の全容を紹介。B.タウト、他。

3300円



続・木造建築の現在

海外61作品、国内13作品の木造建築を紹介。豊かで暖か味のある空間を生み、またあらゆる空間構造に対応できる木構造を再評価する。インタビュー：坪井善勝、杉山英男、内田祥哉。対談：今川憲英×安村基。

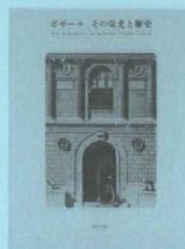
3708円



ブルーノ・タウト

1933-36年滞日期間の活動を中心に、没後40年を記念した特集。作品=熱海の家、ポスボラス海峡に臨む自邸、ヴァイネルト通りの集合住宅、グレル通りの集合住宅、他。タウトの工芸品と著書、他。

2575円



ボザール：その栄光と歴史

ボザールの全貌を紹介。アカデミーの功罪：高階秀爾、ボザールその歴史と思想：三宅理一編、ボザールの成立とネオ・グレコの形成、折衷主義の世界、近代の憂鬱、戦後のボザール、バリ・オペラ座の図面と写真、他。

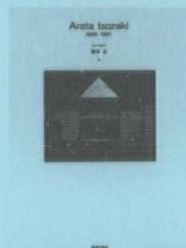
2575円



横文彦のディテール/TEPIA

機械産業情報会館(TEPIA)というハイテクの殿堂にふさわしいデザインを支える、精密かつダイナミックなディテールの仕組みを写真とドローイングの構成で解剖する。横文彦のディテールとしては初の作品集。

6800円



磯崎新 ③ 1985-1991 part 1

キーワードを軸に自らの作品をいくつかの流れに分けて、つくばセンタービル以来、1985-1991年の作品群を紹介。水戸芸術館、サンジョルディバレス、お茶の水スクエア、他。

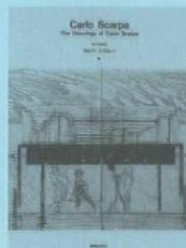
4800円



磯崎新 ④ 1985-1991 part 2

part1同様、自らの「自註」と共に作品を紹介してゆく。ティーム・ディズニー・ビルディング、北九州国際会議場、シュトゥットガルト現代美術館、バラディウム、[蝶々夫人] 舞台美術、他。

4500円



カルロ・スカルパ図面集

プリオン家墓地进行と主要作品のドローイング約150点を収蔵。プリオン・ヴェガ墓地、フェルトレの遺跡博物館、ヴェネツィア大学文学・哲学部校舎増改築、他。文：豊田博之、カルロ・スカルパ、他。

3500円



安藤忠雄 ⑤ アンビル・プロジェクト

'70年代からの見逃せないアンビル作品29点を紹介。JR京都駅改築設計競案、岡本ハウジング、I計画、伊豆プロジェクト、水の劇場、中之島プロジェクトII、Iギャラリー、大淀の茶室、他。

3800円



都市デザイン | 横浜

横浜市の20年にわたる都市デザイン活動の足跡を辿り、これからのアーバンデザインの課題と展望を探る。座談会：都市づくりの新局面へ向けて、横文彦×森原敬×小澤恵一、他。

5000円

環境に呼応する建築：
シーザー・ペリの最新作編集長：相川幸二
副編集長：浜地三千世
編集スタッフ：
寺田真理子 高木伸哉
山田良 大野由美
アドバイザー：伊藤公文発行人：河相全次郎
編集人：長谷川愛子発行所：鹿島出版会
〒107 東京都港区
赤坂6丁目5番13号
電話：
(03) 5561-2551 営業
(03) 5561-2555 編集
FAX：
(03) 5561-2561 営業
(03) 5561-2565 編集
TELEX：
02422467 KAJIMA J
振替00160-2-180883番印刷・製本：
凸版印刷株式会社
〒174 東京都板橋区
志村1丁目11番1号
電話：
(03) 3968-5111 案内取次店：トーハン・日販・
大坂屋・太洋社・
栗田出版販売・誠光堂・
鈴木書店・西村書店・中央社定価：1,950円
[本体1,893円]年間直接購読料：25,000円
特別定価号+送料込み表紙：NTT新宿本社ビル
表紙写真：門馬金昭
表紙デザイン：小泉均

6	アジアおよび海外諸国での設計を通して	シーザー ペリ
10	NTT新宿本社ビル	
20	シーホーク ホテル & リゾート	
30	シーザー・ペリの建築	槇 文彦
33	クアラルンプール・シティー・センター デル ボスケ 香港コンベンション・センター リパブリカビル キャナリーワーフ・タワー 駅舎および複合施設 新台中シティー・センター ハイグ・タワー アバンドイバラ 埼玉アリーナコンペ応募案 生産性国際交流センター	
56	シーザー・ペリ——そのデザインの変遷	片岡博之
61	ランドマーク・グラフィティ 「タワーアート in 通天閣：ヴァナキュラーな電脳都市」展より	
62	野村正則 鈴木達郎 中崎宣弘 高田有子 ウエダリクオ 原田 要 大高 亨 持田総章 橋本 清 中川周士 林 宣子 永井清一郎 中野節子 植松美早 塔本賢一 石原 薫 太田直樹	
72	見える塔、見えない塔 「タワーアート in 通天閣：ヴァナキュラーな電脳都市」の提起するもの	鴻 英良
74	細田みぎわ 原田 明 戸田潤也 橋本菊實 遠藤秀平 新宮 明 丸谷勝也 末松利紀 小山隆治 中村勇大 川北健雄 吉村史郎 吉井康晴 橋本 完 中井清志 長坂 大	
84	塔とリアリティ	飯島洋一
86	高瀬義夫 平田洋一 戸矢崎満雄 大野良平 葉山 勉 土居英夫 鹿間厚次郎 橋 昭信 濱田龍明 夏原晃子 新田正樹	
93	対談： 新世界と通天閣をめぐるって	東 孝光 + 橋爪紳也
98	連載：apple tomology MOVE FORM トムの時空形象学 1 DONONACONTAHEDRON	戸村 浩
101	ニュース： ひそやかな空間の詩 ダニエル・ラリューの現代ダンス	佐藤まいみ
105	新刊紹介	
106	書評	
108	お知らせ	
112		
110	展覧会レポート： "digit"展——デジタルな非物質性	北村 淳
111	展覧会レポート：「E.T.C.J.A.——現代日本建築における新たな潮流」マレーシア展 アジアの隣人たちをもっと知るために	クラバット・ヤントラサ
115	海外建築情報リミックス：ディテール研究 その3 屋根	

Special Feature:

Architecture of Responce: Recent Works of Cesar Pelli

Chief Editor: Koji Aikawa
Editor: Michio Hamaji
Associate Editors:
Mariko Terada
Shinya Takagi
Ryo Yamada
Yumi Ohno
Adviser: Kobun Ito

Publisher: Zenjiro Kawai
Executive Director:
Aiko Hasegawa

Published by
Kajima Institute Publishing
Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka,
Minato-ku, Tokyo 107,
Japan
TEL:
03.5561.2551 [Management]
03.5561.2555 [Editing]
FAX:
03.5561.2561 [Management]
03.5561.2565 [Editing]
TELEX:
02422467 KAJIMA J

Printed in Japan

This Copy: ¥1,950
¥30,000 a year
¥50,000 two years

Order Form: Page 128

Cover: NTT Shinjuku
Headquarters Building
Cover Photograph:
Kaneaki Morima
Cover Design:
Hitoshi Kozumi/NID

6	Working in Asian and other Countries Overseas	Cesar Pelli
10	NTT Shinjuku Headquarters Building	
20	Sea Hawk Hotel & Resort	
30	The Architecture of Cesar Pelli	Fumihiko Maki
33	Kuala Lumpur City Center Phase I Del Bosque Hong Kong Convention Center Republica Building Canary Wharf Tower, Assembly Building and Light Railway Station New Taichung City Center The Hague Tower Abandoibarra Saitama Arena Competition Institute of Productivity Relations	
56	The Changing Designs of Cesar Pelli	Hiroyuki Kataoka
61	Tower Art in Tsutenkaku: Tron in the Vernacular	
62	Masanori Nomura Tatsuro Suzuki Nobuhiro Nakazaki Yuko Takada Rikuo Ueda Kaname Harada Tohru Ohtaka Soshio Mochida Kiyoshi Hashimoto Shuji Nakagawa Yoshiko Hayashi Seiichiro Nagai Setsuko Nakano Misa Uematsu Kenichi Tohmoto Kaoru Ishihara Naoki Ohta	
72	Reality and the Tower	Hidenaga Ohtori
74	Migiwa Hosoda Akira Harada Junya Toda Kikumi Kusumoto Shuhei Endo Akira Shinguh Katsuya Marutani Toshinori Suematsu Ryuji Koyama Isamu Nakamura Takeo Kawakita Shirou Yoshimura Toshiharu Yoshii Hiroshi Hashimoto Kiyoshi Nakai Dai Nagasaka	
84	Visible Towers, Invisible Towers: Ideas from the "Tower Art at Tsutenkaku" Exhibit	Yoichi Iijima
86	Yoshio Takase Yohichi Hirata Mitsuo Toyazaki Ryohei Ohno Tsutomu Hayama Hideo Doi Kojiro Shikama Akinobu Tachibana Ryumay Hamada Teruko Natsuhara Masaki Nitta	
93	Discussion: Shinsekai and the Tsutenkaku	Takamitsu Azuma+ Shinya Hashizume
98	Series: MOVE FORM apple tomology 1 DONONACONTAHEDRON	Hiroshi Tomura
101	News: Contemporary Dance: Daniel Larrieu "Mobile ou le Miroir du Château"	Maimi Sato
105	Book Information	
106	Book Review	
108	Announcements	
110	Exhibition Report: From the exhibition of "digit"	Jun Kitamura
111	Exhibition Report: Emerging Trends in Contemporary Japanese Architecture Getting to know our Asian neighbors	Kulapat Yantrasast
115	Eminent Works Abroad: The Study of Detail 3 Roof	

特集

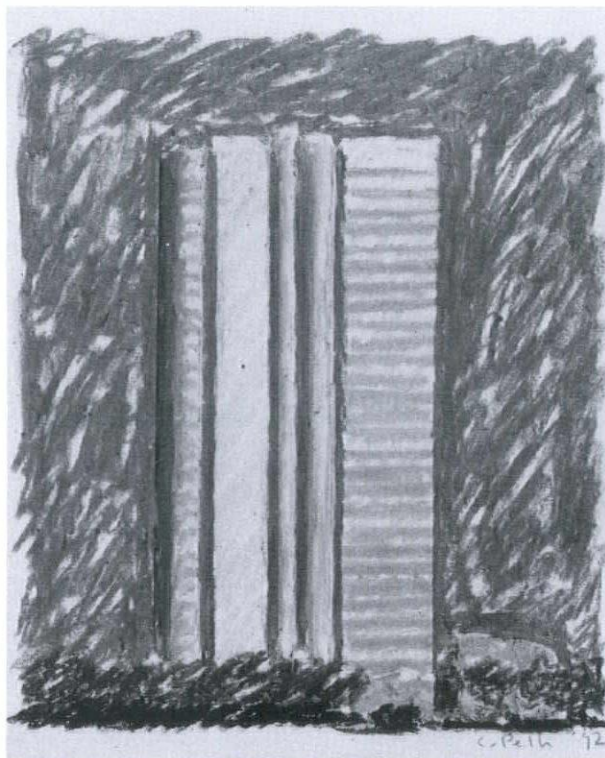
環境に呼応する建築

シーザー・ペリの最新作

Special Feature

Architecture of Response

Recent Works of Cesar Pelli



スケッチ：NTT新宿本社ビル Sketch: NTT Shinjuku Headquarters Building

立て続けに日本でシーザー・ペリの作品が完成した。

そしてさらに世界各国でプロジェクトが

進行している。

これらの作品には、ペリの一貫した設計思想が

込められている。

それは建築の建つところの地域性・社会性など、

環境に呼応する建築がめざされている。

本特集では、アジアを始めとしペリのアメリカ国外で展開される

新作・プロジェクトを紹介し、

そのデザインと設計思想に触れる。

アジアおよび海外諸国での設計を通して

シーザー・ペリ／訳=光井 純

遠い異国で仕事をするということは、若い建築家にとって非常にロマンティックで魅力のあることであり、わたし自身も例外ではなかった。特にアジアで仕事することは、最もエキゾチックな可能性に富んでいることであった。現在私は、幸運にもアジアを含めたいくつかの遠隔の地で実際に建つ建築物を設計する機会に恵まれているわけであるが、例に漏れず若いときに夢見たこととは随分違うことを経験することになっている。殆どの場合、わたしが予想したよりも仕事は面白く楽しいのであるが、いつもロマンティック、エキゾチックというわけにはいかない。結局のところ、世界中どこであっても大型の建物の設計や建設に共通の様々な問題点に遭遇することになるし、仕事を達成した満足感といったことについてもかなり共通したものがあると考えている。

アジア地区における私の最初の仕事は、東京の〈アメリカ大使館〉であった。敷地を最初に訪れたのは1971年である。敷地見学を行い、大使館の方々と打ち合わせをすると同時に、東京という都市、そして特に優秀な日本人建築家の設計による建物をできるだけ見ることに時間を費やした。大使館が、日本の建設会社およびその職人達によって建てられるということから、日本の優秀な建築家たちの仕事の中でも特に材料の使い方とディテールに私は非常に興味を持っていた。

そして、私にとって一番重要であったのは、京都で桂離宮を含めて、多くの寺社を3日間という短く忙しい時間ではあったが、訪ねたことであった。そこで私は尊敬の念を抱いていた日本建築を初めて見たわけであるが、実際に見ることによって、それまで私が写真などから理解していたよりもずっと深い次元において、日本建築の美しさを理解することができたと考えている。日本建築のデザインの質の高さ、その洗練度のすばらしさ、そして自然と建築の関係の完璧さに触れて、私は自問自答した。「このようなすばらしい建築文化をもった国でいったいどのようなデザインをすればいいのか」。しかしながら一方で、その当時に東京で建設された建物のデザインの多くは感心できるものではなかったし、殆どは短時間に十分なデザイン上の配慮を抜きにし

て作られたものであった。

しかし、最近20年間に東京で建設された普通の商業ビルの質は随分向上していると私は考えている。

建物はそれが建てられる場所のもっている建築文化の最良の部分を尊重し、また関係性を維持したものでなくてはならないと考えている。これは〈アメリカ大使館〉の設計に当たって、私の考え方のベースになっている。もうひとつの大事な側面は、大使館は日本で建つ建物としてデザインされてはいるが、日本のための建物ではなく、治外法権のアメリカの地に建つ、アメリカという国を象徴するアメリカのための建物だということである。同時に大使館の建物はアメリカ政府による海外建築物のための非常に複雑な設計条件にも従う必要があったし、東京とアメリカの建築に関する法規（特に東京とカリフォルニアの耐震規準）に従う必要があった。私のコンセプトは、アメリカというものを表現しながらも日本建築の文化や特徴に対しても考慮を払ったものとするのであった。私はアメリカ建築をデザインしながらも、建設地のもっている文化を尊重してデザインをしたいと考えた。同時に東京という都市の状況に配慮した良質の建物をデザインし、東京という町の性格づくりに貢献したいと考えていた。実際日本の建築家の友人で大使館の建物が日本建築の性格を配慮していると言ってくださる方は少なくない。私はこれは単なる友人としての弁ではなく、多少とも真意を表しているものと信じたい。

大使館の敷地は、霞ヶ関ビル及び地下鉄の主要駅の方角からの視線の丁度エンドとなる重要な位置を占めている。同じ敷地に以前建っていた大使館の建物は、低層でレイモンド・アント・ラドーによって設計されたものであり、先程の視線に対してシンメトリーに正面を向けたコロニアルスタイル的な様式の建物であった。それに対して私は建物を少し後退させ、丘の上に配置し、主要視線に対して対角線上に角度を振って配置して、人の動視線に対して都市空間を非対象に変形してゆくことを試みている。建物の色については、少しピンクの入ったグレー、ブラウン、ベージュを混在させたものを選び、日本の美しい壁の

伝統の精神に少なからず関係させた色となっている。建物の構造はRC構造による3次元のグリッド構造であり、プログラムが拡大しても対応できるシステムとしている。建物の幅はアメリカ政府の規準に従って狭くなっている。建物のメインウォールには均等割のグリッドモジュールに従ってガラスとプレキャストコンクリートのカーテンウォールを割り付けている。メインウォールのデザインは、私にとって大事な考え方をいくつか提示している。ひとつはこの建物が現代の技術による建物であり、気密構造となっていて、内部は空調されていること、そして外壁は構造からは分離した軽量の外皮であることである。結果として外壁は静謐で張りのある表現となり、しかも軽量のものとなっている。グリッド状の外壁は軽量で静謐な日本の障子のようでもある。妻側の壁はふたつの状態を表現している。構造がそこで途切れていること、そしてそこから先には構造は拡張してゆかないということである。妻側の構造体はリブ状のテクスチャのついたプレキャストパネルで埋められている。3次元グリッド状の構造体はメインエントランス部分でカーテンウォールが切り取られることによって表現されており、構造体とカーテンウォールの関係を明快に示している。

建物はスマートで上品なものに出来上がり、アメリカ合衆国の大使館としての機能性、象徴性に相応しいものになったと私は思っている。同時に、周辺環境や敷地が東京にあるということを考えたときにも、非常に適切な解答のひとつであったと考えている。新しい建物をデザインする場合、都市におけるその建物の性格付けは、私にとって非常に重要である。建物の中には単体として見たときには悪くない建物であっても、いったん都市の中に置いてみると、何世紀にも渡って一貫した努力によって積み上げられた「都市の性格」を損なったり破壊したりする場合も少なくない。単体として見てもあまり好ましくなかったり醜悪であったりするうえに、都市のイメージにとっても破壊的な建物はおおさらである。

外国から建築家がやってきて設計をする場合には、問題として取り上げられることが多いが、その地の建築家が都市の性格と合わない

い建物を設計してしまうのと、問題としては何ら変わりはない。問題は建築家の出身がどこであるかということではなく、建物をデザインする姿勢や、デザイナーが依りどころとしている哲学や思想的な関心であると考えている。

非常に良好な建築文化をもった都市、そこに住む人々あるいは訪れる人々によって、愛される都市を蝕みつつある現代的思考にはふたつあると考えている。ひとつはシグネチャーデザインおよびシグネチャーデザイナーに対する溺愛性である。これは一個人のデザイナーのスタイル、形態、材料や色、構造表現などを重視しすぎた場合に起きうる傾向である。建築評論家や出版社には論評のし易さ、写真のイメージとしての売り易さから、受け入れられ易いと思われる。読者のほうとしても設計者が誰なのか分かり易いし、深く考えなくてもいろいろな形態を容易に把握して楽しむことができる。またクライアントにとっても最終成果物を事前に容易に予想できるし、建築物を絵画や焼き物を収集するように考える施主やパトロンにとっては理解しやすい建築であるといえるだろう。さらに問題を困難なものとしているのは、このシグネチャーデザインの傾向が非常に強く支配的なため、多くの優秀な建築家がこの方向に入り込んで自分のスタイルを展開させて仕事をし、ゆくことのみに進んでしまっていることである。シグネチャー・アーキテクトによる仕事は優れたものも多く、感嘆の声を上げざるを得ないものも多い。問題は個々の独立した建物にあるのではなく、こうした独創的で誰の設計かと簡単に分かりやすい、オブジェのような建物がつくりだす都市が問題と思われる。

シグネチャー建築ばかりでつくられる都市は、その都市の本来の性格を失うことになりかねないし、その一貫性をも失うことになると思われる。都市を破壊するもうひとつの傾向は形態上の様式やスタイルを伴った建築の潮流や学派であると考えている。モダニズム、機能主義、ポストモダニズム、デコンなどのイズムで括られるものがこれに該当する。一定の思想を伴う学派は非常に誘惑的である。建築家に思考のための知的な規準を与えるし、

論理的な説明を用意し、咀嚼され、オーソライズされた形態的なスタイルを用意してくれるからである。また特に重要なことは何人かの建築評論家の評価を前もって得ていることになるし、好意的に支持を得られるネットワークも手に入れることができる。このようにまとまった利点があると、若い建築家には非常に魅力的なものとなってくる。世界中のどの地でもつくられても同じ学派によるデザインはすべて類似した性格のものになってしまう。ある学派を信奉する人が地元の建築家であろうと同国の人であろうと、外国の人であろうと結果は同じことである。都市に対する影響という意味ではほとんど同じことである。学派に対する忠誠心はあっても、建物が建つことになる都市に対する忠誠心には乏しいということになる。こうした現象が地元の建築家に強く支持されたことで、アジアの国々はアメリカやヨーロッパの国々と比べるとより被害を被っているように見える。これは、こうした考え方がヨーロッパ・ルネサンスに根をもっており、ヨーロッパをモデルにしてつくられたアジアの都市に大きく影響を与えているからである。アジアの多くの都市や、伝統的な建築物について、こうした影響が殆ど見られないことも多い。最近、ヨーロッパにおいてさえ、このふたつの考え方が現代的な形態をもってさらに強まる傾向にあると考えている。

責任感ある建築家であれば建物の建つ場所がもっている様々な良質のものに対して敬意を払わねばならないし、建物が建てばその都市の一員となってゆく現実を直視しなくてはならない。建築物の質をテストする最良の方法は、その建物が都市に加わったことでその地域がどれほど良くなったかということであり、建物が加わったことで街並みや街並みの空間がどれほど良くなったかということである。その建物が加わったことで都市に住む人々に快適な質を向上させることができたであろうか、あるいは損なったであろうか。

設計を取り巻く環境はそれぞれ異なっているし、敷地もしっかりである。良質の建物を設計するための簡単なルールが決まっているわけではない。建築は状況に対応し応答してゆく芸術であり、応答の仕方は創造的で新鮮な

ものでなくてははいけない。模倣によっては生命のない結果しか生まれず、解答とはいえない。状況によっては周辺に埋没させてゆくやり方が望ましいし、また別の状況では周辺から対比的に際立たせることが望ましいこともある。それぞれの状況に応じて、どのような応答の仕方が望ましいかを判断するのが建築家の責任であるといえる。

アジアにおいて、〈アメリカ大使館〉以来、最近、日本で私の設計した建物がふたつ完成した。福岡の〈シーホークホテル&リゾート〉と東京の〈NTT新宿本社ビル〉である。また私は、マレーシアのクアラルンプールにおいて巨大プロジェクトを設計している。〈クアラルンプール・シティ・センター〉と呼ばれるプロジェクトの1期工事であり、2本のペトロナスタワーを中心としている。また我々は、香港、上海、およびジャカルタのプロジェクトに着手したところである。

私は現在、アジアの6つの都市で仕事の機会に恵まれている。またイギリスのロンドン、オランダのハーグ、スペインのビルバオ、アルゼンチンのブエノスアイレス、そしてメキシコシティにおいて設計の機会に巡りあっている。ブエノスアイレスを除いて他のすべてのプロジェクトは私にとって外国の仕事であり、それぞれの都市の性格、建築、気候などについて、私がアメリカの都市で設計するのと同じように学ぶことになるし、それだけでなく、それぞれの都市の文化、歴史、法体系についても理解を深めることになる。ブエノスアイレスについては私の生まれた国であり、もちろんよく知っているし、メキシコについてもアメリカ大陸のスペイン語圏ということで、言語と文化を私は共有しているので容易である。ロンドンとビルバオについても私は共通言語をもっているため、それらの文化を理解してゆくことはそれほど難しいことではない。その他の地域でも、英語を使うことでかなり効率的に仕事を進めることが可能となっている。今や英語は、ビジネスと専門家レベルのコミュニケーションにおいて世界言語になったと感じている。

私は未だに典型的なアジアの都市というものを見つけていない。私はそれは存在しないものだと思っている。アジアの都市は皆、そ

Working in Asian and Other Countries Overseas

Cesar Pelli

それぞれ違っている。アジアの都市は皆、アメリカの都市がヨーロッパのそれと比べて違っているように、相違している。建築の違いよりは、経済、技術的レベル、政治システム、宗教などの相違のほうがずっと大きい。しかしながら私は未だに「アジア的なもの」を見つけ出せずにいる。おそらく、私がついていっている中で一番大きな印象は、世界中の活発で現代的な大都市は皆、近似したものになりつつあるという点である。情報のやりとりは非常に高速かつ包括的であり、世界の大都市に住む人々は同様の情報に反応しており、同じ結論に至ることも多々である。ごく民族的な問題でさえ全地球的な場で同意が得られるまで議論されている。これは建築家が全世界的に仕事をするのが可能になった大きな理由なのかもしれない。ファックス、モデム、そして飛行機を多用することにより、世界中のどこかの大都市とも継続的に、親密に接触を保つことが可能であり、一日もあれば世界中どこでも自ら足を運んでゆくことができる。

私はアジアで仕事をし、そして続けることができ非常に満足している。私自身の文化ルーツと非常に異なる文化の中で仕事をするができるというのは非常に素晴らしいことと思っている。アジアの都市を形作ってゆくことに、私のデザインを通じて貢献できることはこの上ない名誉である。アジアで仕事をして感じたことは、それぞれのプロジェクトで私が貢献すること以上に、私自身、その場所の歴史、伝統、文化から学びとることのほうが常に多いということである。今後とも、アジアの国々の都市に貢献できることを期待して止まない。

●シーザー・ペリ／建築家

Working in faraway countries has always appeared as an extremely romantic and appealing prospect to young architects, and I was not an exception. To work in Asia was the most exotic of possibilities. I have now had the opportunity to design for several faraway places including Asia and reality, as is always the case, is different from the dreams of youth. In many ways the work has been more exciting than I expected, but it was not romantic nor exotic: it has been down to earth with all the usual problems and satisfactions that come with trying to design and build a major building anywhere in the world.

My first project in Asia was the building for the U.S. Embassy in Tokyo. My first visit to the site (and to Japan) was in 1971; I saw the site, I talked with the people at the Embassy and I tried to see as much of Tokyo as possible, in particular the recent buildings by good Japanese architects. I was most interested in their use of materials and details because the U.S. Embassy was going to be built by Japanese contractors and labor. Most importantly, I spent three busy days in Kyoto looking at many temples and Katsura Palace. There I saw the Japanese architecture that I had always admired, and seeing it in reality I found it much more beautiful with many more complex dimensions than I had been able to understand through photographs. The quality of design was so high, the sensibility was so refined, the relationship of building with nature so perfect that it made me question: How does one design a building in a country with such a tradition? On the other hand, I was not so impressed with the vast majority of buildings that had been built in Tokyo in recent years, obviously very fast and without much care. The quality of ordinary, commercial design and construction in Tokyo has improved much in the last twenty years.

I believe that a building must connect with and respect the best aspects of the architectural tradition of the place where it will be built. This was a basic consideration in my design for the American Embassy. Another consideration was that although designed for Japan it was not meant to be a Japanese building but an American building representing America on a piece of soil that was technically American. The Embassy building also had to conform with a very long list of requirements and parameters set by the Office of Foreign Buildings of the U.S. State Department. We were also required to conform to both Tokyo and U.S. codes (and Tokyo and California seismic provisions). My intention was to design a building that would above all represent America but be sympathetic to Japanese

architectural traditions and character. I wanted to design an American building respectful of its host country. I also had to design a building that would make a good and responsible piece of Tokyo and contribute to the character of the city. Many Japanese architect friends have told me that they find the building indeed sympathetic to the Japanese architecture character. I hope this is so and that they were not just being friendly and polite.

The site for the American Embassy was at the end of an important view corridor as one approaches it from the Kasumigaseki Building and its major subway station. The previous U.S. Embassy building on the same site was a charming low building designed by Raymond and Rado that looked very much like a colonial structure and was placed frontally and symmetrically at the end of the view. I chose to move the building back and slightly up the hill, and placed it diagonally offering a glancing view, an incomplete and asymmetrical view, deflecting the space towards the major line of movement.

The colors of the building, grayish brown and beige with a touch of pink, were chosen to relate to but not be the same of those of traditional Japanese walls. The structure of the building is a three-dimensional grid of reinforced concrete columns and beams that could have extended if the program would have been larger. The building is narrow as set by the State Department requirements. The main walls of the building on its long sides enclose and shield the columns with a continuous curtain wall of glass and precast concrete on a regular modular grid. The wall expresses several concerns that are important to me: one is the nature of contemporary buildings that are sealed enclosures of air conditioned space and that enclosure is a light-weight membrane supported by the structure. The wall, therefore, is taut and light. The gridded wall is also like a giant Shoji screen; also taut and light. The end walls express two conditions: the interruption of the structure and the fact that the structure will not grow. They are infilled with textured precast panels. The three-dimensional grid of the structure is made evident at the main entrance where the curtain wall was cut away to reveal the nature of its supports.

I believe the building is a handsome and noble structure, very appropriate for its functional and symbolic role as the Embassy of the United States of America. I also believe it is very appropriate for its site in Tokyo and for the character of the city in this neighborhood.

The question of the character of a new building in a city is for me critical. We all know many buildings that are good in themselves but detract and sometimes damage the character of the city of which they are part; a character that often is the result of centuries of accumulated and coherent efforts. It is much worse of course when the building is in itself bad of banal and also does great damage to the local character of a good city.

When the architect comes from another country the problem becomes sharper but is not different from the problem created by a local architect designing an out-of-character building. The question is not the provenance of the architect, but the attitude with which the building is designed and the philosophical or ideological concerns motivating or limiting the designer.

There are two contemporary currents of thought that are, I believe, damaging to good traditional cities, cities well loved by their people and by visitors: one is the present infatuation with signature design and designers. This is an attitude that puts great value in the character, sets of forms, materials, colors, structural expression, etc. identified with an individual designer. This seems to appeal to writers and publishers because it provides a recognizable pre-explained and pre-sold image. The readers will instantly know whose work it is, enjoy the variations of an understood set of forms without any serious mental effort. They also appeal to clients and patrons that seek to collect signature buildings as they may collect paintings or porcelains, knowing ahead of time the look of the buildings they are going to get. High architecture becomes merchandise. To complicate matters, this attitude has been so strong, so dominant, that many of the most talented contemporary architects have sought to develop a signature and work only in this manner. And the buildings of many signature architects are often excellent. I cannot help but admire them. The problem is not in the building as an isolated object, the problem is in kind of city these unique and recognizable objects make. A city made of signature buildings can not preserve its own character. It will have no coherent character at all.

The other damaging trend has been that of architectural tendencies or schools with strongly prescribed aesthetic attitudes: be it modernism, functionalism, post-modernism, de-constructionism or any other "ism." The appeal of a school of thought is very strong. It gives an architect an intellectual framework, often a moral justification and a resolved

pre-approved aesthetical system. Very importantly, it also offers favorably predisposed critics and a supportive network. Together these advantages make a package of considerable appeal to a young architect. All buildings of the school will have a similar character no matter where in the world they are built. It makes little difference if the follower of a particular school is a local architect, one from another city in the same country or a foreign one. The effect on a city will be almost the same. The primary allegiance (by definition) is to the school and not to the city where the building will be built.

These two trends have done much greater damage to Asian cities through their implementation by local architects than to European or American cities. This is because these ideas have their roots in the European Renaissance and have, therefore, been affecting the design of cities built on European models for a very long time and their city plans can tolerate them. This is not true of most Asian cities or their traditional architecture. What is new, even in Europe or America, is the intensity of the contemporary manifestation of these trends.

A responsible architect must design with an attitude of respect for the good qualities that are present in the place where the building will be built and must keep in mind that the new building will become a piece of the city where it is built. The true test of the quality of a building is how good that area of the city becomes with its addition, how much better (or worse) buildings and spaces around it look after the new building is built.

Does the building help to reinforce qualities dear to the people of the city or does it diminish them?

Each circumstance is different, each site is different. There are no easy rules to follow in the design of an appropriate building. Architecture is an art of response, and the response must be creative and fresh. Imitation is not the answer because it will produce lifeless results. Some conditions require a subdued response, other conditions require a break with the surroundings. It is the architect's responsibility to determine the appropriate response in each case.

In my work in Asia since the American Embassy, I have designed two buildings that were recently finished in Japan: The Sea Hawk Hotel & Resort in Fukuoka and the Headquarters of NTT in Shinjuku, Tokyo. I have also designed a large project in Kuala Lumpur, Malaysia: The Kuala Lumpur City Centre, Phase One Development of which the primary components are

the Petronas Towers. We are, at this moment, in the early stages of design projects in Hong Kong, Shanghai and Jakarta.

I have experience, therefore, working in six different cities in Asia. I also have projects in London, England; The Hague, The Netherlands; Bilbao, Spain; Buenos Aires, Argentina; and Mexico City. Except for Buenos Aires all the others have been foreign cities to me, which meant that I had to learn about the characteristics of the city, its architecture and climate as I would in an American city, but also become immersed in their cultural, historical and even legal differences. Buenos Aires I knew and Mexico was easy for me to understand because of the commonality of language and cultural traditions as a Spanish American country. Working in London and in Bilbao I also had the advantage of a common language, which gave me easy access to the culture. I have been able to function quite efficiently in English everywhere else. English has become the universal language of business and professional interchange.

I have not found a typical Asian city. I do not believe it exists. Each one is different. Cities in Asia are not more alike each other than they are to American or European cities. The greater differences appear to be based on levels of economic and technological development, political systems, religion and climate; but I was not able to detect any "Asian qualities." Perhaps the most important impression I have is how much alike large, dynamic, contemporary cities are becoming all over the world. The flow of information is so fast and comprehensive that people in the cosmopolitan cities are reacting daily to the same data and often reacting the same conclusions. Even ethical concerns are discussed in a global forum until a general consensus is reached. This is perhaps why architects can work successfully all over the world. And with faxes, modems, and frequent long-distance flights one can be in continuous, intimate contact with any major city and can personally fly to any other one in a day of travel or less.

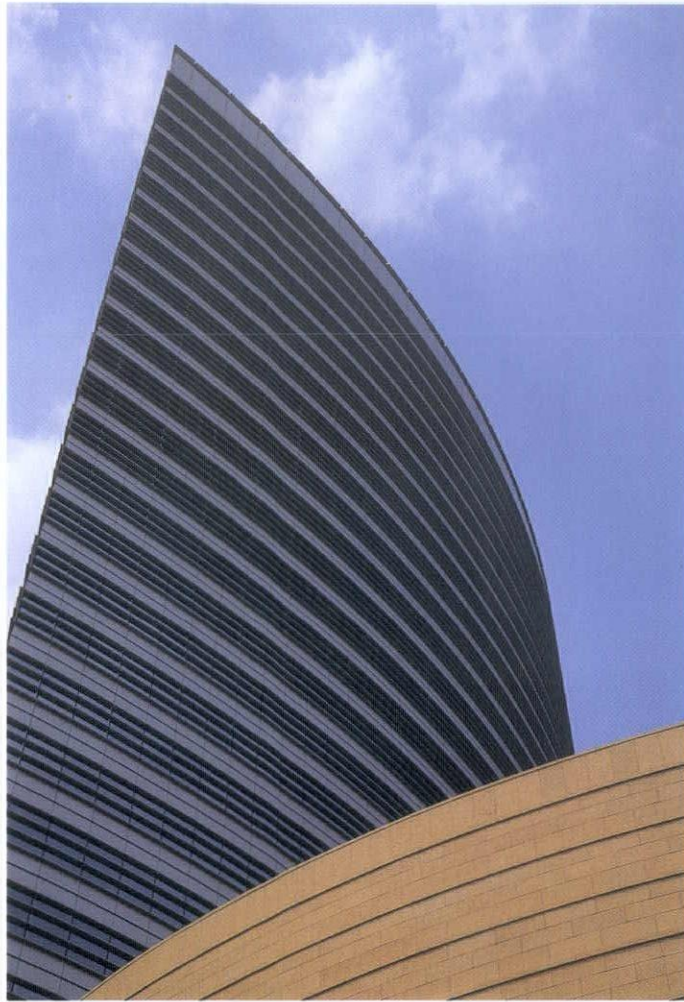
I am very happy to have had the opportunity to work in Asia. It has been most rewarding for me to understand cultures with very different roots than mine. It has been a great honor to contribute with my design to the shaping of these cities. In my work in Asia I have found that as much as I give of myself in every project I always receive more from the history, tradition and culture of each place. I hope I shall be able to continue to do work in the great cities of Asia.

NTT新宿本社ビル

NTT Shinjuku Headquarters Building

Tokyo, Japan 1995





敷地は新宿でも変化の激しい地域にある。周辺はつい最近まで、倉庫や軽工業の工場、小さな個人住宅が建ち並ぶところだったが、今では、新宿の文化、ビジネス、商業の中心地の拡張に伴い、その一部になろうとしている。NTT本社ビルの敷地は、東京都庁から6ブロック、新東京オペラ座から1ブロック離れたところにある。ただし、東側は今なお残存する住宅街と接している。

設計は、通常では考えられない数の規制と不動産上の制約の中で実現しなければならなかった。たとえば、敷地の南側、甲州街道沿いには首都高速の高架があり、西側、山手通りに接する正面には、それよりもさらに高いところを走る高架道路の建設計画があった。また、将来このエリアを横切る地下高速道路の建設計画も考慮に入れる必要があった。(アクセス用の階段を含む) 高架歩道橋は、敷地を横切る格好で建設されることになった。さらに、敷地の一部はオープンにしておくこと、同じく敷地の15%以上は公開空地として提供することが求められた。最高高127m (およそ30階) は、かなり早い段階で、都と周辺住民グループとの交渉によって決定されていた。建造物は、既存のふたつのマイクロ波の通路を避けて建てなければならなかった。ルーフ部分には通信設備、緊急用ヘリポート、およびフライトアクセス用設備を設置することになっていた。もうひとつの決定的な要素は、この建物内に収容する電気通信機器、設備、付随するすべての必要装置、機器を適切に配置する必要があったことで、これらの与件は多岐に渡り、それぞれ個別の問題を抱え、その上それほど柔軟性がないものだった。

太陽光の進入路に関する規制は、我々の設計に最も大きな影響を与えた。両辺の住宅地(地上1.5mの地点で計測)のいかなる地点も、12月21日、つまり冬至の日に計測して、日中3時間以上ビルの陰に入らないような形にする必要があった。太陽光の進入路に関するガイドラインをこの敷地に適用すると、建造物の許容範囲は変形した三角形のダイアグラムとなった。

こうした諸制限が、我々の設計デザインに具体的な形を与えることになった。これ以外に我々が考慮したのは、この敷地で最高の眺望をオフィスに与えたいということだった。このため、オフィスは新宿の中心街、新宿御苑、明治神宮公園を含んで弧を描くエリアの、主に東側に集中させた。

設計プランは、このビルの目的とロケーションに特徴づけられると同時に、それに対応したものだった。ビルの目的とは、先端テクノロジーの世界最大規模の企業の本社にふさわしい建築を目指すことだった。敷地は新たに急速に(人によっては爆発的にともいう)発展しつつある新宿中心街のエリア内にある。この中心街は、おそらく東京の中でも、人、建物、諸機能が最もダイナミックに密集する、ある意味で未来志向の凝集点でもある。これらの諸制約にあたかも拮抗するかのように、敷地は東京の標準的条件からみるとかなり寛大なプロポーションをもっていた。そのおかげで、全ての機能をふたつの別々の構造に収納し、その間に美しい庭園を作ることができた。このため、公開空地(敷地の15%以上)も含めると、東京の同様のビルに比べた場合、NTT本社ビルにはスペースにゆとりがあるという印象を見る人に与える。

敷地に影響を与える制約やガイドラインから展開していったプランは、非常にシンプルなものだった。屋内ガーデンに向かって遠景を望めるようレイアウトされたオフィス棟は、面白い形のブロックとなり、コア機能は三角形を描く許容範囲内に収められた。コア機能は、それぞれ独自のフォルムをもち、外観は個別にデザインすることが認められた。これは、



エレベーター、トイレ、機械室、倉庫、従業員用休憩室（リフレッシュルーム）などである。設計タイアグラムは、かつて私が開発し始めたもので、1971年モクスワ市のために初めて発表し、その後1979年にロサンゼルス市に提案したことがある。これらの提案は、個別のビルディングのための考え方としては展開されなかったが、組織の概念とフォルムの可能性は、常に私の好奇心を刺激するテーマだった。そして、今回のプロジェクトの敷地、およびその目的を考えると、それは明らかにエキサイティングな解決方法を示唆するものだった。

タワー内のオフィス部分は、水平方向に走るウィンドウで構成され、窓からの眺望が配慮された。この窓は、各階ごとに4列の突出したルーバー（ひさし）によって保護されているが、ルーバーは、窓の水平性を強調すると同時に、ファサードのデザインとの調和が図られた。また、ルーバーによって生じる陰影とハイライトがファサードにいきいきとした活気を与えている。

リフレッシュルームは、オフィスエリアと同じく眺望が良く、同様の外壁で構成された。よく晴れた日には、この部屋から富士山のすばらしい眺望が楽しめる。オフィスフロアは水平方向を強調した表現となっている。また、垂直シャフトは、垂直方向にびったりと書架が重ねられたようなデザインとなっている。フロアの水平方向のデザインと、垂直方向のフォルムが対照を為すようにデザインされた。なお、トイレ、階段室にも、戸外に面する窓がある。

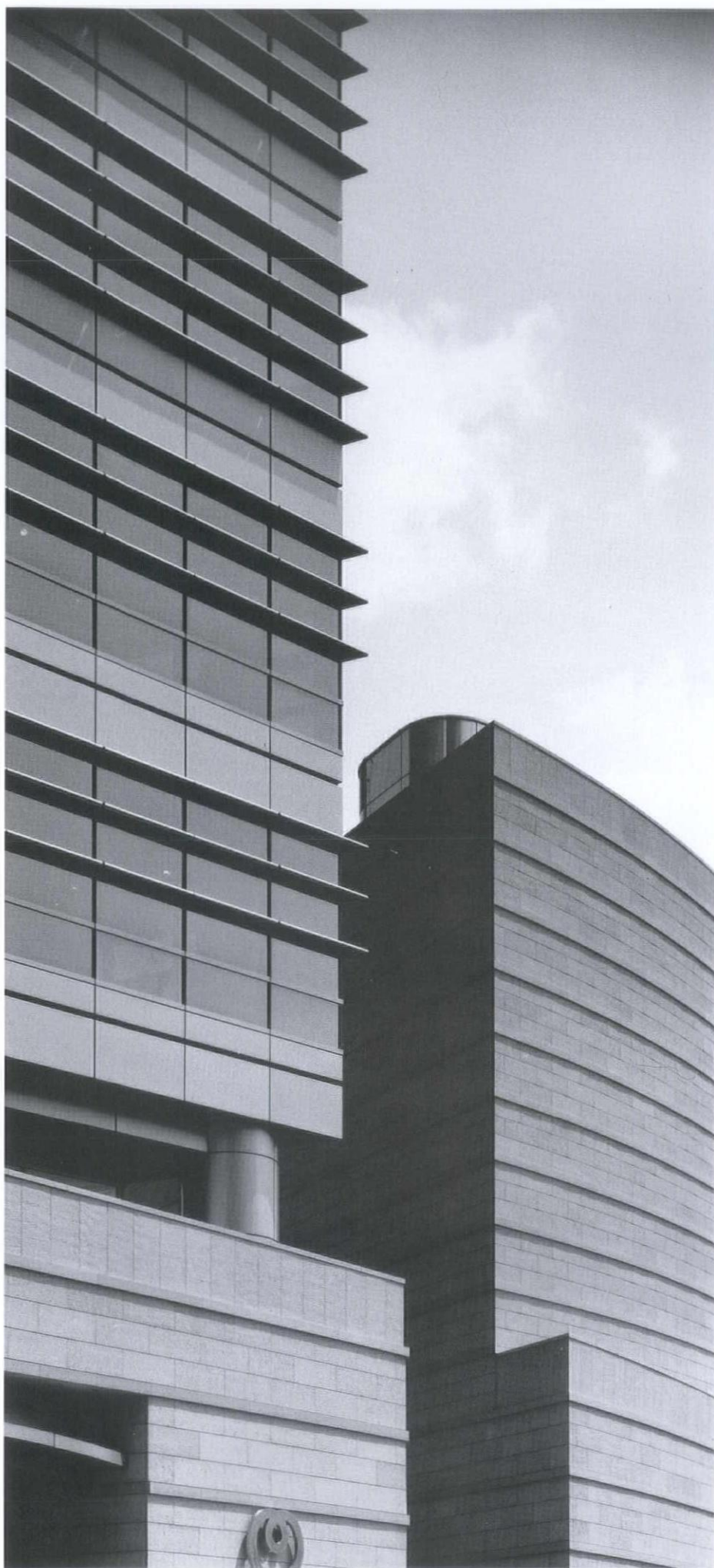
NTT本社ビルの外壁はガラスと金属による張りのある表皮に覆われ、2次元の表皮が3次元の複雑なボリュームを覆い、形態として現象している。軽量で荷重壁ではない内部を覆う気密の表皮としての外壁がデザインされており、芸術的な意図を表現している。アルミの外壁パネルは、フッ素樹脂塗装による暖色メタリックグレーの特注色によって塗装されている。これは通常の塗料の中に雲母の成分を加えることで可能になった。最終的な色に至るまでには、何度も試行錯誤を重ねた色である。

特別機能を持った低層棟の建物は、通り側の面をミネソタ石によって覆われた張りのある曲面の壁となっており、反対の中庭側はガラスのカーテンウォールとなって眺望が開かれている。建物の形態は、円筒形の一部を切り取った形となっており、周辺を取り巻く様々な制約から決定されたものである。ミネソタ石は高層棟のメタリックグレーカラーに好対比を成す深みのある黄橙色の石である。自然のテクスチャをもった色は、シャープで均一な工業的製品に対して対比を成すよう意図されている。低層棟の東側は中に会議打合わせ室等を含む垂直方向の志向性をもった形態によって係留された形態になっている。

このボリュームは緑色のバーリントン石によって外壁を覆われている。低層棟のミネソタ石の壁は高層棟の前面の方へも連続している。これによって高層の巨大なスケール感は、通り空間に対してやわらげられ、高層棟はこの壁の背後にセットバックした形となっている。

またこの壁は背後にある駐車場や車輛の入口を覆い隠す役割も果たしている。

私はこの建物の性格、形態、全体の構成は新宿の街に適切な形で呼応していると考えているし、NTTという会社の性格をよく表現したものになっていると考えている。最後に、そしてこれは最も重要なことであるが、この建物はNTT職員や、この建物を訪れる人々に気持ちの良い「ホーム」を提供していると考えている。尚、このプロジェクトは山下設計と共同で設計が行われた。



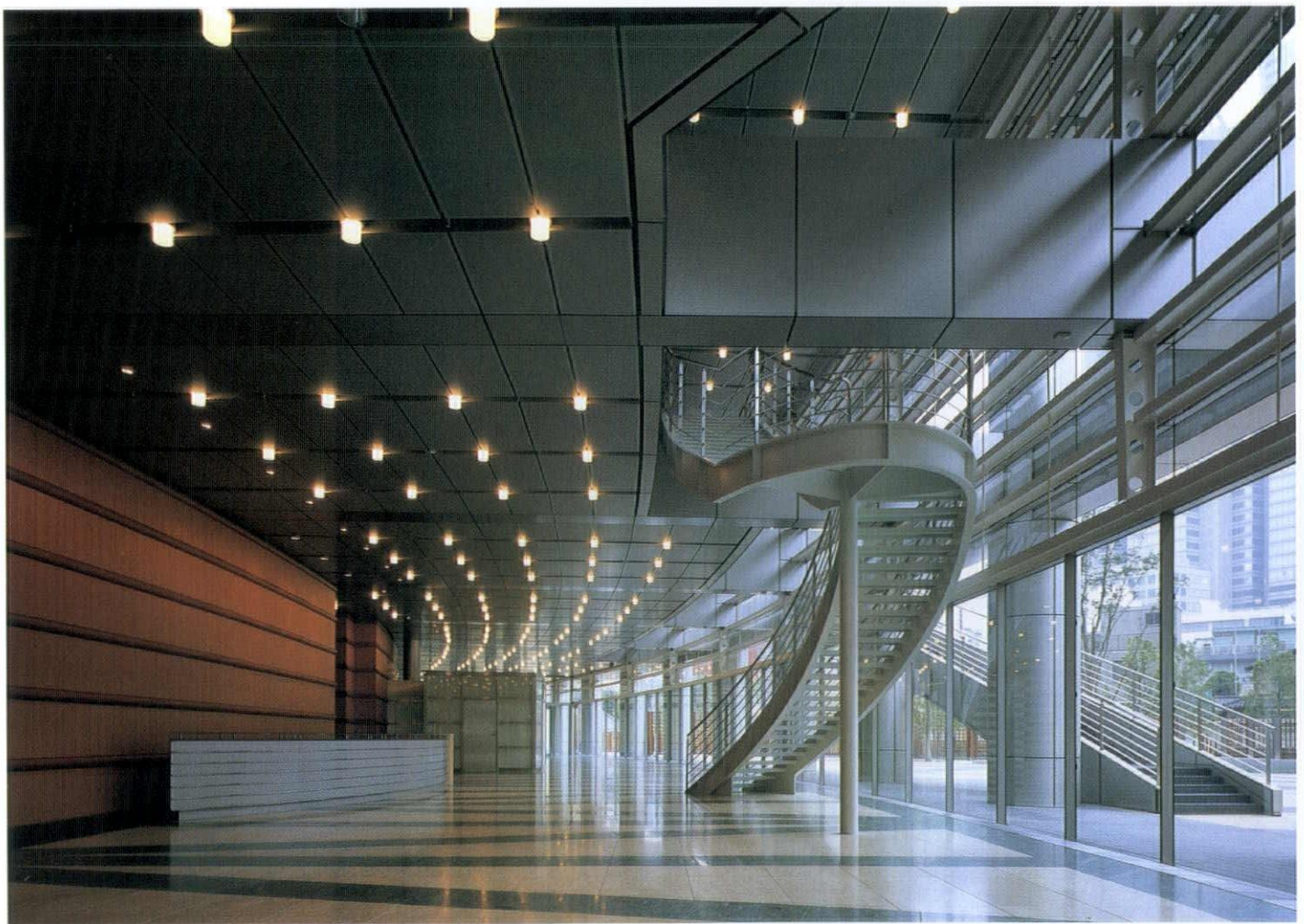
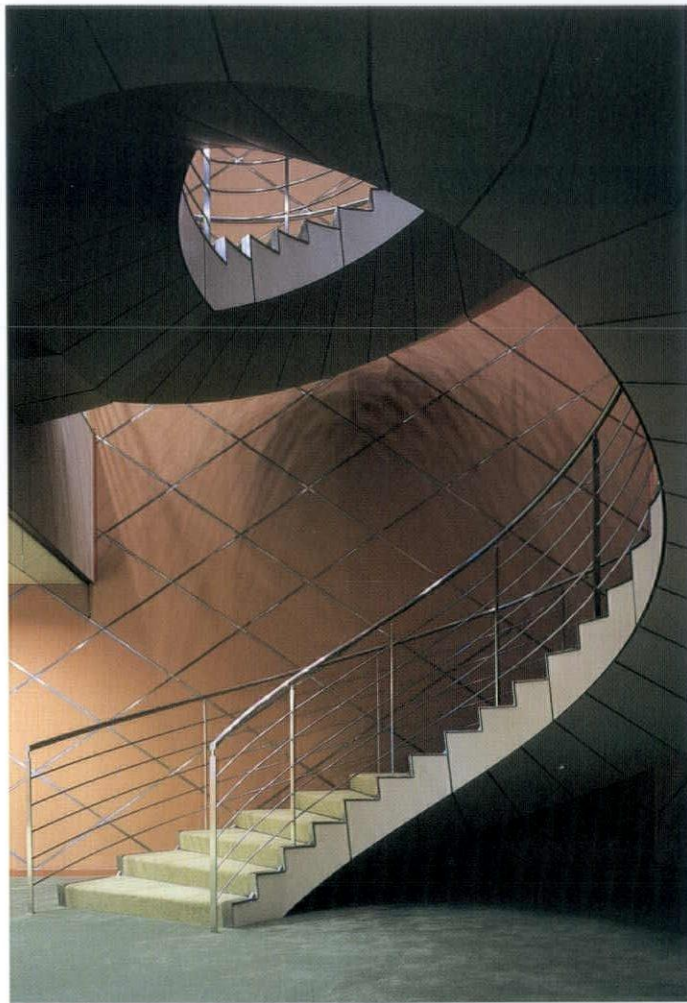


パース Perspective



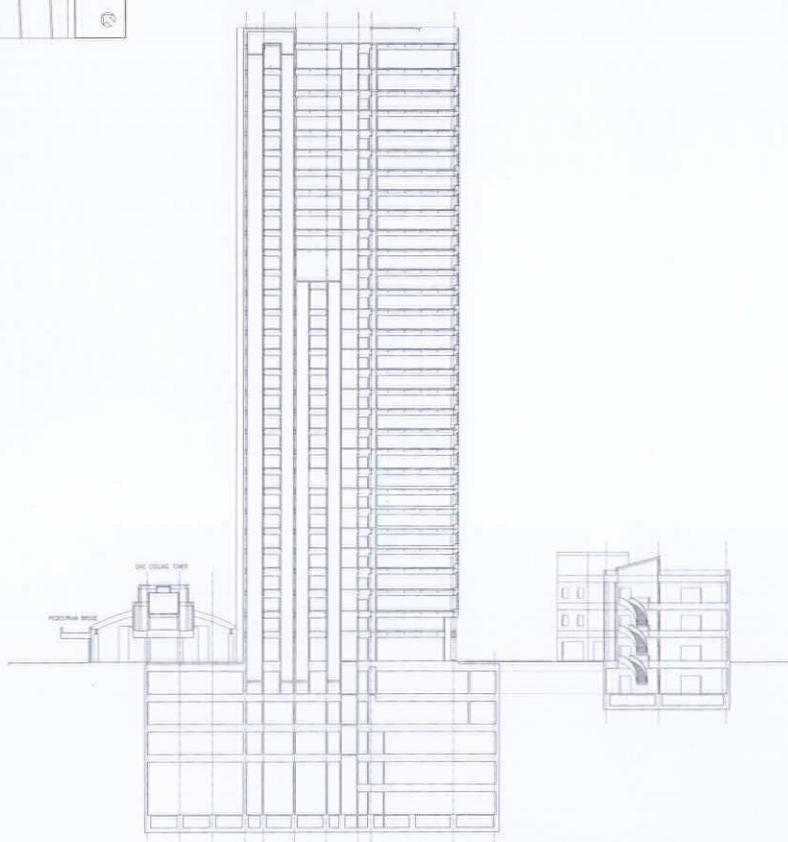
南立面图 South elevation S=1: 125







配置図 Site plan S=1: 400



断面図 Section S=1: 150

The site is in a rapidly changing area of Shinjuku. It was until recently a zone of warehouses, light industry and small single family residences. It is now becoming an extension of the cultural, corporate and commercial center of Shinjuku. The NTT Headquarters site is six blocks away from the Tokyo City Hall, and one block from Tokyo's new Opera House. On the east, the site borders on still existing residential properties.

The design had to take form within an unusual number of limitations and encumbrances: there is an elevated highway on the south side of the site on Koshu Kaido and an even taller elevated highway is planned for the west and main front of the site on Yamate Dori. A third and future subterranean highway had to be allowed for, within the site, including a 180° turn and access ramps. An elevated pedestrian way (with access stairs) had to be provided crossing our site. A portion of the site had to be left open. Over 15% of the site had to be dedicated to public open space. A maximum height of 127m (some 30 stories) had been set in earlier negotiations with the city and neighborhood

groups. The building had to avoid two existing microwave corridors. The roof had to accommodate transmission equipment and also emergency helicopter landing and its flight paths. Another determinant was the need to appropriately accommodate all the requirements of the telecommunications equipment to be housed in this building. These were large, specific and not very flexible.

The sunshine access regulations had the greatest effect on our design. They required that our building be so shaped that no point of the neighboring residential properties (measured 1.5 meters above ground) be under shadow for more than three hours in a day, measured on December 21, the Winter Solstice. The sunshine access guidelines, when applied to our site, produced a diagram with a distorted triangular area as the only allowable envelope for the tower.

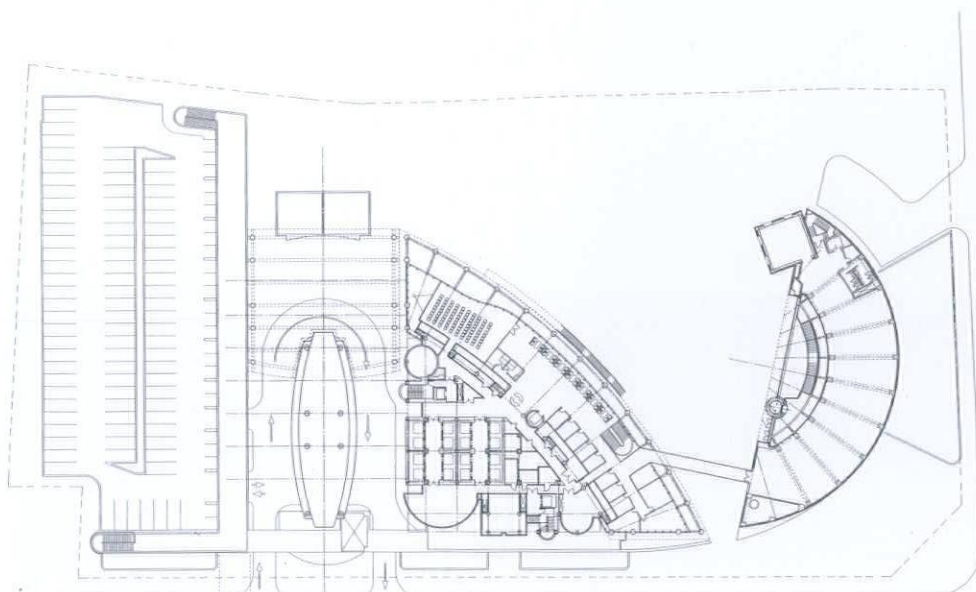
These limitations started to give shape to our design. Other considerations included our desire to orient the offices towards the best views from our site. These are concentrated primarily towards the east in an arc that includes Shinjuku Center, the

Imperial Palace Gardens and the Meiji Shrine Gardens.

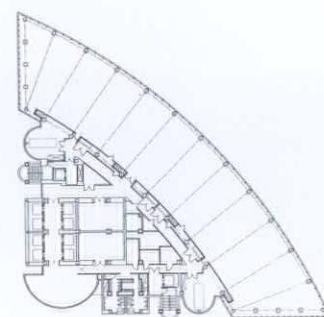
Finally, our design was informed by and responded to the purpose and location of our building. The purpose of the buildings is to be headquarters for one of the largest and most advanced high technology companies in the world. The site is in a new and rapidly (one could say explosively) growing area of Shinjuku Center. This center is probably the most dynamic, tight-packed, future-oriented agglomeration of people, buildings and functions in Tokyo.

As if to counter these limitations, the site is of generous proportion for Tokyo standards. It allowed us to house all the functions in two separate structures and to create a beautiful garden between them. This, plus the public open space (over 15% of the lot area), gives to the NTT Headquarters Building a feeling of generous space as compared with similar buildings in Tokyo.

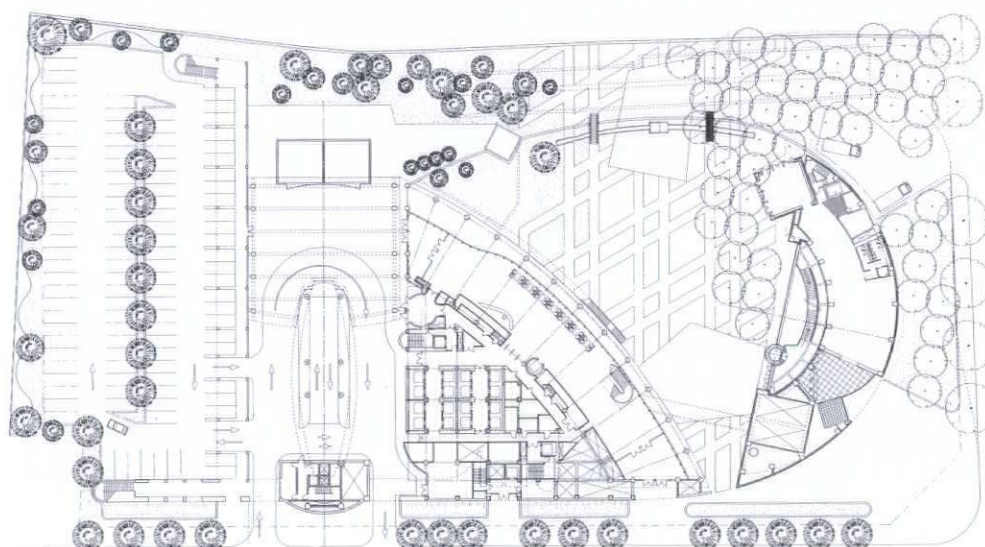
The plan that grew from the limits and guidelines affecting our site is very simple: a fan shaped block of offices oriented towards the interior garden and



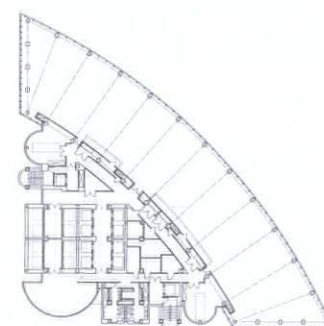
2階平面図 Second floor plan



18~26階平面図
18~26th floor typical plan S=1: 150



1階平面図 First floor plan



10~16階平面図
10~16th floor typical plan S=1: 150

the long views, with the support facilities occupying the remainder of the allowable triangular envelope. The support functions were allowed to each take its own form and be expressed on the exterior. They contain functions such as: elevators, bathrooms, mechanical shafts, stairways, storage and a room for employees breaks and relaxation (the "refresh room"). The plan diagram is one that I started developing and proposed, first for Moscow in 1971 and later for Los Angeles in 1979. Those proposals did not go ahead as buildings, but the organizational concept and its formal possibilities have always intrigued me. In this site and for this purpose it was the obvious and exciting solution.

The office portion of the tower is organized with horizontal windows to take advantage of the panoramic view. The windows are protected by four rows of projecting sunshades per floor. These sunshades accentuate the horizontality of the windows, modulate the facade and animate it with their shadows and highlights.

The refresh room, also open to views, has a similar exterior wall. On clear days there are wonderful

views of Mount Fuji from this room. The office floors are expressed as horizontal trays; the vertical shafts are expressed as tightly clad, vertical stacks. The horizontal expression of the floors play against the vertical forms of the support elements. Toilets, stairways and vestibules have windows to the exterior.

The NTT Headquarters Building is clad in a taut wall of glass and metal, a two-dimensional surface defining a three-dimensional and complex volume. The nature of the wall as a light weight, non-bearing and tight enclosure of air conditioned space, is fully expressed and is part of the artistic intention. The aluminum panels are coated with a specially developed warm metallic gray fluoropolymer finish. This was obtained by adding copper coated mica to the paint formulation. We had several experimental tries until we arrived at the final formula.

The special functions building has a tightly curved wall of Minnesota Stone to the street and it opens to the views of the interior garden. The form of the building, as a segment of a cylinder, was given by

the shape of the site as described by the curve in the future underground highway. Minnesota Stone has a rich ochre color that glows against the metallic gray color of the tower. The natural, textured stone is contrasted to the sleek, uniform industrial product. The eastern end of the special functions building is anchored by a vertical volume with large, gathering rooms. This is clad in green Burlington Stone.

The Minnesota Stone wall of the special functions building is continued in front of the tower. This diminishes the impact of the tower on the sidewalk and sets it behind a wall in a familiar and pleasant manner. The wall also screens the parking lot and the automobile entrance and drop off.

I believe that the character, form and composition of these structures fit appropriately in the Shinjuku area and express well the nature of NTT. Finally, and importantly, the buildings provide a comfortable and pleasant home for its many employees and visitors.

シーホーク ホテル&リゾート

Sea Hawk Hotel & Resort

Fukuoka, Japan 1995









シーホーク ホテル&リゾートは、敷地、周辺環境、プログラムなどの特殊性や日本におけるホテルの性格に対応したデザインとなっている。

このホテルは博多湾に面した福岡市の片隅に建っている。現在の福岡市は古い博多の街を含み、朝鮮半島を間近にした自然港として歴史的にも重要な発展を遂げてきた。現在、港湾都市としての福岡にあって、船舶の発着や漁獲などの重要性が、海に面した街としての象徴的な役割を強調しているのである。この1,052室のホテルは、開閉式屋根を持つ40,000席の野球場、福岡ドームに隣接しており、ホテルのデザインが始められたときにはまだこのドーム球場は建設中であった。敷地は高速道路の高架に直面し、この道路によってビーチとの間を区分されている。こうした条件とリゾートホテルにとつての適切な性格とは、大胆でスケールの大きい対応を必要としたのである。ホテルの設計は国際コンペによってシーザー・ベリ&アソシエイツに決定され、その後の基本設計から竹中工務店が参画し、日米共同で進められた。

リゾートホテルは効率よく機能すべき、非常に複雑な建物である。例えば、我々は次のような別々のエントランスを用意した。ホテル客のエントランスは南側4階にあって、スロープ状の車路と歩道によってアクセスする。団体客には西側1階に専用エントランスがあり、宴会およびコンファレンスのエントランスは南側1階に設けられている。従業員およびサービス部門の入口は北側2階にあり、駐車場への入口は南側の3階と北側の1階に用意されている。ドーム球場とは東側のデッキで接続されており、浜辺からの連絡は北側大階段を昇ってくるようになる。

当然のことながら、客用と従業員およびサービス部門の動線は、別々の階段、通路、エスカレーター、エレベーターで区別されている。機能的な問題は美的な構想とともに発展し解決しているので、美しく楽しいホテルであるだけでなく、使いやすく経済的な建設コストになるように計画されている。

同時に、日本のシティホテルに要求される機能は十分に備えている。客室を最大の収入源および売り物とする欧米のホテルとは異なり、日本では、大規模な催し物、集まりの場所として利用され、客室からの収入は二次的である。結婚式場、レストランやバー、ヘルスクラブ、ショッピング街、会議室や宴会場などを利用する人々の方が宿泊者数より多いのである。

構造形式は、機能に対応するだけでなく敷地の性格に芸術的な対応をすることによって決定されている。

機能

1: デザインの基本方針は、すべての客室から海の景観が望めることにおかれており、結果として客室タワーは湾曲した平面形状となった。

2: 主な共用空間を客室棟と駐車場部分から分離することは重要であり、これによって建設の経済性が確保された。

3: タワーは敷地の西側角に配置されたが、これによって開閉可能なドームに落ちる影の影響を最小限にとどめることができた。

4: アトリウムなどの主要な共用空間は5階に置かれたが、これによって高架高速道路を越えた高さから浜辺の景観を楽しむことができるようになった。

敷地への対応

ホテルのデザインは彫刻的フォルムをしており、客室のすべてが海に面するよう工夫されている。屋根と壁が作り出す緊張感のあるカーブは、水と風を連想させる。カーブしたフォルムの構成が福岡ドームの開閉式屋根の輪郭と呼応し、ドームの低めのフォルムとホテルの高いタワーとがバランスよく対応している。

共用空間の中心であるアトリウムは、古代ギリシャの豊かさや繁栄の象徴である、豊じょうの角の形態となっており、北側の海に対して平滑なファサードを向けている。

ここは博多湾に対する巨大な窓であり、同時に高架高速道路に対する建物の圧迫感を表現している。

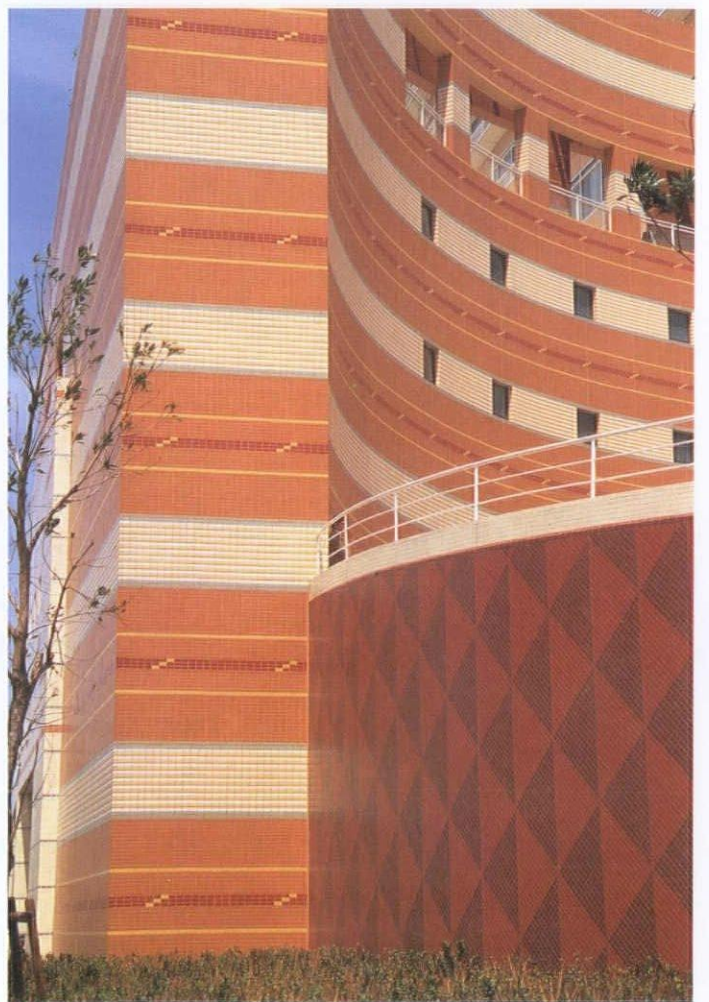
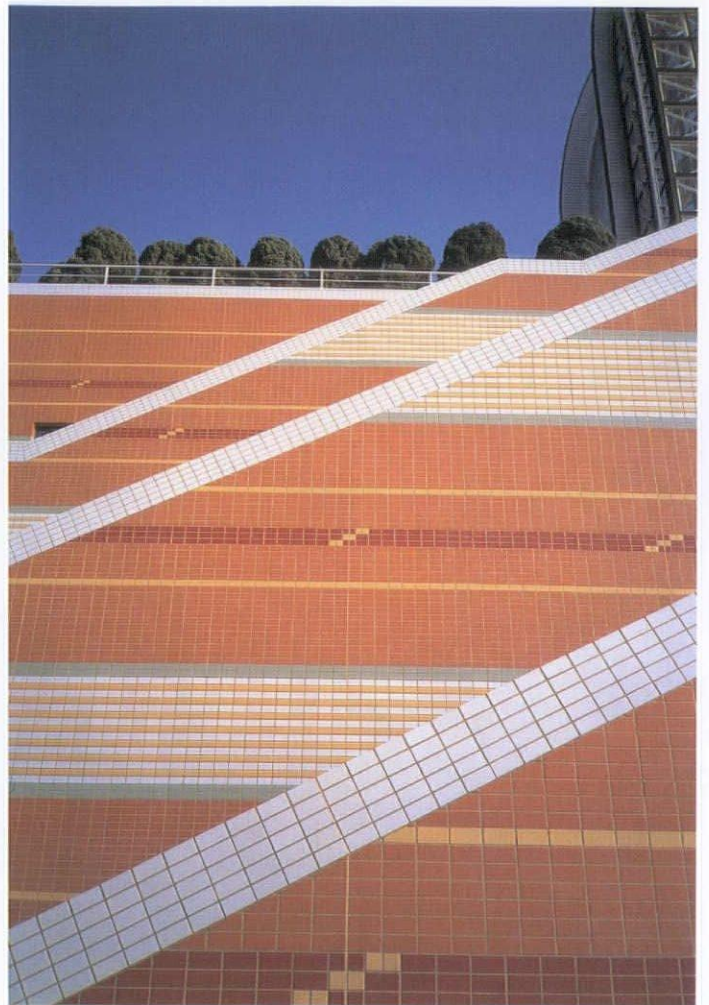
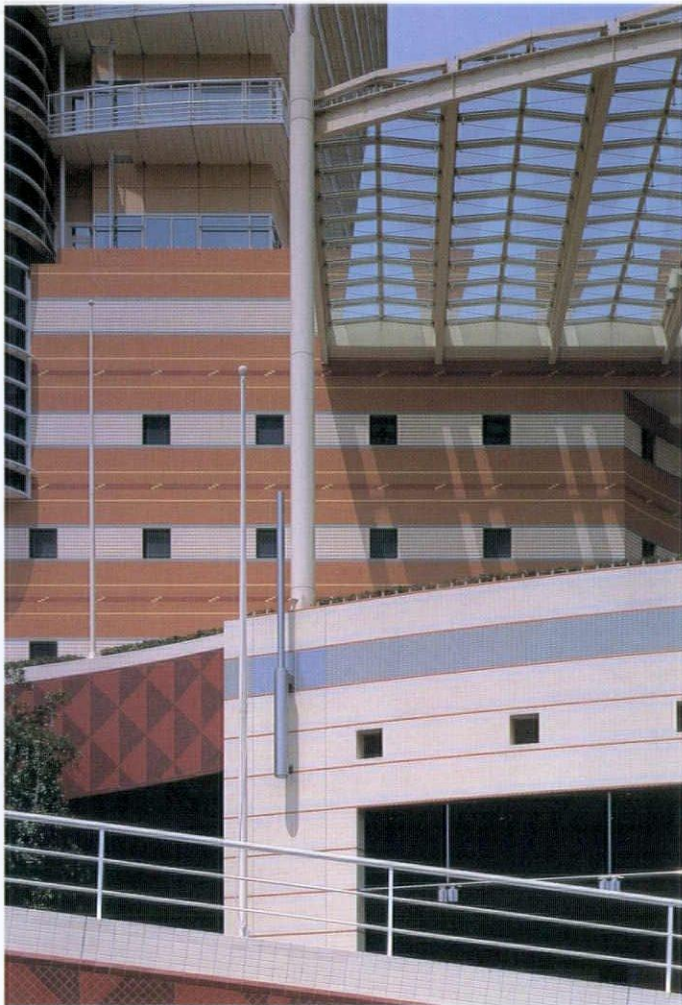
南側エントランスの斜路は背の高いへこみのある壁

に抱かれるように配置され、開かれていながらも歓迎の意を表現する包み込むような空間をつくりだしている。

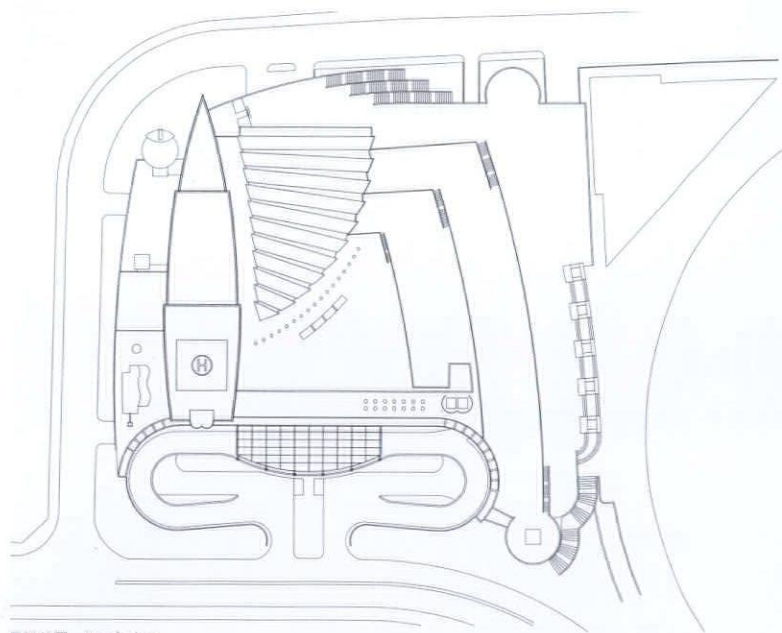
私は常に計画においては直観的で芸術的な視点と論理的で練られた議論とを連結しようと試みている。こうしたことが建築芸術における独特の性格のひとつであると私は信じている。

この建物の壁面にある色と模様は、数え切れないほどのスケッチや模型、原寸大モックアップなどによる検討によって、絵を描くように徐々に展開し決定されている。模様と曲面は重量の概念を弱め、風と水へ向けての躍動感を強めている。我々はこの建物がリゾートホテルであることを明快に了解してもらえよう期待したのである。我々は日本の磁器質タイルを好んで用いたが、それは経済的に見栄えもよいし、建物に色と性格を与える素晴らしい媒体になってくれるからである。このタイルはここではとりもなおさずリゾートホテルの性格を表現することに使われたのであって、特別な場所としての表現、非日常的で強烈な印象が求められたのである。

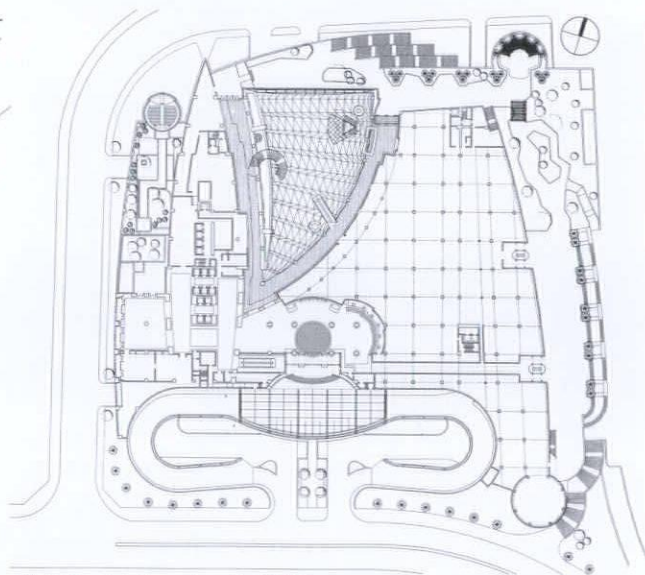
タイルとガラスによる壁面は、緊張感のある2次元平面を3次元ヴォリュームに造形するようにデザインされている。現代建築はこうした技術的な性格をもっている。明るい色模様が全体構成のなかに華やかな性格を与え、建物の被膜にある視覚的な連続性を与えるような「スーパー・サーフェイス」を創りだす。このスーパー・サーフェイスは、窓や開口部を越えて先端にまで、その全体性を失うことなく目で追ってゆくことができる。この計画は当初競技設計として始まっているが、基本設計の段階で竹中工務店設計部との協同作業を行った。我々は外観と主要な内部パブリック空間をデザインし、竹中工務店設計部はそれ以外の全てのインテリアデザインを担当した。また、竹中工務店はすべての技術的な図面書類を作成し、建設においても中心的に携わった。内部空間の性格付けについては施主である福岡ダイエー・リアル・エステートが竹中工務店と共に行った。







屋根伏図 Roof plan



主階平面図 Main floor plan S=1:2500

The Sea Hawk Hotel & Resort was designed to respond to the special conditions of its site, its neighboring structures, its program, and the nature of hotels in Japan.

The site is located on the edge of the City of Fukuoka, facing Hakata Bay. Modern Fukuoka includes the ancient city of Hakata, which figures prominently in the history of Japan as a natural port close to the mainland at Korea. The importance of shipping and fishing in the modern port city of Fukuoka reinforces its symbolic role as a city facing the sea.

The site for the 1,052-room Hotel is adjacent to the Fukuoka Dome, a 40,000-seat baseball stadium with a retractable roof, which was under construction when the design for the Hotel began. The site is against an elevated highway that separates it from the beach. These conditions and the appropriate character for a resort hotel required a bold, large-scale response. The Hotel Commission was won by Cesar Pelli & Associates in an invited international competition.

Resort hotels are very complex machines that need to work efficiently. For example, we provided the following distinct entrances: the main guest entrance is on the south side on the fourth floor, reached by the automobile and pedestrian ramp. The group entrance has its own drop-off on the west side of the first floor. Banquet and meeting rooms entrance and drop-off are also on the first floor, but on the south side. Employees and service entrances are on the first floor on the north side. There is automobile access to parking on the third floor, south side and on the ground floor, north side. Entrances from parking to the main building are on the ground floor and on the fourth floor. Entrance from the Arena is on the fourth floor on the east side, entrance from the beach is up the Grand Stairs on the north side.

There are, of course, separate circulation systems for public, employees and services with differentiated corridors, stairs, escalators, and elevators. The functional solution developed together with the aesthetic conception to provide not only a beautiful

and enjoyable hotel, but one that would be easy to operate and economical to build.

At street level, the design responds to the multiple roles of a large hotel in the life of a city in Japan. In the West, hotels retain a transient residential purpose and character, with the guest room as the primary attraction and main source of revenue. In Japan, by contrast, large communal functions are at the core of the life of a hotel with the guest room a secondary source of income. Extensive wedding facilities, multiple high-quality restaurants, bars, health club, shopping concourse, meeting and banquet rooms all operate as destinations of their own, dependent on a broader audience than hotel guests.

The shape of the structure developed as a response to function and also as an artistic response to the qualities of the site.

Function: 1) A primary design purpose was to give all guest rooms views of the ocean. This shaped the guest rooms' tower as an inflected slab form. 2) It was important to separate the main public space from the hotel rooms' block and from the parking structure. This made for economy of construction. 3) The hotel tower was placed towards the western edge of the site to minimize the impact of its shadow on the neighboring dome with its openable roof. 4) The major public spaces, such as the Atrium, were placed on the fourth floor, high enough to gain views of the beach and Hakata Bay over the elevated highway.

Site: The prow-shape building addresses the beach and the sea. It establishes a vertical balance with the Fukuoka Dome. It is a sculptural form that marks the point where land meets the water. The taut curves of the roof and walls relate to water and wind. The composition of fractured curved forms complements the profile of the monumental roof of the baseball stadium with its three-part retractable roof. The low earth-bound forms of the dome are balanced with the tall prow of the Hotel tower.

The main public space, the Atrium, has the shape of a cornucopia, the ancient Greek symbol of abundance and prosperity. It also has a flat facade

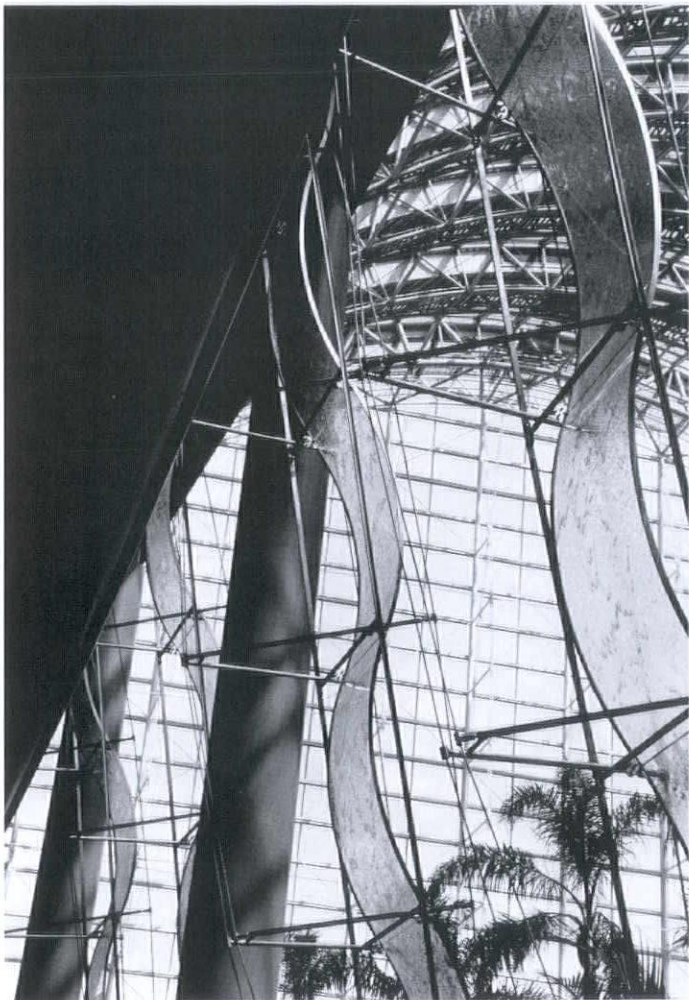
facing the water. This is a huge window to Hakata Bay and at the same time it expresses the compression of the building against the elevated highway.

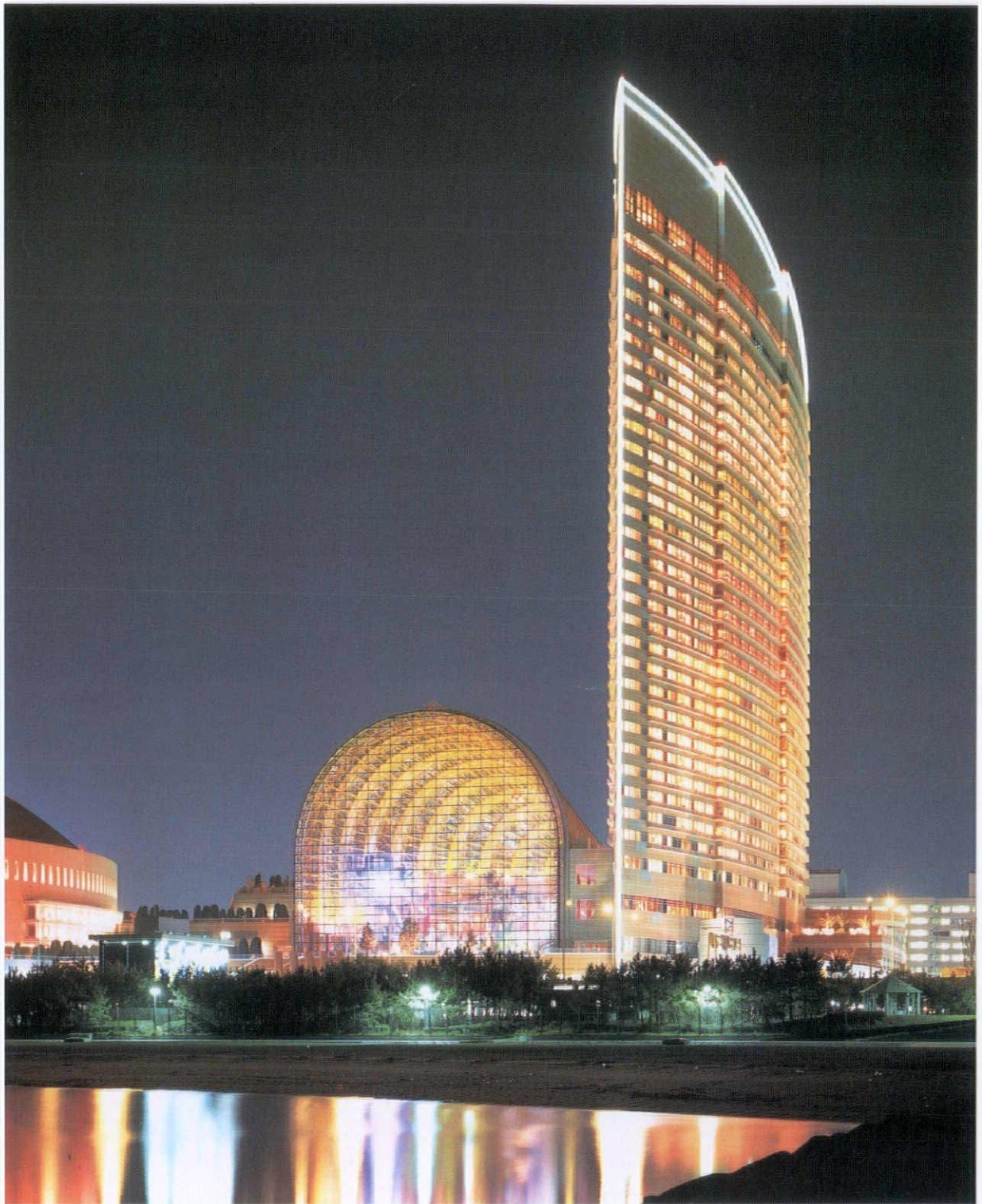
The entry ramp is embraced by tall concave walls, defining an open but contained space as a gesture of welcome.

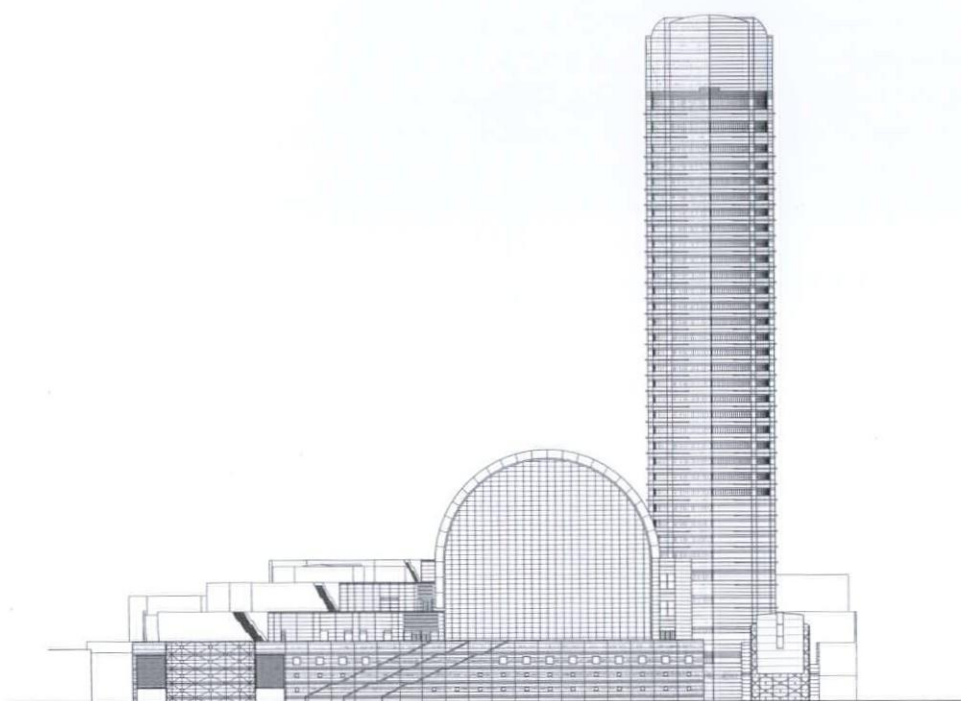
In all my projects, I try to combine intuitive artistic visions with well-reasoned, logical arguments. I believe this is one of the distinctive characteristics of the art of architecture.

The colors and patterns of the building walls developed in a painterly way and slowly, with innumerable drawings, models and full size mock-ups. Patterns and curves de-emphasize the perception of weight and strengthen the sense of motion toward wind and water. We wanted the building to be unmistakably perceived as a resort hotel. We like Japanese exterior tiles; they are economical, handsome and they were a good medium for us to give color and character to the building: the character of a resort hotel, an exceptional place, requiring impressions more intense than those of every-day life.

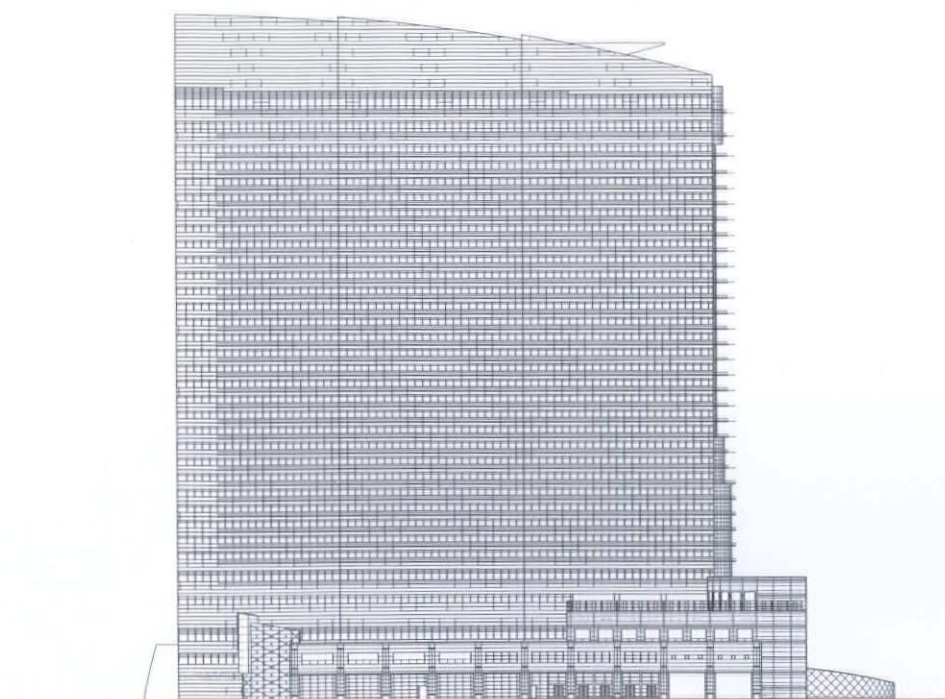
The walls of tile and glass are designed as taut two-dimensional surfaces defining three-dimensional volumes. This expresses the basic nature of all buildings today. The bright color patterns bring an exuberant character to the composition and they create a "super surface" that gives visual continuity to the building skin. The super surface guides our eyes across windows and voids and around sharp corners without losing its integrity. For this project, starting with the competition, we collaborated with the Takenaka Corporation. We designed the exterior form and major interior public spaces, and they designed all other interiors. The Takenaka Corporation also produced all technical construction documents and was the main contractor for the building. Fukuoka Daiei Real Estate, our client, set the character of each space and guided the design of most interior spaces, working directly with the Takenaka Corporation.







北立面图 North elevation S=1:1500



西立面图 West elevation

シーザー・ペリの建築

榎 文彦

最近私は、あるところのレクチャーで現代における建築（あるいは建築文化といっても差支えないかもしれない）のグローバリゼーションの様相に触れ、「どこか違っているようで同じものと同じようである異なっているものの混在現象」として総括し、単に建築のみならず同じ事が政治の世界においても生じつつある事への認識があって始めて相互理解が得られるのではないかと述べた事がある。

かつて建築における差異性とは地域毎の差異であり、また同じ地域の中における時代的発展の差異であった。各々の地域のもつ地理的・風土的特性、地域固有の技術と資源、あるいはそこに育まれてきた生活様式、そして文化的に共有されてきたアイコン等が建築という表現形態の中に反映され、統合され、時に独自の様式と称されるものにまで発展する事があった。これ等がヴァナキュラーなものであれ、高度にリプレゼンテーションなものであれ、建築家の個性とか独創性は緩やかな文化の大河の流れの中に位置づけられ、歴史的に視るならば文化自体に新しい地殻の運動が生じた時にのみ天才が認知されてきた。

誰もが認めるように18世紀以降の近代化、昨今の急激な世界化の文化的現象は我々の建築の世界においてもほとんど共時的な知識、インフォメーションの交流と相伴って、かつて地域の特性を構成していた上記の諸々の要素はむしろ任意的かつ選択的に使用され得る共通の建築言語化しつつある。その結果が冒頭に引用した、私の発言に繋っていく。1930

年代におきた国際様式は明らかに地域性を超えた建築のパラダイムとその表現様式の存在を確認させようとした作業である事と比較した時、90年代の国際様式とはむしろ微分化された差異性が際立ちつつあるところに時代のパラドックスが感じられる。正に共通項と差異項の間に存在する地と図の関係がこの半世紀の間に逆転してしまったのである。

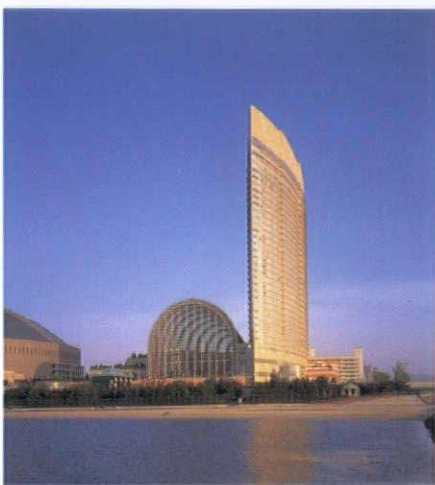
シーザー・ペリのように今日国際的な広がりをもった場でプラクティスする建築家にとって、上に述べてきた事は当然彼の日常の観察と思考の中に組み入れられているのに違いない。我々建築家は広義なレベルではその殆どがモダニストである。但し今日そのモダニズムは百人の建築家がいたら百様のモダニズムが存在すると言われる。何故なのだろうか。ノーベル賞受賞者で詩人であるオクトヴィア・パス (Octavia Paz) はその受賞式の講演の中でモダニズムについて「現在」こそがモダニズムの華であると述べている。だからこそ百様のモダニズムがあって不思議ではない。恐らく誰もこのように建築家がいかに自己のアイデンティティをこうした世界化するモダニズムの中で確立するかという共通の問題意識を絶えず抱いている。建築家の生涯では誰もがそのどこかで彼等の経験の積分値をいかに処理するかという問題に直面している。その中ではっきりと自己完結的な世界をもち、その経験すらも定められた世界の外に出る事を許さないタイプに属する少数の建築家が存在する。一方、もうひとつの派として、彼等の世界は常にオープンエンドであり、新しい経験は絶えず次なる世界の展開の土壌であることに期待する思考様式をもった建築家達が存在する。シーザー・ペリは恐らくこの一群に属する建築家の一人であると考えてよい。その根底のひとつとして、彼の蒼生の頃彼の師匠の一人であったともいべきエーロ・サーリネンにその傾向を強く見出すからである。

また、この春東京であった講演会の席上たまたま彼はフランク・O.ゲリーの建築に言及し、彼はゲリーに作家としては最大の敬意を払うが、彼の建築（建築の方法）は理解出来ない」と述べた（※は著者の解釈）。このことは彼は明らかにモダニズムの規範であった進歩＝新しさ、あるいはラショナルなアプローチへの信仰を未だ失っていない証左でもあると理解する事が出来よう。それでは彼はどのように彼自身のアイデンティティを国際的な建築界の中に確立しようとしているのだろうか。このことを推測する前にひとつの重要な事は、彼が極めてリフレクティブな建築家であるという事である。リフレクティブな態度とは現在を過去と将来の連続した時間の流れの中で捉える視点をもつことであり、このことが彼自身のモダニズムの中での現在性を規定しているといえる。そしてリフレクティブである事によって、彼の意識の中で彼にとって好ましき過去と、あり得べき将来が豊富な経験のレパートリーの中から注意深く選別されていくのである。

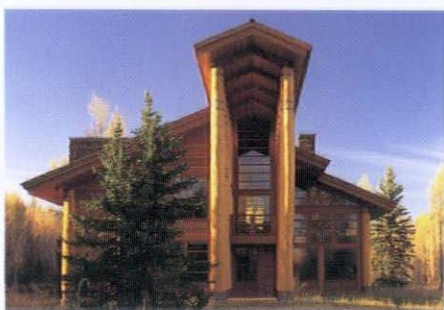
この1年間に日本においてふたつの彼の作品が完成した。ひとつは福岡のホテル、シーホークであり、もうひとつは東京のNTTの本社である。少なくとも分析の対象としてはシーホークの方がより多くのテーマを提供していると思われるので、今この建物に限って触れてみたい。米国に渡ってから彼の作品を通じて際立った印象を与えるのは大きなヴォリュームの処理における図象の構成の大胆性と明快性であった。この才能はヴィクター・グルーエン事務所時代のUNIDO本部の競技設計の1等案、LAの〈パシフィック・デザイン・センター〉、あるいは〈ナイアガラウィンターガーデン〉の作品等に極めて顕著に見出せる。特に〈パシフィック・デザイン・センター〉のガラスがつくり出す抽象図象と濃紺の色彩の組み合わせは、当時一世を風靡したヴ



パシフィック・デザイン・センター Pacific Design Center



シーホークホテル&リゾート Sea Hawk Hotel & Resort



週末住宅 House in the Western United States

ィジュアル・アートにおけるミニマリズムの、建築におけるひとつの実現であり、同時にLAという米国における特異な精神風土を直感的に反映した作品として極めて新鮮な印象を我々に与えたのである。

シーホークはこうしたペリらしい大胆な抽象的図象を駆使した作品群の系列の中のひとつとして捉えられる事が出来よう。といってもアーチの最高点では40mになるアトリウムは、シリンダーの一部でなく、むしろほら貝を想起させる形状をもっている。また、薄いレモン状の水平断面をもったホテルの高層部の海寄りの先端は鳥のくちばしを思わせるように、抽象性というよりも、むしろリプレゼンテーションな性格が強い。特にこの建物に海岸沿いにアプローチする時、隣接する円弧状の屋根をもった福岡ドームと共に、これ等の特異な形状をもった形態群は互いに寄り添うように、そして同時に緊張感をほらみながら、ダイナミックなシルエットをつくり出している。一方エントランス方向から見ると、玄関の両翼は、これも鳥の翼を広げた様な低層部と高層部の先端が柔らかな曲線群のアンサンブルを形成されている。この案は何人かの建築家によるプロポーザルの中から選ばれたものである。そういえばこうした大胆な図象の集合体は審査員の一人であった磯崎好みなどがあったといえるかもしれない。たまたまこのシーホークに泊まった翌日、大分県別の府市に新しく完成した彼の最新作ピーコン・プラザというコンベンション・センターを訪れる機会があった。マチエールの差すらあれ、両者に共通するものとしてこうした明確な図象の大胆な並置の手法を指摘する事が出来るだろう。

ペリのもうひとつの建築の特徴は、こうしたヴォリュームの作品の中にも常にある種の「優しさ」が空間のスケール、場所性の設定を通じて存在する事である。この「優しさ」と「モニュメンタリティ」の共存が恐らく彼および彼の事務所を今日、米国において最もポピュラーな設計事務所のひとつにならしめているとも言える。かつて、私は米国人が建築を評価する場合、絶えずそこに自己の身体の拡張されたイメージとしての建築に対する期待が存在する傾向がある事を指摘した。スカイスクレーパー、郊外住居、スーパー・ハイウェイは、アメリカ人が有する個人的なユートピアとしての建築、あるいは都市文化に対する願望の結晶でもあった。しかし同時に、アメリカ人はこうした身体性の大胆な発露に対して過大なまでの憧憬のまなざしを送りながら、一方身体の対極にある精神において限りなく「優しさ」を求めようとする。考えて

みるとこの強さと優しさの共存こそ、最近まで米国の映画のヒーローに求められた一貫した姿なのであった。一泊したシーホークホテルは4階で客室棟とアトリウムが連結されている。多くの若者達がさんざめく前夜の喧騒が拭い去られ、人一人いないこの空間は、朝の光の中である種の優しさに満ちていた。赤く塗装されたヴォールトの鉄骨、アトリウムの周縁の壁に塗り込められたブルーから赤系の色彩は、ペリの個人的な世界からのメッセージである。赤と緑は彼が最近好んで使う色であると聞いた。同じ福岡にある〈イル・パラッツォ〉はアルド・ロッシの作品である。そこで外壁にほどこされた赤と緑の強烈な色彩は同じ色彩でもロッシの世界のメッセージであり、日本のものではない。と同時にこの二人の作家はどこかで同じラテンの血を分け合いながら、また決して同じではない。またそういいながら「非日本」という共通項をどこかで背負っている。

もう一度、モニュメンタリティと優しさの問題に返ろう。ちょうど数カ月前、『ニューヨークタイムズ』の日曜版に、著名な建築家達が設計した米国の住宅に関する特集があった。筆者はポール・ゴールドバーガーである。この日曜版の表紙になったのがペリのデザインによる、あるクライアントの週末住宅であった。一見モニュメンタルな太い柱列群に、同じ粗削りの梁によって組み上げられた切妻の空間はちょっとみると宗教的な荘厳さをもちながら、ひとつの家族が過す週末の生活のアンニュイに應える優しさをもっている。ゴールドバーガーは次の様に述べている。

「この住宅は一見モニュメンタルである。しかし、真に偉大な建築だけが所有する香気と存在感を有している。そして力強さと優しさによって神秘的ですらある……。そこにはモダニズムの洗練性とログキャビン特有の暖かさが統合されている。この家のもつ巨大さと贅沢さに拘わらず、その場所性を高揚するのに成功している。この家は人間的な暖かきをもつだけでなく、勝れた芸術の基本的な条件である、すなわち我々に世界をみるうえで新しい可能性を与えてくれるという条件を満たしているのである……」。

おそらくこれこそが、ペリが彼のパブリック・アーキテクチャに追い求める夢なのではなかろうか。

●まき・ふみひこ／建築家

The Architecture of Cesar Pelli

Fumihiko Maki

Recently I had occasion to give a talk on the globalization of contemporary architecture (or perhaps I should say architectural culture). I characterized the phenomenon as one in which "things that are the same but appear somehow different coexist in confused fashion with things that are different but appear somehow the same". The situation can be better understood, I suggested, by drawing parallels between architecture and the current political world, which too has witnessed a splintering of groups and shifting of alliances.

The differences that once existed in architecture were regional differences or differences of historical development within the same region. The geography, climate, technology, resources, style of life and cultural icons characteristic of each region were reflected and synthesized in the expressive forms of architecture, and these forms at times developed into distinctive styles. Whether the styles were vernacular or highly representational, the architect's individuality and originality were seen in the context of the larger, gradual flow of culture, and in the past genius was acknowledged only when fundamental changes occurred in culture itself.

As everyone will agree, modernization since the 18th century and the globalization that is taking place so rapidly today have made possible the nearly synchronous communication of knowledge and information, and the various abovementioned factors that once made each region distinctive are becoming a part of a shared architectural vocabulary that more or less can be freely and selectively used. The result is the situation I described at the outset. The International Style of the 1930s was clearly intended to demonstrate the possibilities for a paradigm and an expressive style of architecture that transcended regionality. By contrast, the international style of the 1990s is marked by an increasing divergence that reveals the paradoxical nature of the times. The figure-field relationship between commonalities and differences have indeed been reversed in this half century.

Such facts must inevitably form a part of the everyday views and thoughts of an architect with a worldwide practice such as Cesar Pelli. In a broad sense, nearly all architects are modernists. Yet today, there are as many modernisms as there are architects. Why should that be so? In his Nobel Prize

acceptance speech, the poet Octavio Paz made the comment that "the present" was indeed the flower of modernism. It is not strange therefore that there should be so many modernisms. Every architect is continually made aware of the problem of establishing his or her own identity amid this globalization of modernism. At some point in the course of a career, every architect finds it necessary to evaluate the value of his or her accumulated experience. There are a few architects who inhabit clearly self-sufficient worlds and whose experiences remain within certain predetermined boundaries. Then there are architects of a different type, whose worlds are always open-ended and who believe that new experiences are essential to the continuing evolution of their work. Pelli is an architect of the second type. In this one can see to some extent the influence of Eero Saarinen, for whom Pelli worked as a young man. This spring at a lecture in Tokyo, Pelli happened to comment on the architecture of Frank Gehry. Though he expressed the greatest respect for Gehry as an artist, he admitted to not being able to understand Gehry's architectural method. This can be taken as evidence that Pelli has not yet lost the basic modernist faith in the notion of progress and in a rational approach. How then is he trying to establish his own identity in the international world of architecture? Before speculating on this, it is important to note that Pelli is a quite reflective architect. He sees the present as part of a continuum that links the past with the future, and this can be said to define his own contemporaneity within modernism. And because he is reflective, he carefully selects from a rich repertoire nourished by experience what he considers a desirable past and future.

In the past year, two works by him have been completed in Japan. One is the Sea Hawk Hotel in Fukuoka and the other is the NTT Headquarters Building in Tokyo. I will confine my remarks to the former, inasmuch as it seems to offer more material for analysis. Since moving to the United States, Pelli, in dealing with large volumes, has shown a remarkable ability to create clear and bold compositions. This ability was apparent in the first-prize entry for the UNIDO Headquarters competition which he designed while still with Victor Gruen, the Pacific Design Center in Los Angeles and Niagara Falls winter Garden. In particular, the Pacific Design Center, with its abstract form and dark blue glazing, was a prime example of minimalism, which was so influential in the visual arts at the time, and it impressed us as an original work that reflected in an intuitive way the state of mind that Americans have associated with Los Angeles.

The Sea Hawk Hotel belongs with those

works by Pelli characterized by bold, abstract forms. Yet the atrium, where the tallest arch rises to 40 meters, possesses not a cylindrical form but a configuration suggestive of a conch. And the high-rise portion of the hotel, which is shaped in plan like a flattened (American-style) football, with a sharp seaward end not unlike the beak of a bird, is not so much abstract as representational in character. When one is approaching this building by the coastal road, the distinctive forms of the hotel, together with the curved roof of the adjacent Fukuoka Dome, appear to huddle close to one another, even as a feeling of tension is maintained. The result is a dynamic silhouette. From the direction of the entrance, the hotel appears as an ensemble of gentle curves formed by the low-rise block, which suggests the spread wings of a bird, and the high-rise block. This scheme was chosen from proposals presented by a number of architects, and Arata Isozaki, who also favors such ensembles of bold forms, was a juror. After spending a night at the hotel, I happened to visit Isozaki's latest work, the recently-completed convention center called Beacon Plaza in Beppu, Fukuoka Prefecture. Although there is a difference of material, the two works indicate by their bold juxtapositions of distinct forms a similarity of approach.

In Pelli's architecture, delicacy (by which I mean an ability to empathize with others) is also evident in the way the scale of space and the character of place are established. It is no doubt because Pelli's works combine monumentality with delicacy that his office is one of the most sought after in the United States. As I have pointed out elsewhere, Americans tend to look for architectural images that are extensions of themselves. The skyscraper, the suburban house, and the superhighway are crystallizations in the architectural and urban context of the individualist utopia Americans have sought. Yet Americans, while yearning for such bold manifestations of physicality, also prize gentleness of spirit. It is no coincidence that until recently Americans demanded of their movie heroes just this combination of strength and tenderness. The guest room block and the atrium at the Sea Hawk Hotel are connected at the fourth-floor level. In the morning, I found that this space, which had echoed the night before with the noise of youthful revelry, was deserted and possessed a gentle, solicitous quality. The steel-frame vault painted red and the walls on the periphery of the atrium colored a distinctive blue and red are messages from Pelli's personal world. I understand red and green are Pelli's favorite colors these days. Hotel Il Palazzo by Aldo Rossi is also located in Fukuoka. The intense red and green of its exterior are a message from Rossi's world and by no

means native to Japan. These two architects, though they both come from Latin cultures, are quite different. Yet in Japan at least they have something in common, the fact of being non-Japanese.

Let us return once more to the question of monumentality and delicacy. A few months ago, the Sunday Magazine of the New York Times was devoted to houses in the United States by famous architects. The main article was written by Paul Goldberger. The cover showed a weekend house designed for a client by Pelli. The gabled structure, with rows of log columns supporting log beams, seems monumental at first glance. Yet, though it has a kind of religious solemnity, it also has a gentleness that undoubtedly helps to mitigate the ennui of a family spending a weekend together. Goldberger comments as follows.

"[Although monumental]... it had an aura, a presence, that only true works of architecture possess: it managed, in a way that seemed almost mystical, to be at once powerful and endearing..."

"The design merges ...the sleekness of modernism [with] the embracing warmth of a log cabin. And for all the hugeness and luxury...in the end it celebrates the land far more than it defies it. This house possesses human warmth but also the essential quality of all art, which is the ability to make us see the world in a slightly different way.*"

This is undoubtedly what Pelli is trying to achieve in public architecture as well.

(Translation by Hiroshi Watanabe)

* "The Masterpieces They Call Home", The New York Times Magazine, 12 March 1995.

クアラルンプール・シティー・センター

Kuala Lumpur City Center Phase I

Kuala Lumpur, Malaysia 1997

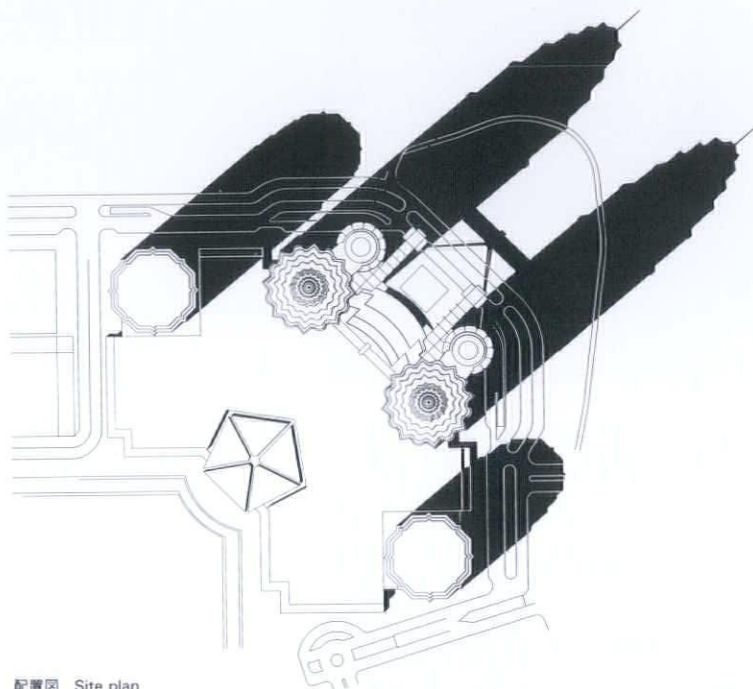
これは、クアラルンプール市のシティーセンター第1次計画の一環として行われた国際指名コンペである。計画の主体は、クレジス、カーター、ペイルアンド・パートナーズによるマスタープランに沿って、敷地の要所である北西の角地に2棟の超高層ビルを設計することであった。この高層ビルは今後クアラルンプール市、さらにはマレーシアの国自体にとってシンボリックな存在となることは明白で、それだけに期待も大きく、主催者側にとって建物の性格づけは非常に重要なものであった。

そのようなことから、コンペでは特に「マレーシア的」な設計にしようという点が強調された。しかし「マレーシア的」として参考出来るような建築は実際のところほとんど無いのである。例えばクアラルンプールで、現在最も重要な建物は英国植民地政府の手によるもので、とてもマレーシア風と言えるものではない。唯一、真に伝統的なマレーシア風建造物と言えるのは、1〜2階建ての軽量木材または竹構造のものがほとんどで、シュロが葉の屋根である。最近になって建てられた大きな商業ビルも、特徴のないインターナショナル・スタイルを踏襲したものであった。

今回の新しい高層タワーを、単にインターナショナルなテーマのバリエーションのひとつに終えるのではなく、(それはつまりはアメリカ的、またはヨーロッパ的なフォルムの一群になってしまう) 何らかの形でマレーシアに属するものにしたい、という意向に私は強く共感を覚えた。そこで我々は、それまでのクアラルンプールのこじんまりとした建築の伝統に完全に沿ったものではなくとも、その場所に合った独自の性格を備えたタワー棟の設計を第一の目標とした。コンペ参加者の中でこの問題に真っ向から真摯に取り組んだのは、我々だけだったと思う。そのことが勝因のひとつにもなったのではないだろうか。設計にあたって我々は、気候や当地に優勢なイスラム文化、また伝統的なマレーシアの建物や品々に見られる、形やパターンに対する人々の感性に出来るだけうまく対応するよう努力した。

芸術面での最も重要な決定は、タワーを象徴的かつシンメトリーな構成にすることであった。近代運動において建築家は、対になった建物は出来るだけ非対称にし、例えば高さを変え、(他の参加案のほとんどがそうであった) あるいは同じ高さであっても、ミースのレイクショア・ドライブ・アパートやミノル・ヤマサキの世界貿易センタービルといった例にならって、斜めに配したりすることが多かった。シンメトリーな構成はシンボル性を生み出す可能性がある——初期モダニズムはそれを嫌って、几帳面なまでにそれを避けたのである。しかし我々の設計したタワーはシンメトリーであるだけでなく、非常に象徴的であり、2棟に挟まれた空間もまた象徴的なものとなっている。

全体の構成の中で鍵となっているのが「空間」である。各棟ともそれぞれに垂直方向の軸があるが、全体としての主軸は空間の中心にある。老子によれば、「虚」における「実体」とは、空間を構成するモノの方にあるのではなく、「中空」そのものにあるので



配置図 Site plan

ある。もちろんこれは精神的な実在について述べた言葉である。しかしそれはまた、ペトロナス・ツインタワーの実体でもあるのである。

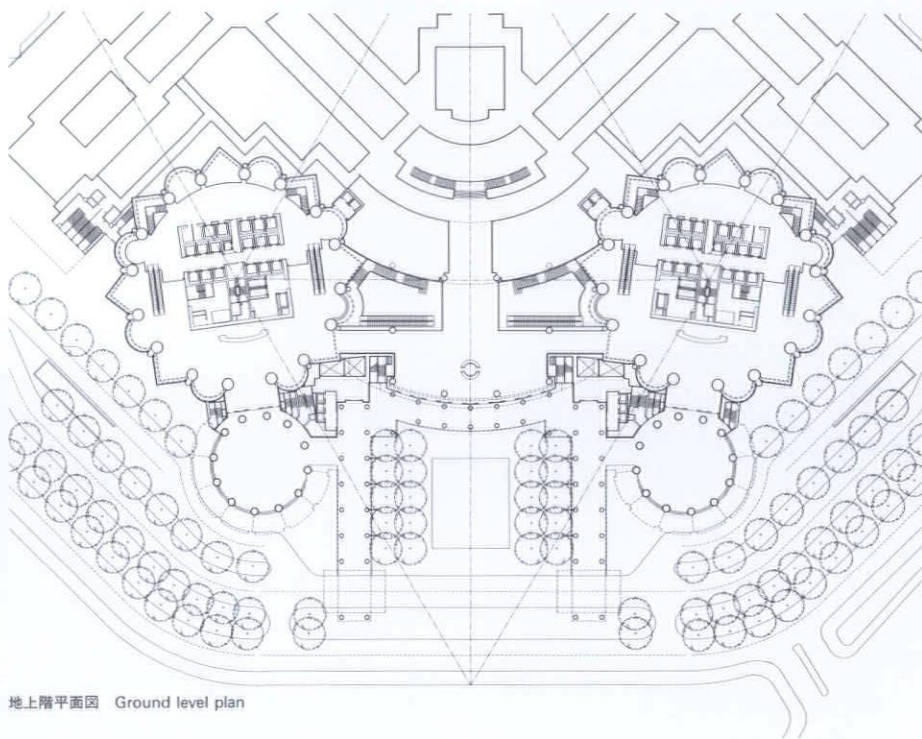
「中空」のタワーは、ふたつの棟を41階と42階(スカイロビー・フロア)で結ぶペデストリアン・ブリッジによって強められ、より明瞭になっている。ブリッジとそれを支える構造体(すなわちふたつの棟)は、空への入口——高さ170mの玄関——すなわち「無限へのドア」となるのである。これこそ西欧のどんな高層建築にもない、ペトロナス・タワー独自の特性である。これは普遍的な特性であって必ずしもマレーシア風とは言えないが、しかしその特性を備えた建物が世界で初めてクアラルンプールに出現することによって、永遠にこの土地と結び付いて人々に記憶されるだろう——例えばエッフェル塔とパリの関係と同じである。エッフェル塔の構造や形もやはり、パリ風あるいはフランス風建築とは何の関係もなく生み出されたモノなのである。

一方でタワー棟と土地との繋がりについては、いろいろな工夫がなされている。例えばタワーの幾何学的な形は、イスラム教における幾何学の伝統に則ったものである。この幾何学的伝統はイスラム教国では西欧より遙かに重視されており、その社会全員によって心から受け入れられ、認められているのである。プランは2個の正方形が重なり合った形を基にしているが、この形は恐らくイスラム教のデザインや建築の基礎となる最も重要な幾何学的フォルムといえるものである。重なり合った正方形はいわゆる「エイトポイント・スター」を形づくる。我々はこの星の内角に8個の半円を重ねて6の分岐した形をつくりだした。16の内角のそれぞれには、さらに小さな半円が建物の主構造である柱を表している。単純形から複雑形へという幾何学的な展開の仕方もある。また、イスラム教の伝統に沿ったものである。基本

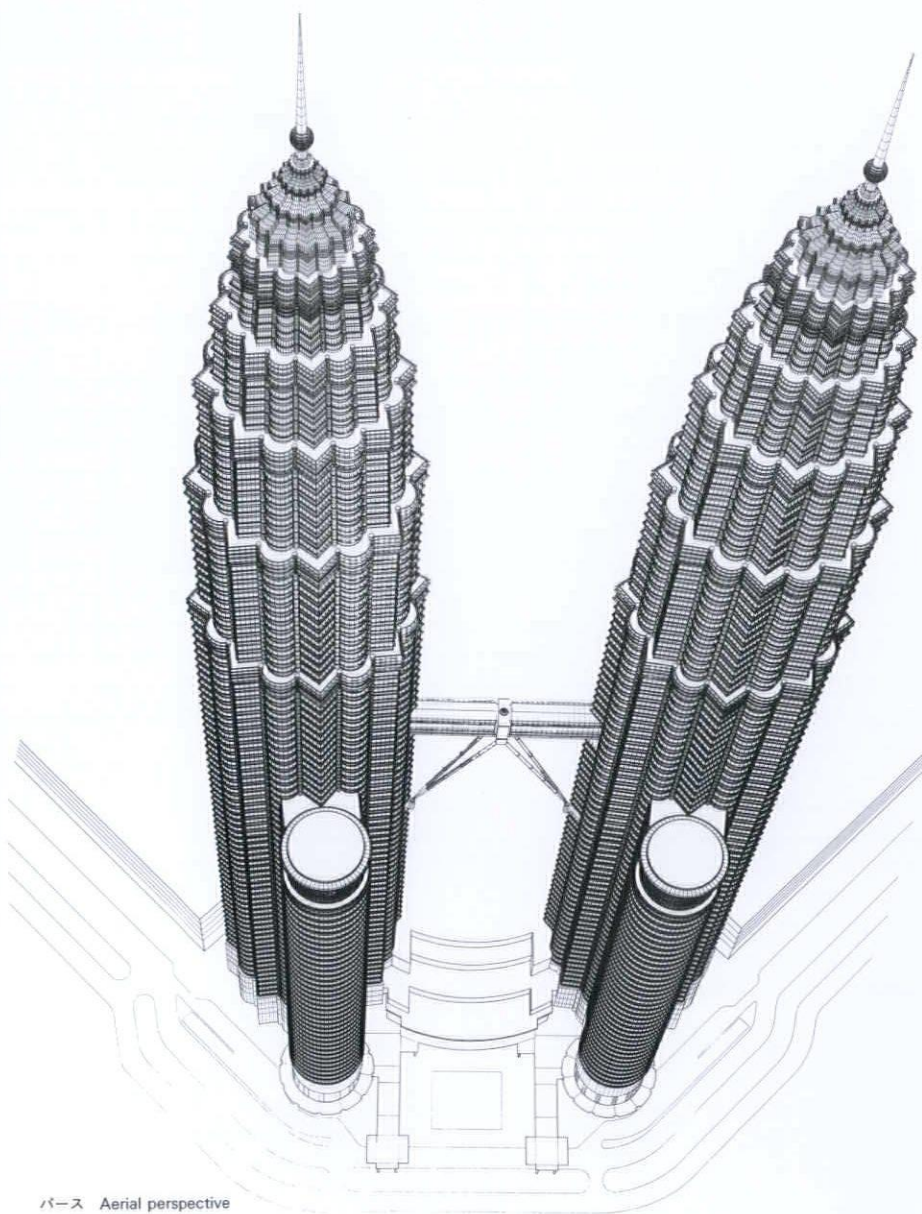
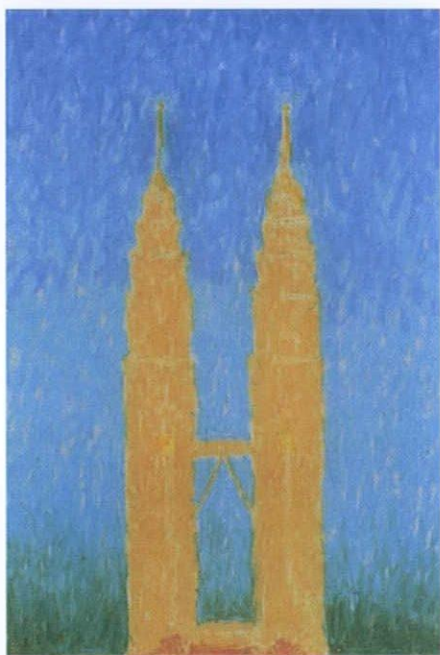
となる正方形は、地球と4つの基本方位(東西南北)——または天国と4本の川——を表し、複雑さは神の不可解性を示すのに必要なメタファーなのである。タワーはどちらも上層へ行くにつれて計6回セットバックしている。上層部ではさらに壁が徐々に中央に向かって傾いて、全体のフォルムをより完璧なものにするとともに、高層建築でいう、いわゆる「axis mundi」の垂直軸を強調している。尖塔部分は空に向かって伸び、全体の輪郭に込められた象徴性をさらに強めている。

建物の一形態としての高層建築は寒冷な気候の北部の都市で生まれ、発展してきた。そこでは光と太陽は歓迎すべきものであり、壁はガラスをより多く、のっぺりした形になっていった。しかしペトロナス・タワーは熱帯に位置している。そこで景観を重視する姿勢はそのままに、横長の連続した窓を設けてはいるが、窓高は抑えられ、突き出した日除けが強烈な日差しを遮るようになっていく。これらの日除けは壁に立体感を与え、多角的プランの壁面と相まって日影の部分が長く、日向と日影が斑模様を織り成す、いかにも熱帯的なファサードをつくりだしている。マレーシア風の色彩やパターン、伝統および技巧といったものも、全体を通じて違和感なく、うまく取り入れられており、その結果生気に満ち溢れた新しい市民としてこの場所に溶け込んでいる。

このタワーは伝統的なマレーシアを表現するものではあるが、同時に今現在造られつつある新しいマレーシア——活発な経済のもとに急速に工業化を推進する国——を表している。これらの建物の根源はマレーシアの土壌にあるが、それはまた将来の可能性をも表している。完全にステンレス・スチールで覆われた外装は、昼に、夜に、いかにもマレーシア的な光の中で美しく反射し、光り輝くだろう。



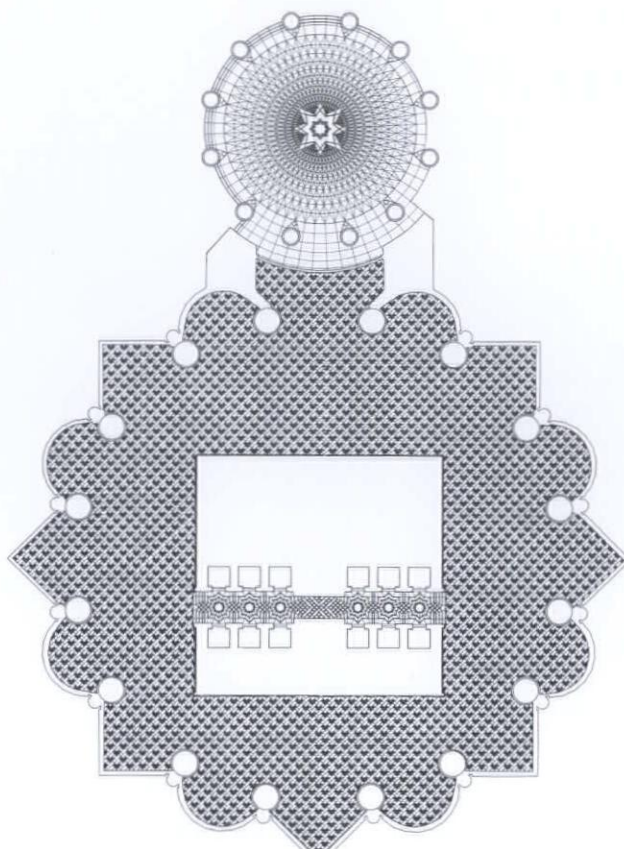
地上階平面図 Ground level plan



パース Aerial perspective



スカイブリッジ Skybridge



タワーロビー平面図 Tower lobby paving plan

An international, invited competition took place for the design of Phase One of the Kuala Lumpur City Centre. The main architectural elements to be designed, following the Master plan of Klages, Carter, Vail and Partners, were two large towers on the key northwest corner of the property. The character of these towers was of great concern to the organizers of the project. It was hoped that these buildings would become symbols of the city and the country.

The competitors were informed of the strong desire that the architecture be "Malaysian". It was recognized that there was very little Malaysian architecture to refer to. The most important buildings in Kuala Lumpur had been built by the British Colonial government and were not seen as Malaysian. The only true traditional Malaysian construction were one or two stories, lightweight wood or bamboo structures with palm or thatched roofs. Recent large, commercial buildings in Malaysia have followed a nondescript international style.

I was very sympathetic to the intention that these new towers be seen not as variations of international themes, which in practice means American or European set of forms, but as somehow belonging to Malaysia. The most important objective, therefore, was to design towers with their own character belonging to the place, if not to its modest architectural traditions. I believe we were the only architects in the competition to have tried to seriously answer this problem and I also believe this was one of the qualities that made us the winners. In the design we tried to respond to the climate, to the dominant Islamic culture, and to the sense of form and patterning that I could perceive in traditional Malaysian buildings and objects.

The most important artistic decision was to make the towers figurative and symmetrically composed. In the modern movement architects have endeavored to compose pairs of buildings in an asymmetrical composition, preferably by making the two

buildings of different heights (as most of the other competitors did) or if the same height, organized diagonally, following the example of Mies van der Rohe's Lakeshore Drive Apartment Towers and as Minoru Yamasaki did at the World Trade Center Towers in downtown Manhattan.

The symmetrical arrangement was avoided precisely because it has potentially symbolic qualities that were shunned by early modernism. The towers we designed are not only symmetrical but strongly figurative, creating an also figurative space between them.

Space is the key element in the composition. Each tower has its own vertical axis, but the axis of the total composition is in the center of the void. According to Lao Tse the reality of a hollow object is in the void and not in the walls that define it. He was speaking, of course, of spiritual realities. These are the realities also of the twin Petronas Towers. The power of the void is increased and made more explicit by the pedestrian bridge that connects the two towers at the 41st and 42nd floors, the sky lobby floors. The bridge with its supporting structure creates a portal to the sky, a 170m high portal; a door to the infinite. These qualities make the Petronas Towers unique, unlike any Western skyscraper. These are universal qualities, not necessarily Malaysian but as they will appear for the first time in Kuala Lumpur, in Malaysia, they will be forever identified with the place. In the same way the Eiffel Tower is identified with Paris, although its structure and form were not in any way derived from Parisian or French architecture.

The buildings are rooted in the place in other ways. The geometry of the towers is based on Islamic geometric traditions. These geometric traditions are much more important in Islamic countries than in the West and are understood, perceived and appreciated by everyone in their society. The plan of the buildings is based on the geometry of two interlocked squares which is perhaps the most important geometric form underlying Islamic design

and architecture. The interlocking squares create an eight-pointed star. To this form we superimposed eight semi-circles in the inner angles of the star creating a 16 branched form. In each of the 16 inner angles we have smaller semi-circular forms expressing the main structural columns of the building.

The development of the geometry from simple to complex forms also follows Islamic tradition. The basic square represents the earth and its four cardinal points (or heaven and its four rivers) and complexity is a necessary metaphor for the incomprehensibility of God.

Each tower as it ascends sets back six times and in the upper setbacks the walls tilt gently towards the center completing the form and strengthening the vertical axis that in a skyscraper represents "the axis mundi." The top spire reaches to sky and reinforces the representative quality of the silhouette.

The skyscraper as a building type was born and developed in northern cities with cold climates. Light and sun were welcome and the walls became glassy and taut. The Petronas Towers are in the tropics. Views are still important and the windows are continuous horizontal ribbons, but they are of modest height and protected from the sun by projecting shades. The sunshades make a three-dimensional wall that together with the facets of the plan create buildings with a great deal of shade, shadow and dappled light: tropical walls.

Malaysian colors, patterns, traditions and crafts have been incorporated throughout the buildings so that they will become not foreign elements but new and exuberant citizens of Malaysia.

The towers express traditional Malaysia, but they also express the new Malaysia that is being made: a rapidly industrializing country with a dynamic economy. These buildings have roots in the Malaysian soil, but they also express the opportunities of its future. They are completely clad in stainless steel and will shine and glow with multiple reflections in the Malaysian light.

デル ボスケ

Del Bosque

Mexico City, Mexico 1996

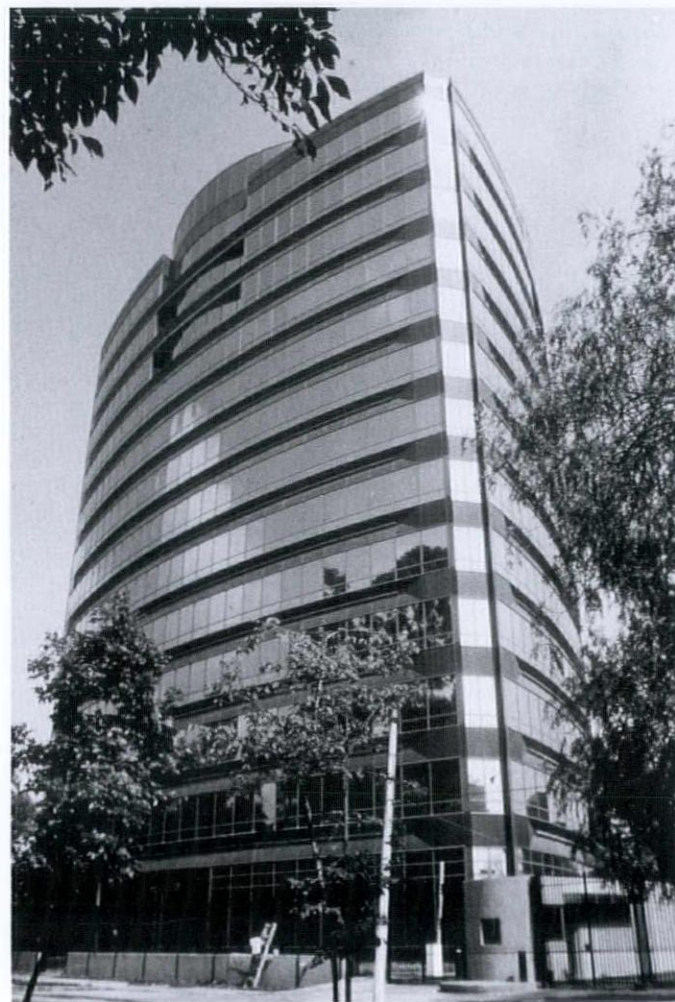
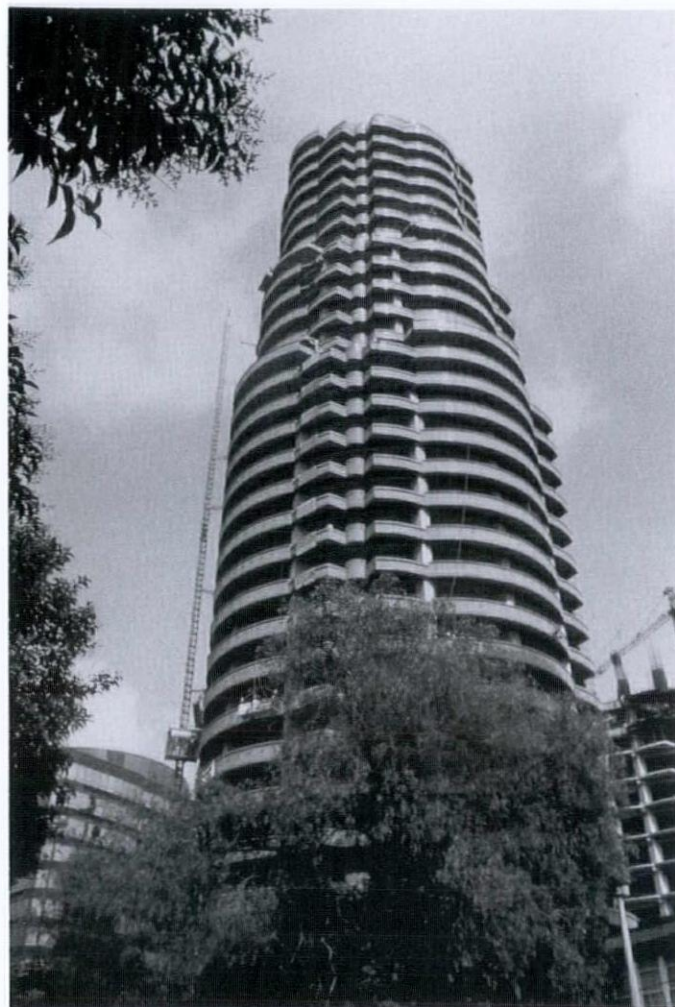
全体は13階建てのオフィス棟、31階建ての居住棟が2棟、広さ5,000ft²のヘルスクラブ、そして3階分の地下駐車場から成っている。地上の4つの建物はポランコ地区の三角形の敷地にあり、チャプルテペック公園の眺めを最大限に得られるよう多重曲線プランを採用している。

オフィス棟は地形に対応して湾曲した三角形プランとなっており、敷地の一端を明確に特徴づけている。外装材はブラジル産の緑色花崗岩と半反射断熱ガラス、およびフッ素樹脂塗装のアルミのカーテンウォールを用いている。花崗岩のスパンドレルには凹状の線型を用いてガラスの壁面を前面に押し出し、外壁のデザインに張りのある緊張感を与えている。住居棟の建物はツインタワーとなっており、多重曲線による平面計画、セットバックおよびバルコニーによって最大限の眺望性を考えると共に、居住性を高める工夫をしており、全体として彫刻的な形状をもった「ゲート」としてデザインされている。外装は突き付けのガラスと赤いプレキャスト・テラゾーのスパンドレルの帯が交互になった中に、艶のあるメキシコ産タイルがアクセントとして所々に設けられている。

Del Bosque comprises one 13-story office building, two 31-story residential towers, a 5000 square-foot health club, and a three-level below-ground parking facility. The four buildings are situated on a triangular piece of land in the Polanco District and have been designed with multi-curved plans that maximize the panoramic view of Chapultepec Park.

The office building has a curved triangular plan form that responds to the geometry of the site and marks the corner of the block. The building is clad in Brazilian green granite, semi-reflective insulated glass and poly-fluorimer painted-aluminum curtain wall. The granite spandrels have recessed moldings to bring forward the glass wall and intensify the design intent of a taut skin.

The apartment buildings are twin towers designed as sculptural pylons with a multiply curved plan, set backs and balconies to maximize views and enhance their residential quality. The buildings are clad in alternating bands of butt glazed glass and red precast terrazzo spandrels with accents of glazed Mexican tiles.



香港コンベンション・センター

Hong Kong Convention Center

Hong Kong, U.K. 1995

新しい拡張計画は、既存のコンベンションセンターに調和するものであることを意図されており、ふたつの建物が一緒になって、ワンチャイ北埋め立て地の新しい部分の核となる計画である。コンベンションセンターが拡張されれば、既存の施設を統合して「コンベンションプレイス」に新しい形態とアンテナティティが生まれるはずである。

「コンベンションプレイス」は、ヴィクトリア湾に面した立地を戦略的に最大限に利用しており、都市の個性的なイメージを作り出すことが目的である。都市がウォーターフロントと交差するところに、威信と祝祭の雰囲気と満ちた空間が生み出されることになる。計画のコンベンションおよび展示空間は、設計条件によって貿易や商用の目的ばかりでなく、

集会、イベント、パフォーマンスにも利用される大空間が要求されている。この新しい「コンベンションプレイス」は人口密度の高いワンチャイ地区というウォーターフロントを機能的に連結してゆくシンボルになると考えている。この施設を都市に付加し、国際会議の機能、そして従来より望まれていた市民の交流の機会を用意することで、コンベンションセンターとしての機能と公共性を持った建物としての機能を満たすべくデザインをする必要があった。

新しい「コンベンションプレイス」は、街の中に街を作り出す方式でデザインされている。それはフェリーやホバークラフトのターミナル、国際クラスのホテル、ビジネス支援施設、国際色豊かな店舗、レストランスペース、そしてマルチメディアの娯楽ス

ペースなどの施設が計画されて、都市の拠点となるものである。外部の公共空間は、屋外での貿易ショーやコンサート、公共イベントを行う舞台となるようにデザインされている。ここから会議の参加者や地域の市民がヴィクトリア港のすばらしい眺望を楽しむことができるのである。ヴィクトリア港はこのセンターの最大の魅力となっている。新しい増築によって様々な設計条件は十分に満足させながら、ウォーターフロントへの空間的なつながりを演出している。非常に膨大で複雑な施設に、非常に明快な動線システムを与えて建物をわかりやすいものにするには、こうした施設を運営するにあたって不可欠である。人の動線が建物の形態に論理性を与えたと考えている。

The new extension is designed to complement the existing Convention Centre. The two components will together create a new urban core for the Wanchai North Reclamation Area. The expanded Convention Centre will also serve to unify the existing facilities, giving form and identity to the newly created "Convention Place".

The "Convention Place" will take full advantage of its strategic site location facing Victoria Harbour. The intention is to create a unique image for the City. It will be a place where the City meets the waterfront with dignity and festivity.

A Convention and Exhibition Centre, by the very nature of its program requirements, demands grand spaces and places, not only for the conducting of

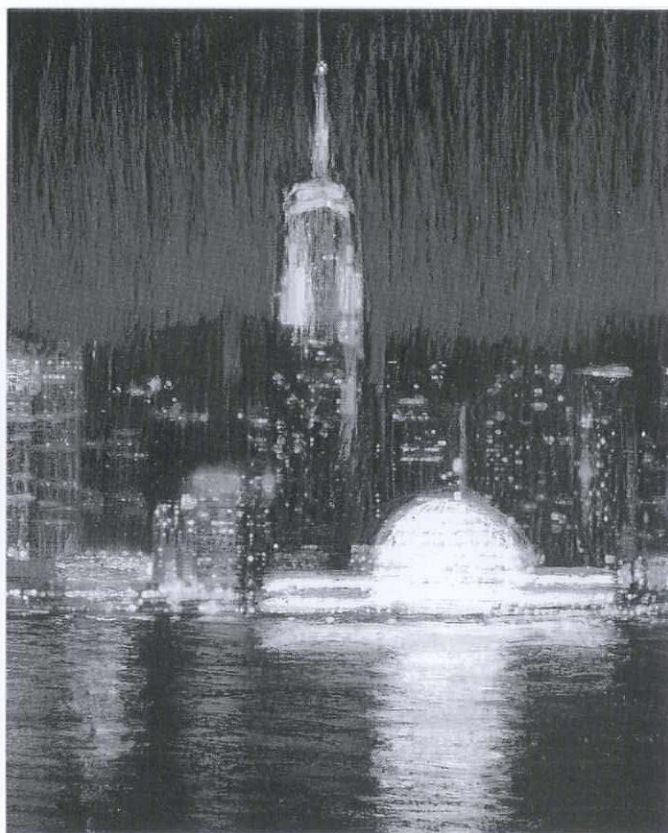
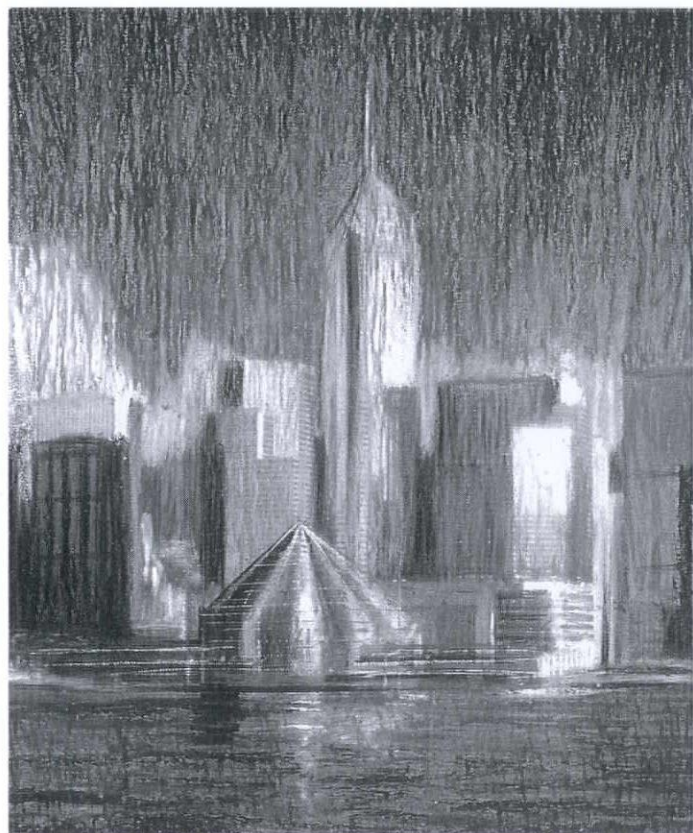
trade and commerce, but also for the provision for public gathering, and social and performance events. The newly created Convention Place will act as the functional and symbolic connection between the densely populated Wanchai area and the waterfront. The design of this new urban addition needs to fulfil its private objective and its public obligation, by providing the proper facilities and setting for international convention functions and much needed public recreation opportunities.

The new Convention Place is designed as a "city within a city." It is an urban destination complete with ferry and hovercraft terminals, world class hotels, business support facilities, an international array of retail boutiques and dining establishments

and multi-media entertainment facilities. The outdoor public spaces are appropriately designed for the staging of outdoor trade shows, concerts and public events. Here convention delegates and local citizens will share a splendid view of Victoria Harbour.

The Harbour is the Centre's greatest outdoor amenity. The new extension, while accommodating the massive program requirements, will provide a handsome procession to the waterfront.

A clear circulation system, that will bring comprehensibility to the vast dimensions of the complex, is crucial to a successful operation. Human movement provided the rationale for the architectural form.



Renderer: Bill Butler/C.P. & A.

リパブリカビル

Republica Building

Buenos Aires, Argentina 1995

このプロジェクトは、抽象的な形式によって周辺環境に呼応している。というのも、建築規約による制限に従った設計ではあるのだが、その規約そのものが、ブエノスアイレスの伝統に則った、例えば周辺の町並みに合った低層建築を可能とするようなものではなかったからである。敷地はマデロとブシャーに挟まれた街区の北端に位置しており、地形は緩かなカーブを描いてプエルトマデロや川への眺望が開けている。

三角形の敷地は市の境界線沿いにあり、街から川への移行点にあたるという立地条件もまた、建築的な決定要因のひとつとなった。プランは川に面して膨らんだ曲面形となっており、三角の地形に対応した形となっている。この曲面は、マデロ通りとブシャー通りのそれぞれの町並みがうまく繋がるよう考慮したものである。市の方向に面するファサードは街

路空間を構成する壁面線に準拠したものとなっており、窪んだコーナーはローマ広場に面している。このローマ広場に面したメインエントランスと5階建ての円筒形の形態、テラス・ガーデンおよびブラザを望むオフィスなどによって、都市内におけるこのコーナーの重要性が強調されている。外観は白いアルミニウム・パネルと多様なガラス(反射ガラス、不透明ガラス、模様ガラスなど)、そして影や反射によってファサードに変化をつけている金属チューブとが交互になって曲面性を強調している。上層階ではふたつの連続したバルコニーがブエノスアイレスの伝統的建築を彷彿とさせ、その一方でがっしりとした基部はアレン通りの古いアーケードを思い起こさせる。1階レベルにあるウィンター・ガーデンと集会場は会議やコンサート、宴会、展覧会など、用途に応じて繋げたり別々に利用することができる。

このウィンター・ガーデンは公共ブラザに面しており、金属とガラスのキャノピーが双方の緩衝空間を構成している。

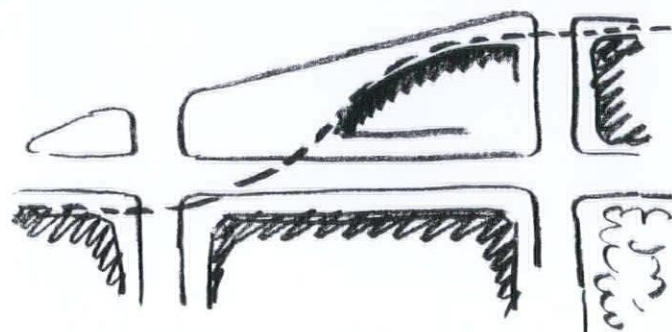
庭園は地形だけでなくタワーの形にも呼応して非常に彫刻的な印象を与え、建物の湾曲したファサードへの対比となっている。ランドスケープ・デザインを担当したバルモリ・アソシエイツは、騒音や公害を避けるために、オープンスペースをストリートレベルより上に持ち上げた公共庭園とした。この庭園の形はおぼろげながら船のデッキに似ており、端部の高くなった船首にあたる部分(キール)からは川のすばらしい眺めが得られる。マデロ通り沿いには糸杉とジャカラングの並木が2列に植樹され、ブシャーと接する部分にはスズカケの並木が植えられている。

The project responds to its context in an abstract way. It was designed within the restrictions imposed by the Construction Code which did not make feasible a more traditional solution to Buenos Aires, such as a low building defining its block outline. The Republica Building marks the northern end of the row of blocks between Madero and Bouchard with a gently curved form. The curve opens the interior views towards Puerto Madero and the River. The triangular site is located at the border of the city. This transition was one of the characteristics that determined the architecture. The Building adapts itself to the triangular block with a broad convex curve towards the river. This curve tries to join the urban wall of Madero Avenue where it ends with that of Bouchard Street. The facades pointing

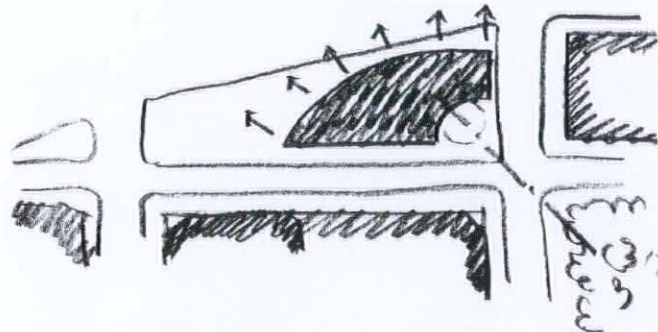
towards the city conform to vertical planes which define the street space; a concave corner faces Plaza Roma. The urban importance of the corner is accentuated by a five-story cylindrical volume and main entrance facing Plaza Roma, a terrace garden, and offices with views toward the plaza. White aluminum panels and different types of glass (reflective, spandrel, and patterned) alternate with metallic tubes that modulate the facade with shadows and reflections and accentuate its curved shape. In the upper floors, two continuous balconies make reference to the traditional architecture of Buenos Aires, whereas the solid base resembles the old arcades of Alem Avenue. On the ground level, a Winter Garden and an Assembly Room can be used together or separately for conferences, concerts,

banquets and exhibitions. The Winter Garden opens towards a public plaza and a metal and glass canopy defines a transition space.

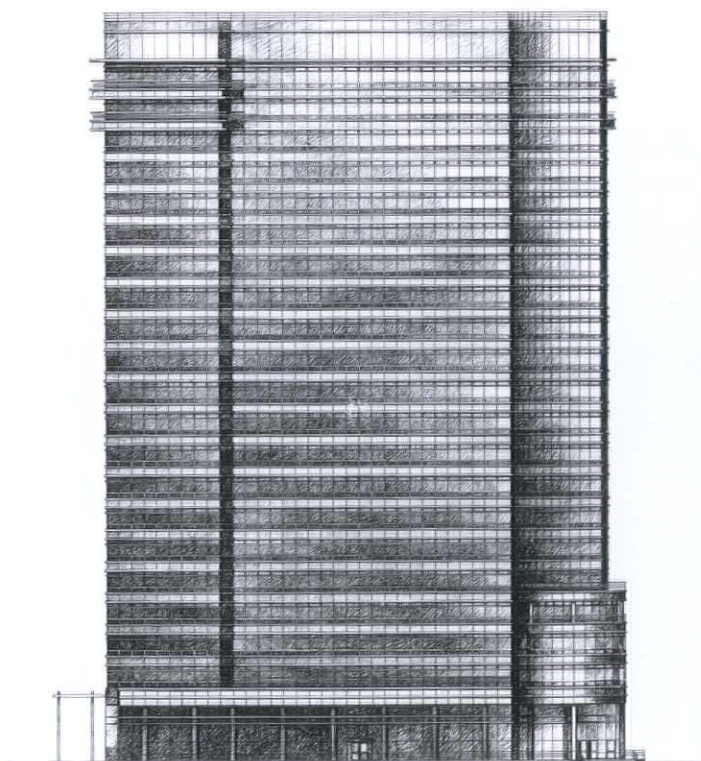
The garden's sculptured shape is based on the triangular site as well as the tower form, offering a counterpoint to its curved facade. Landscape designer Balmori Associates focused the open space as a public garden raised above street level to avoid noise and pollution. The shape of this garden vaguely resembles a ship's deck, ending in an elevated keel with views toward the River. A double row of cypresses and jacarandas line Madero Avenue and a line of sycamores define its border over Bouchard.



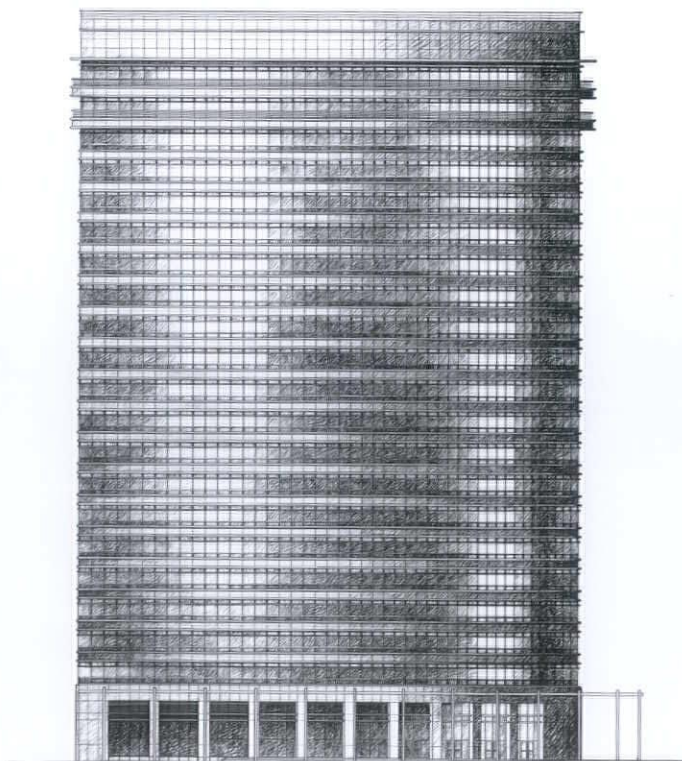
アーバンスペースの縁帯 Urban Space Border Definition



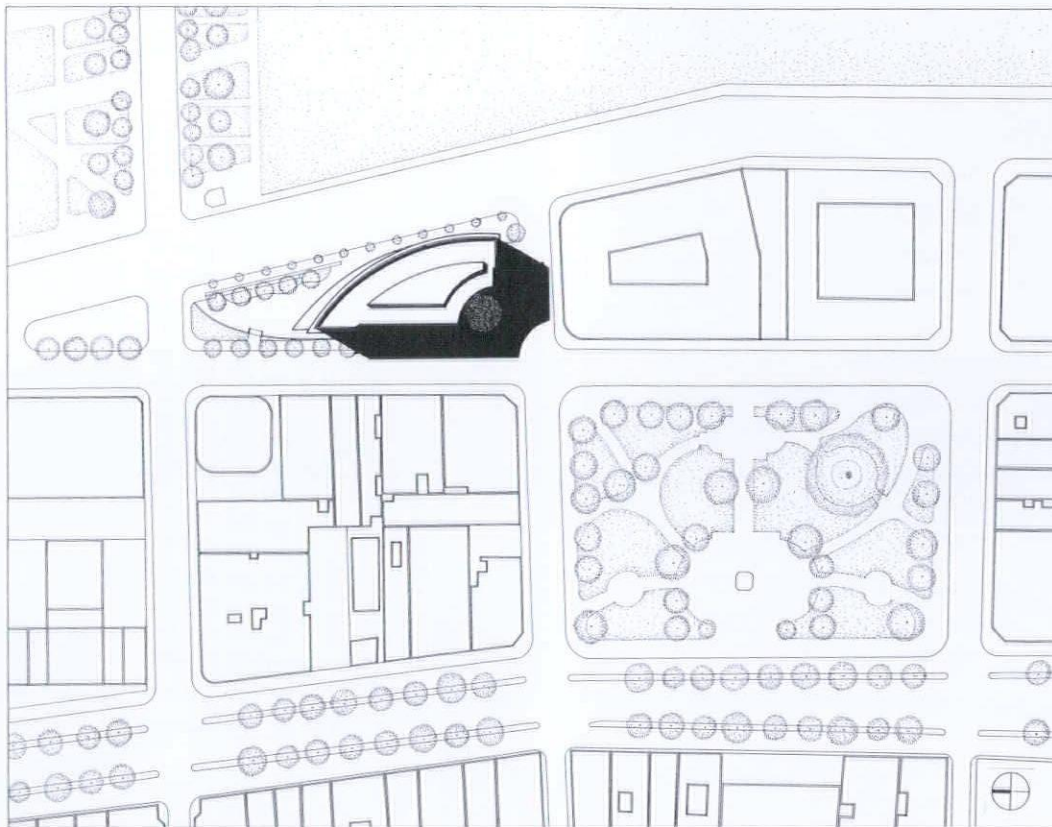
都市の文脈による建物の関係性 Building Relationship to its Context



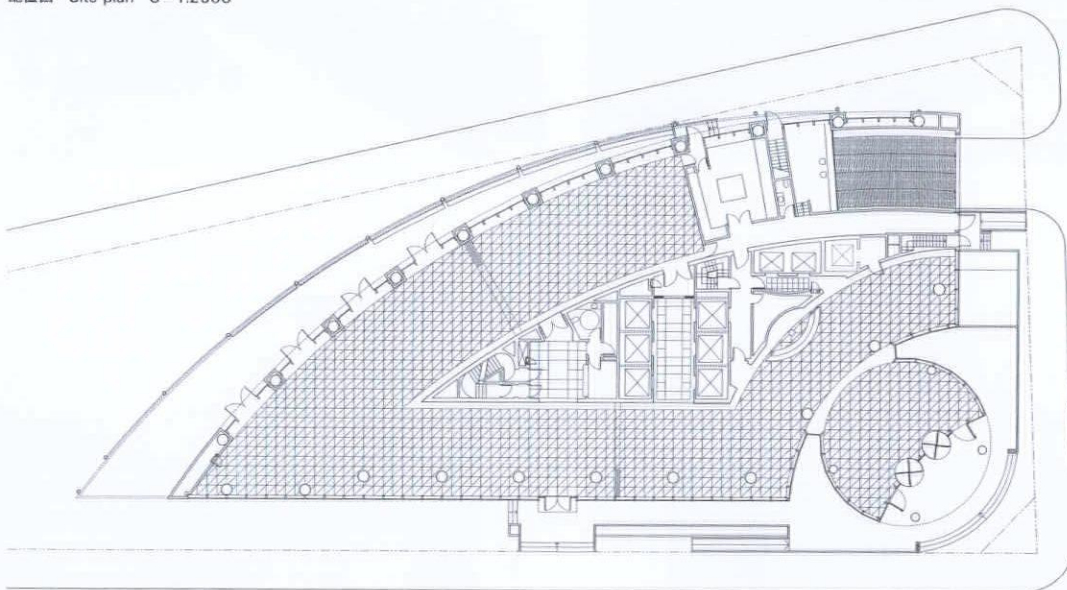
立面图 Elevation



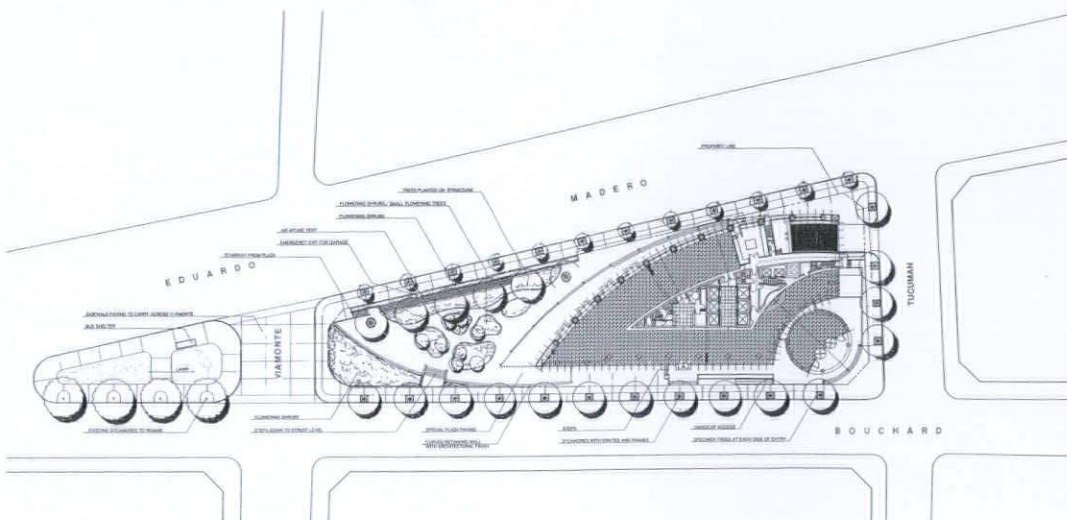
立面图 Elevation



配置図 Site plan S=1:2500



地上階平面図 Ground floor plan S=1:600



ランドスケープ Landscape plan S=1:1500

キャナリーワーフ・タワー 駅舎および複合施設

Canary Wharf Tower, Assembly Building and Light Railway Station

London, England 1997

キャナリーワーフ・タワーは、キャナリーワーフの複合施設全体のシンボルとなる施設である。タワーは48階建てで、英国で最初の高層ビルと目されている。高層棟はコーナー部分が分節した背の高い四角柱の結晶体としてデザインされ、空を背景にピラミッド型をした頂部の形態へとまとめられている。タワーは未来への架け橋、つまり21世紀へ向けた建築物として設計された。タワーの外壁、そしてピラミッド型の屋根はステンレス・スチール製。その金属製の表面は、光と空の色の移り変わりを映すものとなっている。タワーは、どんよりして霧のたちこ

めたロンドンの日々の中で、柔らかくほのかに光っている。壁に取り付けられたリブ状のアクセントに光が反射して輝き、タワーの立面に垂直方向のトレサーリー（レース状の細かいディティール）状の細かい文様をつくりだしている。タワーのコーナー部分は分節されて削られた形となっており、タワーの持っている圧迫感を軽減すると共に垂直の方向性を強調したデザインとなっている。タワーの分節されたコーナーによって、自然光が内部を照らし、階ごとに内側の廊下に採光を可能にすることも考えられている。

キャナリーワーフ・タワーのロビーは、隣接する水上中庭や遊歩道に向いており、小売店舗及び議会ビルディングの中央広場に直結する。

ドックランズDLA駅は2階レベルに位置し、小売店舗棟の広場を介してタワーと直結されている。駅はカナリー埠頭への出入口で、毎日約6万人の通勤客が乗降している。その屋根は120フィートに渡るガラスとスチールのヴォールト（丸屋根）で、19世紀ロンドンの鉄道駅の大丸天井で蔽われた空間を、現代的に再解釈したものであると考えている。

Canary Wharf Tower marks the entire Canary Wharf complex. The Tower rises 48 stories and is considered the first skyscraper in England. The building is a tall, square prism with indented corners that culminate in a square pyramid against the sky.

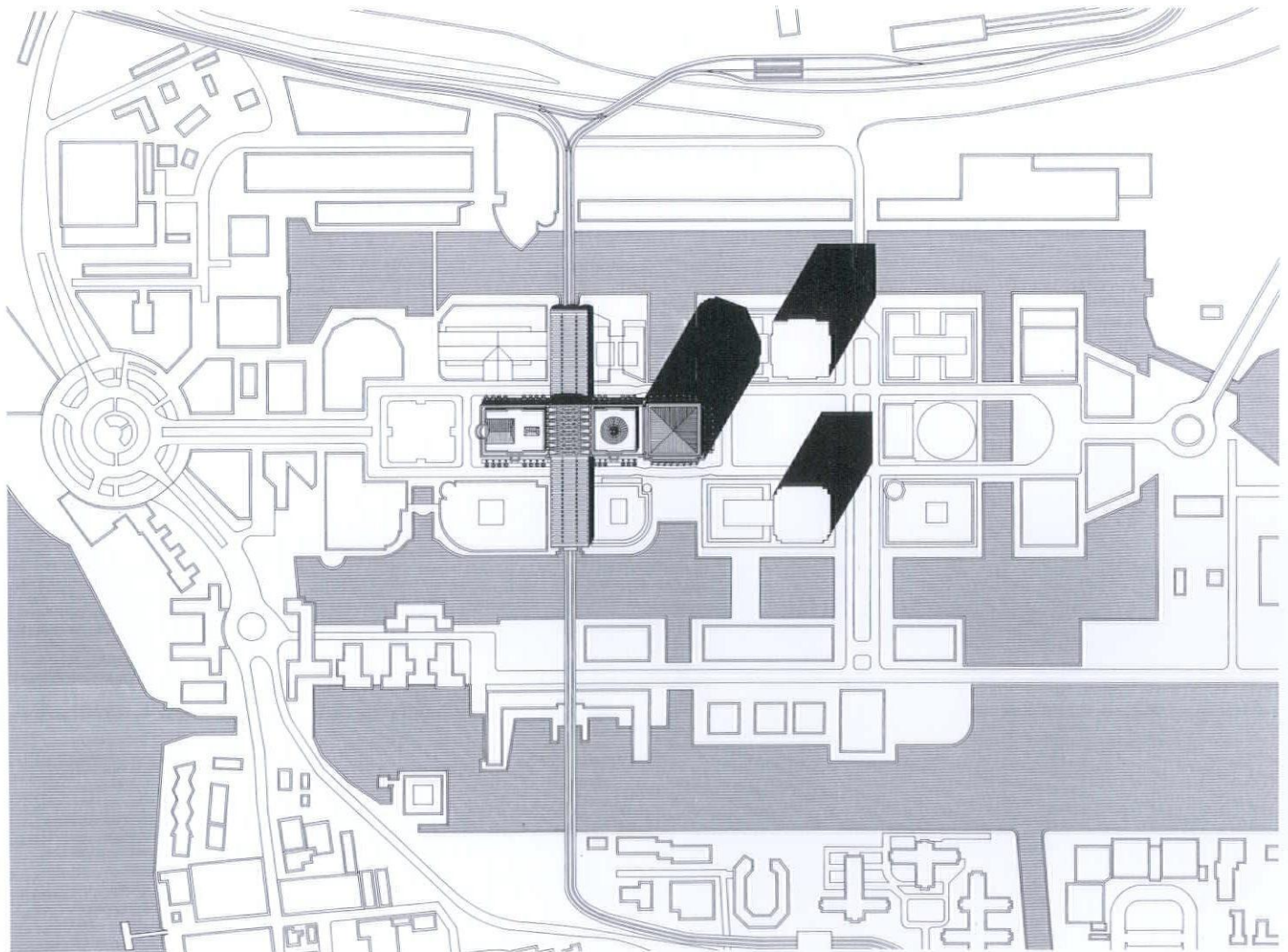
The Tower was designed as a connection with the future, a building for the 21st Century. The exterior Tower walls and its pyramidal roof are stainless steel. The metallic surfaces reflect changes in the light and the color of the sky. The Tower appears to

softly gleam in the gray and misty London days. The highlights on the ribbing of the walls create a thin tracery of vertical lines that reflect the sunlight. The corners are indented to reduce the apparent girth of the Tower and emphasize its height. The articulated corners also allow for natural light to illuminate the interior and reach the inner ring of corridors on every floor.

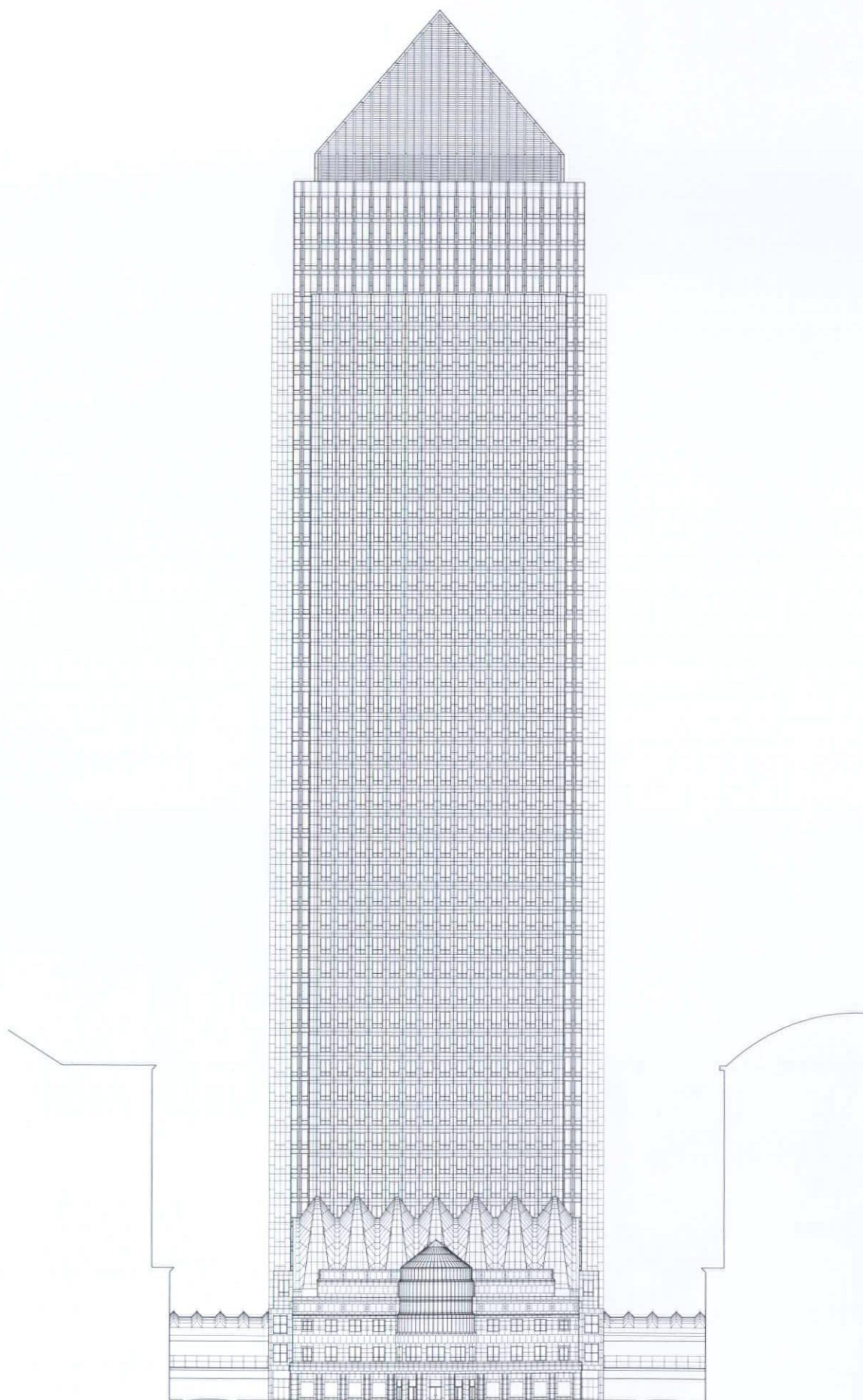
The lobby of the Canary Wharf Tower opens to adjacent water courts and promenades, and connects directly to the central concourse of the Retail and

Assembly Building.

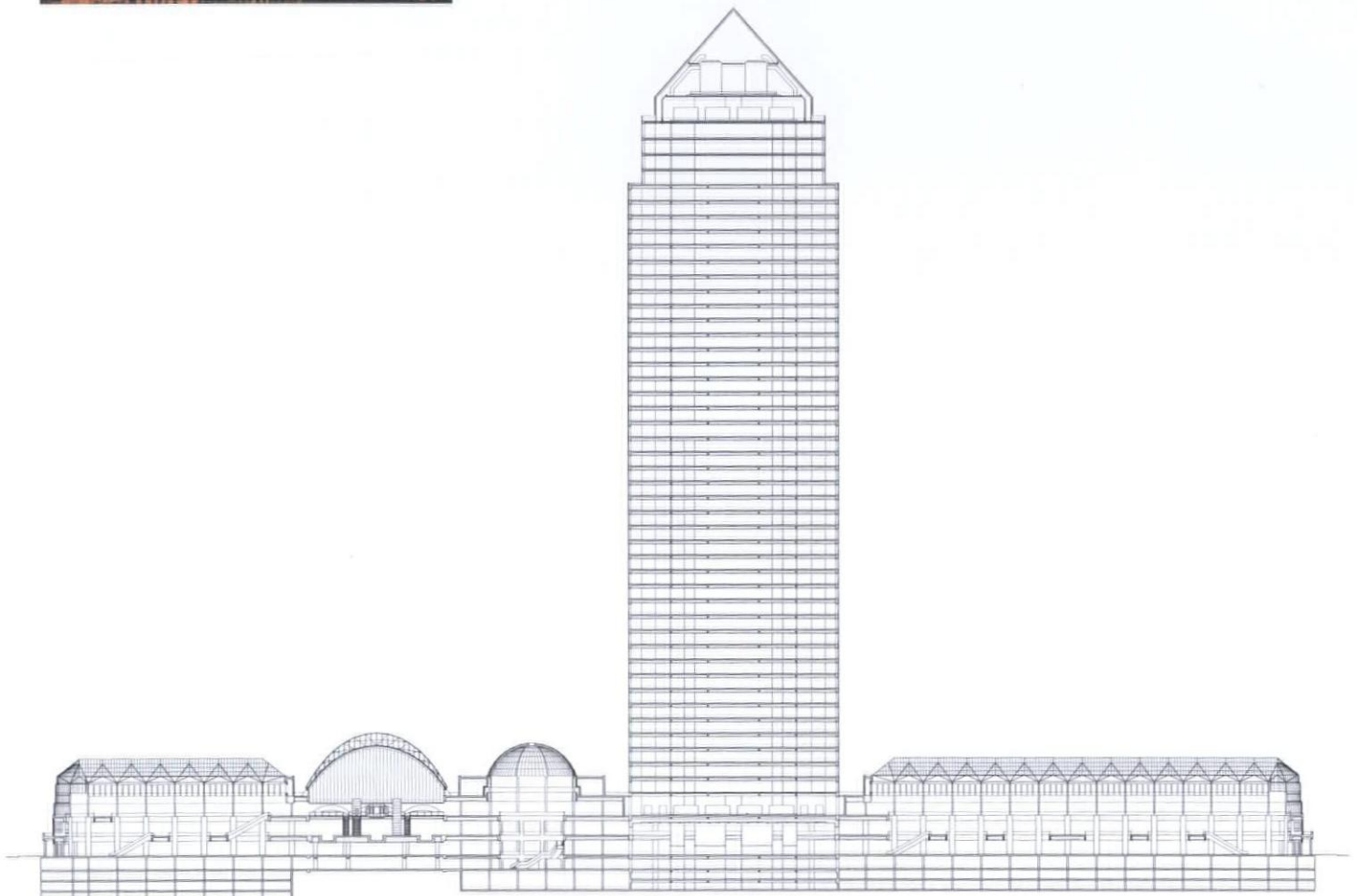
The Docklands Light Railway Station is located at the second floor level, directly connected to the Tower through the concourse of the Retail Building. The Station is the gateway to Canary Wharf, accommodating approximately 60,000 commuters daily. Its roof is a glass and steel vault spanning 120 feet, a modern reinterpretation of the great vaulted spaces of London's 19th Century railroad stations.



配置図 Site plan

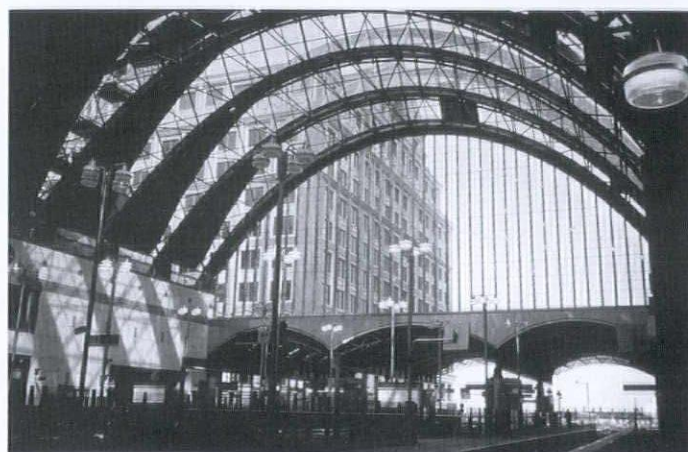
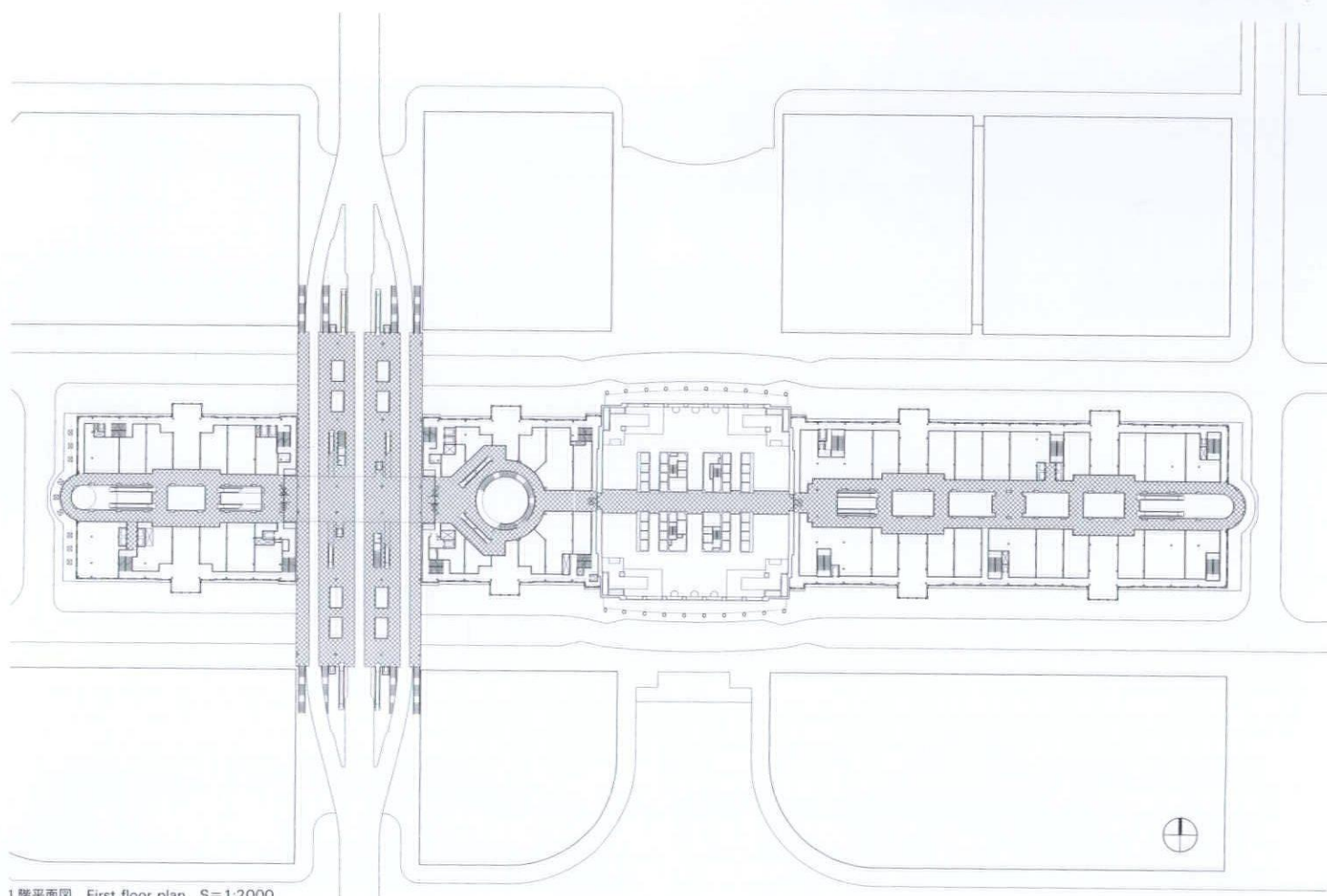


東立面図 East elevation S=1:1000



東西断面図 East-West section S=1:2000

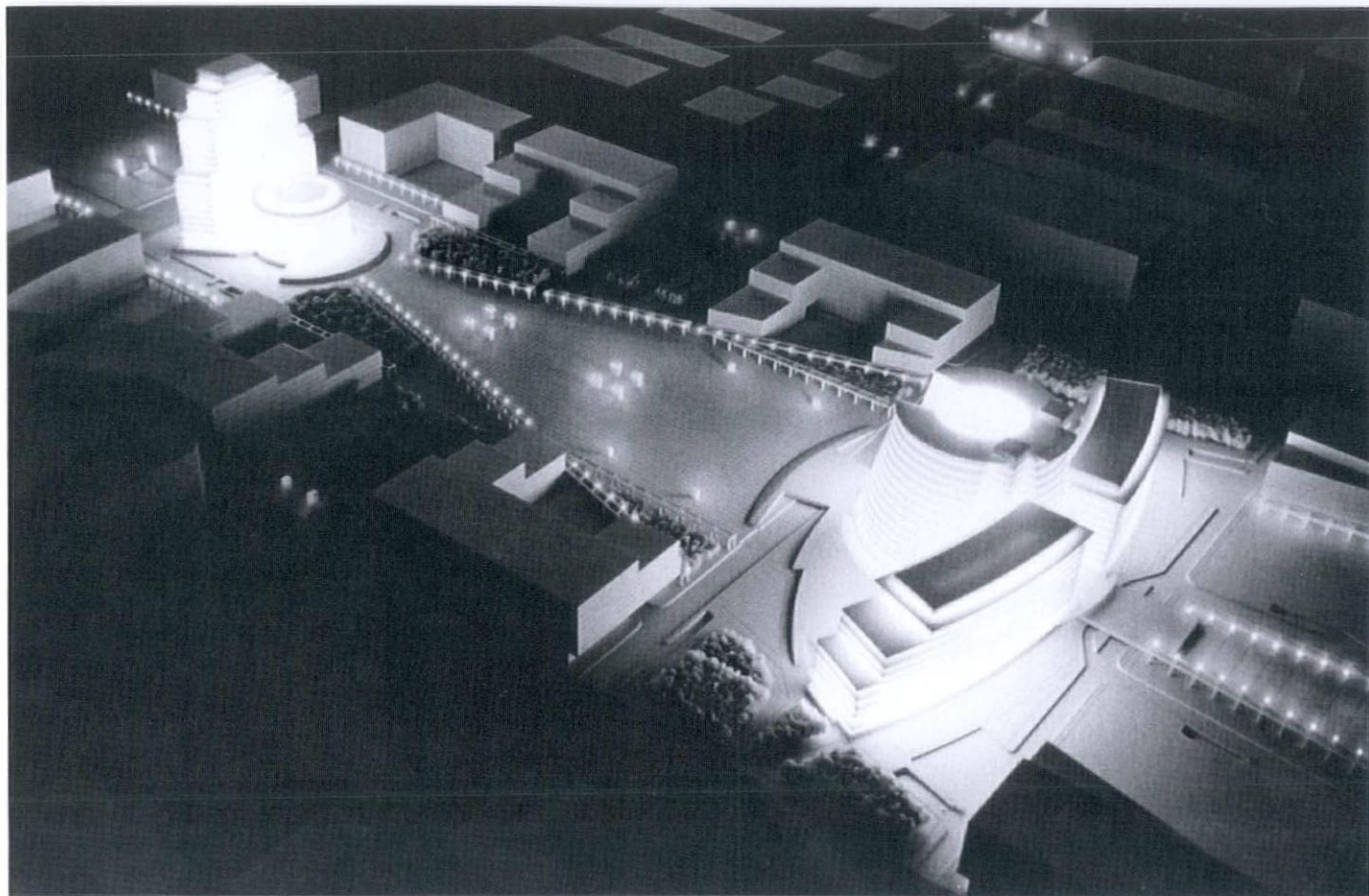




新台中シティー・センター

New Taichung City Center

Taichung, Taiwan 1995



新台中シティー・センターの敷地は、市の主要交通幹線である、台中ハーバー通りによって北側を、そしてウェンシン通りによって東側を挟まれた新台中シティー・センター街区の中心部の非常に重要な位置を占めている。107ヘクタールにおよぶ台中シティー・センター街区は21世紀における台中市の発展の核となると考えている。

我々が行った全体配置計画は、新台中市シティー・センター街区のガイドラインに沿って考案されたものである。デザインの中では、幾何学形態とそのバランスに基づいた計画を提案している。三角形のシティー・センター広場は、北側を市行政の建物によって、南側を市委員会の建物によって囲まれている。広場は市議会の建物から放射状に展開されており、ふたつの建物をひとつの一貫した形態へとまとめられている。

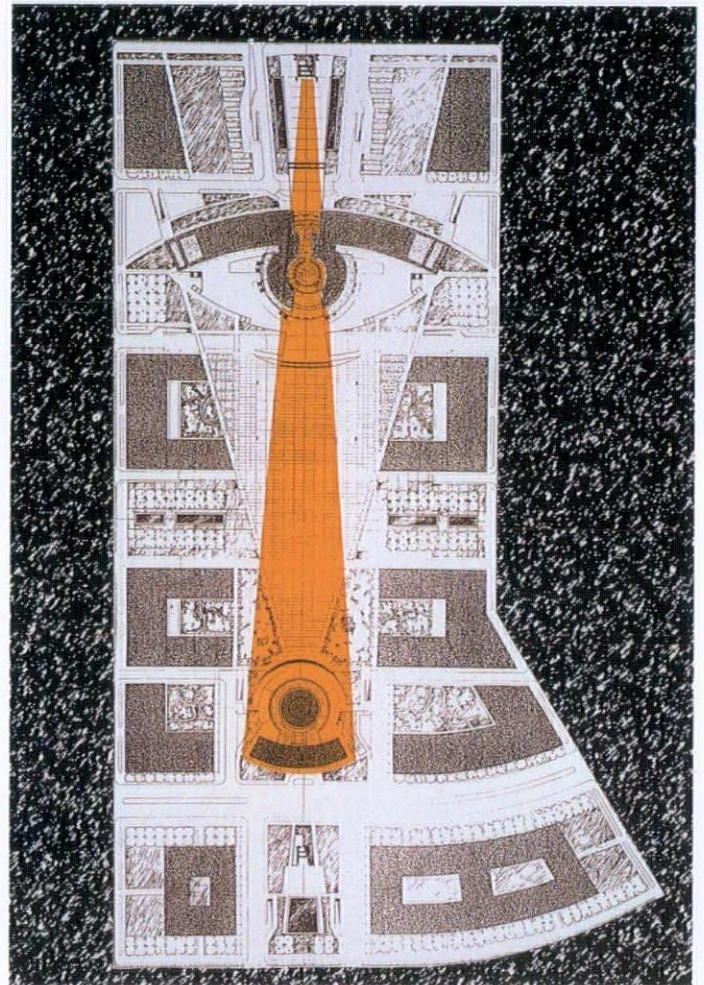
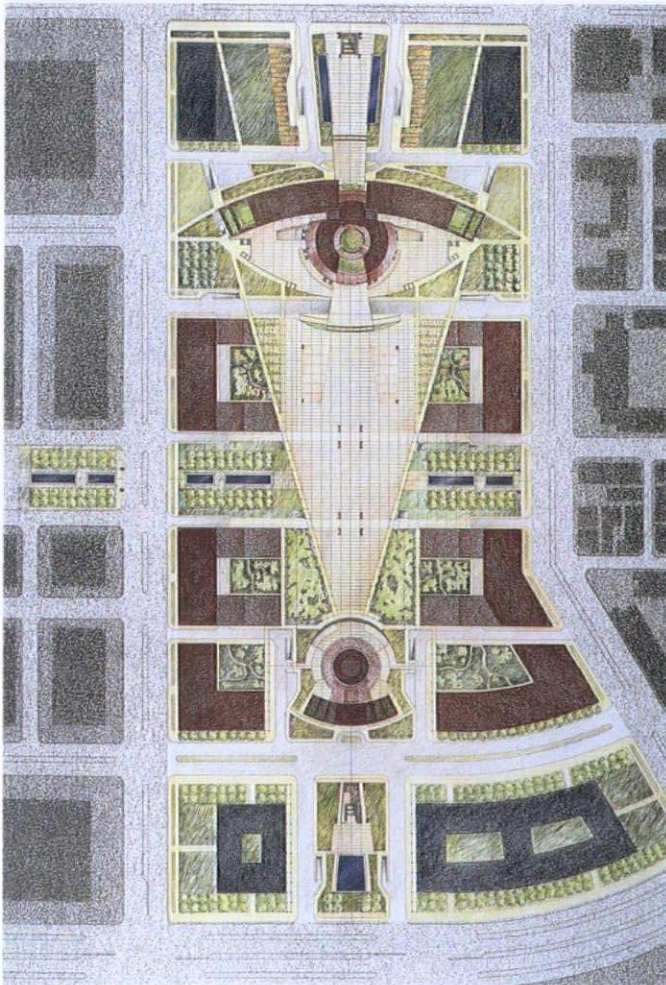
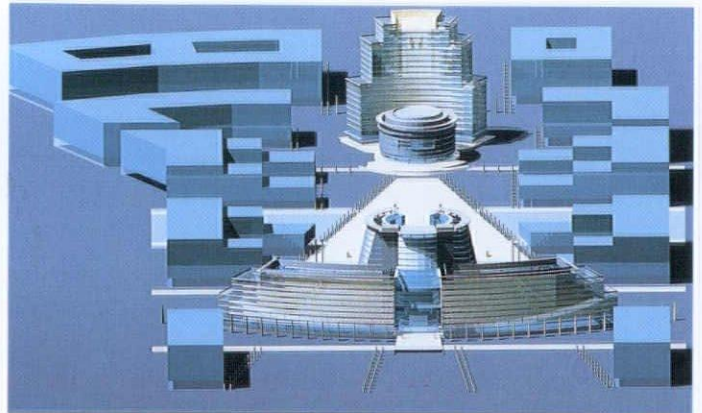
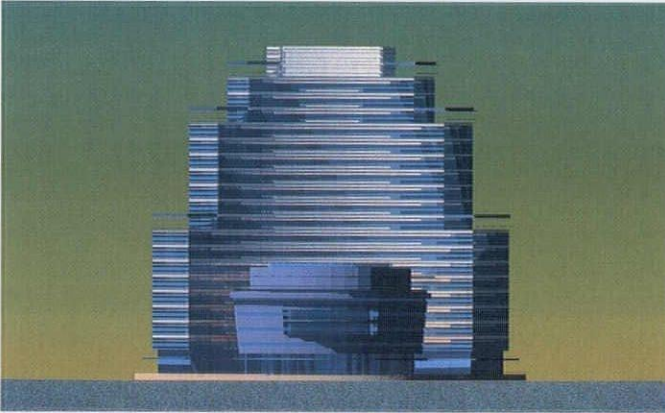
新台中シティー・センターの提案の中で我々は、全体計画によって定義づけられた。市当局の役割や配

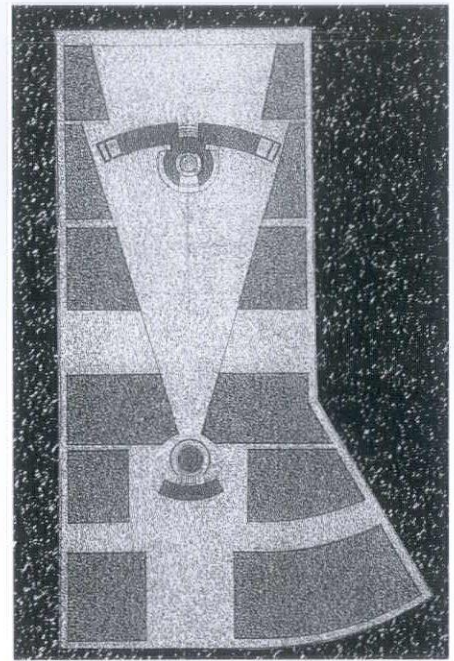
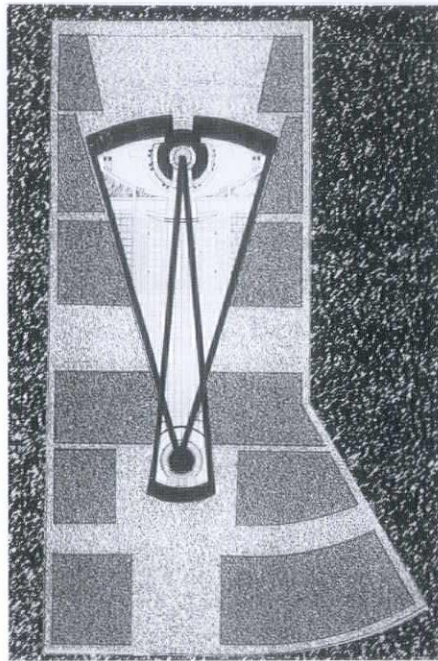
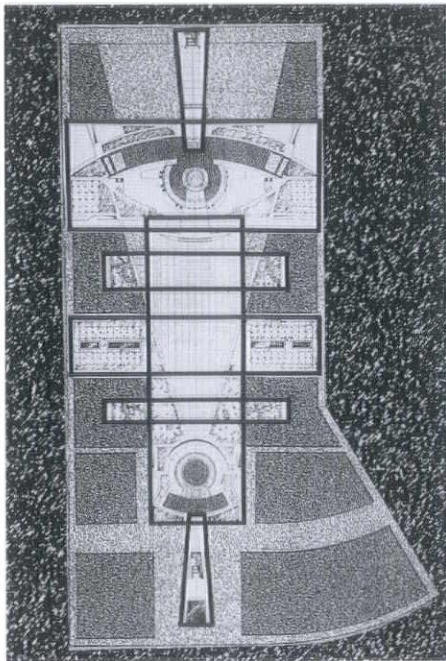
置計画の考え方を採用しながら、形態操作を行っている。シンプルな建物の形態、公共空間の連続的構成、そして軸に沿った空間構成によって伝統的な中国の市中建築がもっている形態的な特性を表現している。ふたつの建物の高さを変え、プロポーションを対比的に扱っている設計条件と敷地の制約を反映していると同時に、市行政当局と市議会のふたつの機能上の相違および、それぞれのアンデンティティを表現している。

すべての儀礼的な公共空間は、前庭すなわち造園を施された屋外のレセプション空間を起点とする線形の構成がなされている。その前庭から、10階吹き抜けの大ホールのアトリウム空間へと導かれる。大ホールの空間は、自然採光を取り入れたガラスによって包まれた屋内の市民の広場であり、市民の交流の場であり、様々なイベントを行うことが可能となっている。

空間の連続性は、シティー・センター広場へとつな

がっていく。シティー・センター広場は、公式の儀式や祝祭が催されるところであり、屋外の展示やパフォーマンスが行われるところとなる。広場は、両側をアーケードによって囲まれており、市民のための日陰の空間であり雨よけの空間である。広場は物の壮大なスケールを強調すると同時に、多数数のアクティビティに対応可能となっている。一方で広場を取り囲むマーケット空間は、個人レベルでの交流の場や、瞑想の場を提供している。造園計画は自生の植栽を採用することで台湾の文化の伝統と熱帯の気候を考慮したものである。コストとなればよく手入れをされた枝張りによって、涼しい木陰のオープンスペースを生み出すことになる。市議会の建物が線形に展開するパブリックスペースの終点となっている。我々は、新台中シティー・センターの提案によってモニュメンタルな雰囲気と市の威厳を表現しようとしている。





The site of the New Taichung City Civic Center occupies a critical and central location within the "New Taichung City Civic Center District", bounded on the north by Taichung Harbor Road, and on the east by Wen-Hsin Road, the two major traffic spines of the City. The 107-hectare new Taichung City Civic Center District is intended as a focus for the growth of Taichung City in the next century.

Our master plan grew from the planning guidelines established for the new Taichung City Civic Center District. Our design proposes a plan with a strong and balanced geometry. The triangular shaped Civic Center Plaza is embraced by the City Government Building to the north and the City Council Building to the south. It radiates from the Council Chamber and unifies the two buildings into a singular coherent formal entity.

Our architectural proposal for the new Taichung City Civic Center is carefully sculpted to take full advantage of its civic role and the unique site

configuration defined by the Master Plan. The simple form of the buildings, the progression of public spaces and the axial spatial organization are intended to capture the spirit of the formal order found in traditional Chinese civic architecture. The contrasting height and proportion of the two buildings are direct responses to the building programs and the site restraints; they also reinforce the separate identities and responsibilities of the City Government and the City Council.

All ceremonial and public spaces are organized in a linear sequence that begins with the Forecourt, a landscaped outdoor reception area. From the Forecourt, the visitors will proceed to the Great Hall, a 10-story interior atrium space, which will function as an enclosed small city square with the sun filtering in from the glass wall; a great everyday meeting place and a place appropriate for ceremonial events.

The sequence continues through the Civic Center Plaza. It is the outdoor public space where formal

and festive occasions will be celebrated, and where outdoor exhibitions and performances will be held. The Plaza is bordered by arcades on both sides, providing pedestrians with shade from the sun and shelter from rain. The design of this Plaza reinforces the grand scale of the buildings and is well suited to large crowds and civic activities. The surrounding arcades will provide the intimacy for individual conversation or quiet contemplation. The landscape design responds to the semi-tropical climate and the cultural heritage of Taiwan, through the use of plant species indigenous to the area. Mature, well-maintained tree canopies will provide cool, open space environments.

The Council Chamber Building terminates the linear sequence of public spaces.

Our design proposal for the New Taichung City Civic Center is intended to express a simple monumentality and civic dignity.

ヘイグ・タワー

The Hague Tower

Hague, Netherlands 1997

六角形のタワーは、ある保険会社の本社となるものである。このプロジェクトは、ロベルト・クリーアが他に幾人かのオランダ人の建築家と協働で設計した「デ=レジデント」マスタープランに含まれる。マスタープランが意図するのは、第二次世界大戦中爆撃を受けたヘイグの1区域に、旧来の都市構造を拡張することだ。

The hexagonal tower will be the corporate headquarters for an insurance company. The project is within the *De Resident* Master Plan designed by Robert Krier in cooperation with several other Dutch architects. The Master Plan intends to extend the old city fabric into an area of The Hague that was bombed during World War II.

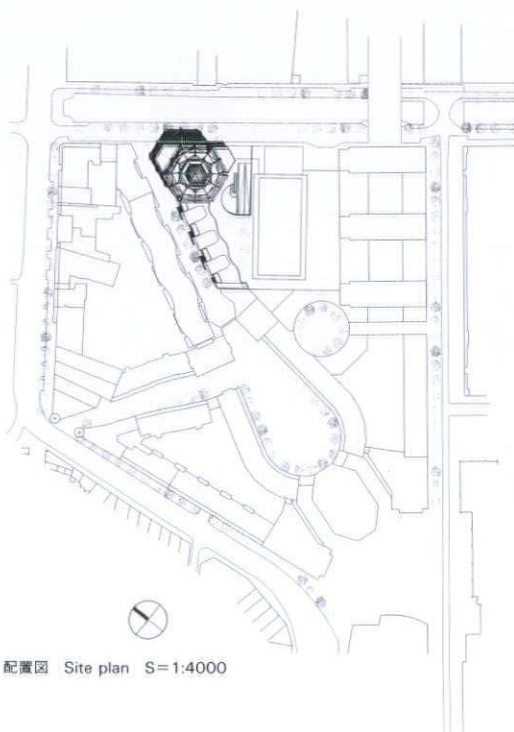
煉瓦とセラミックタイルの外壁によって仕上げられたタワーは、20階建の高さを持ち、2層の地下駐車場および、地下機能の諸施設、そして5階建のウィングとによって構成されている。ウィングの5階には社内食堂、ミーティング・ルーム、それにメディア・センターがある。展示場および建物裏の中庭が、共にタワーの1階に配置されている。

The brick and ceramic-tile tower will rise 20 stories, with two layers of underground parking and below-grade functions, as well as a 5-story Wing. The fifth floor of the Wing will have a corporate restaurant, meeting rooms and a media center. A public gallery will be located on the ground floor of the tower, with a private garden court on the back of the

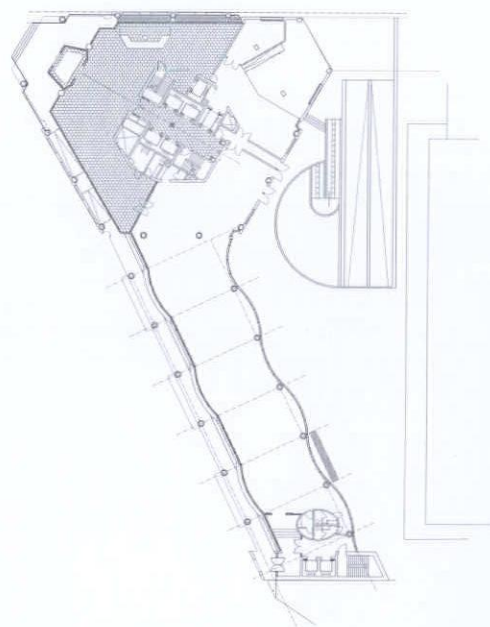
building. タワーは、ケニングネ・グラハト通りのアイ・ストッップにあたる位置にあって、近隣のコーカンプ市公園への眺望を有効に利用している。タワーの頂部は着色された金属パネルによってデザインされており、ドーム型の輪郭を持っている。建物の外壁は、5色の煉瓦とセラミックタイルによってパターンがデザインされている。

building.

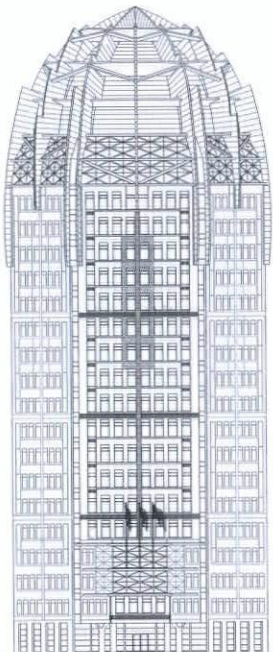
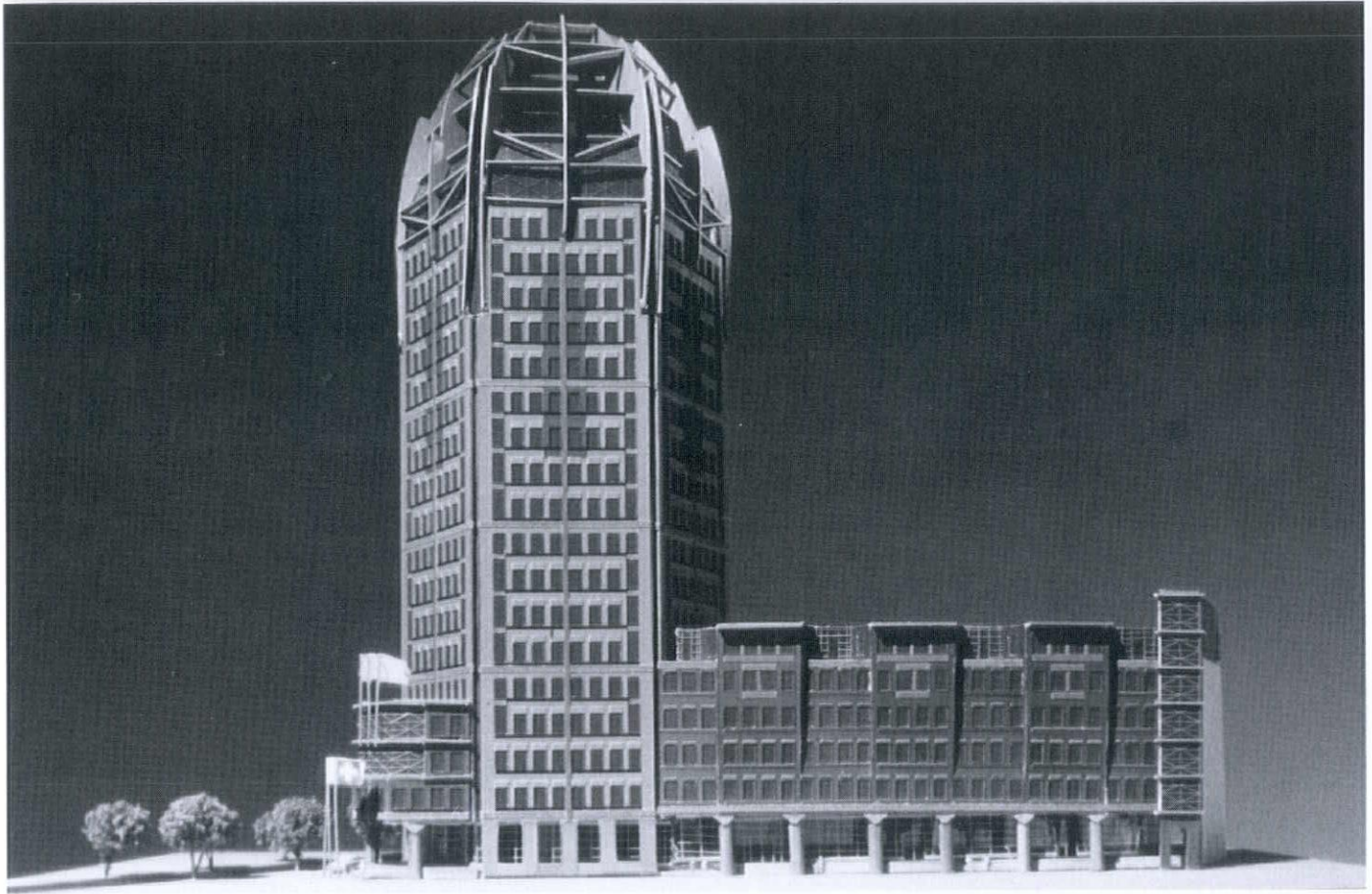
Acting as the visual terminus of the Boulevard Koningne Gracht, and taking advantage of views to the adjacent Koekamp city park, the tower will terminate in a top constructed of colored-metal clad planes which define a dome. The facade will be patterned with 5 colors of brick and ceramic tile.



配置図 Site plan S=1:4000



地上階平面図 Ground floor plan S=1:1000



北東立面圖 North-East elevation S=1:1000



東立面圖 East elevation

アバンドイバラ

Abandoibarra

Bilbao, Spain 1993

1993年、ビルバオ市議会は、アバンドイバラのマスタープランの為のデザイン・コンペティションを呼びかけた。かつての旧造船所、コンテナ駅、それに港が移転されると、この地域は再開発されることになっている。マスタープランは、既存の市街とウォーターフロントの間の8mの高低差を解決し、道路網、それにオフィス、住居及び小売店舗棟、ホテル、図書館を含む複合プログラムをデザインしてゆかねばならない。

シーザー・ペリ&アソシエイツ、バルモウリ・アソシエイツ、エウヘニオ・アギナーガの提案が、ビルバオ市議会によって選ばれた。

この提案の中では既存の都市の道路グリッドがアバ

ンドイバラの開発へと延長され、ド・ニャカシルダ公園を拡張しながら、直交グリッド状の通りのうち2本が緩い勾配を持ちながら延長されてウォーターフロントへと繋がっている。またネルビヨン川に沿って曲線状の新しい通りを導入することで、オペラ座（サリアノ・イ・パラシオス設計）とグッゲンハイム美術館（フランク・O. ゲーリー設計）を結び付けると同時に周辺の交通網の再構築を行っている。マスタープランの重要な構成要素に、新しい美術館前広場があり、既存の市街と新たな開発区域をつなぎ、大きな円形の建物を抜けて市街に至る乗り物の出入りを解決している。この広場に近い斜めの道、エルカーノの軸線上に、超高層ビルが川まで達した

市街のシンボルとして位置する。

コンペティションの後、市議会は計画案への部分的変更の検討を要請した。それは、アフリアゲラ通りの拡張計画、そして1棟の高層ビルの代りに、低層2棟のオフィス・タワーを開発しうる可能性、そして機能プログラムへのいくつかの変更といったことであった。

シーザー・ペリ&アソシエイツ、バルモウリ・アソシエイツ、そしてエウヘニオ・アギナーガは、コンペティションの計画案の特色や本質を変えることなく、これらの変更を取り入れた。修正案(デザイン)は、今やビルバオ市の為の新マスタープランに組み入れられている。

In 1993, the City Council of Bilbao called for a design competition for the master plan of Abandoibarra. This area is to be re-structured once the old shipyard, the container station, and the port are relocated. The master plan has to resolve an eight-meter elevation difference between the existing city and the riverfront, the road system, and a complex program that includes offices, residential and retail buildings, a hotel, and a library.

The project designed by Cesar Pelli & Associates, Balmori Associates and Eugenio Aguinaga was the one selected by the City Council of Bilbao.

In this proposal the urban grid is extended through Abandoibarra, enlarging the park of Doña Casilda

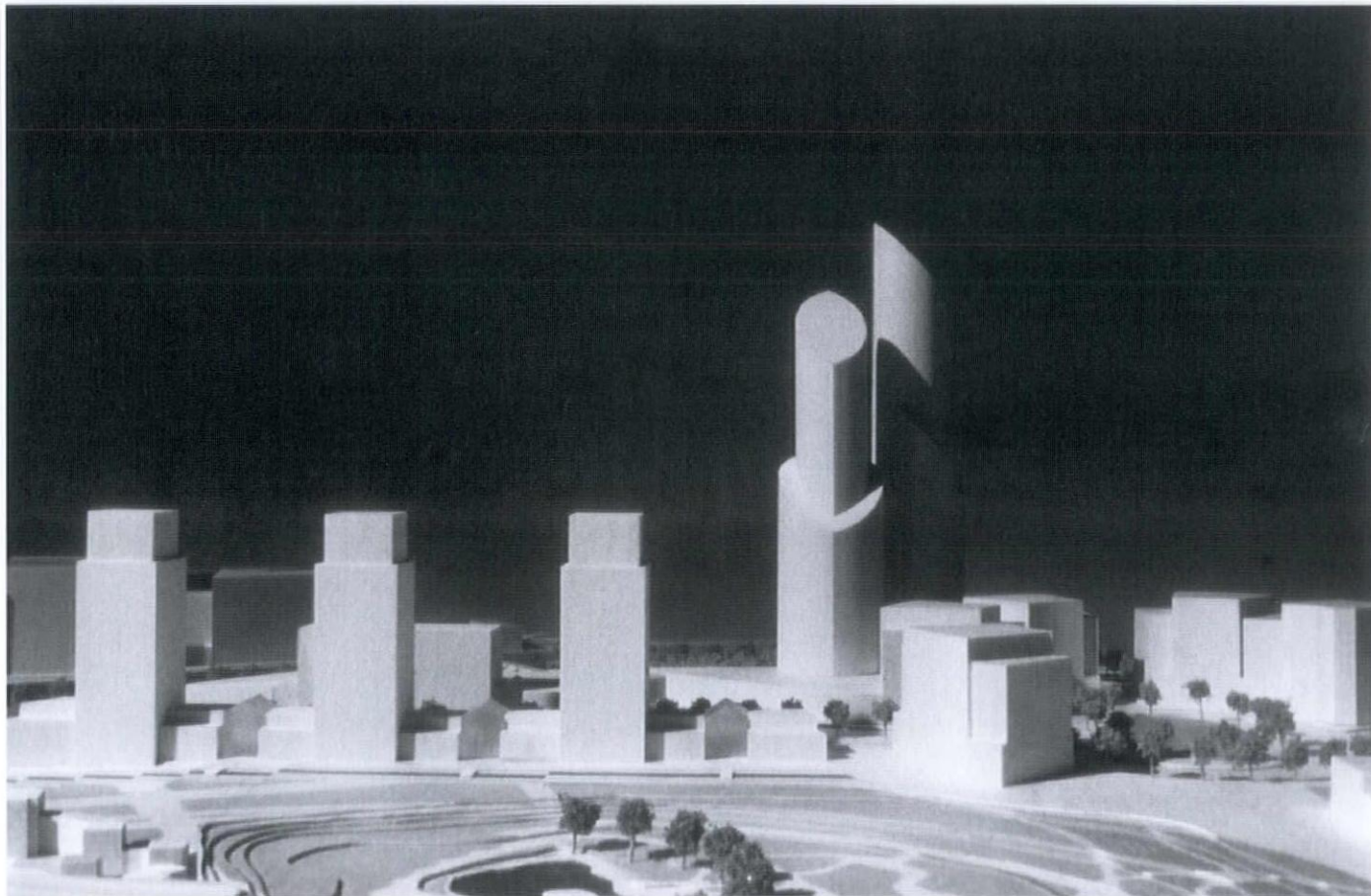
and extending two of its orthogonal streets in a gentle slope down to the riverfront. A new and curved avenue along the Nervión River ties in the Opera (designed by Soriano y Palacios) with the Guggenheim Museum (designed by Frank O. Gehry), reorganizing at the same time the traffic system.

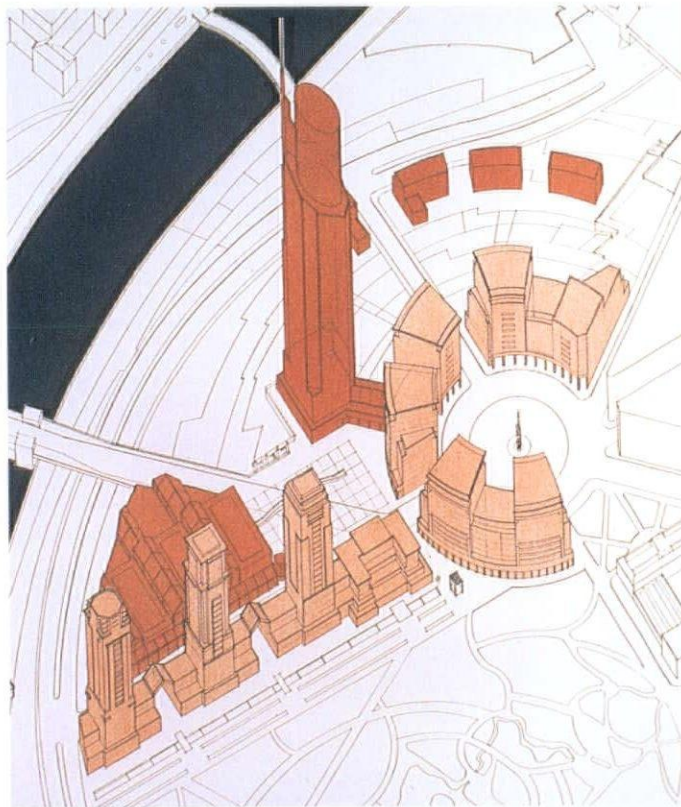
An important component of the master plan is a new Plaza in front of the Museum of Art linking the existing city and the new development and resolving the vehicular access to the city through a large rotunda. Close to this Plaza and on axis with the diagonal street Elcano, a skyscraper stands as the symbol of the city having reached the river.

After the competition, the City Council requested

the study of modifications to the proposal that would allow the extension of the Ajuriaguerra Street, the possibility of developing two smaller office towers instead of a single skyscraper and the introduction of several changes to the functional program.

Cesar Pelli & Associates, Balmori Associates and Eugenio Aguinaga introduced these modifications without altering the character and essence of the competition proposal. Their revised design has now been incorporated in the new master plan for the City of Bilbao.





埼玉アリーナコンペ応募案 (優秀賞)

Saitama Arena Competition

Saitama, Japan 1995

私が最も大事にしたことは、埼玉県民の持っているビジョンを適切な形でデザインに反映させるということであった。敷地条件および、設計条件を慎重に分析した結果以下の3つが最も重要であると考えた。ひとつは建物の象徴性である。21世紀に向かって発展する埼玉のエネルギーを象徴することであった。飛翔を象徴する翼をモチーフとして、記憶に残るシルエットを持ったデザインとしている。

The most important thing to me was to capture the visions of the people of Saitama in an appropriate design. We carefully studied the site and design requirements and concluded that the three following points represented the most important goals. The first point is the symbolism of the building. I wanted to symbolize the growing energy of Saitama as it moves toward the 21st century. I seized upon the dynamism and universal beauty of wings about to lift from the ground. I love the sense of energy directed toward a purpose that wings in motion

第2のポイントは機能的なアリーナ空間をつくることであった。多目的に使用されるアリーナに万全の機能を持たせることであった。利用しやすいこと、運営しやすいこと、空間に柔軟性のあることが必要である。可動可変システムによって、音楽イベントや、アメリカンフットボールの国際競技にも対応可能としている。

3つ目のポイントは、人々のスケールに対して注意

portray. The building has a graceful form, a friendly character and a memorable silhouette.

The second point is the function of the arena space. It was extremely important to meet all functional requirements of the arena for all possible events. Our design was very efficient: easy to manage, use and reconfigure for multiple purposes. By employing a flexible partition wall system, a full range of uses from high quality specialty space for music and arena events to international level American football can be comfortably accommodated.

深く対応するということである。できるだけコンパクトな外観に納め、さいたま広場につながるオープン広場を最大限にとる必要性があると考えた。

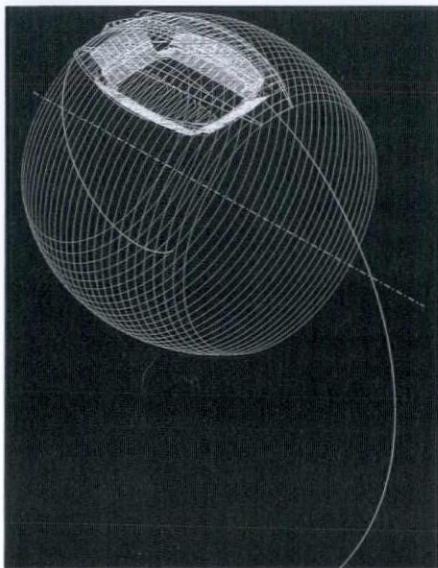
広場に関しては、文化娯楽施設と大アトリウム空間を提案している。

建物は人をその情景の中に取り込んだ「にぎわい」そのものであると考えた。

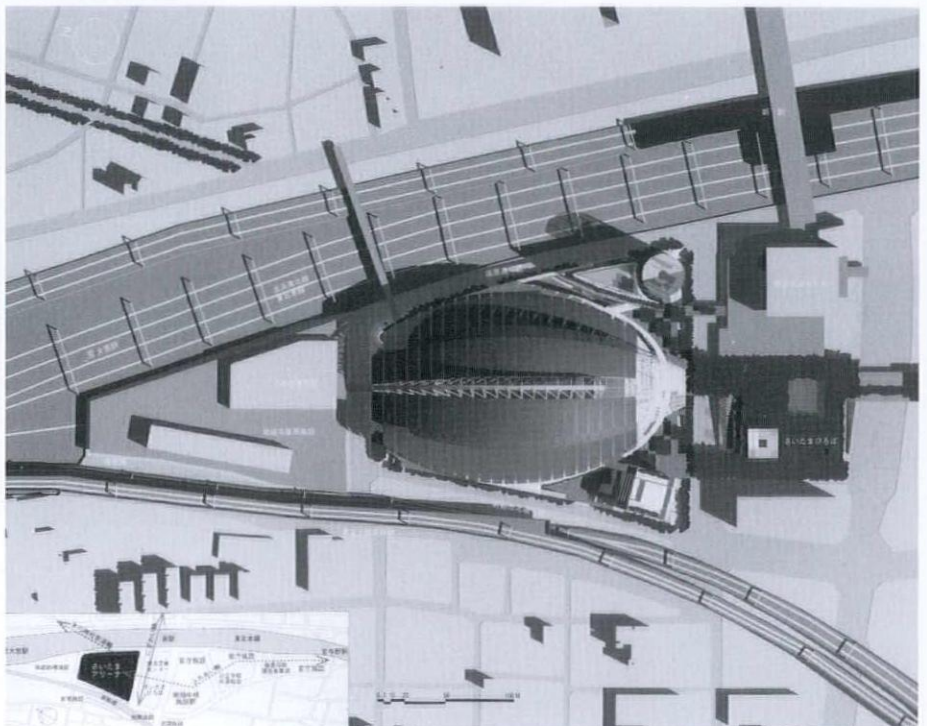
The third point is sensitivity to human interaction and its appropriate scale. We worked hard to make the arena as compact as possible pushing it north to maximize the openness of the plaza continuing the green from Saitama Hiroba.

We further reinforced the life at the plaza level by adding the culture-amusement facility, the large atrium space and the Tsuji place.

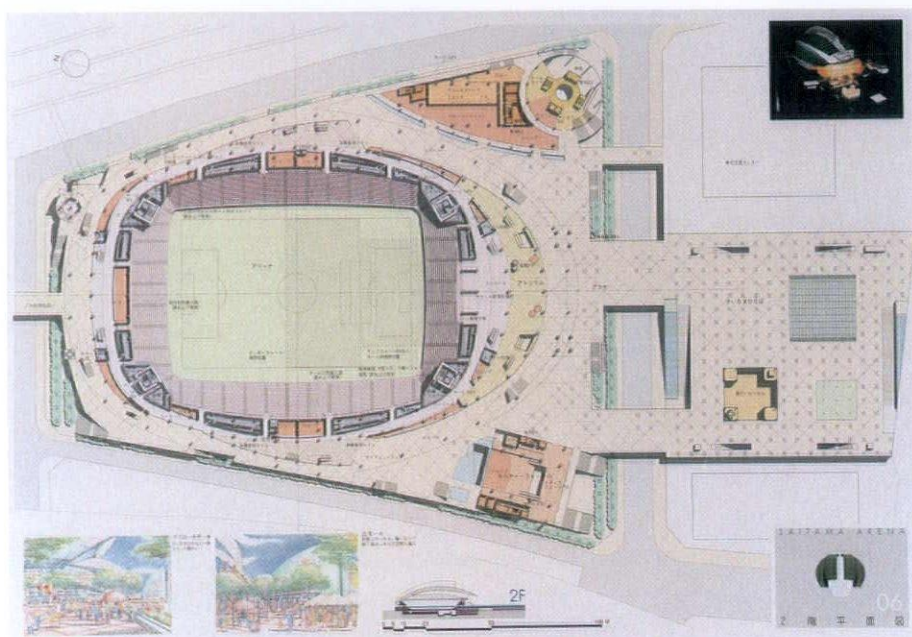
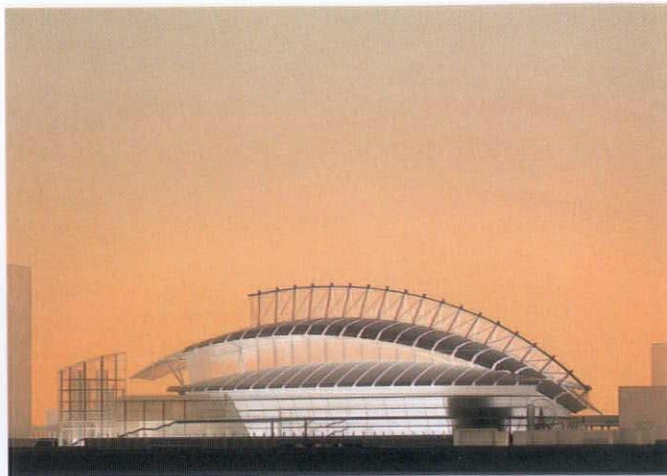
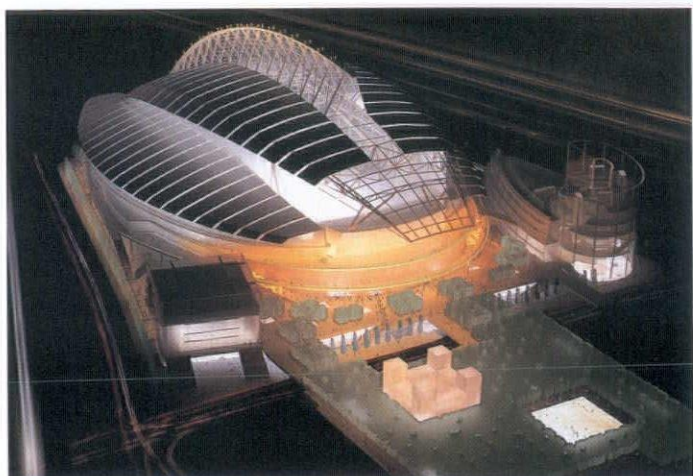
For me, architecture is not in the empty building but ultimately in the gathering, use and enjoyment of people-the concept of Nigiwai.



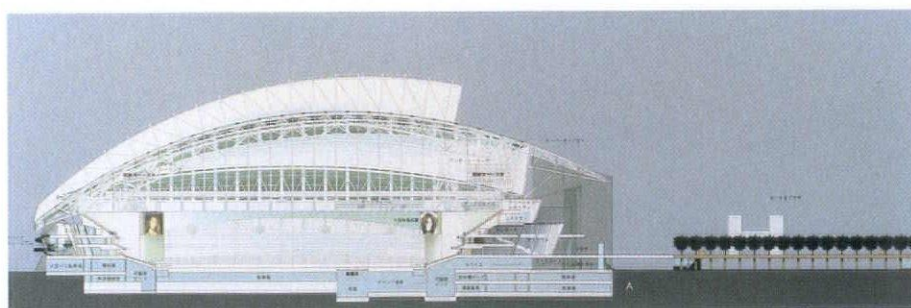
コンセプト図 Concept drawing



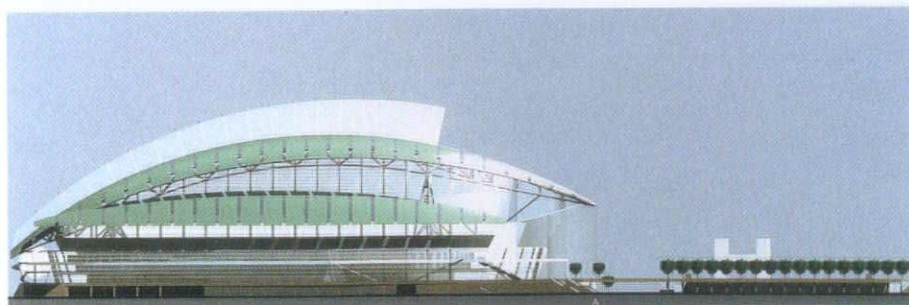
配置図 Site plan



2 階平面図 Second floor plan



断面図 Section



立面図 Elevation

(財)日本生産性本部の為の研修所であるこの建物は、東京から南方へ約50km離れた夏のリゾート地である三浦半島の葉山に位置している。相模湾と富士を一望できる丘の中腹にあるこの敷地は緑道公園により分割されている。全体計画のガイドラインによって「最高高さ15m」と「傾斜屋根」という設計条件が規定されている。

この研修所は宿泊棟の150の客室とバーレストランだけでなく、研修棟の教室、セミナー室、そしてラウンジも有する。この建物の形態は、緩やかにうねっ

た敷地の等高線に沿って主動線を取り、最大限の眺望を得るというふたつの考え方によって構成された。この研修所は、遠方の富士を見るための屋外劇場のように丘の中腹に配置されている。建物の中の人々は、屋外劇場にいるかのように丘の等高線に沿って移動する。この施設には研修所のためのアクティブなスペースと、リラクセスのためのスペースというふたつの機能を持ち、おのおの分割して配置している。地下動線は、既存の線道公園に影響を与える事なく、ふたつの建物を結んでいる。主要な個々の機

能は、独立した形態、色、そして方向をもつ明快な小さな形によって表現されている。それらは、線形に構成された客室部と主動線の廊下に対して対比的に扱われている。外観は、セラミックタイルによって覆われている。レストランとラウンジは自然の散策路へとつながる外部のテラスを有している。この建物は、自然の岩が露出しているかのように丘の中腹に配置された。尚、このプロジェクトは山下設計と共同で設計が行われた。

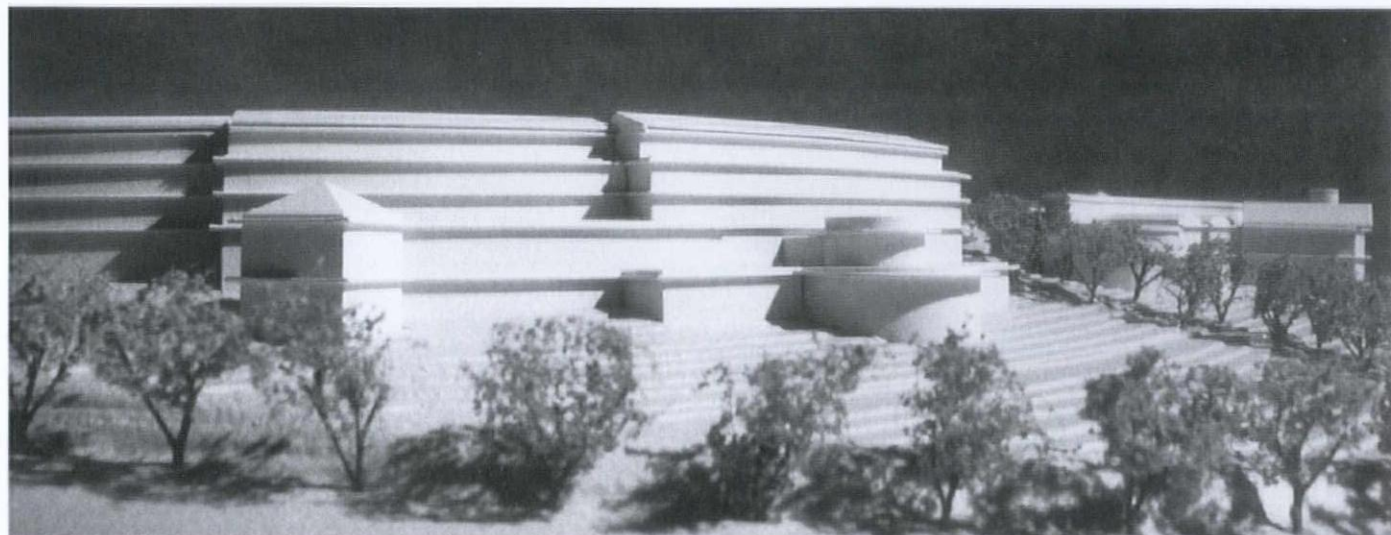
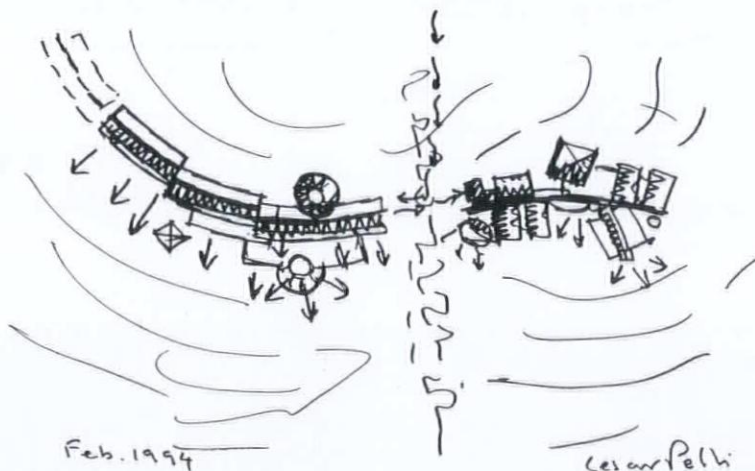
The corporate training facility for the Japan Productivity Center is located near the summer resort town of Hayama, approximately 50 km south of Tokyo, on the Miura Peninsula. The hillside site has panoramic views of Sagami Bay and Mount Fuji and is divided by a linear public park. Master-plan guidelines for the area stipulate a 15 meter building height limitation and sloping roofs.

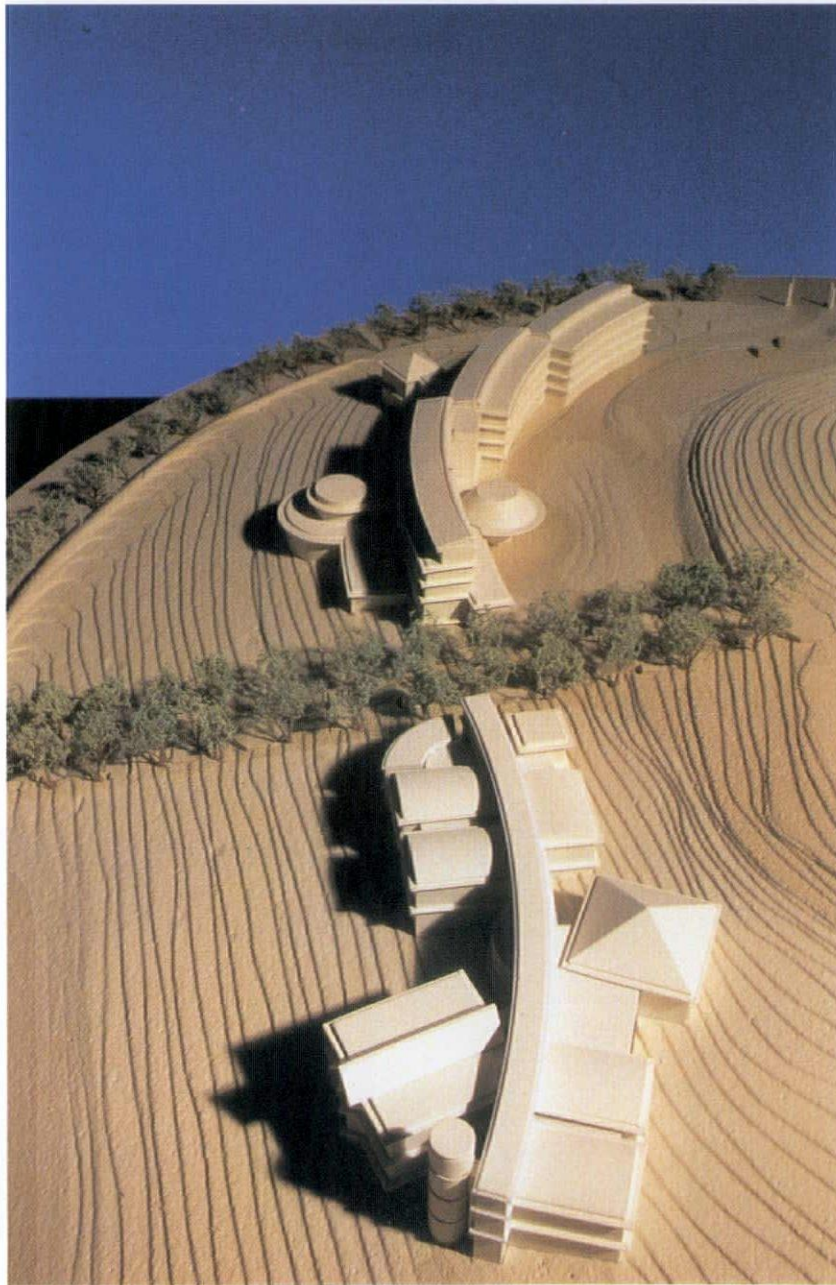
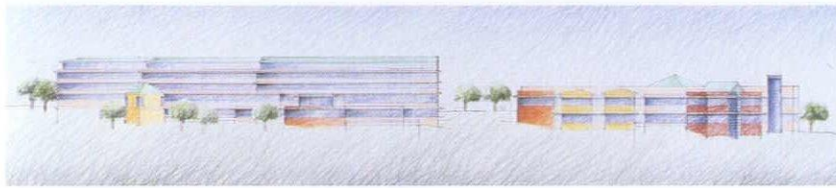
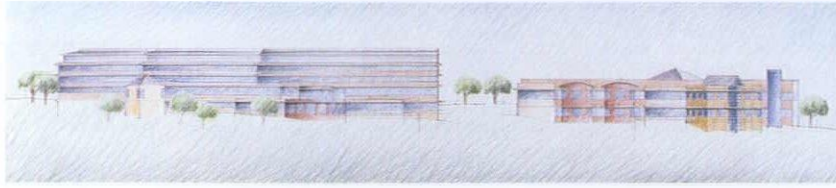
The training facility includes classrooms, seminar rooms and lounges as well as 150 guest rooms and a bar/restaurant. The building forms have been

organized along linear circulation spaces which follow the gently curving contours of the site and maximize views. The buildings for the Institute sit on the side of the hill as if it was on an amphitheatre looking at the distant views of Mount Fuji. People in the building will move along the edge of the hill as if on an ancient path.

There are two separate groups of buildings: one for work activities and one for relaxation, each occupying a separate half of the side. An underground corridor links the two sides without

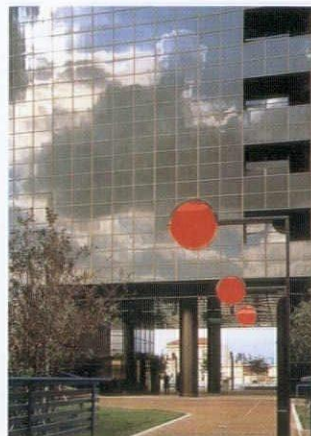
disturbing the existing linear park. The important individual functions are expressed as discreet smaller forms of varying shapes, colors, and orientations, which balance the linearly organized forms of the guest rooms and circulation corridors. The exterior walls are clad in ceramic tile. The restaurant and lounges include outdoor terraces which connect to informal winding paths. The building sits on the edge of the hill like a natural rock outcropping.







commons・オブ・コロンバス



サン・ベルナルディーノ市庁舎

シーザー・ペリ——そのデザインの変遷

片岡博之

シーザー・ペリとの出会いは、1989年私が米国シーザー・ペリ事務所での研修勤務を始めた時であった。2年間にわたる研修勤務時代、いくつかのプロジェクトに実際に携わることで、ペリの設計理念、デザインの進め方について、直接学ぶ機会が得られた。

ペリが日本そしてアジアにおいて新たなデザインの展開を始めた今、研修勤務時代に得た経験もふまえ、ペリの現在に至るまでのデザインの変遷とその特徴について、述べていくことにしたい。

スキン（外皮）としての表層

ペリのデザインの変遷を見ていくうえで重要なポイントは、その根底にある一貫した設計理念と、それに基づいて展開される表層のデザインにある。

今日の建物は、石積みをもととした古典的建設の伝統から、建物を包み込む軽量の外皮と

それを支持する鉄骨やコンクリートの骨組みを築くという新しい建設の伝統へと変わってきている。

ペリの持つ設計理念とは、多くの古典的建築の美の体系がその石積みをもととした建物の構成の原理から発展してきたように、今日の建築においても、その多層の皮膜と骨組みという構成の原理に基づいた新たな美の体系（形態表現と表層のデザイン）を確立し、発展させていこうというものである。この基本的設計理念はペリの初期の作品から現在に至るまで一貫してつらぬかれているが、その表層における具体的な形態表現は、時代、コンテクスト、プログラム等の変化に適応し、様々な変換を遂げてきている。

モダニズム全盛期であった初期の作品では、単一かつ均質なグリッドに基づく抽象的な形態表現がおこなわれている。

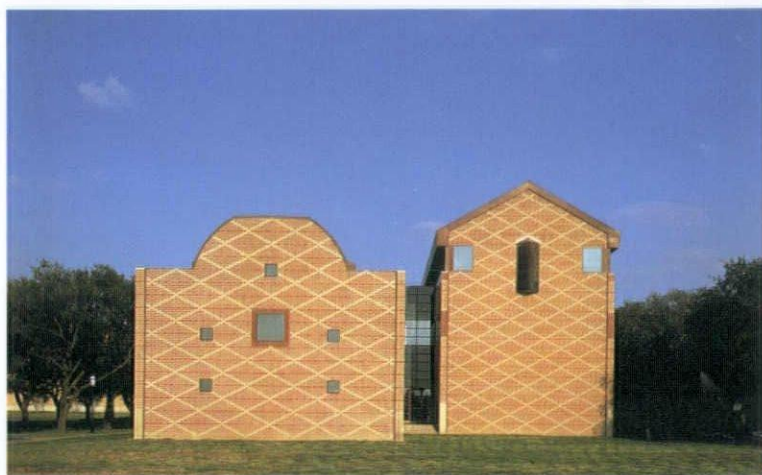
〈サン・ベルナルディーノ市庁舎〉や〈コモ

ンズ・オブ・コロンバス〉では、外装に均質なグリッド状のミラーガラスのスキン（外皮）を用い、建物全面を覆うことによって、抽象化され、密封された美しいガラスの箱の創造が試みられている。

また、日本でのペリの最初の作品となった東京の〈アメリカ大使館〉では、均等割のグリッド・モジュールに基づくミラーガラスとPCカーテンウォールのスキンが用いられている。ここでは日本の伝統的古建築の色調を意識したブラウンとベージュの清楚なスキンによって、大使館が必要とする複雑な内部空間を包みこむという手法がとられている。

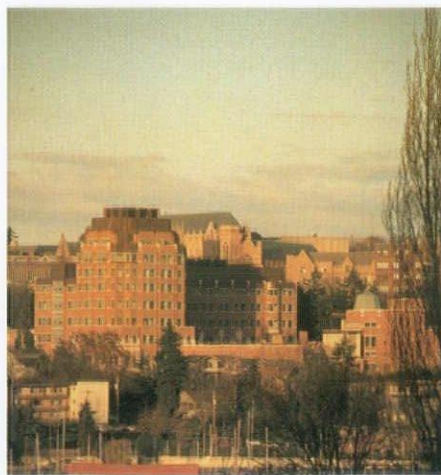
ペリの均質なグリッドに基づく抽象的形態表現の特質が最も色濃く出た作品に、ロサンゼルスに〈パシフィック・デザイン・センター〉がある。「青い鯨」と呼ばれる第1期の建物は、全体が鮮烈なブルーのガラス・カーテンウォールに包まれ、スケール感を消した抽象的な形態表現がおこなわれている。その後建てられた第2期の建物では、グリーンガラス・カーテンウォールに包まれた立方体の四隅を鋭く切り落とすという手法により、抽象化された幾何学的形態表現がなされている。

このウエスト・ハリウッドに忽然と現れた巨大なオブジェのようなふたつの建物は、特徴の無い街並みに対し、カリフォルニアの驚



ライス大学ヘリングホール

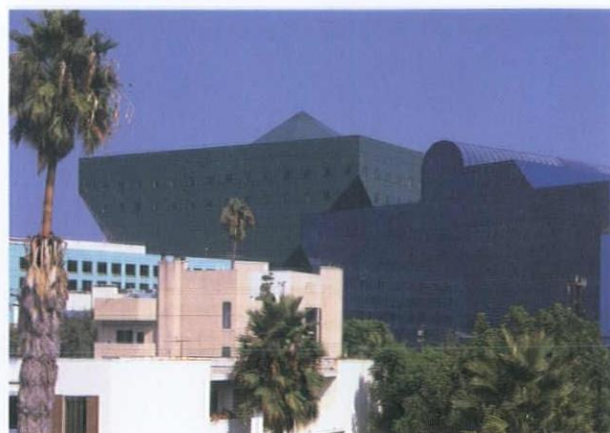
SD9510



ワシントン大学サトル校 物理学部 天文学部ビル



アメリカ大使館（東京）



パシフィック・デザイン・センター拡張計画

き (surprise) を与えると共に、周辺の新たなランドマークとしての役割りを果たしている。

これらの初期の作品では、一貫して、単一かつ均質なグリッドに基づく抽象的な形態表現がおこなわれているが、フォルム全体のプロポーション、表層における色彩の使い方にペリのオリジナリティが強く表れているといえよう。このペリ独特のプロポーション感覚と美的感覚が、この後の作品で展開される豊かな表層のデザインを生み出す原点ともなっている。

伝統と創造——大学施設のデザイン

ペリの大学施設の作品では、長い歴史の中で培われてきた各大学の伝統的なコンテキストとオリジナリティに融合した独自のデザインが展開されている。

そのデザインには、大きくふたつの特徴が挙げられる。

ひとつは各大学の既存キャンパスのマスタープラン、軸線、そして既存建物群の配置、ボリューム、高さ等の関連を注意深く読みとり、知的分析をおこなうことによって創り出された配置／平面計画とその形態表現である。

もうひとつは、各大学の歴史的既存建物の伝統を継承した新たなスキン（外皮）としての表層のデザインである。

スキンとしての具体的な表現においては、歴史的既存建物の形態、装飾、ディテール等を直接引用するのではなく、そのファサードの中から、素材（煉瓦、ライムストーン、瓦等）、色彩、パターン等を抽出し、近代建築の原理に基づき、再構成することによって、独自の表層のデザインが創り出されている。こうして創り出されたペリの作品は、各大学の歴史的既存建物群の持つ伝統を継承すると共に、新しい大学施設として、各大学の持つコンテキストとオリジナリティをより強化していくものとなっている。

大学施設の最初の作品となった〈ライス大学 ヘリングホール〉では、今世紀初頭にラルム・アダム・クラムによってデザインされたマスタープラン及びその建物群への融合が試みられている。また、スペイン瓦の屋根とライム・ストーンの基壇と明るい水平帯の繰り返しからなる「ライス大学風煉瓦造り」の外装パターンを継承することで、変化に富んだ新しい表層のデザインが創り出されている。

ニューヘブンに建つくエール大学 分子医学センターでは、湾曲する前面道路、医学部キャンパスそして歴史的既存建物（ルネサンス・リバイバル・スタイル）への調和と融合を図ることによって、曲線状の形態表現と水平方向の連続性を強調した豊かな表層のデ

ザインが展開されている。

最近作の〈ワシントン大学 物理／天文学部施設〉では、既存キャンパスの軸線と歴史的既存建物（アカデミック・ゴシック・スタイル）への調和と融合というテーマのもとに、全体施設のデザインがおこなわれている。ここでは、既存キャンパスの3つの軸線を活用した明快な配置計画、各施設の機能性に基づく変化に富んだ形態表現、そして水平ラインと垂直ラインを巧みに統合した表層のデザインが展開されている。

このように一連の大学施設の作品では、アメリカの伝統的な大学が持つ既存コンテキストへの調和と各大学の歴史的既存建物の伝統を継承した新たなデザインの創造というふたつのテーマのもとに、変化に富んだ様々な表層のデザインが創り出されている。

表層の美学——スカイスクレーパーのデザイン

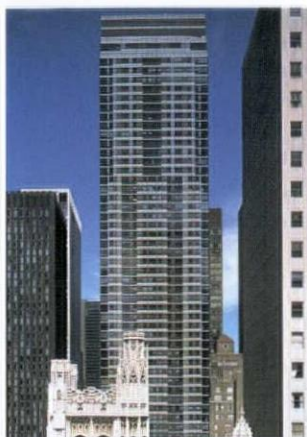
ペリの一連のスカイスクレーパーの作品では、「スキン（外皮）としての表層」という設計理念に基づきながら、より繊細な、そして豊かな表層のデザインへの変換が試みられている。それは、大学施設の設計の中で確立してきたコンテキストへの調和、素材、色彩、パターンを巧みに活用した表層のデザインといった考え方を、さらに発展させ、統合したも



インスティテュート・フォー・アドバンス・スタディ



エール大学 バイヤー分子医学センター



ニューヨーク近代美術館 (MOMA)

のとなっている。ここで、ペリの代表作となったニューヨークの3つのスカイスクレーパー・プロジェクトにおける表層のデザインについて着目してみたい。

ひとつはスカイスクレーパーとしての最初の作品となった「MOMAレジデンシャルタワー」である。タワーのスキンは淡色の窓ガラスと11の色調をもったスパンドレルガラスによって構成されている。その繊細なグリッド割と多彩なカラーガラスが織りなす幾何学的なパターンは、モンドリアンのコンポジションと相通じる、ある種の緊張感をもった美しさを創りあげている。

そして、これらのパターンは単に美しいスキンを創り出すという意味だけでなく、タワーの内部機能（各住戸の位置と大きさ）を暗示しており、その表層において住居用のタワーであることを明確に示している。また、スキンに用いられている茶褐色系の11の色調は、この地域の重要な既存建物の色調に調和するよう選ばれている。

ここでは、スキンとしてのカラーガラスを活用した繊細かつ図象的な表層のデザインがおこなわれている。

次に挙げられるのは、バッテリーパークシティ開発の中心施設として計画された「ワールド・ファイナンシャル・センター」である。



ワールド・ファイナンシャル・センター

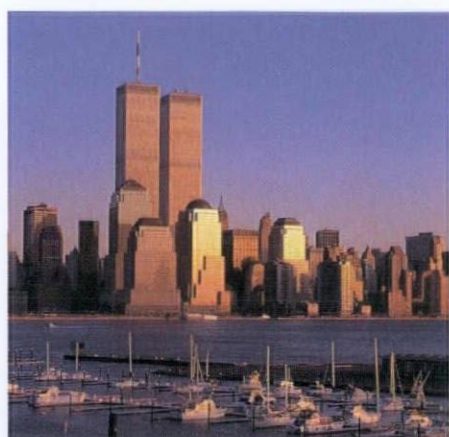
この計画ではロウアーマンハッタンを歴史的スカイラインとコンテクストを重視し、その伝統を現代的ボキャブラリーと感覚によって翻訳し、継承していくというテーマのもとに全体施設がデザインされている。

タワーのスキンにはこの地域の色調、素材感への調和を図るため、グレー系御影石とミラーガラスが用いられている。

3層に分節されたタワーシャフト部分は、壁面の石に対するミラーガラスの占める割合が上層部ほど大きくなり、最終的にすべてがミラーガラスに変換している。この天空に向かってスキンが変換していくデザインはタワーの視覚的上昇感と垂直方向へののびやかさを強調している。

ここでは、石（薄板）とミラーガラスをミックスした多層のスキンを重ね合わせることで、より、天空への透過性を強調した変化のある表層のデザインが展開されている。

最後は、カーネギーホールの空中権を利用して増築された「カーネギーホール・タワー」である。タワーのスキンは、隣接する既存のカーネギーホールと同系の3色の煉瓦とガラスによって構成されている。ファサードは、両端のベージュ系煉瓦部分と中央の茶系煉瓦部分の3つの帯に分割され、タワーの垂直性を強調した表現となっている。またカーネギ



ワールド・ファイナンシャル・センター

ーホールのコーニス（庇）のラインに揃った水平帯は6層ごとに繰り返し用いられ、タワー頂部のコーニスと共に、水平方向のアーティキュレーションの役割を果たしている。これら一連の表層のデザインは、既存カーネギーホールのファサードを想起させるものとなっている。

ここではカーネギーホールという歴史的既存建物への調和を意図した、煉瓦による豊かなそして図象的な表層のデザインが展開されている。

これら3つのプロジェクトは同じ都市ニューヨークの中に計画されているが、プログラム、コンテクスト等の違いに基づいて、全く異なるタワーの形態と表層のデザインが創り出されている。しかし、それぞれの表層のデザインは「構造から切り離されたスキンとしての表層」という基本概念に根差しており、それはモダニズムの設計理念を継承しながらも「より軽やかに、繊細に、豊かに」というデザインイメージのもとに、表現性豊かな表層へと変換されたものになっている。

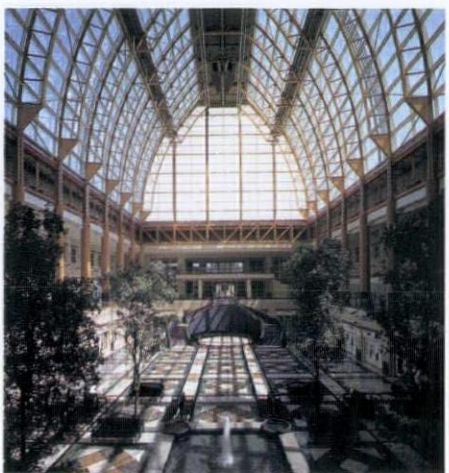
新たな時代へ——日本、アジアにおける展開
ペリの日本、アジアにおける最近作では、異なる風土、文化、プログラムを知的に分析し、卓越した美的感覚とプロポーション感覚によ



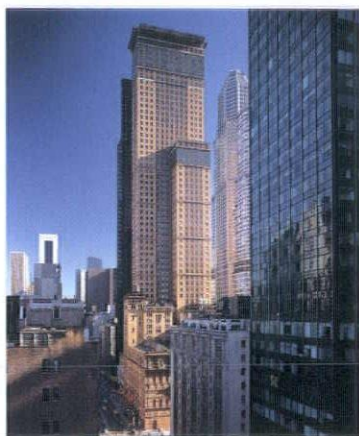
ワールド・ファイナンシャル・センター
SD9510
58



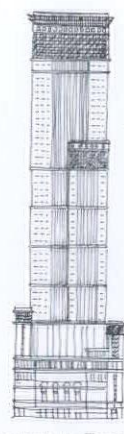
シーホークホテル&リゾート



ネーションズバンク本社ビル

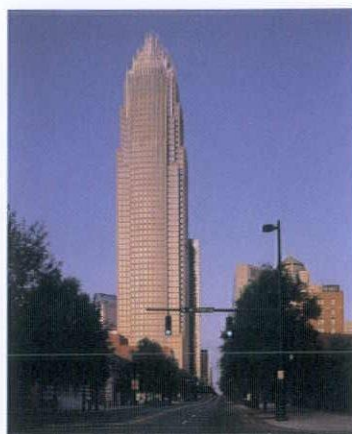


カーネギーホール・タワー



Carnegie Tower
- Cesar Pelli 1989

カーネギーホール・タワー



ネーションズバンク本社ビル

って、それらに適合する表情豊かな表層のデザインが創り出されている。

〈シーホーク ホテル&リゾート〉ではタワーの新たなスキンとして、経済的で高品質な日本のタイルを用い、多様な色彩とパターンを活用することによって、リゾート施設として親しみやすい表情豊かなデザインが展開されている。また、軽やかな流線形のフォルムを持つホテル棟には、ガラスのスキンに内包されたパブリックスペースとしてのアトリウムが隣接して計画されている。

このガラスのスキンに内包されたアトリウムはペリの提唱する「アーバン・リビングルーム」のコンセプトに基づいてデザインされている。

この「アーバン・リビングルーム」とは、地域そして施設の新しい核として、市民のリビング・ルームに成り得るような空間、すなわち、人々が自由に集い、様々な活動をおこなうことができる憩いの場としての空間を提供しようという考え方である。

この考え方は、初期の作品の〈コモンズ・オブ・コロンプス〉において試みられ、その後W.F.C.のウィンターガーデン、NCNBタワーの複合施設内のファウンダーズ・ホールへと展開されてきたものであり、そのアトリウムのフォルムと内部空間は、より変化のある

豊かなものへと高められてきている。

〈NTT新宿本社ビル〉では、タワーのスキンとして、アルミとミラーガラスを用い、水平ラインを強調したシャープでメタリックな表層がデザインされている。湾曲した正面ファサードと外壁面に装着されたアルミの日除けルーバーは、太陽光のもとできらめき、タワー全体にスケール感と深みのある陰影の変化を与えている。

メタリックな高層タワーと石貼りの低層アネックスの間には、緑豊かなパブリックスペースとしての中庭が計画されている。この中庭は、ある意味で、自然の少ない新宿という環境条件のもとで創り出されたガラスのアトリウム空間に代替するペリの新たな「アーバン・リビングルーム」の試みのひとつともいえよう。

また、ペリのスカイスクレーパーの最新作ともいえる〈クアラルンプール・シティ・センター〉では、タワーの新たなスキンとしてステンレスが用いられ、象徴的で変化に富んだ表層がデザインされている。

ツイン・タワーとして天空に向かってそびえたつ形態表現は、マレーシアの地域性、文化、宗教を意識したイスラム的モニュメンタリティとランドマーク性を強く感じさせるものとなっている。

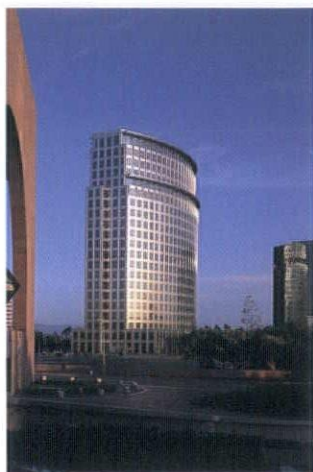
この先鋭化された尖塔のイメージは125階建てスカイスクレーパーとしてペリが計画したシカゴのミグリン・バイトラー・タワーを想起させる。

また、タワーのスキンに現代の新素材ともいえるステンレスを用いた他の最近作として、ロンドンに建つ〈キャナリーワーフ・タワー〉そしてロス郊外のコスタ・メッサに建つ〈ブラザタワー〉があるが、本プロジェクトでは、タワーのフォルムが織りなす複数の切り子面と水平方向の円筒形日除けルーバーによって、メタリックな尖塔としてのイメージがより研ぎ澄まされ、変化のある表現に統合されている。

これら一連の最近作を見ると、ペリが21世紀へ向けた新たなタワーデザインの展開として、今日の新素材ともいえるアルミ、ステンレスを活用した、よりシャープな、そしてよりハイタッチな表層のデザインへと変換を始めていることを強く感じる。

そして、モダニズムからポストモダニズムへと揺れ動く現代建築の潮流の中で、ペリは新たな時代へ向け、その独自の設計理念に基づき、より知的に、より美的にその表層のメタモルフォーゼを展開しているといえよう。

●かたおか・ひろゆき/KAJIMA DESIGN



プラザタワー



クアラルンプール・シティ・センター



ミグリン・バイトラー・タワー



スケッチ：シーホークホテル&リゾート Sketch: Sea Hawk Hotel & Resort

Photo Credit

(a:above b:below r:right l:left m:middle)

Peter Aaron /ESTO p.58 (ar)
 Joe C. Aker p.57 (ar)
 John A. Connell p.59 (bl)
 Kenneth Champlin p.59 (bl)
 Scott Frances /ESTO p.30 (br)
 Taizo Furukawa /Takenaka Corporation p.24
 (bl),25(b)
 Jeff Goldberg /ESTO p.57 (bl),59 (al)
 Paul Hester p.56 (bl)
 Timothy Hursley p.57 (br),58 (br),59 (ar)
 Harusumi Ichikawa p.25 (a,m)
 Balthazar Korab p.30 (l),56 (al,ar)
 Mitsuo Matsuoka p.10-14
 Kaneaki Monma p.15-17
 Osamu Murai p.20,21
 Tomio Ohasi p.53 (ar)
 Cervin Robinson p.58 (al)
 S&T STUDIO Inc. p.53 (al)
 SHINKENCHIKU-SHA p.57 (al)
 M.Turbucz p.56 (br)
 Olympia York p.58 (bl)
 Yukio Yosimura p.22,23,24 (al),28
 Cesar Pelli & Associates p.45-51,58 (am),59 (am,
 bm)
 R.Bostwick /C.P.&A. p.39 (al),43,44
 D.Coon /C.P.&A. p.54,55
 Bruce Davis /C.P.&A. p.24,58 (bm)
 R.Espejo /C.P.&A. p.36
 Cesar Pelli /C.P.&A. p.27 (al),39 (ar)
 Taka Sato /C.P.&A. p.24 (br),27 (ar,b)
 V.Simonescu /C.P.&A. p.34

翻訳協力

櫻井義夫

倉西幹夫

尾崎澄子

足立正

シーザー・ベリ&アソシエイツ日本事務所

編集協力

シーザー・ベリ&アソシエイツ日本事務所

ランドマーク・グラフィティ

「タワーアート in 通天閣：
ヴァナキュラーな電腦都市」展より

Tower Art in Tsutenkaku: Tron in the Vernacular

An artistic and architectural exhibition by artists and architects
who live in Kansai

大阪・通天閣——それは今なお、ヴァナキュラー性とシンボル性を発揮し続ける「塔」として存在する。そしてそれは「新世界」という庶民の高密度なエネルギーを放つ地域に根ざしており、第二次世界大戦下に解体消滅しながらも、再建され現在に至っている。

1995年8月、この地にヴァナキュラーな場を前提として近未来都市の「塔」を提案する試みがなされた。

——各々の多様な構想力及び表現手段を通じて来る21世紀へのタワーの象徴、意味を志向の上、風土に根ざしたヴァナキュラーな場を「空間造形」という視点から提示、創作してください。

こうした呼びかけに、在関西の若手建築家、造形作家44人が応え、専門分野を越境した展覧会が開催された。場所は、テーマの核心地、通天閣内部のフロアである。本特集は、この展覧会を紹介しながら、都市における場所性とランドマークの再考を試みようとするものである。

撮影＝堀内広治（新写真工房）

野村正則

Masanori Nomura

風の記録

版画家

1953年 大阪府生まれ
1977年 大阪芸術大学美術学科卒業
現代版画コンクール
1992年 源流の4人展、現代美術一茨木
1993年 紙によるディスプレイ制作、梅田大丸
1994年 個展、ギャラリーつち・いろ・すみ

発表展示期間というのは作品制作とはまた一種異なる無気味な緊張のある時です。大阪南でのグループ展終了直近か、搬出前日に起こった大震災。我を忘れる時の後、事の大きさに困惑しながら、ふと思い出したのが出品中の展覧会。自分の作品より画廊は無事か、あの作品は危ないなど、今となれば大した事でもない事に躊躇しました。

震災で実感した事は建造物への興味と不信感ですが、制作活動においても改めて考えさせられ、ものを造る事への何か不明瞭な疑問すら感じました。その後の作品に大きな変化は見られません。ただし、今回の展示は大阪の町並みを背景にした形ですので、その特種な空間に溶け込むようなものになればと思います。震災で感じた事を直接作品に取り込むつもりはありませんが、テーマの下地として考えています。



大高 亨

Tohru Ohtaka

Shape of Two Sheets

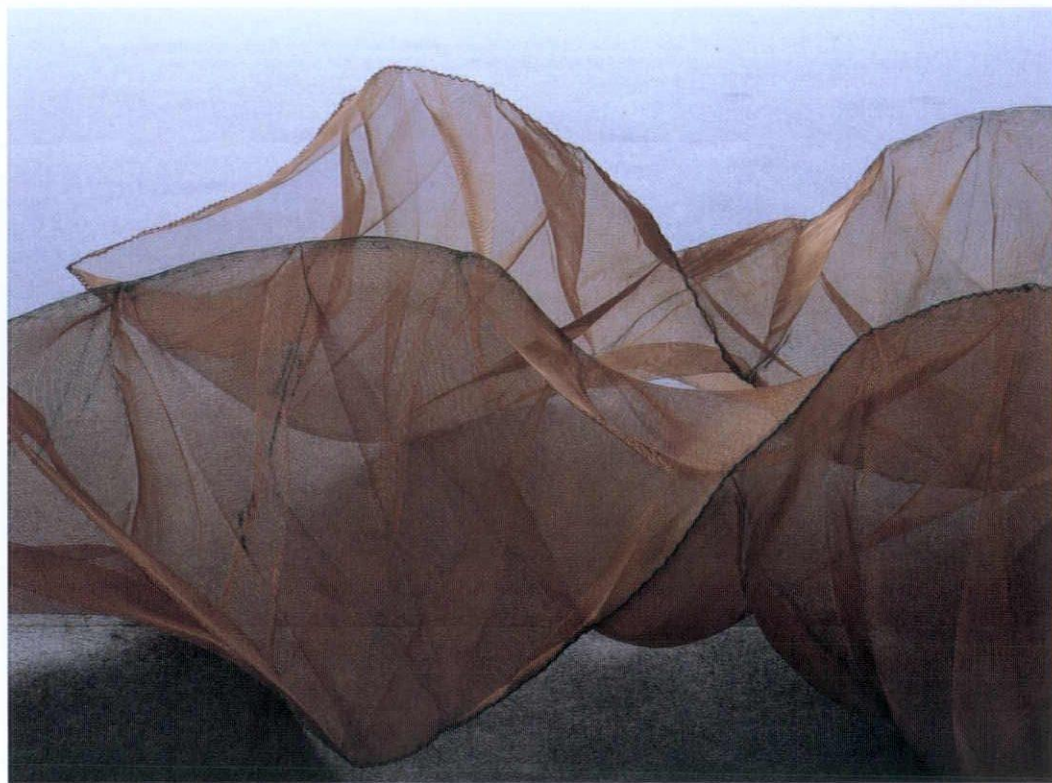
造形作家

1964年 秋田県生まれ
1988年 武蔵野美術大学卒業
1992年 国際テキスタイルコンペティション、
京都文化博物館
1993年 個展「時と偶の遊戯」、
ギャラリーNWハウス
1994年 常設「現代世界の美術」国立国際美術館

私の表現してきた作品は、今回の展覧会の会場となる「通天閣」及び「新世界」の持つ日常の中のレトロ感覚と通じる「懐古」をコンセプトにしているものもあります。「通天閣」及び「新世界」を現代に復権したいという展覧会の主旨は、正に私の作品の存在意味と一致すると考えております。

私はいつも素材に、繊維、鉄線、銅線など日常身の周りにある素材を使い、「時」をキーワードに制作を続けて来ました。今回の作品は、日常にある素材で、この場、この時にふさわしい「私のかたち」として復権させた物。

「日常」という意識しなくてももしっかりと存在している物、意識しなくても過ぎて行く「時」、かげろうのような、現れたり消えたりする「はかない存在」、そんな「日常」「時」「はかない存在」を、「私のかたち」にしてみました。



中野節子

Setsuko Nakano

what

造形作家

1948年 大阪府生まれ
1991年 現代日本美術展
1992年 現代版画コンクール展
1993年 黒部野外彫刻展
1994年 余次元の作家たち展

真鍮ネット・ガラスを素材として使用することにより、風にそよぎ、時間の流れと共に変化し、有るか無きかのような形態の中に、小宇宙の空間を構成した。



鈴木達郎

Tatsuro Suzuki

横たわる塔——南海天王寺
支線跡地へのオマージュ

建築家

1964年 静岡県生まれ
1992年 大阪芸術大学建築学科卒業／同大学助手
1994年 和音 WAON展、Nulwon Gallery
(韓国)
1995年 アトリエ幹舎主宰
大阪工業技術専門学校講師
大阪デザイナー専門学校講師
ドナルド・ジャッドの遺した財団の訪
門報告会、大阪府立文化情報センター

現代において「塔」は存在しない。と、
いう所から私の創作は始まっている。

幼い頃——確か5、6歳の時だったが
——祖母と2人で薄暗い仏壇の前に座り、
訳も分らないまま、祖母の唱える
お経の後を追いつけながら、真っ直ぐ
に立ち昇っていく、線香の煙を不思議
そうに見つめていた。

その垂直性と、崇高な感覚は、独特
の匂いと先端の紅い光とともに、今も
はっきりと蘇ってくる。

果たして、あれが、私が体験した初
めての「塔」の感覚だったに違いない。

永遠なる垂直性を水平性に置換する
こと、その空間や表情は、あくまでも
minimalであること、この二つの命題が
今この瞬間、現代において「塔」を出
現させ得るのかもしれない。

持田総章

Sosho Mochida

LOCATION

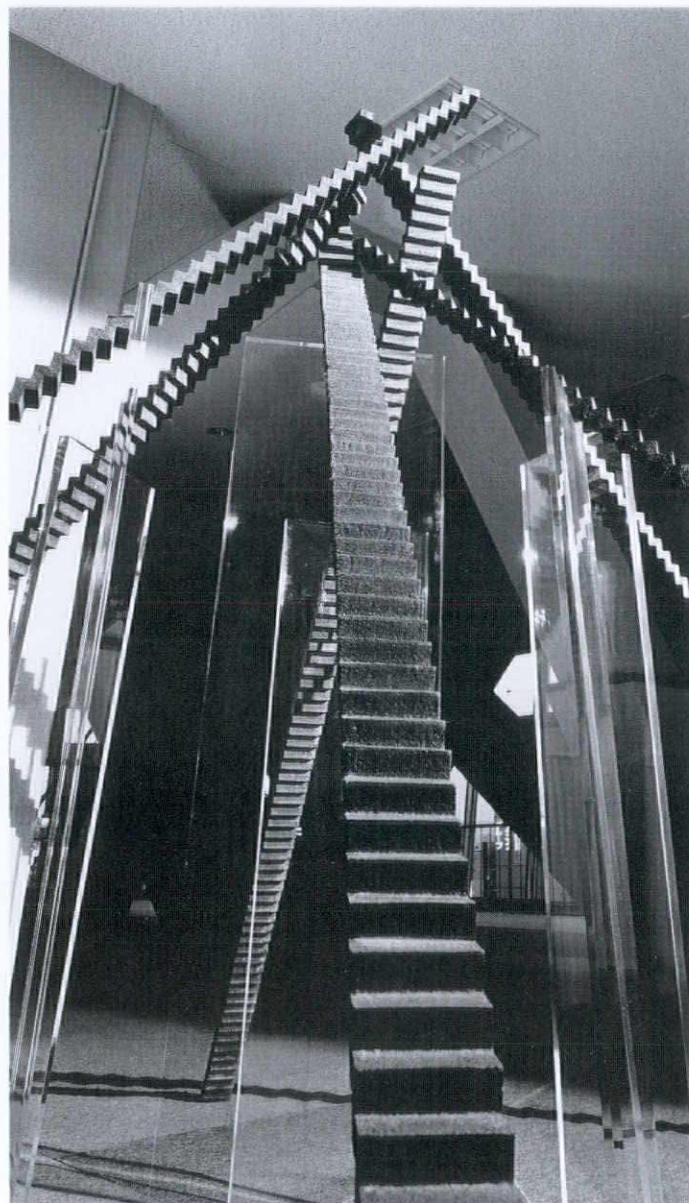
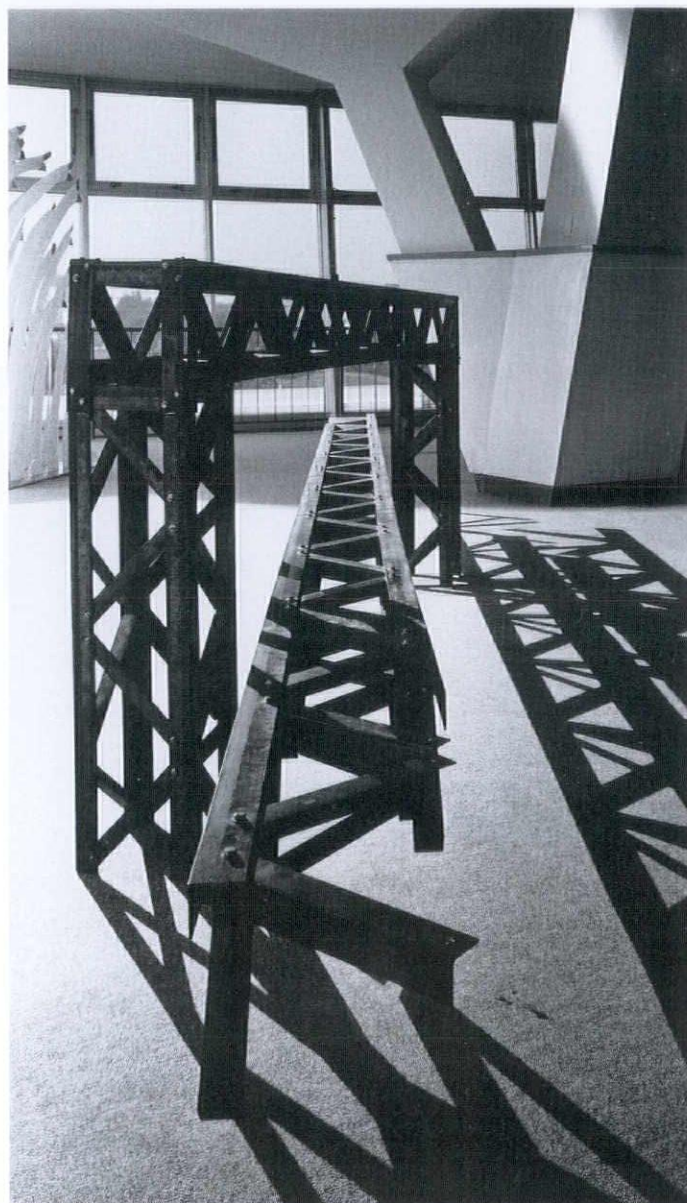
美術家

1934年 東京都生まれ
1980年 まがいのもの光景展、国立国際美術館
1985年 中華民国版画ビエンナーレ(台北)
1986年 個展、ミネアポリス美術デザイン大学
(U.S.A.)
1990年 芸術の相互作用展(フランス)

階段がそこにある。昇るも降りるもあ
なた次第。天上世界は幾千年も前から
の人間の希求するところ。のぼりつめ
たい。天国に行きたい。天国とは一体
どんなところ。如何せん誰一人として
天国から帰って来て天国物語を語って
くれない。天国、人間がつくりあげた
理想の世界。ユートピア。

階段がそこにある。昇ることしか考
えられなかった。地上世界は希望の持
てない暗鬱なものだった。一段一段は
明るい光に向った。一步一步踏みしめ
てたどりついた回廊から次の階段へ。
昇りつめたと思ったがまだ上があった。
ふと、顔を上げると天空が見えた。初
めて足元を見た。

階段がそこにある。昇ることを諦め
た。降りるは楽だ。楽しい足どりで、地
底世界の存在を信じこんだ。降りても
降りても限りが無かった。求めても求
めても理想の世界は見つからなかった。
人間いつかは土に帰る、と誰かがうそ
ぶいた。あらためて足元を見た。



植松美早

Misa Uematsu

祈りのタワー

造形作家

1941年 京都府生まれ
1988年 個展、大阪府立現代美術センター
1992年 企画展「抵抗する白」、ギャラリー無有
1993年 アートビエンナーレ京都展
1995年 個展「正と負の状況」、東京and gallery

長年、平面作家であった私ですが、絵の具を極力使わないで、どこまで表現できるかというテーマを持ち始めてから、次第にレリーフ状になり、立体へとその表現ジャンルを拡大する道を辿ることになってしまいました。平面作家という枠を外すことで得た自由な表現に感動を覚えて、制作を続けております。

会場の作品は、祈りの心を形にする。とどんな物かと自身に問い詰め、形象化した造形物が108個。これを通天閣内の階段を利用して、視覚上のタワーに造り上げました。より高いものに憧れ、高邁なものを目指す人間の業。その心が造り上げるタワーを象徴的に視覚化したものです。

製作過程において、絹という素材の持つ特性、動物蛋白質繊維というものの魅力——魔力に改めて気付くことになりました。高層建築物に使用される素材とは、およそ掛け離れた素材を選ぶことによって、何か新たな呈示になれば、望外の幸というものです。

中崎宣弘

Nobuhiro Nakazaki

人は木のようにでありたい

パブリックアート・デザイナー

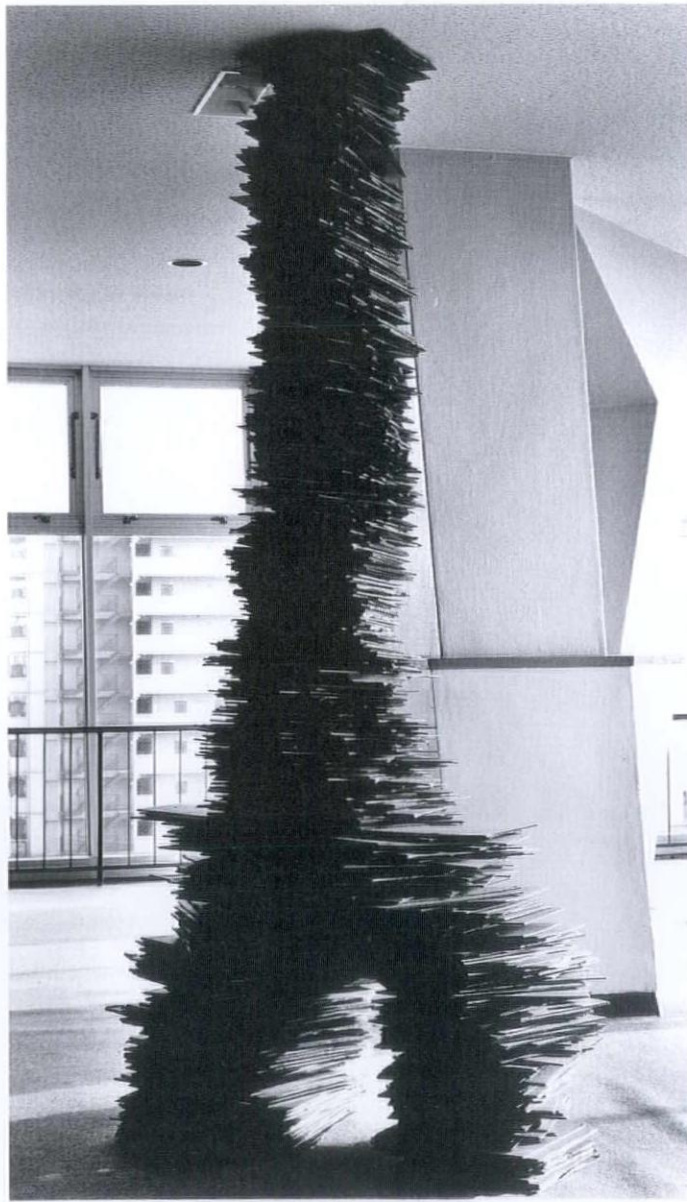
1952年 兵庫県生まれ
1977年 京都市立芸術大学造形学部洋画科卒業
サントリー株式会社
1989年 退社後、渡米
1991年 帰国/ノブ・デザイン設立

「人は木のようにでありたい」。

身近なところに、いつも見上げては話しかけられるような大きな木があればと思う。子供には特にそんな木を一本見つけてやりたいと思う。なぜだかはわからないけれど、人は木を見て育つ、と確信できるからだ。広い海も、遠くの大きな山も、夜のきらめく星も、きれいなせせらぎも、みんな必要なんだ。でも「あなりたい」と想えるのは、空に大きく両手を広げた一本の木の「姿」なのだ。

大きな木を見ていると、見ているだけではものたりなくなって、登ってみたいはならないか？怖いのをがまんしながら、枝をつたって、つたって最後にてっぺんの葉の繁みから顔をのぞかせれば、そこに広がっているのは、いつかどこかで見たような、実になつかしい宇宙空間だ。

木は、人の生きてゆく姿とゆくべき世界をそのまま具現化してくれているように思える。



橋本 清

Kiyoshi Hashimoto

斧

美術家

1932年 三重県生まれ

1987年 自選展、ABCギャラリー

1988年 「まほろ」日本生命光明池情報
センター竣工モニュメント

1993年 「真」小倉山三尊院（平安建都1200
年祭公募「京を創る」）

1994年 まほろ芸術研究所設立主宰

古来より天上界楽しく神の住む世界、人々は天上界に憧れた。天と地を結ぶ階段として御幣ができ、家々の門口に注連縄を飾るようになり、山の頂上に棒典を捧げ人々の幸せを願った。現代人も同じく高い所に上がってみるのは、幸せになりたい人の持つ願望ではないだろうか。混沌と多様かしこの時代、我々が今考えていなくてはならない問題として芭蕉が云った「不易流行」、鈴木大拙の「即非」、西田幾多郎先生の「絶対矛盾的自己同一」、禅の教えの中

に「下語」ということばがあり、質の違った物と物が一体になり普遍的な考えをしていかななくてはならないのではないのでしょうか。まさしく湯川博士が一番大事にした「止揚」質の違った物と物が一つになり新しい物が生まれ、それが働いていかなければならないでしょう。

自然環境より教えてもらい、バランスのとれた社会、世界を願ってこの斧を制作しました。



塔本賢一

Kenichi Tohmoto

犬のためのタワードッグ

美術家

1943年 熊本県生まれ
1991年 大阪国際版画トリエンナーレ
1993年 現代美術の視点、ABCギャラリー
1994年 見ること・触れること現代美術展、
枚方市民ギャラリー

都会の中の公園は心が休まる。そんな公園の、バラ園の横に私のビニール人形の作品はある。ビニール人形達は、昼休みに弁当を食べるサラリーマンや、ジョギングをする人々と楽しげにコミュニケーションしていた。私の作品に台座などない。そのまま自然に地面に腰を降ろしている。パブリックな空間の中でよくありがちな権威や芸術性を前面に出したような立体ではない。モチーフはたいてい私自身か、私の家族である。そして犬や鳥などの愛すべき隣人達である。一見だれにでも作れそうな素材の立体で、見る人と私の作品とは、お互い同じ目線で見ることになり、個人空間が、パブリックな空間の中で融合される性質を持っているのかも知れない。



高田有子

Yuko Takada

towards the light

造形作家

1958年 大阪府生まれ
1983年 京都市立芸術大学大学院美術研究科修了
1991年 「RESTLESS SHADOWS」
Japanese Fiber Art(イギリス)
1993年 「WAVES」 Japanese Fiber Art(カナダ)
1995年 「WHITE NIGHTS」 II International
Textile Exhibition (ロシア)

街の象徴である塔。
新世界にそびえる通天閣。
子供の頃、初めて訪れた時の鮮烈な記憶。
そのある種独特なにぎやかさと
労働者のにおい
初めて感じたにおい
その空気を大人になって感じなくなったのか。
歓楽街のにぎわいから塔空間へ入る時
異空間としてそのにぎわいを感じたい。
鉄とガラスに囲まれた直線的な空間に
人のあたたかさを感じたい。
外の「憩い」とはちがう意味で
内の「憩い」として塔空間を存在させたい。



中川周士

Shuji Nakagawa

初期値に対する鋭敏な依存性

造形作家

1968年 京都府生まれ

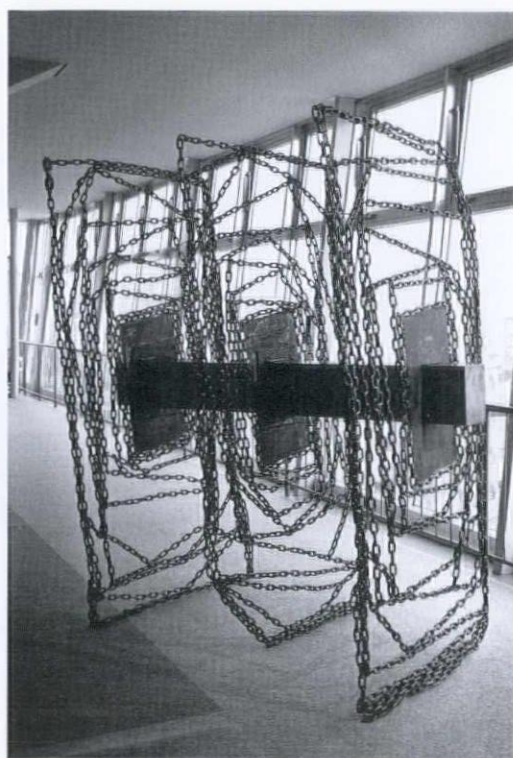
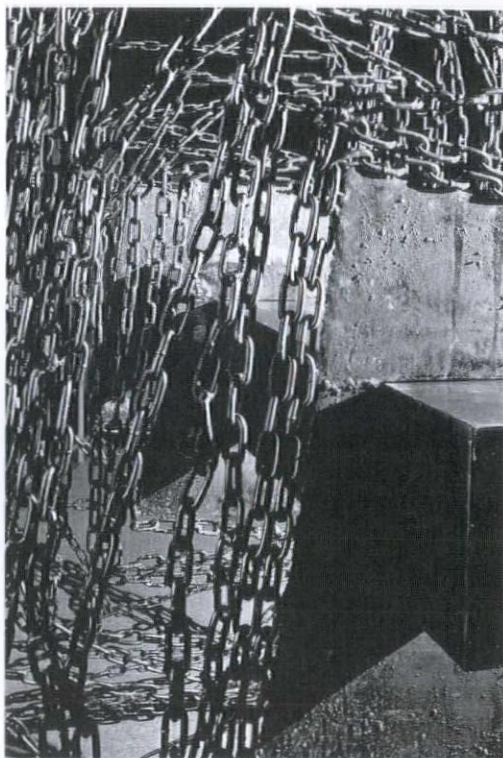
1992年 京都精華大学美術学部立体造形学科
卒業／しのぼろオブジェフェスティバル

1994年 個展、ギャラリーすずき

1995年 京展

京都に住む私は、今まで通天閣についてほとんど何も知らなかった。今回初めて実際に見て、その街を歩き、ここはすべてが通天閣より始まり、通天閣があるということがそこに生活する人々に大きく影響を及ぼしているのだということを感じた。その自覚された、あるいは無自覚なままの影響の積み重なりがある種の傾向を示し、土着した街らしさや文化を生みだしているのだということを私は痛感した。

そのことがカオス的性格としての「初期値に対する鋭敏な依存性」という今まで認識しただけの観念を私に実感をもたせた知覚的観念として見せつけたのである。この通天閣との出会いにより起こった認識と知覚の一致が今回の作品制作の動機であり、主旨となりうるものだ。



石原 薫

Kaoru Ishihara

立体と平面のあいだに

造形デザイナー

1943年 大阪府生まれ

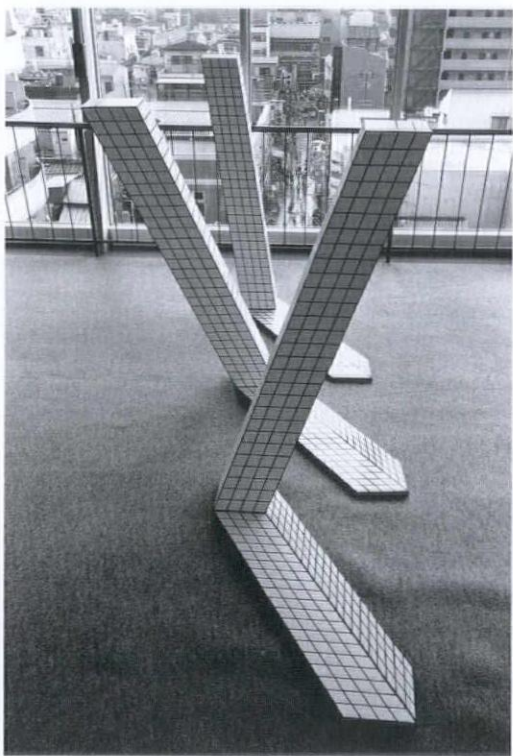
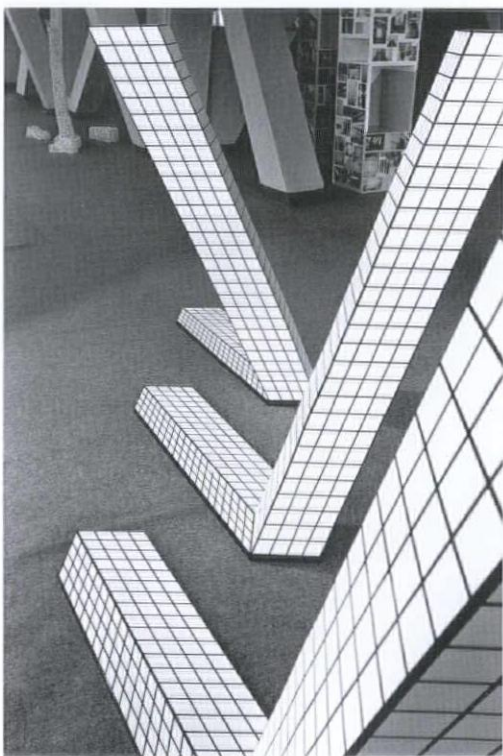
1984年 神戸須磨離宮公園現代彫刻展

1990年 「SUPER RING CIRCUS」 個展

1993年 「RIGHTING ART」 個展

例えば水平面に30度、垂直面に60度傾いている長さ l 、半径 m の線を考えてみる。実形は立体の中で簡単に在るが平面に描くと少しやっかいで言葉にすると初めの如くになり、うかつに聞いていると解けの解らない事になる。長く私たちは紙で、つまり平面で考え、伝え記録してきたので今のところモニターも平面なのかもしれない。しかし実形（立体）と紙に書かれた（平面）のあいだにはとてつもないものが在って、そこでは組み替え、ずれ、ゆらぎ、偶然が起こっているようだ。

「この天と地のあいだにはな、ホレーシオ、哲学などの思いもよらぬことがあるのだ」（シェークスピア「ハムレット」小田島雄志訳）天と地のあいだに塔をつくりこわれるように、立体と平面のあいだをつくりこわしている。



ウエダリクオ

Rikuo Ueda

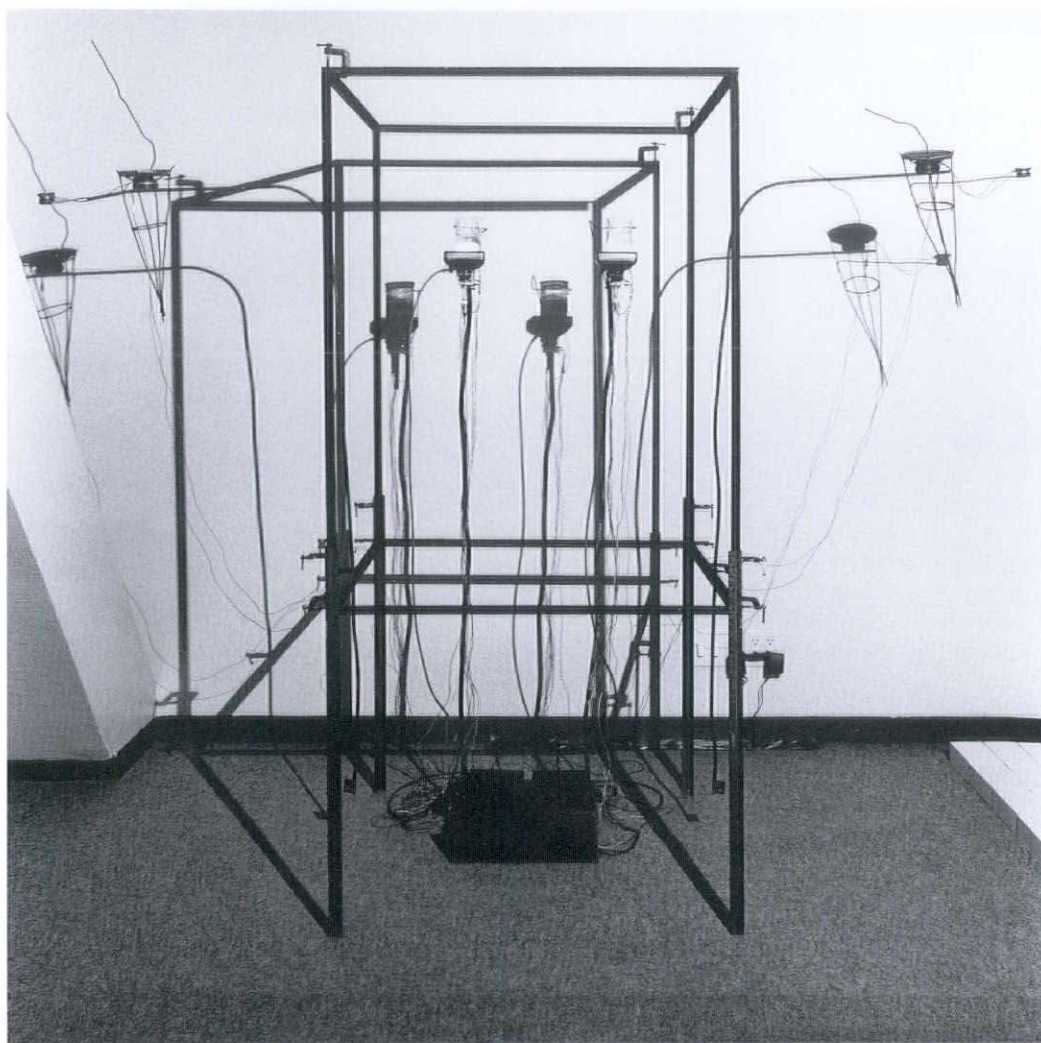
work

造形作家

1950年 大阪府生まれ
1987年 「AIR WING」パフォーマンス、天王寺博覧会
1991年 「PASSION and SILENCE」マレーシア国立美術館（マレーシア）
1994年 異類異形展、熊本美術館
「ADENARABIE」、ABCギャラリー
1995年 「風の無い日」、ABCギャラリー

あたりまえの事やいつも見ている物が、とても不思議であったり美しかったりする時があります。そのようなときに作品となります。私にとって最も分からないのは、私であり世界です。気の遠くなるような関係性です。一番単純な事が一番複雑に思えます。たぶん複雑にして楽しんでいるのでしょうか、度が過ると見えなくなります。

私の作品作りは、作ると言うよりは見つける行為のように思われます。材料は、廃材や廃品、番線、コンクリート、水、砂。最近はこちらにブラウン管が加わり、映像は満月であったり環状線の車窓や言葉などです。それらが作品となるときは色々な物が組み合わせられ構成をし、造形が試みられますが、結局はすべて取り払われ、残ったものは最小限に手を加えられた物となってしまいます。そしてそれを見せるのではなくその回りの空間を認識するための装置と考えている自分を、日本的だと感じることがあります。



林 宣子

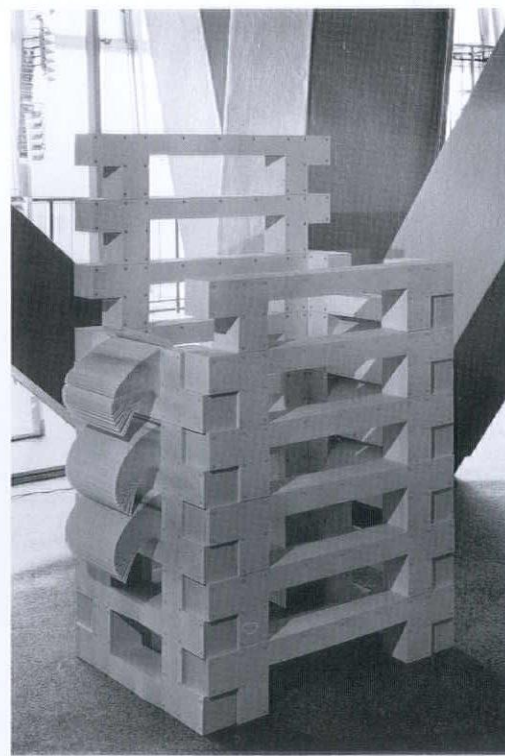
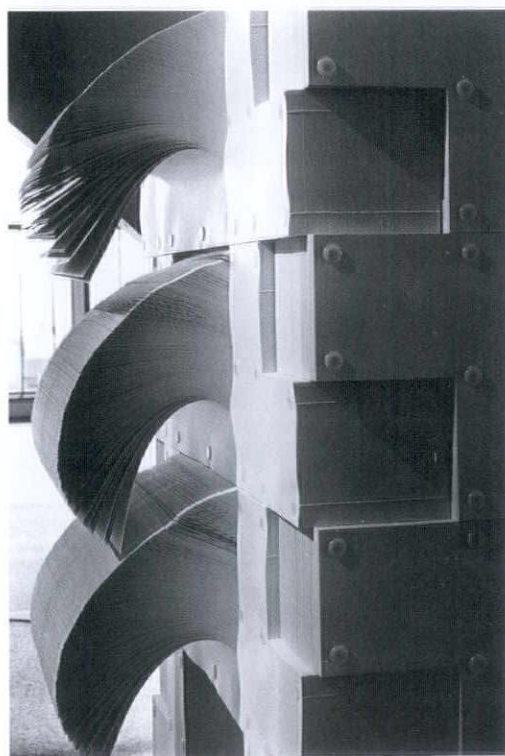
Yoshiko Hayashi

塔は下から組め

造形作家

1954年 兵庫県生まれ
1974年 夙川学院短期大学美術科立体造形コース卒業
1989年 毎日現代美術展
1990年 文化庁現代美術選抜展
1993年 丹南アートフェスティバル

- ・犬も歩けば塔にあたる
- ・ねずみがいる塔は栄える
- ・ひとつ塔のむじな
- ・猿も塔から落ちる
- ・ひょうたんから塔が出る
- ・塔をつついてへびを出す
- ・塔は下から組め



太田直樹

Naoki Ohta

植物風の塔 NO.2

彫刻家

1962年 大阪府生まれ
1988年 多摩美術大学彫刻科卒業
1990年 「For Use」展、西武スタジオ5
1992年 二人展、大和ギャラリー
1994年 公募彫刻展in 能生

展覧会まで一ヶ月程になっても作っては壊しの繰り返しが続いた。

如何に美しい彫刻としての塔が作れるか、だけを考えて制作した。

「タワーアートin 通天閣」に出展する「植物風の塔」は、現代で忘れられたような原始のパワーやフォルムを何処まで追究できるか、見たことのない自分の表現とは如何なるものかを試みた塔である。



原田 要

Kaname Harada

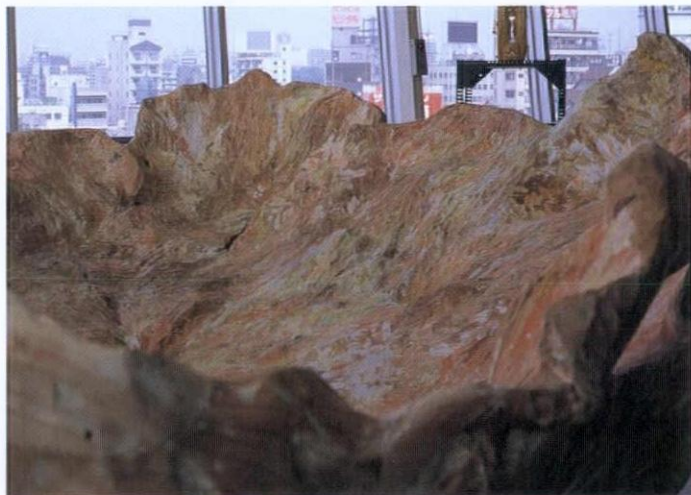
吐花壺——天上の庭

彫刻家

1961年 大阪府生まれ
1988年 大阪教育大学大学院修了
1992年 個展、ギャラリー白
1994年 美術のペクトルと教育展、大阪教育大学
1995年 天理ビエンナーレ、天王寺美術館

塔の意志とは何か。それはより高みへと人を導くもの、天の神へと近付こうとするものであろう。例えば、物理的に天に接近しようとするものであったり、また絶大なる権力を誇示することで自らの存在自身を神にしようとするものであったり。ならばより高く鋭く天に向けて上昇するものだけでなく、神の住まう場所を再現しようとする行為も、同時に塔のエッセンスに通じるものがある。

ところで、私は現在奈良に住んでいるが、この盆地が実に良い。穏やかな気候に育まれた盆地。やまと——山間地であり、山に抱かれた盆地の母性的な空間はまさに「優しうるはし」である。元来全てのものに神を感じるアニミズムの宗教観を持つ日本人にとって、特に神聖なる山々に囲まれている盆地は、神と共に住まうには絶好の土地であろう。この神に抱かれる感覚を再現すること。特に今回はそれを少し高みに上げて、天上の庭となすこと。これが今回の私のテーマである。



永井清一郎

Seiichiro Nagai

0への願望

立体造形作家

1936年 大阪府生まれ

1961年 京都大学工学部卒業

1984年 個展、ギャラリー白

1989年 個展、信濃橋画廊

1992年 個展、ギャラリークオーレ

藁とかかわって、もう20年近くになる。藁との出発点では、町育ちの小生にはない古里を求めてそこへ行ったが、やはり自分の古里ではないと感じ、いろいろなものを使って、いろいろなことをしてきた。そしてある時、多くの生命が物質と化した死体を見てきたことを思い出し、自分自身の生死も、もう少し物質的に考えられないものかと、一度生を失った藁に思いをかけるようになった。そして今過去の古里を求めるセンチメンタルではなく、新しい科

学の中の新たなセンチメンタル（例えば自分の子の心臓が、移植され、どこかで生きていく喜び）を作りたいと思っている。

これから私たちは今まで作ってきた負の資産を、共同負担してゆかねばならない時代の中で、与える優しさではなく、自分自身の持っている優しさの量が問題ではないかと考えている。小生自身のこの量の少なさをすこしでも多くするよう努力してゆきます。



見える塔、見えない塔

——「タワーアート in 通天閣：ヴァナキュラーな電腦都市」の提起するもの

鴻 英良

ジャン・ボードリヤールは『象徴交換と死』のなかで、ニューヨークの世界貿易センターにはなぜ二つの塔があるのだろうかといひ掛けている。ニューヨークのマンハッタンの摩天楼はいわば背の高さを競うように建てられており、上昇しようとしてひしめいている。この一群のビルはニューヨークの活力をよく表していた。だが、世界貿易センターの二つの塔は、こうした競争に終止符を打つかのように、並んで建てられたのである。同じ高さのものが二つあるということは、バランスを内側から打ち破りさらに上へと向かおうとする意思を根底からなし崩しにしていくなのだ。だからそれらのビルは、摩天楼からやや離れたところに、摩天楼を無視するかのように建てられていたのである。それはただお互いを映し出すかのように建っているだけであり、もはやどんな競争も無意味であるということを示そうとしているかのようだ。

「この二つの塔は、たしかに高いとはいえ、雲をついてそびえたつこと自体に意味を見いだしてはいない。……こうした双生児の性格のもつ価値はもはや相手を乗り越える価値ではない。それは……モデルと置き換えの戦略が、今後の歴史においては、競争という伝統的戦略に打ち勝つだろうということを意味しているに過ぎない」(ジャン・ボードリヤール著『象徴交換と死』、今村仁司、塚原史訳、ちくま学芸文庫)

塔についての展示会の話を聞いたとき、ぼくが最初に思い浮かべたのは、ジャン・ボードリヤールのこの言葉だった。いうまでもなく、ここでは塔はなにがしかのものの不毛性を言及するためにもちだされてきているのであり、塔の本質とでもいふべき競争的な上昇運動がわれわれの文化のなかでは終焉を向かえているということが示唆されているのである。いや、それ以上に、現代文明のなかで、

塔に意味があるなどと考えているものはいまや希少価値をもつとしかいえないということにわれわれは気づいているはずだ。そして、塔の男根中心主義的な特性を思えば、フェミニズム的、ポスト植民地主義的な世界観が優勢なわれわれの文化戦略のなかで塔に与みするのは分が悪いとしかいいようがないのである。

こうした状況のなかでタワーアート展を開催するということは、ある種の不可能性とかかわるということである。つまり、さまざまな塔の魅力に思いを馳せ、そこにもうひとつの塔のバリエーションをつけ加えるというような牧歌的な快楽に酔うというようなことははじめから禁止されているのである。各アーティストたちはそのような場所でのタワーアートの制作を呼び掛けられているわけであり、それゆえ、塔に対してどのような批評的なアプローチをとるかが問われているのである。

しかし、中心のシンボリズムとしての塔の理念の無効性を宣告するにしても、あるいは男根中心主義的なものの建築的な表象としての塔を断罪するにしても、つまり、そうした塔のネガティブな側面からひとまずは出発しなければならないとしても、われわれは、同時にまた、塔をわれわれの文化の外に完全に追放することができるなど考えることができる。塔は文化のさまざまな位相のなかで、ときおり、きわめて重要なヴィジョンとしてわれわれのまえに現れるからだ。たとえば、ミシェル・フーコーは『監獄の誕生——監視と処罰』のなかで、現代社会を「監視の社会」と規定しているが、そうした監視システムのなかできわめて中心的な場所に浮上してくるのが「監視塔」であるというフーコーの指摘をここで思い出すのは無意味ではないだろう。「われわれがそう思うよりもはるかに、われわ

れはギリシヤ的ではない。われわれの居場所は、円形劇場の階段座席でも舞台の上でもなく、一望監視の仕掛けのなかであり、しかもわれわれがその歯車の一つであるがゆえに、われわれ自身が導くその仕掛けの権力効果によって、われわれは攻囲されたままである」(田村俣訳)とフーコーは書いている。つまり、フーコーによれば、塔は監視塔として、近代文化の中心に存在しているということになるのである。

しかし、今回の企画で目論まれているのは、こうしたことを複合的にとらえつつ、もっと複雑な事態のなかで塔について考えようということだ。今回の企画「タワーアート in 通天閣」のキャッチフレーズ「ヴァナキュラーな電腦都市」はそうしたことへアーティストたちの視線を向けるために提示されていたと考えるべきであろう。そのことで、この企画は塔に対する新たな視点を提供しているのだと思う。「ヴァナキュラー(土着的)」という言葉と「電腦都市」という言葉は、一方はアルカイックなものであり、もう一方は近未来的なものであるという具合に、ほとんど両極端に位置する概念なわけだが、ここでは、そのように、いわばアルカイズムと未来主義とを結びつけるものとして塔が構想されているのだ。この理念は、しかし、はじめはそれほど深い意味をもっているとは思えなかった。なぜなら、この展示がなされる通天閣の建っている場所が、大阪でも近代化から取り残された、「新世界」という、それこそヴァナキュラーな匂いのする場所であり、そこで塔をめぐる新たな芸術を構想しようというのだから、この展覧会では、そもそものはじめからアルカイズムと未来主義が出会わなければならないからである。

しかし、このキャッチフレーズは、現代文化の本質的なところへ塔を持ち込むことにな

ったのである。実は、われわれはアルカイズムと未来主義が結合する場としての塔という、そのようなモデルを歴史の転換点においてもっていたのである。それは、ウラジーミル・タトリンがロシア革命の直後に構想した「第三インターナショナルのための記念塔」(1919-20)と呼ばれるものだ。これは、回転する建築物を内包したスパイラル状の塔で、高さはエッフェル塔をはるかに凌ぐはずであった。第一層は立方体に作られ、一年に一回転し、その建物には立法府が置かれる。第二層はピラミッド状で、ひと月に一回転し、行政部門が置かれ、第三層はシリンダー状で、一日に一回転、そしてそこは情報センターになるというような設計がなされていた。つまり、建物の最高位を情報センターが占めるという点で、この塔は後の情報社会の出現を予告していたわけだが、そもそもこの塔は共産主義社会の新たな生産関係を構造的に象徴するものとして構想されていたのであった。だが、こうした塔のなかで、その建物が、太陽、月、地球と天体の運行に合わせて回転するように設計されている、つまり、宇宙的なリズム、ある種のアルカイズムが未来社会のモデルに同居しているのである。ジル・ドゥルーズ／フェリックス・ガタリは、その共著『カフカ——マイナー文学のために』のなかでこの塔について触れ、「偏執病的なアヴァンギャルド、最も現代的な機能主義が、最もアルカイックな、あるいは伝説的なかたちを、多かれ少なかれ意図的に再活動させたように見える」(宇波彰+岩田一行訳)と書き、未来主義がアルカイズムを否定なく引き起こしてしまう逆説としてこの塔について触れている。

そして、この企画展が問題にしているのも、こうした逆説のなかでしか塔については今や語れないのではないかという視点である。つまり、そのような否定性と肯定性が二重螺旋

のように入り組んだ存在としての塔をも視野に入れた塔に対する批評的なアプローチをするように出展アーティストたちに呼び掛けているのである。[そのような視点は、たとえば、空中庭園の展望台で人気を呼んでいる原広司の「梅田スカイビル」の地下になぜレトロの感覚の路地が埋め込まれているのかといったことをも問題化するであろう。]

さて、このような目論見のもとに企画された今回の展覧会の成果について、その展示の特徴について、一つだけ指摘しておくことにしよう。だれもが気づくことと思うが、多くの作品がその塔のなかにビデオ・モニターを内蔵していたというのがこの展覧会の目立った特徴だった。作品に近づいていくと、作品の一角にビデオ・モニターが仕込まれていて、そのモニターを覗き込むと、たいていの場合、覗き込んだわれわれ自身の姿が映し出されている。どこにカメラがあるのか後ろを振り向きながら、カメラを捜し出そうとするのが、この展覧会を訪れたものの共通した身振りであったが、しかし、多くの場合、そのカメラがどこにあるのかは容易にはわからないのであった。カメラはむき出しになっているものもあったが、ほかの作品のなかに隠されている場合もあって、どこから映されているのか、最後までわからない場合すらあるのである。つまり、カメラは作品の外に、場合によっては、他人の作品のなかに仕込まれているのである。作品はそれぞれのアーティストが作っているのだけれども、このカメラとビデオ・モニターはそうした個々人の作品制作の作業を越えて、ある種のネットワークを構成している。このネットワークが監視システムのネットワークであることはいまさら指摘するまでもないだろう。作品は個々の作家の個別的な作業の結果生み出されたものであるのに、それら相互の作品を結びつける

ためのビデオ映像のネットワークが会場で構成されているのである。どうやら、この会場でアーティストたちは、監視システムのネットワークを作るための協力体制を一時にして作り出してしまったらしいのである。つまり、この展示会は、監視システムをつくるための共同プロジェクトと化していたのである。これがどこまで自覚的にやられたのかはわからないが、現代文化のなかで塔にアプローチしようとしたとき、そのプロジェクトのなかで監視システムのネットワークをつくってしまったというのはあまりにもアイロニカルと言わざるをえないように思える。そして、ほくはこのアイロニーを高く評価したいのである。

ミシェル・パートメンが『トランスミッション・タワー』のなかで書いていることだが、現代社会は、重要な要素が「見えない」社会なのだ。たとえば、メディアがわれわれの生活の中心にあるとしても、電波は目に「見えない」。そうした見えないものによってわれわれの生活は規定されているのだということを警告しているかのように、目に見えるかたちで「電波塔」が建っているのだとパートメンは書いている。だとしたら、塔の新たなヴィジョンを構想しようとしたとき、そのなかにビデオによる監視システムのネットワークを組み入れ、展覧会の会場を構成したアーティストたちは現代社会のなかの「見えざる」塔の姿をよく表現していたといえるのではないだろうか。このようにわれわれの社会の特質を露呈させようとした「タワー・アート in 通天閣」のアーティストたちの共同プロジェクトは、その意味で、塔に対する新たな今日的な視点をよく提示していたように思う。

●おおとり・ひでなが／演劇批評家

細田みぎわ

Migiwa Hosoda

記憶のタワー

Memorial Cards

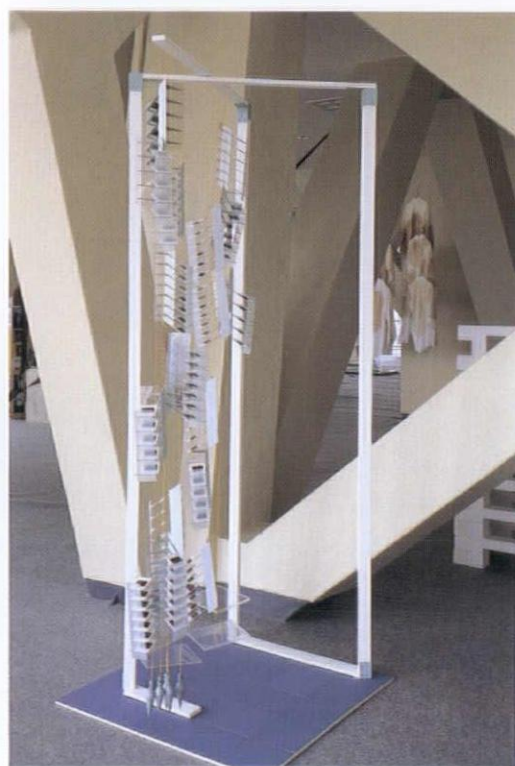
建築家

1958年 大阪府生まれ
1982年 大阪府立大学生活科学部住居学科卒業
安藤忠雄建築研究所
1987年 戸田潤也建築設計工房
1994年 細田みぎわArchi-Studio設立
1995年 大阪芸術大学デザイン学科非常勤講師

[記憶:V]でできているタワーは、
[実体:R]の抜殻となった街に存在する。

Rは脱皮し、姿を消した。
と同時に現れたのは、無意識のうちに
堆積していたVである。
Rが刻む時間のスパンとは異なる、遭遇
する出来事が刻む時間のスパン——そ
の不均衡なVを等しく並べ変え、タワ
ーをつくる。

* R → V
real → virtual
routine → variant
rough → vague
run → vanish
reason → voice
...



丸谷勝也

Katsuya Marutani

INDUCING

建築家

1960年 大阪府生まれ
1983年 京都府立大学生活科学部住居意匠学
専攻卒業/貴志雅樹+環境企画室
1990年 ARC UNIT STUDIO設立
1992年 京都府立大学非常勤講師
1993年 平安女学院短期大学非常勤講師
建築アンデパンダン展

「塔(tower)」は有史以来、人々の「夢」
や「希望」の象徴として立ち続けてきた。

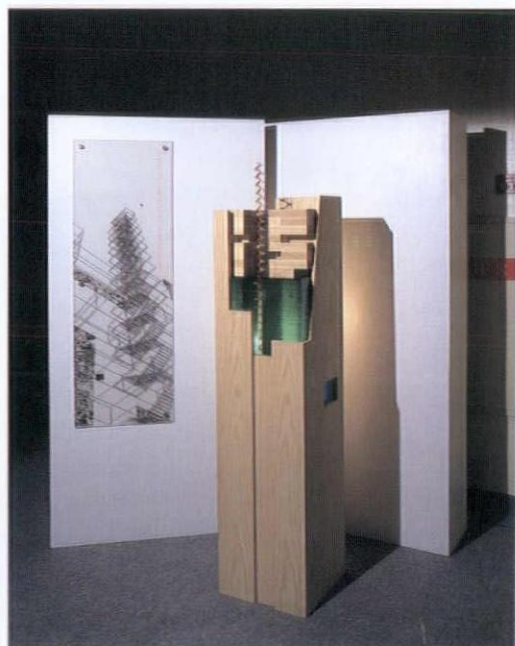
現在でも人々は天を突きそびえ立つ「塔
状の構築物」に思いを託しているに違
いない。

しかし私たちは、阪神間を突如襲った
大自然の脅威に「成長」「発展」という
近代概念がどれだけ脆弱であったかとい
うことをまざまざと見せつけられた。

私たちは、今まで信じ続けてきたこ
の「一方向の価値観」を見直し、「新た
な「希望」がどこにあるのか?」「違う
「夢」の見方とはどんなものなのか?」
を本当に見つけたいといけなのでは
ないだろうか。

あなたが、「居たい」ところを——見つ
けないと——。

SD9510
74



吉村史郎

Shirou Yoshimura

だれかが私をよんでいる

建築家

1947年 奈良県生まれ
1971年 大阪工業大学建築学科卒業
コンコード建築設計事務所
1974-81年 AZ環境計画研究所
1982-86年 Architectural Association
School of Architecture 卒業
(イギリス)
1992年 SQUARE Architects and Associ-
ates 設立

混沌たる情報社会に生活する現代人、
ともすると情報におどられ、自己を
見失ってしまう。

そんな中、空中高く孤独に漂うする
「塔」。一步、一步、昇るにつれて「塔」
のなかに自己をおき、遠い祖先からの
魂の叫び声に目覚めていく。

人間本来の姿とは何なのか？

人類の足跡を過去へと辿るとき、「塔」
は生命体としての自己を再発見する動
機を提案する。

「あー！ だれかが私をよんでい
る！」……DNAの記憶



原田 明

Akira Harada

G.B.タワー (Glass Beam)

インテリア・プランナー

1957年 兵庫県生まれ

1984年 河原デザインスクール修了

1987年 コックピットデザインチーム設立

ここ大阪、浪速区にそびえ建つ通天閣。

21世紀のタワーをイメージする時、この天王寺周辺は大阪で唯一昔ながらの下町風情を色濃く残している地域でもあり、路面電車、商店街、民家等昔ながらの生活の匂いがする街でもある。

その中心にこのタワーが突然現れる事により、一見不釣り合いに感じられるタワーがインパクトを与え、人々と街の新たなコミュニケーションが出来る場としてこのタワーをイメージしました。

末松利紀

Toshinori Suematsu

fu (rni) ture

建築家

1963年 福岡県生まれ

1986年 大阪芸術大学卒業

吉田保夫建築研究所

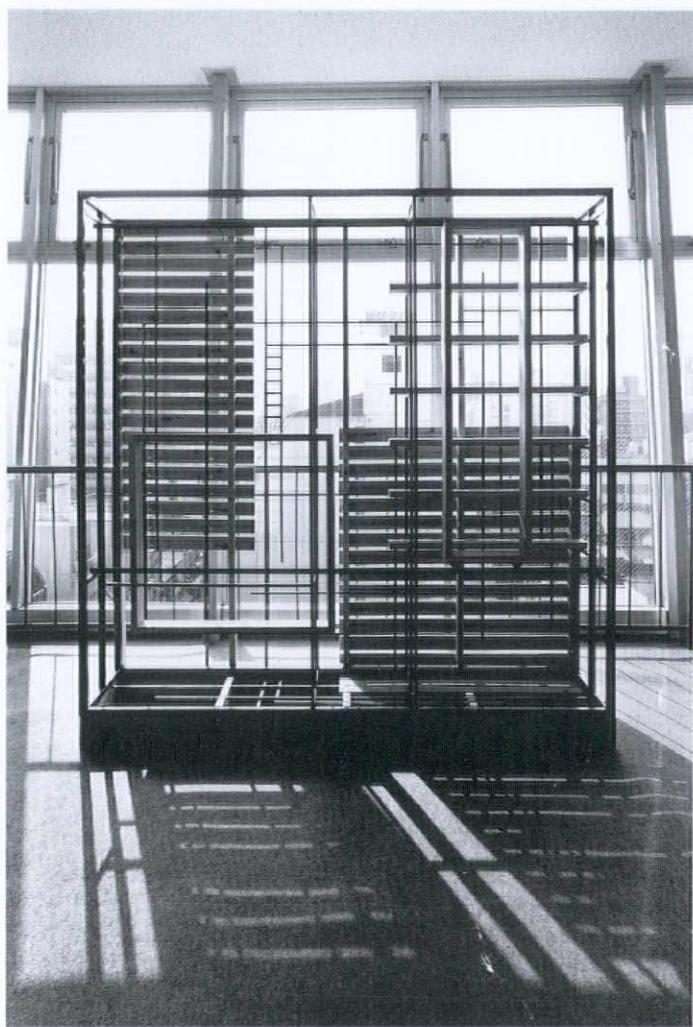
1989年 末松利紀建築研究所設立

1994年 京都精華大学非常勤講師

1995年 大阪総合デザイン専門学校非常勤講師

輝ける未来のシンボルとしての塔は、巨大な影が傾くアクリル色の街の灯の中に沈み、親しみある趣きは消えつつある。明日吹く風に流される事があったとしても、柔らかな時の流れと安堵感を与えて欲しいと思う。

この地が刻んでいる時の強度は、脳裏に焼きつけられ、常に私を引っ張り続けている。建築に関わり日々を送っている私のフィルターを通し、日常、実際に使用できる物として、この手で1/1の塔を構築し、物としての意味のみを内在させる事なく、その強度を鉄・木・ガラス・光・影などに転換し、私自身へのフィードバックを試みる。その時、想い描く建築とのコンタクトが可能になったとすれば、人・物・空間それぞれの距離は著しく近くなるのだが。



吉井歳晴

Toshiharu Yoshii

塔の家——family talking

建築家

1957年 大阪府生まれ
1979年 大阪工業技術専門学校卒業
北村陸夫+ZOOM計画工房
1984年 吉村篤一/建築環境研究所
1987年 吉井歳晴設計室設立
1989年 WIZ ARCHITECTSに改称

「おはよう！いまからそっちへいくよ」

「きのうはどこで会ったっけ？」

「たまには4人で食事をしようよ」

[11014-88]

「お姉ちゃんの玄関に

忘れてきたみたい」

「どこで集まる？」

「あっ、おとうさん

プールにきているの？」

「夜中にうろうろしてたの

あなただったの？」

パスワード T19-A3KA3

「ここでもいいよね」

「お母さん見かけたよ」

「きのうどこで寝てたのよ」

[084] [141064]

「おとうとと食べよ」

「今朝上の庭ですれ違ったね」

「あっ姉ちゃんだ」

「ひとりになりにくい」

「どこで本読もうかな？」

パスワード R19-15E9

「元気？うまくやってる？」

「しばらくだね お母さん」

「お姉ちゃんだけ降りてこないね」

「夕食一緒に作ろう」

「帰りに寄るよ」

「これは4人で決めよう 集合！」

[5151-103]

「お母さんどこかでたまにはしようよ」

[4949]

「また降りて行ったよ弟」

「いっしょにお風呂入らない？」

「ここの結構くつろぐね」

[0848]

・

・

・

戸田潤也

Junya Toda

空虚の塔

建築家

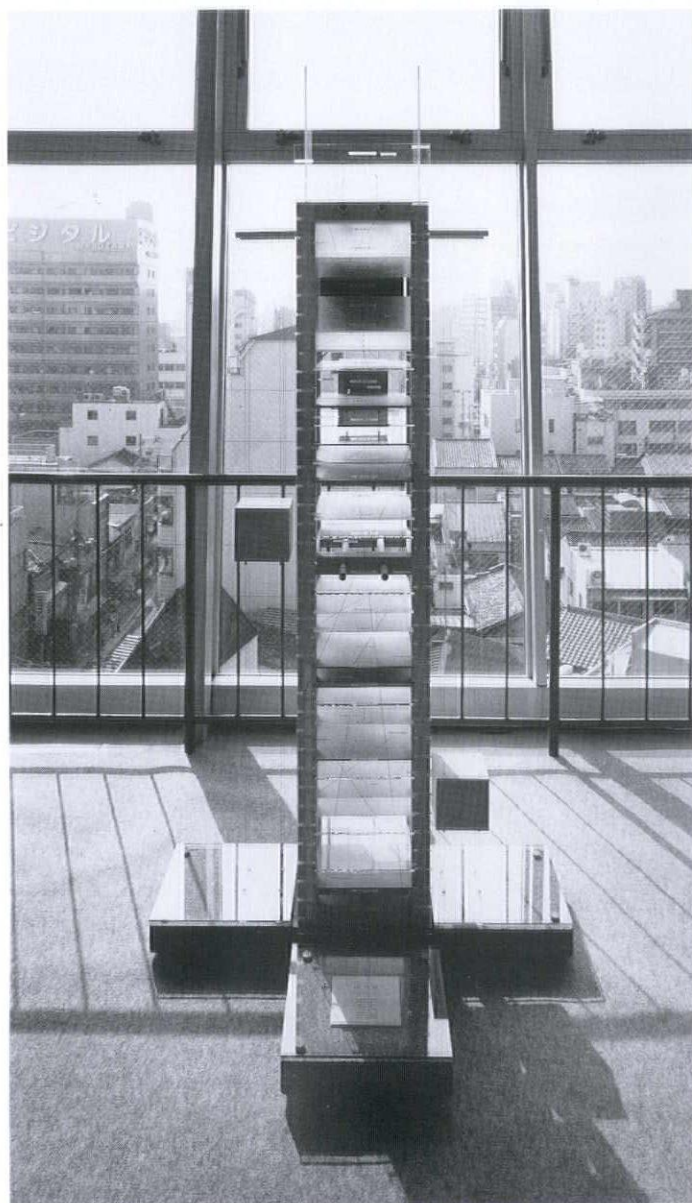
1956年 新潟県生まれ
1982年 京都大学大学院修士課程修了
安藤忠雄建築研究所
1987年 戸田潤也建築設計工房設立
1991年 京都精華大学非常勤講師
1995年 木の建築と都市展、国立国際美術館

かつて塔は、ひたすら見上げられる客
体、もしくは見下ろす主体として、つ
まりは一方的な眼差しを強制するも
のとして存在した。

しかし、都市に林立する高層ビル群
の複数化する力は、それが備えていた
単一性と超越性を奪い取っていった。

塔がそれでも今日、存在可能である
としたら、それは、複数性や眼差しの
双方向性によって始まる空虚を逆に自
身に、内在させることにおいてであろ
うか。

ビルを構成する床が、舞い上がり、
堆積して、大地へと連なる。空虚と化
した塔が、都市的スケールで連鎖して
ゆく……。



小山隆治

Ryuji Koyama

id-tower-its an example

建築家

1963年 兵庫県生まれ
1981年 豊岡実業高等学校卒業
1986年 無有建築工房
1992年 小山隆治建築研究所設立

人の持つ本能的衝動として解いてみた。

——ミタイ	——穴
ミセタイ	像
サガシタイ	写
モチタイ	比較
アンシンシタ	距離
etc.	他



橋本 完

Hiroshi Hashimoto

現代の夢殿

建築家

1962年 大阪府生まれ
1987年 多摩美術大学建築科卒業
大阪大学環境工学科研究生
1992年 「BEING AS URBAN GAP」、Pratt
Institute
1993年 上田篤都市建築研究所
1994年 まほう空間計画研究所代表

夢殿は、日本国の基盤を創建した聖徳太子を祭る八角円堂である。それと同じく通天閣の頂に乗る展望台も八角の平面形を持ち、逆八角錐で2層の展望フロアには、ビリケン神像が安置されている。その足元には北東、北西方向に延びる2本の通りが南北に走る新世界の街割りを斜に横切る。その端に立って通天閣を見上げればそのオーバーハングしている八角錐はますますダイヤモンドの様に際だってみえる。

本来、八角円堂は故人を供養するために建てられた小仏堂であり、古代では正八角を以て円となみし中心を持つ四方相称の記念碑的な形式として特別な場所に採用されてきた。

そこで、今回のプロジェクトにおいて、「現代の夢殿」とはどうあるべきかを新世界周辺を含めた場所性と、関西復興又は21世紀のシンボルとなる記念塔となるのかを再志向して、制作を行ったものである。



楠本菊實

Kikumi Kusumoto

イエ・イエ・イエーイ

建築家

1950年 山口県生まれ

1975年 大阪工業大学短大部建築学科卒業

1975-78、81-83年 石井修/美建築設計事務所

1983年 Ks ARCHITECTS共同開設

1986年 楠本菊實+Ks ARCHITECTSと改称
芦屋芸術情報専門学校非常勤講師

このエキシビションを見る前に展望台に昇ってミナミからキタあたりを眺めて下さい。ガラスのフィルターを通して見える箱（建築）の羅列の鳥瞰は、テーマをぶっ飛ばすリアルとアンリアルです。そこから左に遠く、震災により破壊された阪神間が見えます。もっともリアルです。リアルの方がはるか先へ行ってしまいう結果が出ました。

「建築家にできる事?」「建築家って何や?」とみんなが自分に問いかけている状況の中で、僕はリアリズムに立って「普通のイエ（建築）」という今さらながらのプロジェクト達を、後退しながらも進行させていくという社会性に対する方法を取ろうとしています。リアル・プロジェクトはインフォメーションとコミュニケーションによってのみ成立します。メッセージと個人のシリアスな問題を包含して……。



中村勇大

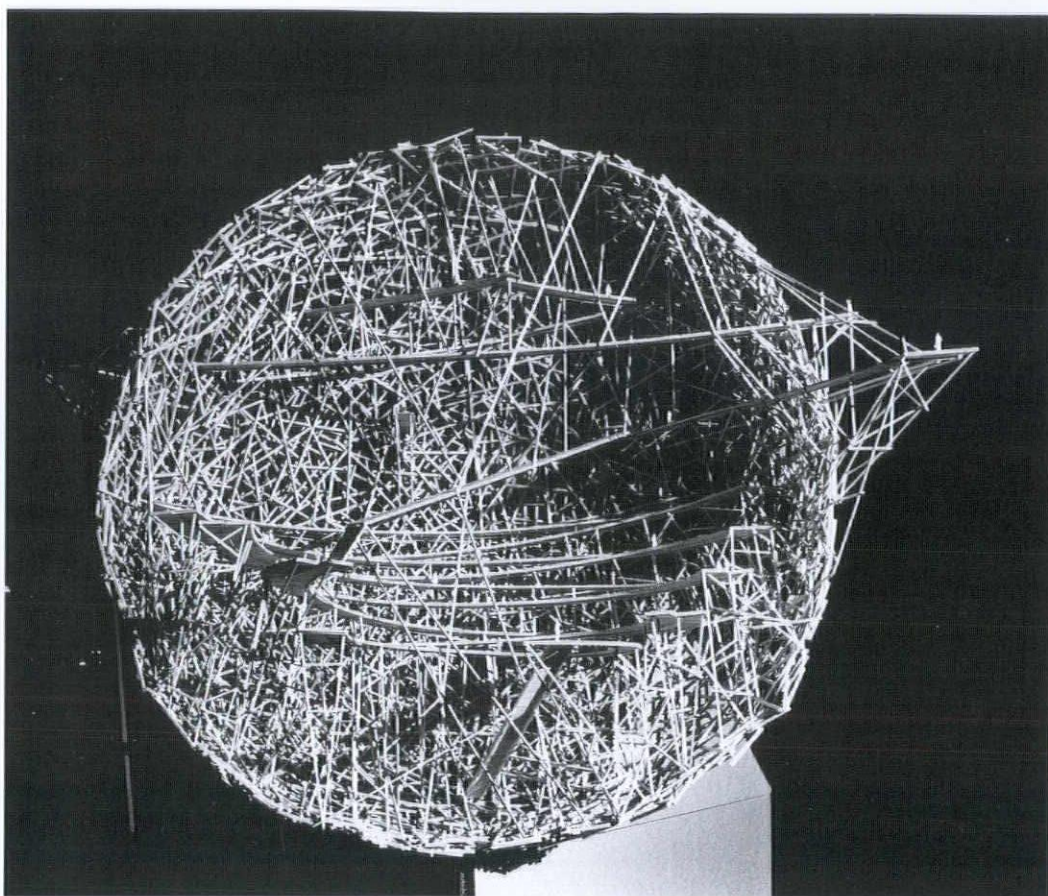
Isamu Nakamura

— ~ +

建築家

1959年 京都府生まれ
1988年 北村隆夫+ズーム計画工房
1990年 中村勇大アトリエ設立
1993年 京都芸術短期大学専任講師

空間のなかで直立している人間の姿勢に対し自然に与えられている方向性には、互いに対になって並べられた「上と下」「前と後」「右と左」の六つの種類がある。この内的文節に関するもっとも単純な原理として、垂直軸と水平軸が共同で人間の具体的な空間を単純な図式で構成している。ここではこの図式を緩やかに変化すべく垂直軸の傾きと、水平面の消去によってもたらされるゆらぎ。すなわち新たな地平とパースペクティブの発見を試みるスタディである。



中井清志

Kiyoshi Nakai

左手の夢

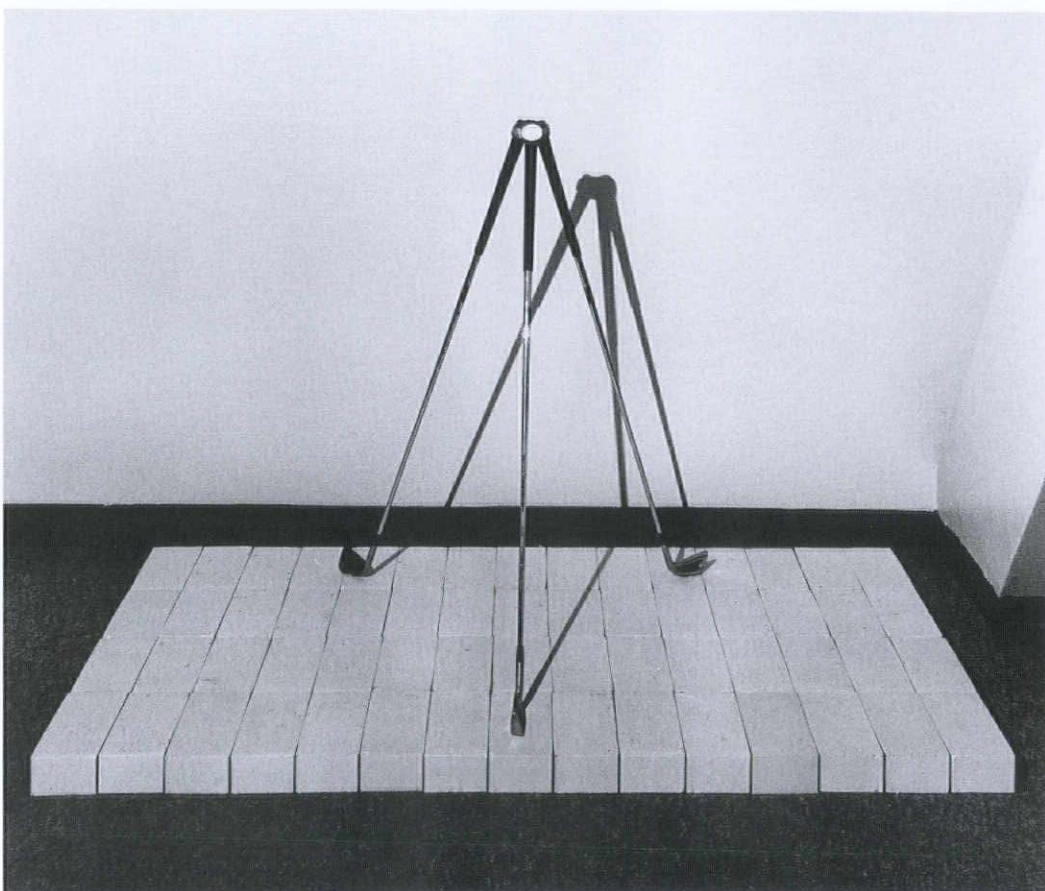
建築家

1955年 滋賀県生まれ
1978年 京都工芸繊維大学工学部住環境学科卒業
1983年 石井修／美建設事務所
1990年 中井清志建築設計事務所設立

私たちが今日、扱わねばならない都市環境の課題は、伝統的な手段では取り扱えないような複雑なもの、多元的なものとして理解されねばならない。いまや都市環境は、自然的環境（場所性として、他地域と区別されるもの）としてよりは、人工的環境（場所性のないもの、記号化されたもの）に基盤を置くものとして捉えられる。

そこにおいて、意味表出の形成は、個別の記号システムと特定の文化との関係においてなされる。記号としてのモノと地域との関係性によって記号としての環境は変化を受ける。そこに場所性が表れるのである。

純粋に人間の欲望の産物として造られた筈の「塔」もその地域文化の中に溶解していく。日常的に見慣れた環境の中で新たな意味付けがなされ、場所性を獲得したものをシンボライズするモノとしてゴルフがあり、スポーツという日常を離れ、ヴァナキュラーな意味を持つに至った。



遠藤秀平

Shuhei Endo

希望の塔

建築家
1960年 滋賀県生まれ
1986年 京都市立芸術大学大学院修了／石井修／美建設事務所
1988年 遠藤秀平建築研究所設立
1993年 建築アンデパンダン展、京都市美術館

塔とは象徴化行為における建築的形式である。この行為は、象徴されるもの以外を排除し、視界から消そうとする欲望に支配されている。塔が持つこの排除構造は、見るものと見られるものとのもっとも単純な関係性を示している。このことが示唆するものは、眼差しが持つ力の強さと弱さの二面性である。

塔が可能性を有するとすれば、この関係性の認識と克服にほかならない。

見えるものを見えなくする力から希望は生まれない。

必要なものは、見えないものを視ようとする勇気を喚起する塔である。

視るものと視られるものとが塔を接点として未知を発見する。

接触は目的を持たず、効率を追求せず相補的結果として塔が出現する。

すべては接触により生み出され、追求すべきは勇気ある接触であろう。

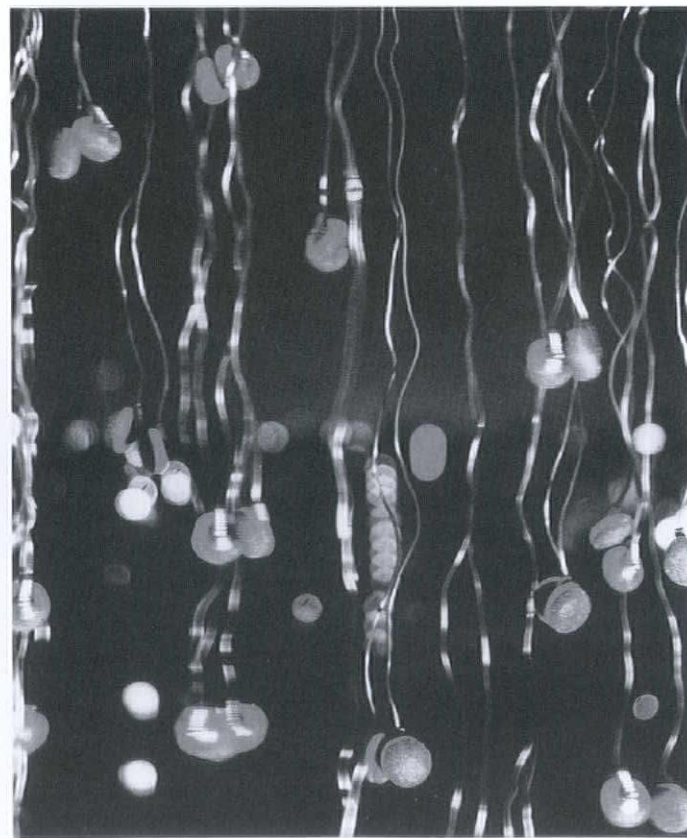
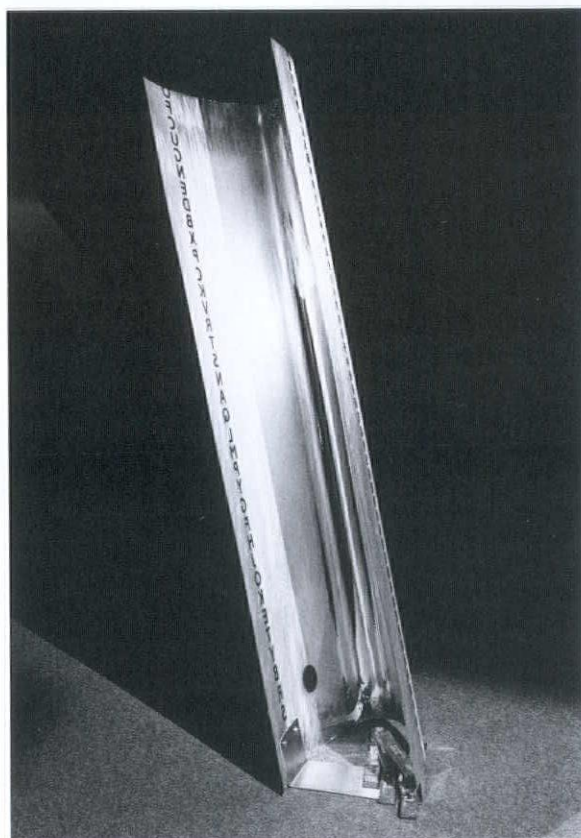
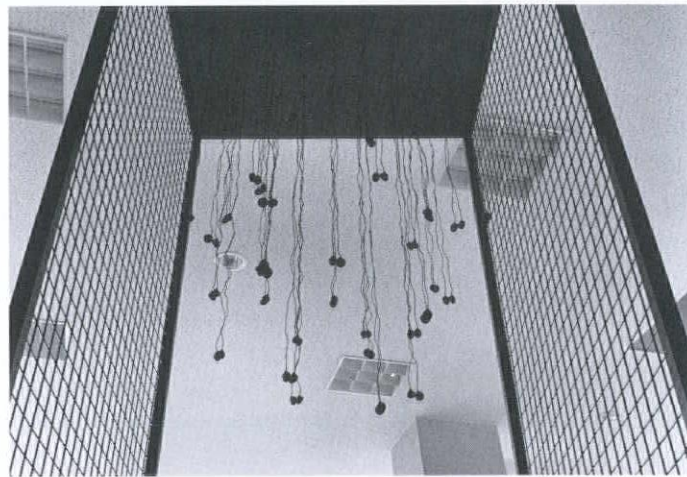
川北健雄

Takeo Kawakita

塔——錯綜空間に浮かぶ空虚な場所性

建築家
1959年 滋賀県生まれ
1987年 京都工芸繊維大学大学院修士課程修了
1988年 オブリスト建築事務所(スイス)
1992年 コロンビア大学大学院MSAAD課程修了
1993年 大阪大学大学院博士課程修了
神戸芸術工科大学・大学院助手

都市の公的空間に現れる様々な日常の場面を、「ウォークマン」のイヤホンという私的装置によって切り取り、それらを再度、公的装置ともいえる展覧会の場に集めて併置している。個々の音は、通常の脈絡を絶たれ、非日常的な状況の中で他の音と関係しあって、新しい意味の発生源となる。このような錯綜体そのものが、現代の都市の姿を暗示している。ここにはもはや、ひとつの共同幻想によって支えられるようなシンボルとしての塔は存在しない。多種多様な個々の活動が交錯しあう中に生じる瞬間的な結び付き、錯綜空間の中の無数の交点の偶然の重なりの中に、虚像としての塔が浮かび上がる。



写真提供：川北健雄

長坂 大

Dai Nagasaka

遺伝子の塔

建築家

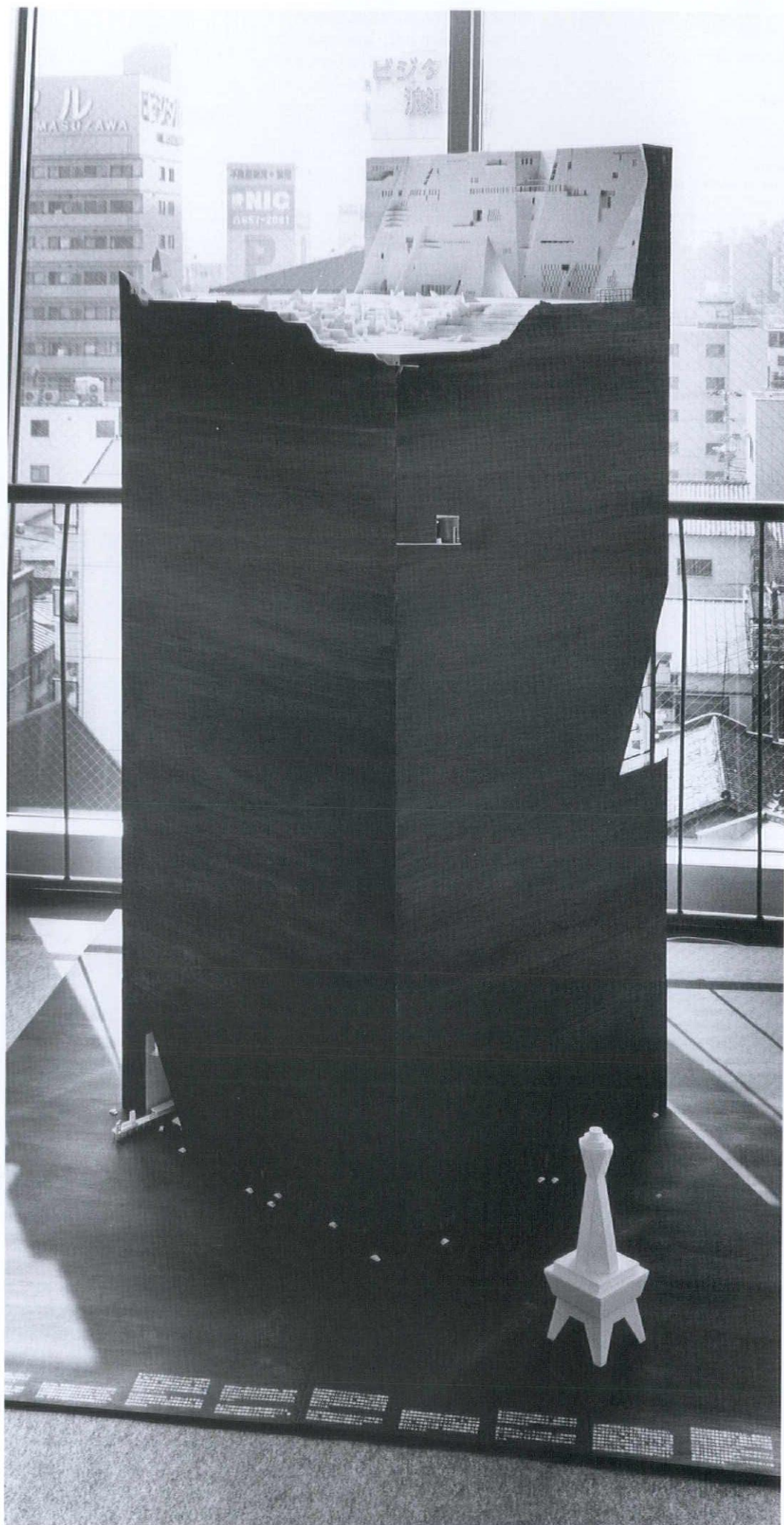
1960年 神奈川県生まれ
1982年 京都芸文館大学工学部住環境学
科卒業／松永巖・都市建築研究所
1985年 原広司＋アトリエ・ファイ建築研究所
1989年 京都芸文館大学工学部造形工学
科助手
1993年 建築アンデパンダン展主催

2001年。和歌山県の小集落は突然大地ごと約500mの深さまで切り取られて大阪都心部へ運ばれ、高さ580mの巨大な塔として出現する。以後、塔の栄枯盛衰の物語は原則的には完結することがない。

当初の集落としての死は比較的早く訪れるであろう。自然淘汰の原則は塔の一部となった集落に対しても厳しく作用してしまう。だが塔の様態のひとつは死のモニュメントであり、巨大な塔にとって部分である集落の死はその歴史の一側面でしかない。一方、塔への新たな遺伝子の侵入は新たな成長する「部分」を発生させる。そもそも塔に取り込まれた自然の一部である大地や集落、建築物にとって、生や死は様態そのものが異なるのである。

この物語は数百年単位の観察結果から得られるものである。生と死の蓄積がある限り塔は変貌を続け、人々の記憶に新しい姿を刻み続けるであろう。

出品作は比較的初期の姿の模型である。



新宮 明

Akira Shinguh

ユラリユラリト

建築家

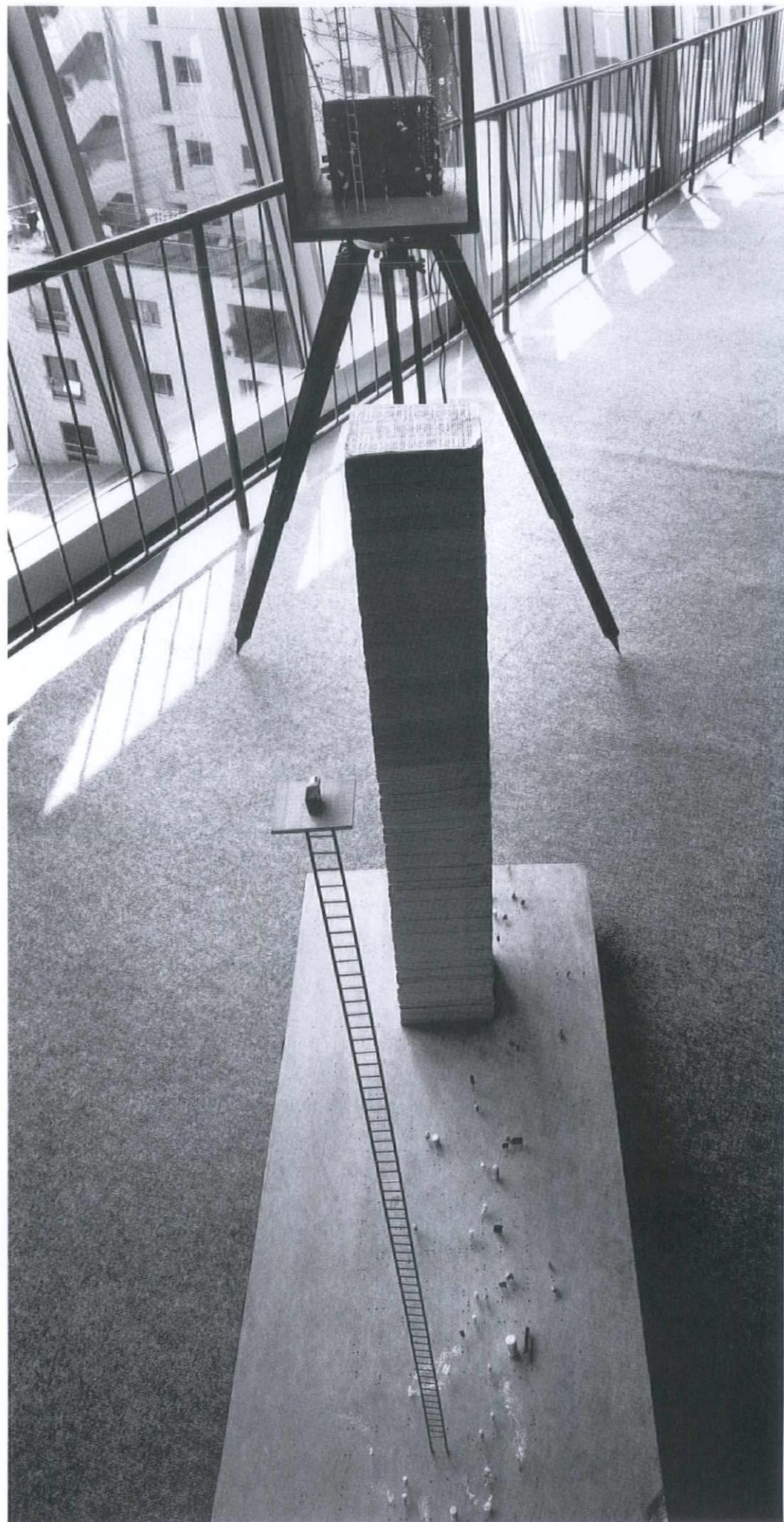
1968年 滋賀県生まれ
1992年 大阪芸術大学建築学科卒業
同大学副助手
1992年 極楽二人羽織展、心斎橋バルコ
1995年 個展「豆腐と建築と私」ギャラリー紅

固着化した実像を剥離し、完結した実体と機能がある方法で静止、解体すること。そして、極度の緊張状態、硬直化した実体は自らを消去させること無く状態を保持する。

「用」と「常」を失った（物質化した）実体は分別の無い器となり、あらゆるものを受け入れ、また、拒絶するようになる。

（物質化した）実体に別の「用」と「常」、そしてある美意識を付加する事で、状態が解かれ、異化が起こり、環境の新しい実像（現像）として可視化され存在する。

日常の世界の「普通」として。



飯島洋一

「タワー・アート in 通天閣」という名称を持つ展覧会を、主として関西の建築家や造形作家らが集まって、大阪の新世界にある通天閣で開催するという話を聞いた時、わたしはびっくり通天閣の保存計画を考える催しなのだと思った。美術館といった通常の施設ではなくて、あえてというか、実直なまでにストレートなやり方で、展示空間を通天閣の内部に設定した趣旨も、やはりそのことを強く想像させるものだったからだ。建築業界関係者ではなく、むしろ日頃、アートや現代建築にそれほどの関心を寄せているわけではない普通の人たちに、この展示をぜひ見てもらいたいという思いがそこにはあって、主催者たちは、通天閣を通して、真の地域性と公共性について考えようとしている、そう思い込んでしまったのである。

わたしがこの企画の話を聞いた時、まず真先にそのことを考えてしまったのは、もちろん通天閣という、わたしのように大阪という風土について十分に理解しているわけではない東京の人間まで、よく耳にしている名所がテーマとして取り上げられているからだけではなかった。それよりも現在のような社会状況において、地域に根ざした建築に関心を持ち、その集合的な記憶をいかに継承してゆくかについて思考したいと欲するのは、ごく自然な感情であるように思ったからである。

ポストモダニズムの時代とは異なって、われわれはいま「場所」というものといかに密接な関係をかたちづくるか、そのことをめぐって思考し、ものづくりをしたいという欲求にかられている。わが国で80年代に流行した

ポストモダニズムが、その立地する場所の歴史や記憶と切断する要素を故意に持って来ることによって、場所との無関係性を楽しんだのに対して、ポストモダニズムの反省に立った現在は、逆に、立地する場所の歴史性や記憶といかに関係性をかたちづくるかに、設計者たちの神経が傾けられているように考えられるのである。

実行委員会もそのパンフレットの中で、「日常性の中から問題提起をおこなう」ことの重要性を問うているが、それは今日にあって、しごくもっともなものを射得た見解だと思われる。まさに日常性とリアリティが、いまや問われているのである。その意味でいっても、通天閣の中で、通天閣をめぐる建築家や造形作家たちが、リアルな提案をするという催しは、いかにも時代の気分とマッチした提案であるようにわたしは思い込んで、会場に赴いたのだ。

しかしここまで述べてきた調子からすると、実際には展示会場を訪れて、そうした期待はものの見事に裏切られることとなった。全部で40以上もある展示物の中で、通天閣の保存案などは、一つもそこにはなかったからである。

保存案とまでは行かなくても、それでもせめてこの塔を今日的なたちで再解釈し、解題するような展示はあるのではないかと考えながら、会場の作品を一つ一つ時間をかけて丹念に見て廻ったが、そうした解題案すらほとんど見当たらない始末であった。それどころか、ある建築家は、通天閣の建て替え計画をさえ提案していたのである（それは驚くべき

ことに、この塔の記憶をまったく消し去ってしまうような提案であった）。

どうやら実行委員会がパンフレットの中で書いているような、「日常性の中から問題提起をおこなうこと」の真のまろみは、無視されてしまったようである。代りに多くの出品者たちは、わたしが感じ取った範囲では、今日、漠然と「塔」というものはどのようなものなのか、そのことをめぐってかなり大きく観念的で空想的な提案をおこなっていたのである。

しかし40以上の作品の、そのすべてが漠然とした「塔」へのイメージであったわけではない。通天閣を保存、あるいは解題するというテーマは括弧に入れるなら、関心を抱かされるものがいくつかその中に見出だすことはできたからである。

それには大きく言って二つの方向性があった。一つは「塔」というものが本来持つ、機能的ではない、精神的でシンボリックな側面を形象化しようとする作品である。天上志向型とでも言えればいいだろうか、そうした案は天に向けて自らの案を上昇させ、結果としてロマンティックな雰囲気を見る者に強く感じさせようとしていた。

たとえば2001年に、和歌山県の小集落が500mの深さまで掘り起こされて、それが大阪の中心部に移動し、巨大な塔となって出現するという長坂大の「遺伝子の塔」や、天に向かう階段のみで全体を表現した持田総章の「LOCATION」、さらには長坂に似て、積み上げられた高い場所に一個の都市めいた風景をデザインした丸谷勝也の「INDUCING」な

どはそのいい例であろう。

誤解を恐れずに言えば、そこには汚れたこの地上を捨て去って、新しいユートピアを構築したいとの欲望が、制作者たちの「塔」に対する意識であると感じられた。彼らにとっては、「塔」はあくまでもシンボリックなものであり、同時に精神的な構築物なのである。

それに対してもう一つの提案は、いま述べた天上志向とまったく相反する提案である。つまりそのような塔の精神性やシンボル性を、ことごとく破壊しようとするものである。こうした案では、総じて制作者たちの大半が、どこかで「塔」というものの終わりをイメージしているように思われた。それは「塔」というものが、西欧的な概念規定からして、きわめて「構築的」なものであるという認識からきている。というのも、西欧の構築性の根幹には、明らかにいくばくかでも天に近づきたいとする欲望が秘められているのだが、その欲望を最も端的なかたちで建築に表象したのがほかならぬ「塔」であり、同時にその天上志向には、ファロセントリズムが隠喩化されているからである。

そうした男根中心主義的伝統としての構築性たる塔を、いかにして破壊するか、構築の枠組みをズラし、多くの穴や隙間、空虚をどのようにして提示するか……。後者の案には共通して、そうした欲求が込められていると思われたのである。

たとえば都市のノイズなどを聞くことができる、多数のイヤホンを垂らした川北健雄の「塔——錯綜空間に浮かぶ空虚な場所性」は、かたちではなくノイズという非実体的な

現象に着目し、そのノマド的な音の「流れ」の中に、ノマド的な非シンボルリズムを表象する提案であり、また鈴木達郎の「横たわる塔——南海天王寺支線跡地へのオマージュ」は、垂直に屹立する塔を水平に横たわらせ、さらにそれを鉄骨骨組みの隙間だらけの非物体としてわれわれに差し出すことで、やはり塔の持つシンボル性を破壊しようと試みている。

また戸田潤也の「空虚の塔」は、鈴木のアイディアのように塔を水平に横たわせる明快さを持ってはいないが、塔の中にいくつもの隙間を生成させることで、タイトルどおりに空虚のほうをより強く人々に認識させようとするものだったし、新田正樹の「負のピラミッド」は、円柱、ピラミッド、バベルの塔という具合に、構築的なシンボルを次々に引き合いに出しつつも、たとえばピラミッドを転倒させて「負」の塔として提示することにより、塔が宿命的に持つシンボル性から逃走しようともくろんでいるように思われた。

こうした案は、どれも作者の発言として、空虚とか、虚像とか、偶然性とか、隙間とか、負といったネガティブな言葉が共通して提示されていたが、それはもちろんのこと、いま述べたような、塔＝構築性を継承するのではなく、むしろその脱構築を作品の中心部に据えているからであり、そのことを言葉によって補完しようとしたのだといえるだろう。

とりわけ、川北の提案には、この種の傾向ではこの上なく明晰なイメージの表出がされていて興味深かった。都市を構成するさまざまな言語の中から、あえて音を抽出して、ネガティブな塔を表現する試みは、いたって大

胆なものであり、実体性の隙間を漂流してゆくイメージが、こちらに巧みに伝わってきた。

こうした川北らの提案は、今日の「塔」とは何か？という問い掛けへの提案ということならば、この上なく面白いの一語に尽きる作品である。しかしそれならば、なぜ通天閣でわざわざやるのだろうか？通天閣の建つあたりの地域性や場所性、それにその町の人々の記憶は問われないままでほんとうに大丈夫なのか？

この問いに対する答えは、依然として宙に浮いたままなのだ。

実行委員会がこの企画をあえて通天閣という日常的な主題で捉え、通天閣で開催しようとしたのは、(通天閣ひとつが近い将来保存可否かの危機にあるかないかということではなくて、あくまでもこの時代全体の流れからみて)現代社会の日常性がどこかで失われようとしているリアルな危機感があったからに違いない。それだからこそ、逆説的な言い方になるが、こうした展覧会が企画される必然性があったのである。

冒頭の繰り返しになるが、いまわれわれに問われているのは、ロマンティックに未来を空想することではなく、不毛な形而上学についていたずらに思いをめぐらすことでもない。この「現実」と「現在」をめぐってきわめてリアルに思考することである。わたしはそう考えているのだが、果たしてどうだろうか？

●いいじま・よういち／多摩美術大学助教授

高瀬義夫

Yoshio Takase

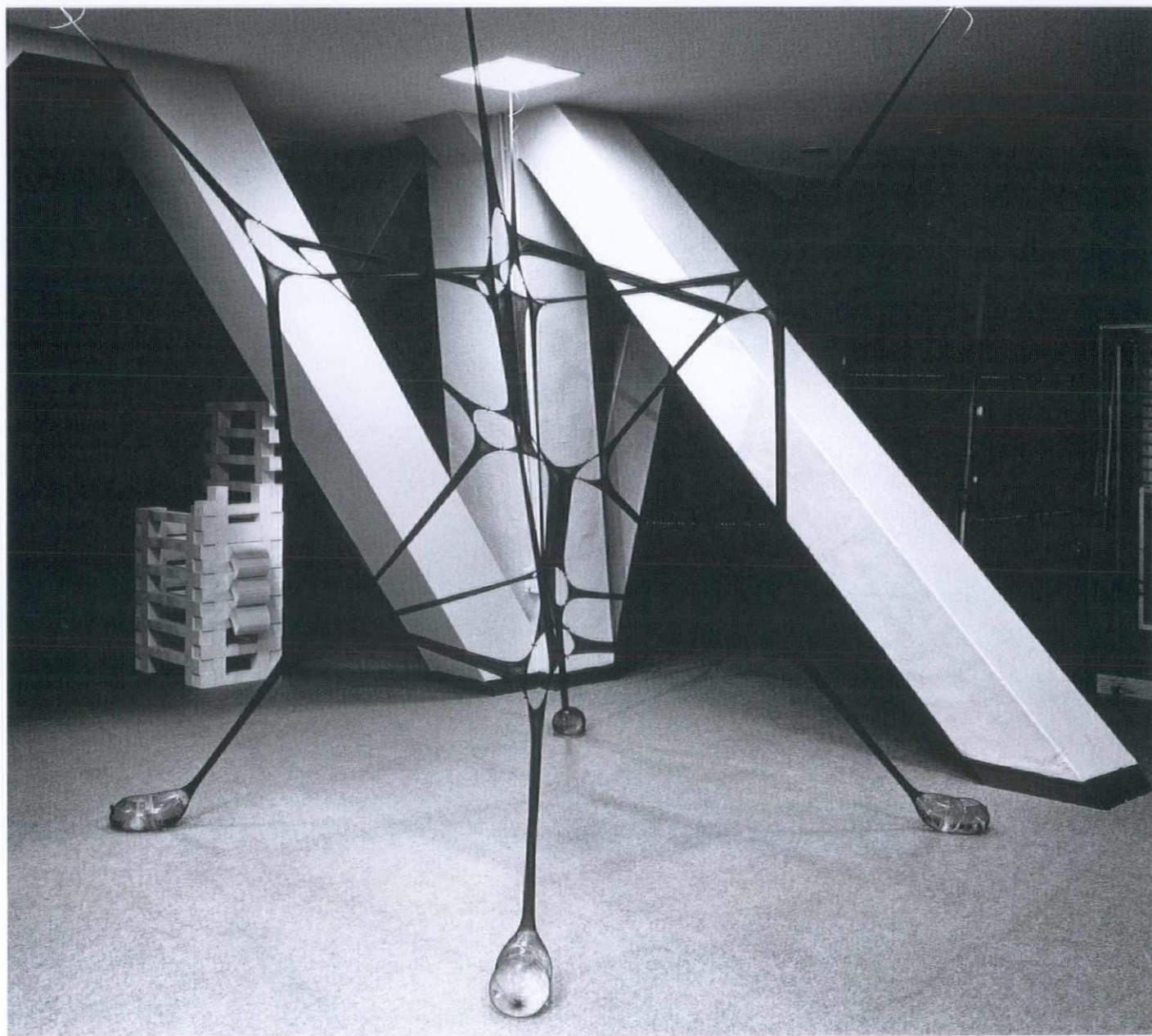
アート・インセクト

造形作家

1952年 大阪府生まれ
1991年 国際掌中新立体造形公募展
1992年 ABC & PI展
1993年 芸術祭典・京「京を創る」、金閣寺
1994年 現代日本美術展

私の作品は、ファイバー素材による空間構成が基底をなす。主に工業規格製品（ストッキング）の素材を「ジョイントとテンション」によって心のおもむくまま空間に繋ぎ留めてゆく、「インスタレーション」形式の制作が続いている。生物が本来持ち合わせている神経細胞の集合体の組織が作品となって

顕われる。作品テーマが自然から有機的な生命体への追求へと変わりつつあるようだ。RNAやDNAに替わり、自己の感性に心を委ねる自己表現の領域を拡げてゆきたいと考えている。生の未知世界に一步でも近づきたいと思うと同時に、自己の内面世界を造形手段を通じて探りつけて行きたい。



鹿間厚次郎

Kojiro Shikama

赤い目、青い頭、白い手

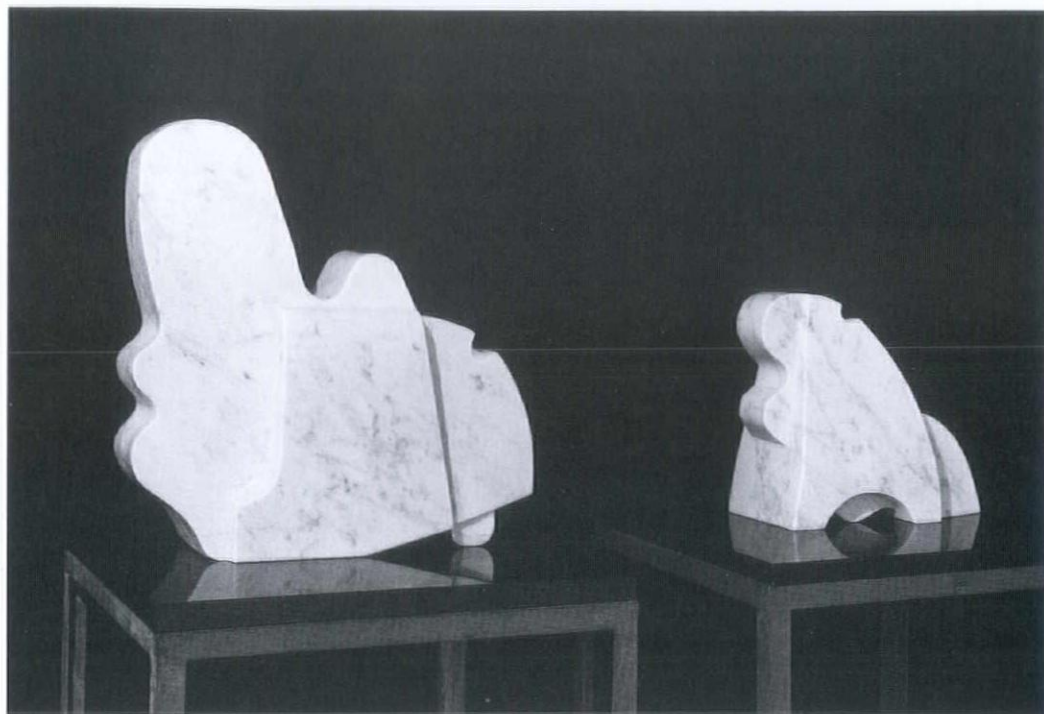
彫刻家

1941年 兵庫県生まれ

1994年 個展、ABCギャラリー

赤い目、青い頭、白い手・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・



平田洋一

Yohichi Hirata

岩の机

造形作家

1936年 兵庫県生まれ

1964年 グループ・アローラインに参加

1968年 可能性の実験展、信濃橋画廊

1972年 「コレイガイノスベテ」

京都ビエンナーレ展

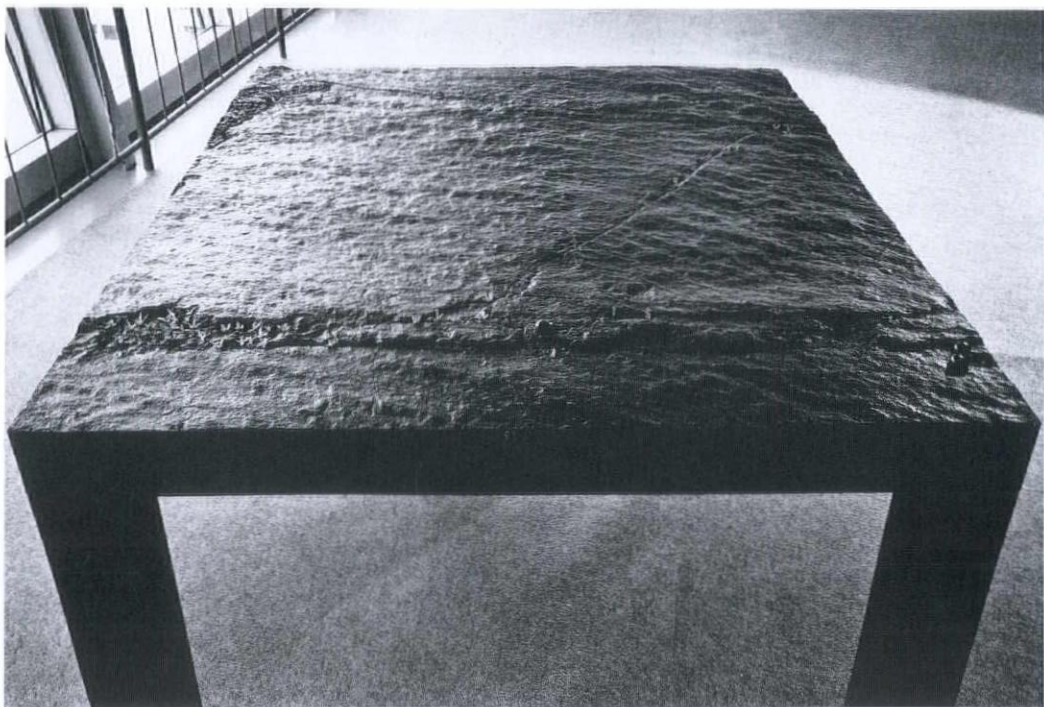
1994年 関西の美術1950's～1970's展

作品を作らなくなって、すでに20年以上が過ぎてしまった。ドロップ・アウトの理由は製作費の潤渇にもあったが、第一には自己の発送の質、つまりは才能に対する絶望感であったと思う。

今、それらの潤渇や絶望感がすべて払拭消滅したわけではないのだが、無為徒食にいささかの反省の気もあり創作再開に踏み切った次第ではあるが、如何せん不才の身、とりたてて新しい事が出来るわけでもなく、以前の絶望感を引きずっての悪戦である。

今回出品する「岩の机」は年末に予定している個展への一作だが、ご失笑は覚悟の上である。

ここで想い出すのは、かつての梅田の酒房「フミノ」で聞いた山口牧生さんの言葉「ぼくは下駄屋が下駄を作る様に作品を作るのだ」である。なんだか解る様な気がする。



橘 昭信

Akinobu Tachibana

風の柩Ⅱより

造形作家

1941年 大阪府生まれ
1964年 京都教育大学特修美術科卒業
1967年 個展、ギャラリー16
1988年 個展、信濃橋画廊
1990年 「風の柩Ⅱ-7」

「かたち」をうつろいゆくものとして捉えきれるか…。

見えないものを見る「かたち」に置きかえる作業から、何かをつかみとれば良いのだが…。

戸矢崎満雄

Mitsuo Toyazaki

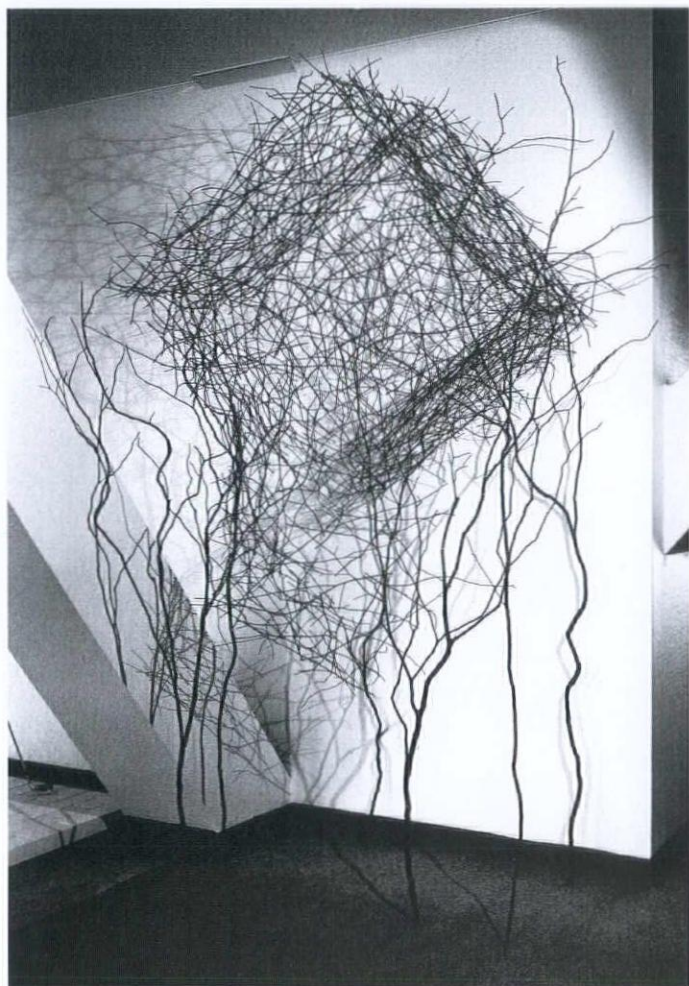
柄(カラ)

美術家

1955年 長野県生まれ
1981年 東京芸術大学大学院美術研究科修了
1990年 個展、麻布工芸美術館
1992年 国際タペストリー・トリエンナーレ(ポーランド)
1994年 「LIGHT AND SHADOW」Japanese Artist in Space (U.S.A.)

柄は血縁を意味し本性を現わす。私たちが身に付けるもの身に纏うものは、その起源として社会的な記号であったと考えられる。しかし、私たちが日常的に身に付けるものは、むしろ個人の趣向によって選ばれる時代である。衣服に付けられる柄も本来の意味は失われ、多様な記号性をもった流行現象の中で消費される。

この大量消費の時代に新たな意味は生まれるのか、失われ続けるのか。私が1994年より始めた行為——不要の古着シャツを集め、線香の火で穴を無数に空け続ける——はそれを問うものである。第2の皮膚、身体の抜け殻とも言えるが平凡で特徴もないシャツ、そこに小紋柄のように穴を空け、焦げ目と煙で付けたパターンは一見自然な模様として目に映る。しかし、それは繊維が寸断され、もはや使用に耐える衣服ではない。それは日々の営みを象徴化し、存在の確かな時を記憶させる、もしくは消去するための行為である。



濱田龍明

Ryumay Hamada

時空の塔

エコ・アーティスト

1945年 北京生まれ
1990年 個展、ギャラリーブチフォルム
1991年 大阪現代アートフェア、
大阪現代美術センター
1992年 国際コンテンポラリーアートフェア
1993年 大阪市の公共仮設フェンスに
エコアートのペインティング

近年、制作意識の中で漢字四文字からなる〈時・空・表・象〉と云う言葉シンボルをテーマとして制作発表しています。

今回、生命の象徴・源泉・太陽・自然景觀、そして自己の観想として〈時空の塔〉を制作しました。

今後、私自身の制作の中でひとつの手がかりになる様な気がしてなりません。

大野良平

Ryohei Ohno

削剥された、かたち ——通天閣

彫刻家

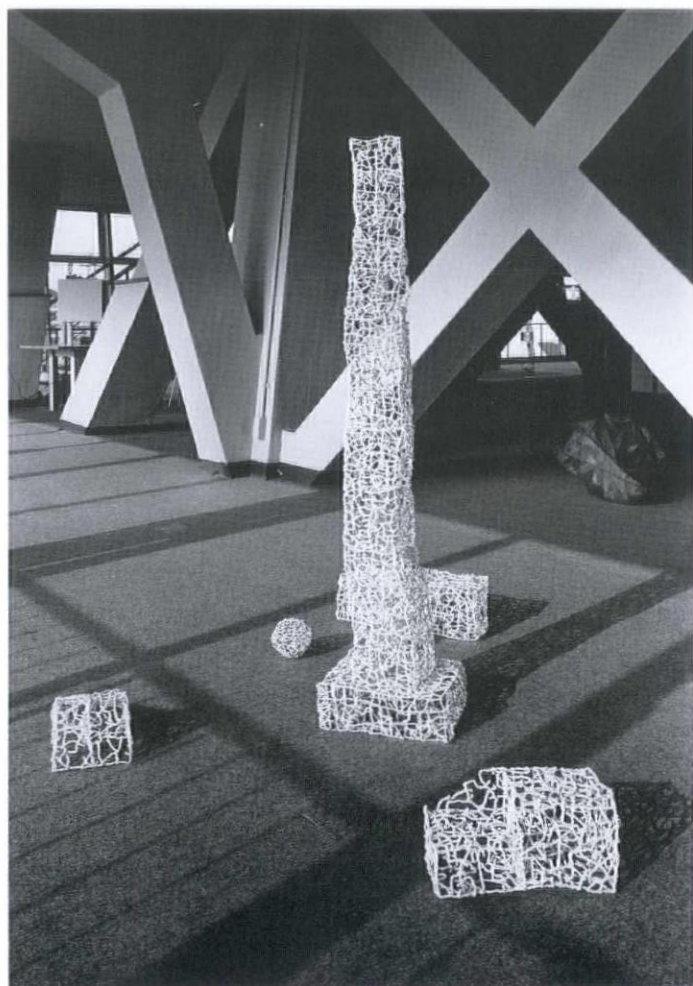
1959年 大阪府生まれ
1991年 宝塚造形芸術大学彫刻科卒業
1993年 兵庫の美術家展、兵庫県立近代美術館
1994年 主張する小さなオブジェ展、
信濃橋画廊
1995年 ニューウェーブアート実験展、
大和ギャラリー

以前から私は、通天閣界隈はこの世に残された唯一の楽園といったイメージを持っている。そこは数年前に訪れた、インドのオールドデリーに通じる昔ながらの路地が残存しており、そこで生活している人間臭がたちこめる、栄養たっぷりの地に思える。本当の意味での文化がこの地には在る。

そういった地のシンボルタワー通天閣で展覧会をするという企画に参加させていただいたが、タワーアートと言われても私には何のことかさっぱり解からない。

私はここ数年、木という素材を通して制作している。木で何をつくるかではなく、むしろ削り出すという行為の方に興味を持ち続けている。削剥することによって果たして何が見えてくるかが終始私のテーマである。

夕闇せまる通天閣を眺めながら、今回の作品タイトル「削剥された、かたち——通天閣」が思い浮かんだ。



夏原晃子

Teruko Natsuhara

“X”空間

造形作家

1938年 大阪府生まれ

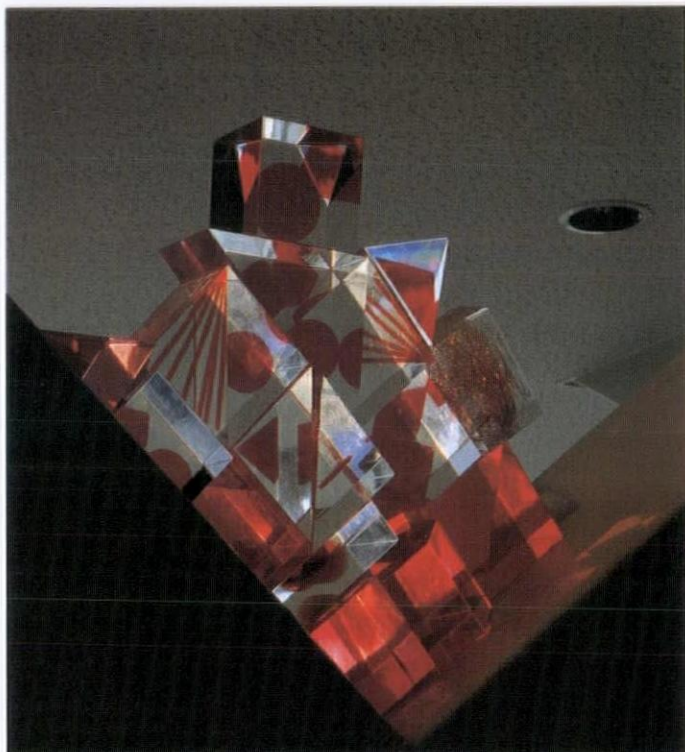
1990年 「Optical Acrylic Illusion」、ABC
ギャラリー

1994年 「虹」、大阪府総合女性センター、
ドーンセンター

1995年2~4月 大阪府・仏文化省アーティスト
ト交換でALBI市に滞在制作、個展

1995年5月26日初めて通天閣へ行った。南海電車からいつも眺めるおなじみの広告塔に展望台がついているものであるが、その足元に立つと何とも不思議な空間である。ここへのアプローチは、地下鉄、私鉄、JRとさまざまであるが、そこからこの足元へ集まる街の発想はまさに「エッフェル塔」かも知れないが、景色はまったく異なる。独特の強い個性を持つこの界隈は店と集まる人々とのコラボレーションであり、思わず立ちどまり覗き込みたくな

る。近年は周りに高いビルなどが建ち、近づくにつれて通天閣を見失うのは残念だ。真下に天王寺公園とそれに続く寺町を見渡せる展望台はXの柱に支えられている。これに透明アクリルブロックを積み重ね、連続させる。ブロックを通して眺める景色と無色のアクリルは共に展望台に浮かびながら支えようとするのだろうか。X空間の「X」をここを訪れる人々と一緒に見てみたい。



葉山 勉

Tsutomu Hayama

途上の風景

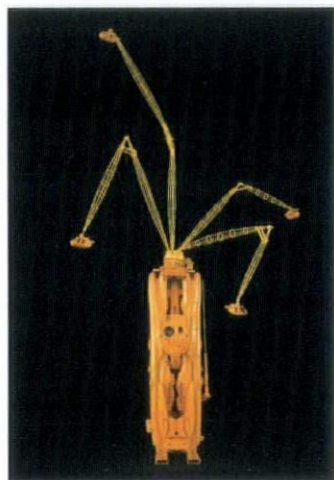
——展望塔としてのクレーン

建築家

1961年 鳥取県生まれ
1986年 京都工芸繊維大学大学院修了
設計事務所ゲンブラン
1987年 上田篤都市建築研究所
1991年 葉山建築設計事務所設立
京都精華大学美術学部専任講師
1994年 設計組織B.B.アーキテクツ共同設立

建築現場はエネルギーに満ちた喧騒の世界である。それは建築の完成を目指した、期待と危険をはらんだ制作途上の状況である。タワークレーン、パイルドライバー、パワーシャベルなどに代表される工作機械は、言い換えれば、身体の延長としての人間の道具=武器である。人間のスケールや力を超えたこれらの工作機械は、明らかに機能を超えた力強い「美」を呈示している。工事中の風景は都市に対して暴力的であるにもかかわらず、風景としての免罪符を持つものである。

生命力に満ちたこの途上の風景を、恒常的なものとして通天閣に重ねてみる。新世界の持つ場所性を、建築現場の持つ力強さや可能性、「新しい世界」が生まれる予感として表現してみたい。



新田正樹

Masaki Nitta

負のピラミッド

建築家

1953年 広島県生まれ
1971年 三原工業高校建築科卒業／大成建設
1975年 フリードラフトマンとして活動開始
1982年 新田正樹建築設計工房設立
1995年 新田正樹建築空間アトリエに改称

言うまでもなく、かつてタワー（ここではエジプトのピラミッドから東京タワーまでも含んだ総体）は人類にとって科学的シンボルであった。人類のはるかなる夢と欲望が象徴されていた。しかし、現代都市に於けるタワーは、完全に都市の特異点としての役割を終了した。もはや人々は、上空へのむやみな憧れを抱かない。周辺のオーディナリー性がその特異点までも飲み込んでしまったからだ。それに留まらず、逆に都市のマイナス特異点になろうとしているかにも見える。

なのに今何故又もやタワーなのか。
それでもやっぱりタワーなのか。
だからこそもう一度タワーなのか。
中心の空白こそ現代のタワーにふさわしい。

土居英夫

Hideo Doi

TWIN CORE SYSTEM

建築家

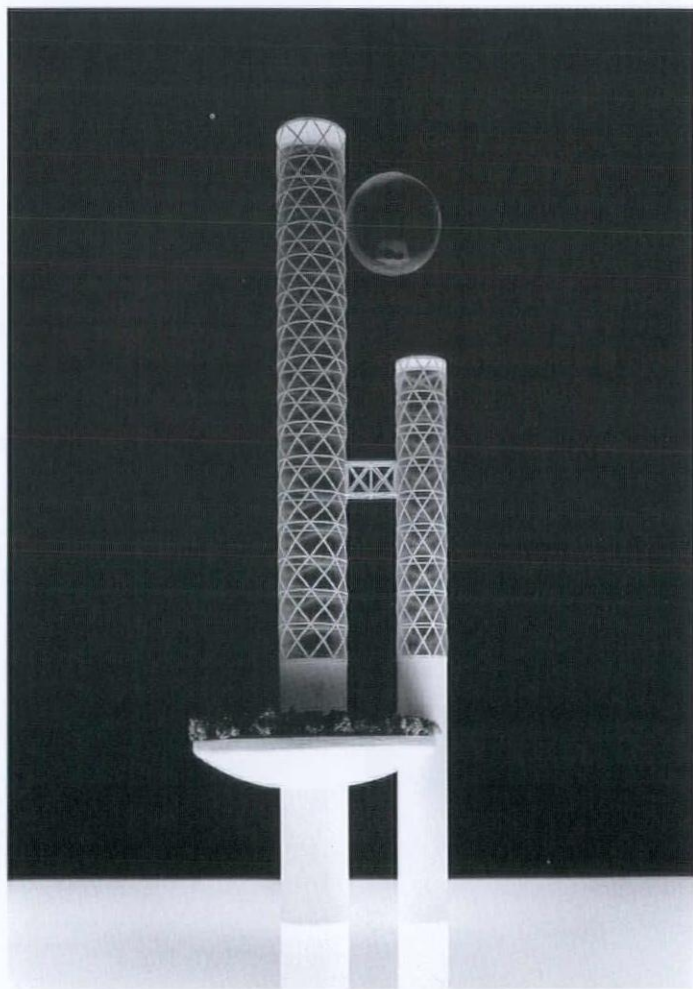
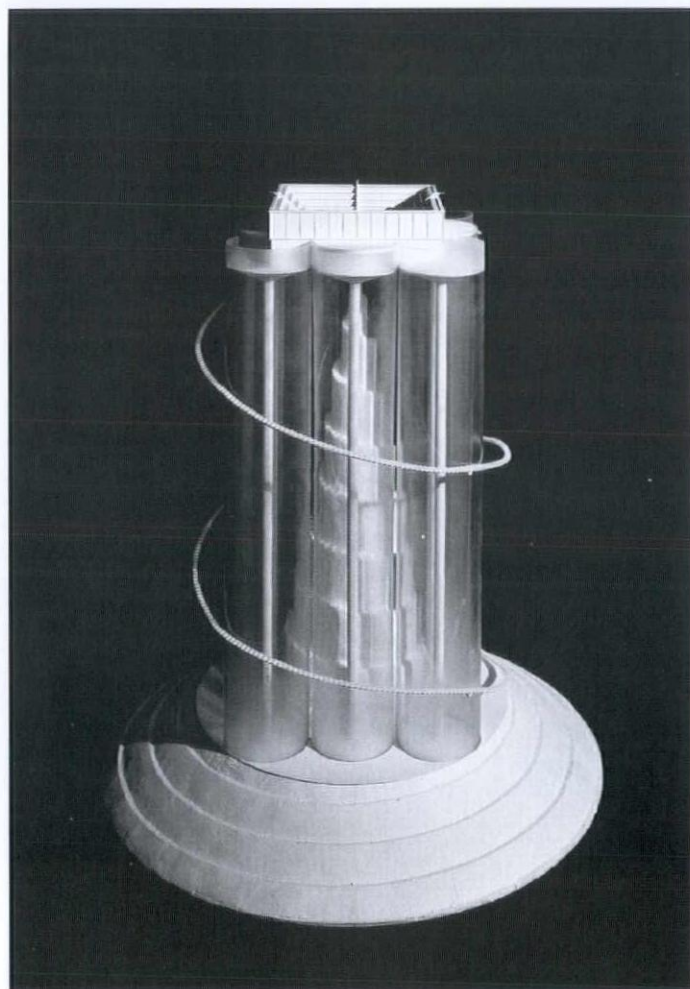
1961年 大阪府生まれ
1985年 大阪芸術大学芸術学部建築学科卒業
同大学非常勤助助手
1987年 個展、心斎橋ソニータワー
1988年 上田篤都市建築研究所
1995年 デイ・アーキテクト主宰

Core System1: 空中庭園と展望台からなる。上下の移動はリニアエレベーターを利用。中間階にてCore System2へアクセス可能。

Core System2: 内部はスパイラルスロープのギャラリーからなる。

塔(タワー)によって我々が、いわば空間、つまり無限と結びつけられるときに体験するセンセーション、とらえどころのない無限に延長する空虚なひろがり、我々に不快と不安の感情をひきおこす。塔(タワー)は孤独な道しるべのように、人に自信と慰安をあたえる仲介者のように、雄々しく誇らかにそびえ立つ。それは、泡立つ大洋の中の帆柱のように、すべてをのみこんでしまう形のない空間の脅威に対して、確実な定点を示すのである。

——マグダ・レヴェツ・アレクサンダー



新世界と通天閣をめぐって

東 孝光×橋爪紳也

東：今日は、通天閣での「タワーアート」展開催を機会に、この不思議な場所、新世界周辺と通天閣にまつわる話をしようということなんですが、まずは昔の資料にもくわしい橋爪さんに歴史的事柄について触れてもらえればと思います。

橋爪：僕は、通天閣・新世界というのは、あの地域だけではなく、必ず他の街と対にして考えなくてはいけないと思うんです。例えば同時代の浅草とか。また梅田や宝塚と比べることも必要だと思う。当時の盛り場や集客装置のつくり方を、都市デザイン史の上できちんと位置づけるために、新世界のまちづくりは実に重要な事例だと思うのです。そもそもは阪堺電車のターミナル型盛り場として計画された街区ですから。

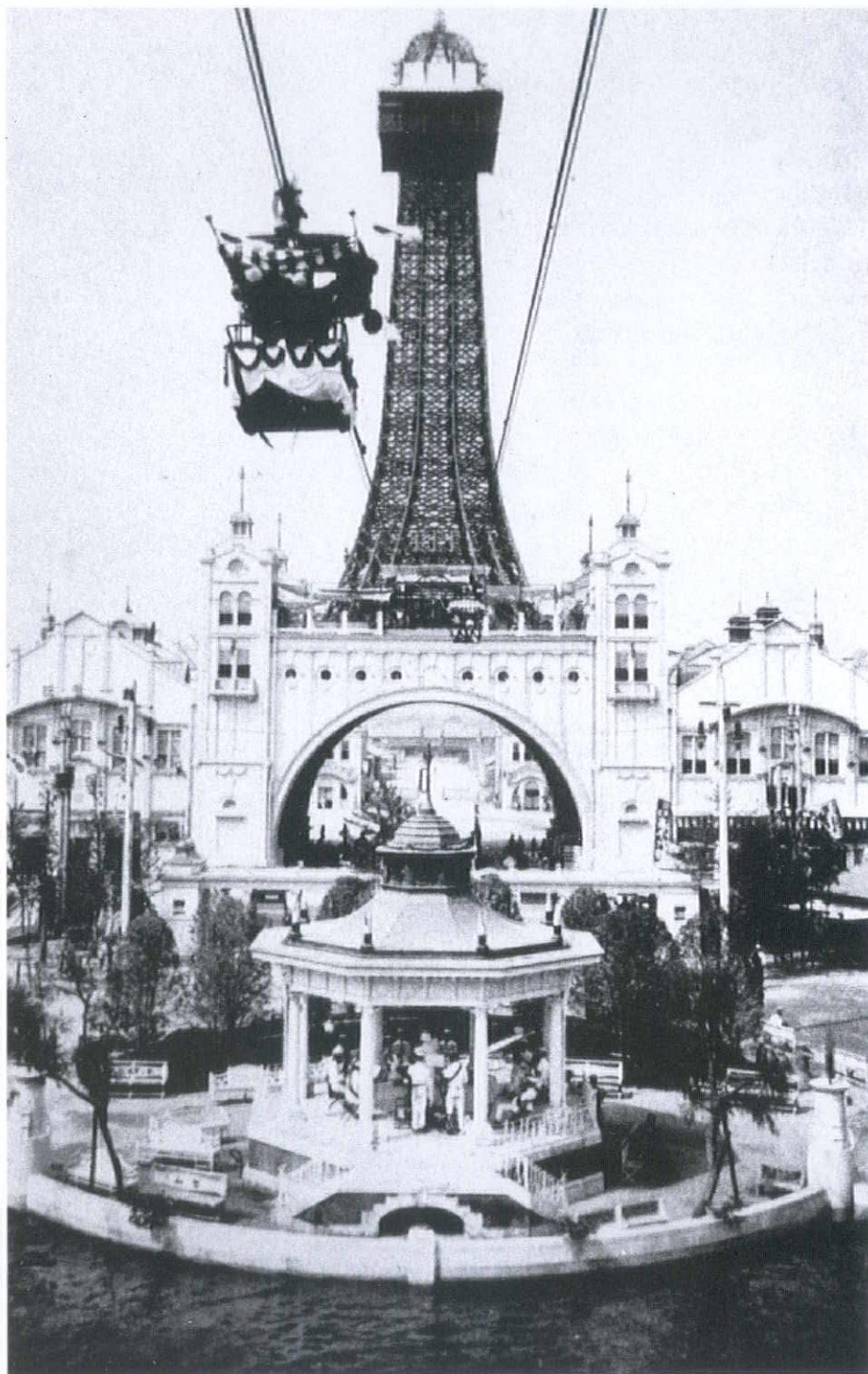
東：恵美須町の辺りですね。そこが中心になってつくられたとして、そもそも新世界とは何だったのか。

橋爪：明治の始め頃から大阪府の公園候補地だったんですがなかなか実現できなかった。ようやく明治36年の「第五回内国勧業博覧会」の開催を機に、その跡地利用として公園計画がかたちになった。跡地の西半分は民間に払い下げられ、大衆的な娯楽を提供する盛り場に、東側は健全な娯楽地ということで、公立の公園として整備された。その西側が、つまり新世界であったわけです。ディベロッパーの当初計画では、パリをモデルにヨーロッパ的な町の偽物を創ろうと考えていたようです。

東：その南側の部分というのは、ニューヨークでいえばコニー・アイランドみたいで、当時を想像すればすごいことですね。

橋爪：ええ。途中で計画変更がありました。南側はルナパークを中心に、ニューヨークを意識した街がつくられた。新世界という名前もアメリカを連想させます。

東：しかし、それが戦後はやがて衰退していくんですけど実は僕は戦前、その隣の下寺町、日東町あたりに小学校2〜3年生のころ、半年か1年住んでいたんです。それは、母方の祖父の家があったからで、その祖父の妹で、僕が下寺町のおばあちゃんと呼んで可愛がってもらっていた人に、よく新世界のラジウム温泉に連れていってもらった記憶があります。温泉に入った後、浄瑠璃や文楽を観るんです。



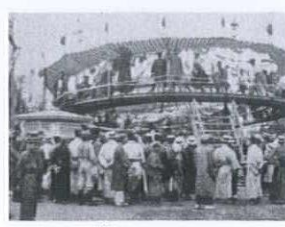
ルナパーク（手前）と通天閣



氷山館



観戦鉄道館



サークリング館

そういうことを楽しむ老人がたくさんいたんですよ。

橋爪：そうですね。映画や大衆演劇、相撲、見世物など、各種の興行の小屋が並んでましたから。

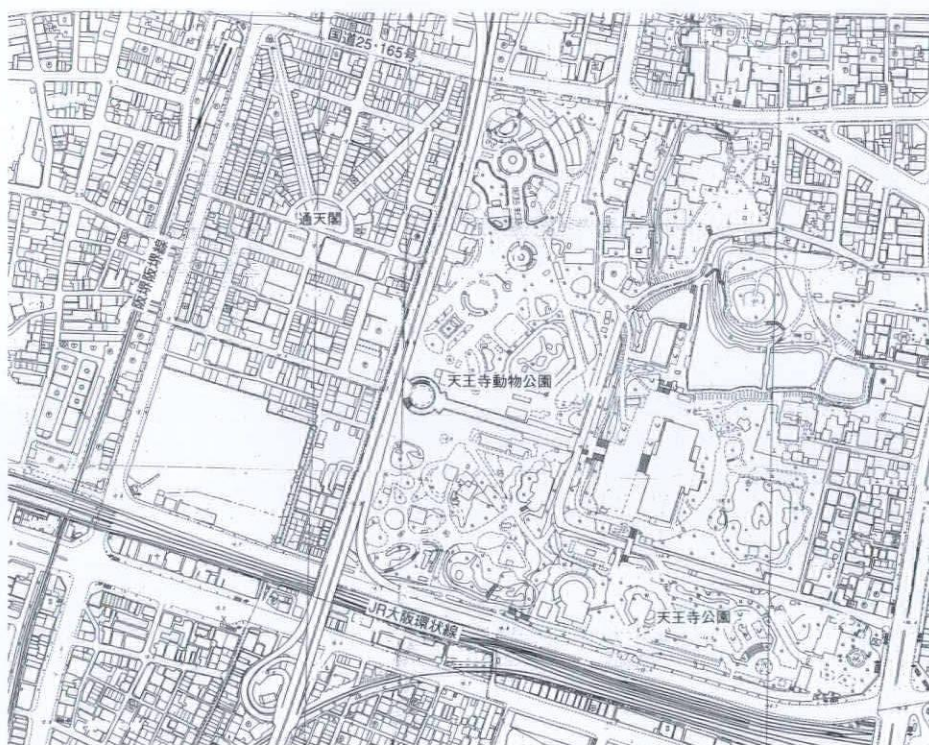
東：だからこの辺りに対しては不思議な場所としてのイメージがあるんです。祖父の住んでいた住宅も不思議なモダンなもので、鉄筋コンクリート造3、4階で、東京の同潤会アパートをもっと立体的、高密度にしたようなものだった。僕は自分の建築家としての生い立ちの中でも、路地のイメージとか、狭い暗い所から明るい所へとかというの、大阪の町家に生まれ育った経験からでていると思っていますが、もうひとつはそういう不思議な近代初期のモダンなハウジングの影響もあるらしい。この集合住宅にはトンネルがあって、それを越えると中庭で、狭い通路があって、しかも一隅にはお地藏さんがあったりして、すごくイメージ豊かな幼年期の思い出があるんです。あの頃のあの界限というのは、モダンと伝統の入り混ざった、非常に不思議な所だったなという気がするんです。一方、いま振り返る大阪の本当の町中の、現在でもわずかに残っている適塾とか、小西義助商店のあの黒塗りの壁の重々しい町家と比べると、多分もっと快樂的で明るい世界だった。当時の大阪の人は、新世界の辺り、あるいはそのシンボルとしての通天閣をどう見ていたのか。少なくとも映画に出てくる坂田三吉の木造しもた家の2階から向こうに見える通天閣ともちよっと違うと思うんだけど。

また、この地区というのは、現在不思議なエアポケットのような状態になっていることも確かですね。ある意味では昔のままで残っていると。いまの大阪の都市構造というのは、真ん中に古い伝統を受け継いだところと、その回りの当時フロンティアだったところがあって、その間が抜けたまま未開発、未整備の状態であってあるという不思議な世界なんですね。

橋爪：ちょうど環状線で区切られているところですね。江戸時代の大阪市街地と、近代以降、スプロールした新市街を区切る境界の位置です。

東：僕は都市は城壁を持つべきだと思っています。つまり現代都市では境界がはっきりしなくなっている。つまり、今では「大阪に来た」とか「奈良に入った」ということがはっきりイメージできないんじゃないかと。そういう意味では、都市の中で残されている所をどうするかというのが大事なことだと思うんです。

橋爪：通天閣というタワーは、南から大阪市



現在の新世界、天王寺公園周辺

通天閣

1903年、第五回内国観業博覧会が大阪で開かれ、後に間もなくその跡地利用計画がなされた。1911年、大阪財界人によって「大阪土地建物株式会社」が発足し、大阪市当局が跡地をこれに貸与して計画が開始された。その内容はニューヨークのコニーアイランド遊園を模倣したテーマ館を中心とした娯楽施設と、パリのエッフェル塔のような高塔を配した一大娯楽園を実現するというものであった。この地区は「新世界」と命名され、東は天王寺公園、西は霞町と阪堺電車の路線まで、南は現在の国鉄関西線、北は逢坂通り（現在の国道25号線）がその境界である。「新世界」中央の公園をルナパークと呼び、そのまわりに興行館（芝居小屋、映画館など）を建設し、ルナパークを見下ろす位置に通天閣が建てられた。これらの目玉施設を揃える第一期工事は1912

年に竣工し、第二期工事ではそのまわりに浴場、料理店等の建設が進められた。ルナパークには噴水があり、その上空を通天閣めがけてロープウェイが横断し、そのまわりに現在のテーマ館の草分けである、興行館、例えば「観戦鉄道館」「エジプト館」「氷山館」「美人探検館」などが軒を連ねた。通天閣は当時東洋一の高さを誇る展望館として、娯楽の国「新世界」の目玉となった。

しかし、1943年1月、塔脚部の映画館が火災で焼失したことをきっかけとして、同年2月戦時中の供出鉄材として解体され、大阪府に献納された。戦後すぐに再建運動が始まるが、なかなか計画に移せず、1954年地元民の出資で通天閣観光株式会社が発足し、再建に向けての具体的な準備が進められた。1956年、二代目の通天閣が内藤多仲の構造設計で竣工する。



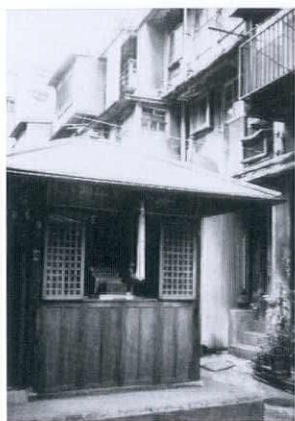
通天閣塔脚から放射状に延びる道路をのぞむ

写真：堀内広治



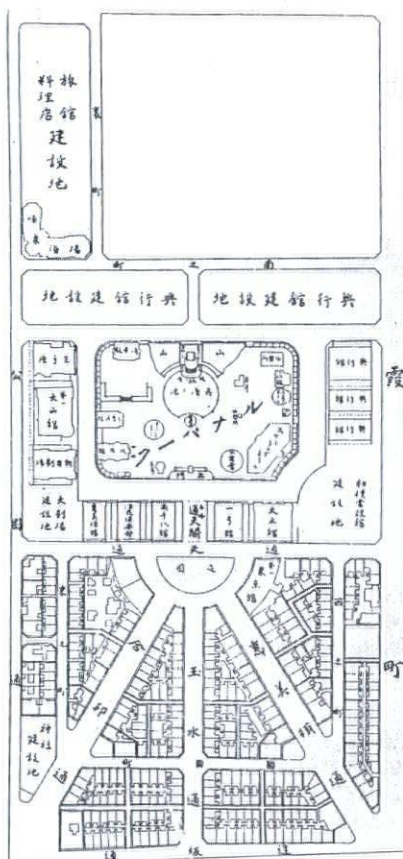
下寺町住宅

写真：東孝光



下寺町住宅の地藏尊

写真：東孝光



初代通天閣建設時の新しき世界平面図

内へ入る人にとっては大阪に到達したシンボルになっている。逆に帰る際には、通天閣が遠くなると大阪を外れていくという意識をもつ。そういう意味で大阪のランドマークと言えるでしょうね。

東：それは昔も今もあり得るでしょうね。もうひとつ印象が深かったのは、戦後学生時代にもう一度下寺町の祖父のところに身を寄せていた頃に触れた、当時天王寺公園にいたホームレスの人達のことです。互いに芝生に寝転がって、政治、宇宙、宗教などの話をしている人達がいる。僕も通りがかりに座り込んで、よく話を聴いたりした。ロンドンのハイパークみたいな風景でしたよ。職に恵まれないでホームレス的生活をしているけれど、結構知識とか教養のある人がいっぱい集まっていた。最近でもこの辺りにはまだ随分リヤカーにダンボールを積んだ人の姿を見受けますけどね。

橋爪：新世界はさまざまな人がともに暮らしている街ですね。以前にここの商店街の人からヒアリングをしたんですが、新世界で無一文に近い状態から商売を起こして成功した人がかなりおられるようです。例えば阪神側に邸宅を持つほど成功する人もいます。しかし利便性を考えて新世界の家は手放さない。昔から住んでいる人はなかなか動かないそうです。ただ近年ではワンルームマンションが増えて、都心に近い割に家賃が安いので若い女性の住人も増えたらしい。

東：話はまた坂田三吉の映画に戻ってしまうけれど、一般の人にはあのイメージがどうも強烈で、何か新しいスマートな格好良いものに対して、古い世界からの反撃という感じがある。だから通天閣もそういう見方をされそうで、それを変えたい感じもするんです。

橋爪：出来た時には非常にモダンでハイカラだったと思う。「大阪にこんなものが出来るなんて」と誰もが思ったのではないのでしょうか。それがいつのまにか泉州や南河内の文化を象徴する場所になりましたからね。

東：それはどう思う？ その役割でいいかどうか。

橋爪：現在から見ると、やむ得ないという気はします。ただ街区割とか、あるいは映画館でも多少古い建物が残ったりしていますので、それらを素材にあの町が最先端であった頃の物語がもっと語られればいいかなという気がします。つまりかつての「新しさ」へのノスタルジーといった感覚が大切だと思う。

東：僕は通天閣の形そのものは、一度作り変えられて、原型は失われたも同然だし、レトロな意味というよりは、そういう日本のある時期にヨーロッパの都市デザインを取り入れ

た道路のパターン、基本的には放射状道路になって、今はめったにない道路パターンそのものが貴重だから、それをもっと補強するようにパターンを拡大して、それに対して新しい建築を作っていくということで再開発をすれば、放射状の中心にある建物も意味を持ってくる。そういう方向で改造していけば、とても面白いと思うんですが。

橋爪：僕も不思議に思うのは、このまちは周辺との関係性を想定して作られたものでもないということです。孤立している。その後の時代でも特徴的な街区割を周辺に拡張するという努力は一切なかった。

東：そう、日本の都市には何でも取り壊して新しく作り変えることばかりで、それは伝統的にもないわけですよ。むしろこれからは、意識して古い町並みに新しいものを複合させていく都市デザインを考えるべきだと思う。

橋爪：周辺のまちと関係なく、そこで完結したヨーロッパ風、アメリカ風のまちを作ってしまう。まちづくりというよりテーマパークの発想ですね。

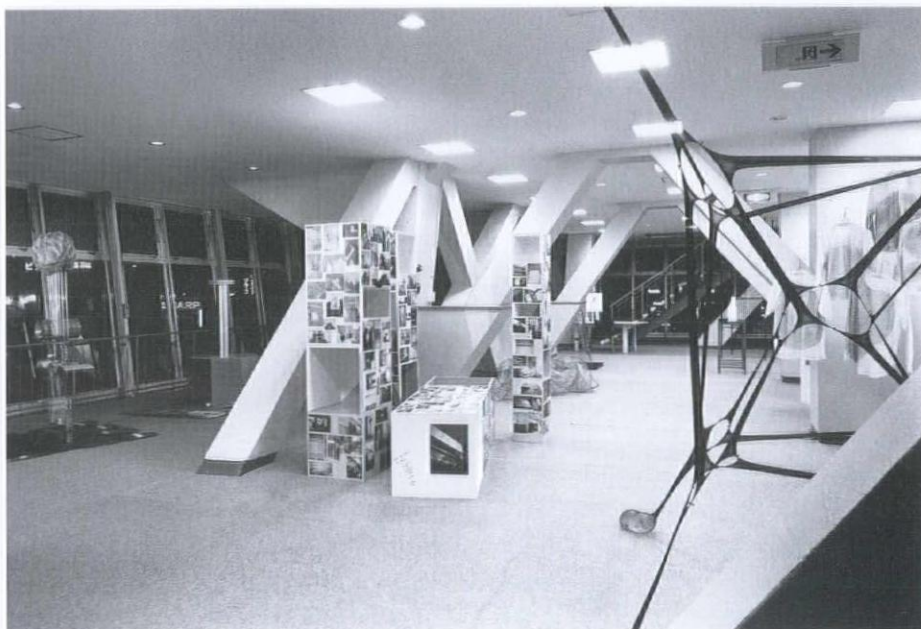
東：計画した人もここで止めようと思ったわけじゃなくて、それは後世の人に託すと言うか、それを受け取った人がそれをどう解釈して周りにいろいろ発展させていくかという問題だから、やはりそれは日本の社会全体の問題にならざるをえないと思うんです。

今、日本の都市デザインの戦後50年というのを考えているので思うんだけど、そういう都市空間の中での個々の建築の在り方というのをこれまで全然考えてこなかった。せいぜいお城がどう見えるかくらいは意識はあったかもしれないけど、町民はそういうことは考えなかった。武士もほとんど専門家ぐらいいでしょう、都市の中の城の位置ぐらいい。それでも都市空間を意識した。だからこれからそういうことを意識した道のデザインの方法とか、ポイントの建築の受け止め方とかをやっていくかないといけな。

だから新世界や通天閣には、単なるタワーというよりは、特に放射状の街路に作ったということも含めた、町の在り方の生きている価値というか、そういうものを見出したい。それで将来はまだ生かし得る価値を持っているんだというような、そういうところではないでしょうか。

[1995年7月20日 於：新大阪シティプラザ]

●あずま・たかみつ／建築家、大阪大学教授
●はしづめ・しんや／建築史家、京都精華大学助教授



「タワーアート in 通天閣：ヴァナキュ
ラーな電腦都市」展

〔会場〕

通天閣3階展示ホール

大阪市浪速区恵美須東1丁目

〔会期〕

1995年8月13日(日)ー8月27日(日)

〔主催〕

タワーアート実行委員会

〔企画〕

橋本 完

〔コーディネイト〕

井上正信、高瀬義夫

〔企画アシスタント〕

山田美穂

〔協力〕

東 孝光、鴻 英良、高橋 享、橋爪紳也、長坂喜代子、
岡村 満、加来富美、俵谷政行、徐 明



「タワーアート in 通天閣」展会場

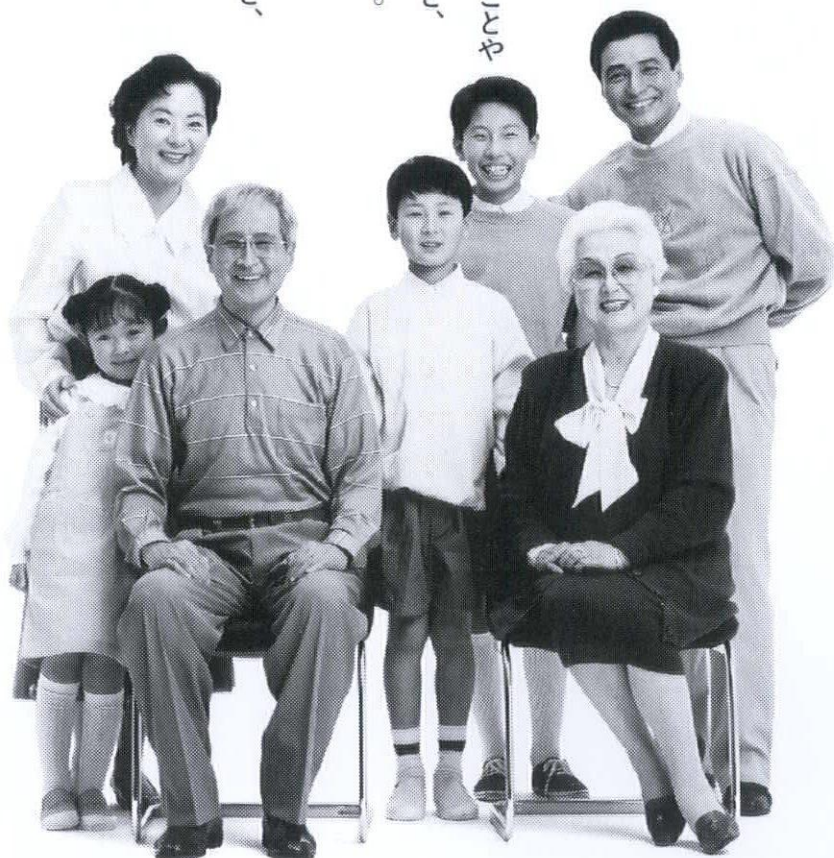
MITSUBISHI

SOCIO-TECHの三菱電機



ずっと身近な ホームエレベーター 三菱から誕生。

見晴らしのいいところに
皆があつまるリビング・ダイニング。
それが主婦の私の夢だったけれど。
重い買い物袋を下げて階段を昇ることや
朝のゴミ出しのたいへんさを考えると、
ちよつと無理かな、なんて思ってたの。
それなのに、
「母さんには、毎日のことだからね」と、
ホームエレベーター付に
してくれたお父さん。
ほんとうに、ありがとう…。



新 登 場



本写真はAタイプです。



家族のこと。これからのこと。
ホームエレベーターにできることが
たくさんあります。

納入実績No.1

平成7年5月現在

ホームエレベーターは三菱。

三菱電機株式会社

お問合せ、カタログのご請求は 三菱電機株式会社 ●東京(03)5573-3789-3796 ●札幌(011)212-3727 ●仙台(022)216-4583 ●埼玉(048)653-0255
●千葉(043)241-8422 ●横浜(045)224-2611 ●新潟(025)241-7221 ●富山(0764)42-2326 ●金沢(0762)33-5506 ●名古屋(052)565-3167 ●大阪(06)347-2271
●広島(082)248-5286 ●高松(0878)25-0006 ●福岡(092)721-2163

apple tomology

トムの時空形象学

連載 ①



戸村 浩

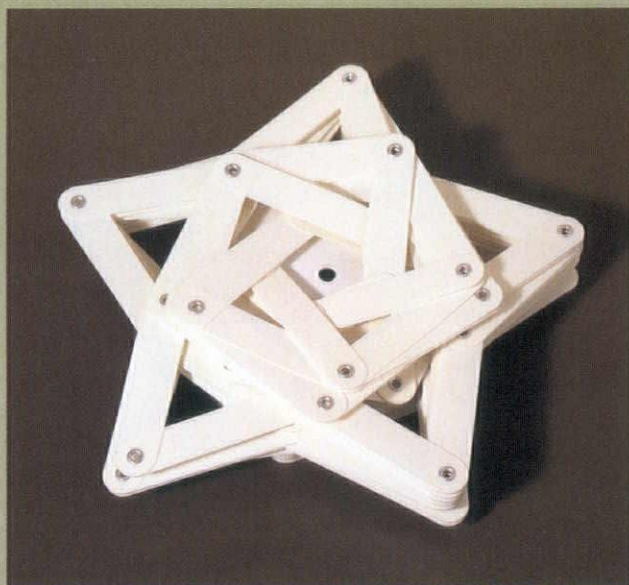
MOVE FORM—DONONACONTAHEDRON



初めに、ページ右上の小さなリングのマークに特と注目あれ。アダムとイブは、禁断の木の実のリングをかじったためにエデンの園を追われ、ニュートンは熟したリングを木から落ちるままにしておいたので、万有引力を発見した。ウィリアム・テルは、頭上に乗せたリングを自由への標的とし、白雪姫はリングを喉に詰まらせた。だが、50年前、我々はその赤いリングに、唇を寄せるだけであった。かくして、35年の前、私は、かじられたこのリングのマークを制作した。物理学のレポートの表紙に付けたもので、副題として「古典力学から量子力

学へ」という言葉を添えたのである。再び、この禁断のリングをかじったのは誰か。それは勿論、アインシュタインだ。

ニュートンのリングはかじられても、人間次元の証しとして、リングの芯は力強く残り、それを中心として電子が回り始めたと、ニュートン力学の偉大さとアインシュタインの偉業とを象徴したつもりである。以来、リングと縁が切れなくなり、かじられたリングは私のシンボルとなって、何かと新しい概念を潜めることの出来たと思われる作品には、このマークを付けることにしている。



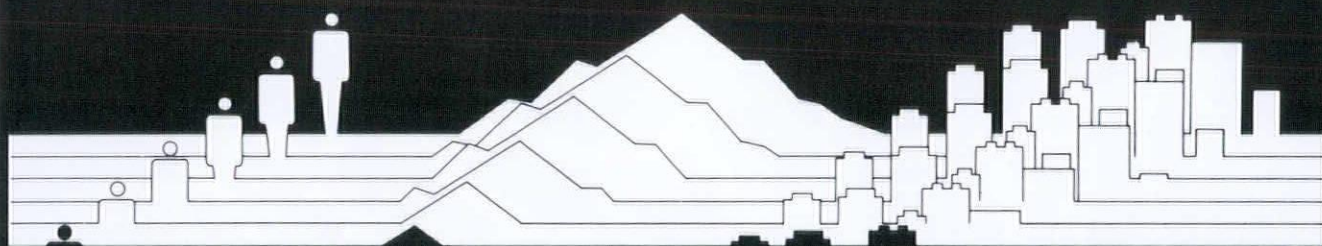
これより、このかじられた禁断のリングを旗印に、時間、空間、人間について考える、トムの時空形象学 apple tomology をひもとこう。この tomology とは、私の愛称である tom と ology (学問) とによる合成語だ。また、ハンガリーの数学者であり、国際シンメトリー学会 (ISIS) の会長であるデニス・ナジが、私の仕事を総じて名付けてくれた造語でもある。位相幾何学の TOPOLOGY をもじった誠に有り難い名称だ。

まずは、私の創作の中でも、最もトポロジカルな作品を紹介しよう。立体から平面へと、折り畳んだり、裏返したり、形態を自由に変化させることの出来る構造体、ムーブ・フォルムと呼ぶ動的な作品である。その MOVE FORM による多面体 DONONACONTAHEDRON (92面体) に光を与えた照明器具だ。内部にたっぷりと光りを蓄え、周囲の空間を大きく包んでくれる発光体。宙空に浮かぶ禁断の惑星のようであり、まるで丸々と完熟し、豊富に蜜を保ったリングのようだ。だから、つかじりついて、形を変えてしまいたくなる。

●とむら・ひろし／造形美術家

SANKI

人を育む。自然を守る。産業を支える。
三機のエンジニアリング技術は多彩。



人間活動のすべてを支える社会環境を一体化させ、
そして調和させようとする三機の総合エンジニアリング技術。

快適で機能的な都市生活、
合理的で先進的な産業活動、そして、それをとりまく自然。

三機は、これらを単独ではなく、
総合技術を通して見つけ、有機的なひとつの流れを実現しようとしています。

多彩な技術を結び、
新たなシステムを展開している三機。



三機工業株式会社

本店 東京・日比谷・三信ビル TEL.(3502)6111
支店 北海道・東北・北関東・東関東・横浜・名古屋・北陸・大阪・
神戸・四国・中国・九州

「カラー原稿が、ファクスみたいに送る」



速い、鮮やか、簡単。カラーコピー機との接続でカラー原稿を高速送受信。

ファインカラートランスファーⅡは、デジタルカラー複写機に接続し、INSネット64を利用して最大A3サイズのフルカラー原稿を、高速に手軽に送受信できる通信装置です。速く、鮮やかに、しかも、簡単にファクス感覚でフルカラー静止画像を転送します。カラー原稿の色味を迅速にチェックしたい、色を見ながらリアルタイムで打ち合わせをしたい、など、さまざまな制作現場の声に応えるとともに、相互のコミュニケーションを密接にします。

- カラーはRGB対応で1670万色。解像度は最高400dpi。鮮やかなフルカラー静止画像の送受信を実現します。
- 送信はファインカラートランスファーⅡからダイヤルするだけ。画像サイズ、解像度、画質の設定もワンタッチです。
- カラー静止画像符号化圧縮方式の国際標準であるJPEG方式を採用。鮮明なフルカラー画像を高速送信できます。
- 国際的な標準インタフェース、SCSIを装備しているので、Macintoshに接続でき、ペーパーレスでの高速伝送が可能です。

ひそやかな空間の詩——ダニエル・ラリューの現代ダンス

ダニエル・ラリュー「モビール／城の鏡」公演
 日時：1995年10月14日(土)7時、15日(日)4時
 場所：グリーンホール相模大野
 企画：製作：(財)神奈川芸術文化財団

1989年にダニエル・ラリューが初来日した時の作品のタイトルは、「建築狂達」というものだった。舞台奥に背景幕を数枚重ねダンスの進行に従って幕を入れ換えてゆく。と同時に床に敷かれたダンスカーペットも徐々に形を変えて広がってゆく。こういった一連の舞台転換の操作すべてが舞台上のダンサー達自身の手でなされ作品構成の一部に組み込まれていた。ところでこの作品は有元利夫へのオマージュというただし書きつきのもので前述の背景幕に描かれた絵は有元の絵からの引用である。

ラリューがある日シャンゼリゼの裏通りを散歩していたままたま立寄った画廊で有元の画集が目止まった。このフレスコ画の日本人の絵には時間が閉じ込められてひそかに息づいているような不思議な静けさがあった。空間の使い方、人物の配し方、背景の色調に共通するある質がある。このミステリアスでシアトリカルな有元の絵に魅了されラリューはその画集を毎日毎日眺めていたという。

背景幕の最初の絵柄はロマン様式の窓わくを模した室内、色は朱が基調。下手に無数の置き時計が並べられた。この舞台の時間を司どるのはダンサー達ということだろうか。その結果舞台の時空は、はるか遠くの時、どことも知れない場に変貌する。朱の衣裳の一人のダンサーが現われるが、彼女の端正で優雅

でひそやかな踊りは背景の持つ質感にとっても近いので両者は互いに溶け合い舞台はさながら生命をふき込まれた絵画になってゆく。次の背景は青い空と白い雲と低い山並み。舞台空間の質や広さが変わる。ダンサー達の表情や感情を抑制したムーブメントがさらにこの空間に広がりを与えてゆく。ダンサー達がただひたすら曲線を描きながら歩き続けるシーンは、時がピタッと止まったような感じと逆に果てしない時の連なりを同時に感じさせこれは有元の絵から受ける印象にとっても似ていた。決して絵をそのまま引用しているのでもなぞっているのでもないのに。そこからたち現われる空気や色調が同じ質を持っているせいだと思う。フレスコ画の淡い色調を身体で表現するということはそう誰にでもできることではない。身体が生々しさを消去することが要求されるわけだから。

さて今回日本で上演される「モビール／城の鏡」は15世紀の代表的な要塞ランジェ城の構造に触発されて作られたものである。ラリューは現在国立トゥール振付センターのディレクターであるが、このランジェ城はトゥール市の近郊にある。この要塞の外部はごつごつした中世的な構造であるのに内部は繊細で洗練された調度でできている。この外と内の質的な違いにとっても興味を持ったという。音楽家、舞台美術家、照明家、ダンサー達とこ

の城を訪れ、ここをとっかかりにして作品づくりに取り組んだ。ところで音楽はトム・ウィレムスのオリジナルであるが、ウィレムスは今世界的に注目を浴びているフランクフルトバレエの専属の作曲家である。話が少し横道にそれるがフランクフルトバレエといえば、バレエ革命の旗手ウィリアム・フォーサイスの拠点であり、フォーサイスといえりベスキンドが登場するのである。それ程フォーサイスとウィレムスは「建築」に魅かれていた。ラリューもまた好んで建築という言葉を使うのである。

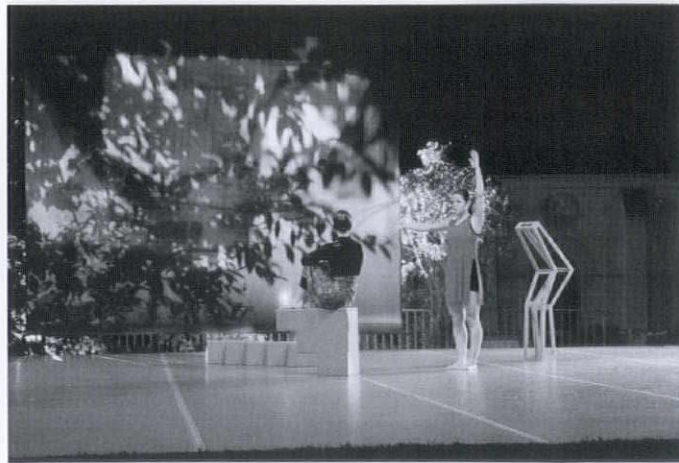
ラリューがダンスで表現しようとしている世界は決して言葉ではカバーできない。物語りや感情や情念が注意深く排除されているのである。人間の持つあらゆる感覚と知覚を総動員して未知の何かを発見しようとしているのだ。ラリューの創造する世界は空間や色彩、音や形、体の描くライン等で構成されているが、その構造を彼は「建築」といつているのである。これらの意味をはく脱された抽象的な色彩、音、形、ムーブメントが、ラリューの手で混ぜあわせられると舞台は豊かな詩の空間に変貌する。不斷に移ろいゆくひそやかな空間の詩を観客は体験するのである。

●佐藤まいみ／プロデューサー



風の善魔—第2部 建築狂達

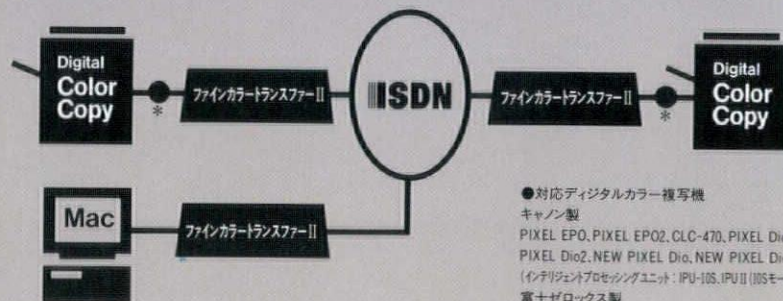
photo: 宮内勝



モビール／城の鏡

photo: Arnold Gröschel

「早くから、話が早い」もう! そんな時代。



●対応デジタルカラー複写機
キヤノン製
PIXEL EP0, PIXEL EP02, CLC-470, PIXEL Dio,
PIXEL Dio2, NEW PIXEL Dio, NEW PIXEL Dio S
(インテリジェントプロセッシングユニット: IPU-10S, IPU II (10Sモード))
富士ゼロックス製
Acolor630/635, Acolor631/636, Acolor930/935
(外部インタフェースユニット: RMICS)
●対応WS/PC-アップルコンピュータ製
Macintosh Quadra シリーズ
PowerMacintosh シリーズ
(OS: 漢字Talk7以降)

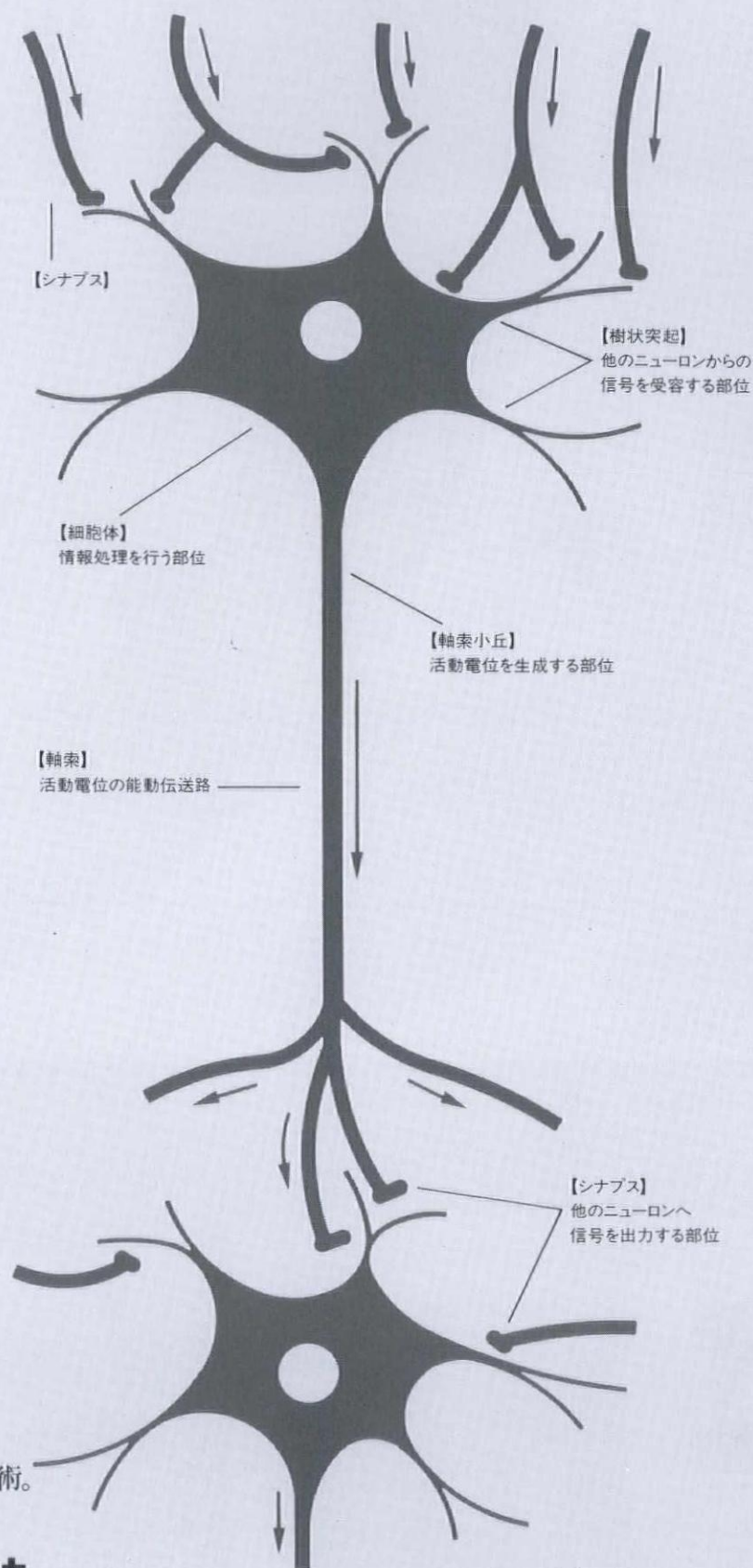
* インテリジェントプロセッシングユニット
又は外部インタフェースユニット



高精細カラー静止画像通信装置
ISDN
ファインカラー転送ファースト II

新 登 場

21世紀の空調は、人間の脳神経がお手本になる。



私たちは「ニューラルネットワーク」理論を応用した、次世代の空調システムの開発に取り組んでいます。誰もが心地よい空気を作り出すことは、本来、極めて微妙なコントロールを必要とします。もともと簡単かつ鋭敏に、人が求める快適さを感じてくれないだろうか。そのテーマに込めるべく、私たちは生体の脳回路に着目。脳の神経細胞が行う高度な学習機能や適応能力を応用することで、エア・デザインング技術の新たな主流となるシステム研究を始めています。

東洋熱工業株式会社 〒104 東京都中央区京橋2-15-12 TEL 03-3562-1351

時代の呼吸に応える技術。



東 熱

『秩序への模索——これからの都市・建築へ向かって』

芦原義信＝著

四六判 182頁

丸善 1648円

「東京という都市が、外国から見ると極めて無秩序に見えるものの中に、実は『隠れた秩序』がある。」

本書は国際感覚豊かな建築家が

21世紀の都市環境を展望し、夢のある都市の実現に向けて

自由闊達な発想をまとめた随筆集である。



『インド地底紀行』

武澤秀一＝著

A5判 110頁

丸善 2369円

地下水のレベルまで地底深く降りて行く

階段状の壮大な建築空間「ステップウェル」の全貌を明らかにした、わが国初の

インド地底建築探訪の記録。

地底空間の新たな可能性に光を照射し、

建築と都市そして環境問題に多くの示唆を与える。



『プライバシーの境界線』

中沢新一＋柏木博＋C・F・ガスバリーニ

＋内田繁＝著

四六判変形 186頁

住まいの図書館出版局 2200円

「プライバシーの境界線」といったテーマは、デザインが捉えなくてはならない

根源的要素のひとつである。

本書はこの根源を見直し、今日失われつつある社会の秩序を再生するための手掛かりを探る。



『TOKYO—A guide to recent architecture』

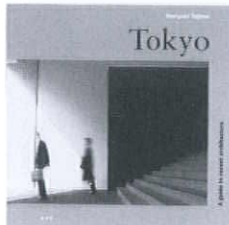
田島則行＝著

A6判変形 320頁

Ellipsis London Limited 2190円

過去10年間に建てられた建築を、社会・文化的なバックグラウンドを考慮した上で、デザイン的内容も含めて紹介する。

80年代から90年代の初めに至る、バブル時代の社会環境や文化的な事象を、建築という媒体を通して読み解く。



『現代建築集成／オフィス・ビルディング』

小倉善明＝監修

A4判 224頁

メイセイ出版 16000円

'89～'94に完成した建築的、内容的にも優れ、

時代性と個性や特色のある、厳選された

最新オフィスビル全26作品を収録した建築作品集。

ヴィジュアルに見せる誌面構成で、写真331カットと図面202点を掲載。多様な執務空間を可能な限り収録し、作品の設計データ、設計コンセプトを記載。



『ゼネコン都市の虚構』

——欠陥ビルはこうしてつくられる』

竹島清＝著

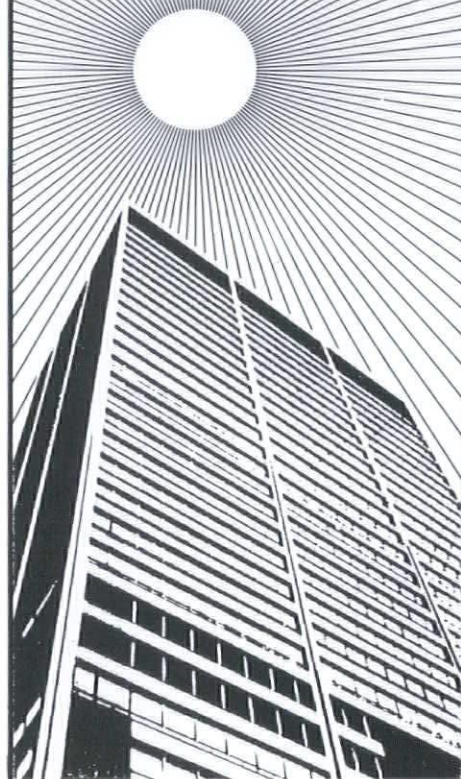
四六判 253頁

DHC 1500円

阪神大震災や韓国のデパート崩壊などの都市災害が相次ぐ中、その危機管理態勢が深刻に問われはじめています。本書では大手ゼネコン設計部に勤務するノンフィクションライターが、都市の直面する問題をつぎつぎと検証していく。



建設を
アシストする
技術で貢献!!



- 一般電気設備工事＝設計施工
- 防爆電気設備工事＝設計施工
- 計装工事＝設計施工
- 電気加熱保温工事＝設計施工
- 静電気接地用リール＝販売

ASTEC
SHOWA ASTEC

昭和アステック株式会社

(旧社名 昭和電機工業株式会社)

取締役社長 浦道雄

- 本社／東京都港区東新橋2丁目7番3号
電話03(3437)3851(代表) 千105
- 支社＝関東・中部・関西・中国
- 営業所＝新潟・鹿島・千葉・四日市・堺
倉敷・岩国・徳山・坂出・松山
新居浜・大分・福岡
- 駐在事務所＝ジャカルタ・テヘラン・タイ
シンガポール・マレーシア

『残像のなかの建築』

——モダニズムの〈終わり〉に

田中純=著

A5判 241頁

未來社 3296円



評者=

浜田邦裕

モダニズム再考

ある意味でこの本を読むのはさわやかな体験だった。それはひとつにモダニズムの建築に対して他には見られなかった見解が披露されていたからであり、もうひとつはこれまでの建築評論家に欠けていた美学的に横断していくパースペクティブをもっていたからであり、さらに著者が建築を前にして得られたインスピレーションが率直に語られているからだと言える。この最後の点に関しては、建築家的視点を建築教育を受けなくとも、著者が評論家として本能的に身に付けたすぐれた直観の力によるのであろう。著者はドイツ文化を領域として、表象文化論的なポジションから建築という表象へアプローチしてきたようだが、狭い建築ディスクールからの建築観が、いかに新鮮であるかいまさらのように感じられる。また、作者である建築家以上によりよく建築を理解すること、つまり解釈することの重要性を思い出させてくれる。

この本では、モダニズムの英雄的な時代の建築、ヴィトゲンシュタインの家、タウトの建築幻想、アインシュタイン塔、ミースのガラスの塔を、イデオロギーとして存在した建築、著者の言葉によれば「残像」のなかにあった建築として解釈している。私の用語で言えば「アンビルトの建築」への関心が、ここに例示された建築群に共通しており、「モダニズム建築そのもののなかにこの実在＝現実性を破綻させる亀裂を見つけだすこと、それによるイデオロギー批判となっている。本書は〈建築は存在しない〉という命題を書きつけるために構成されている」という序文の一節に著者の意図は凝縮されている。

これまで見られなかった見方を教えられるのは喜ばしいことだが、同時に即座には同意しがたい、いくつかの疑問もわきあがってくる。モダニズム建築の重要な倫理的な立脚点として、ヒューマニズムを外すわけにはいく

まい。本書では触れられていないル・コルビュジエは「住むこと」への積極的な関心を、建築言語の定理として用いた。ロースは自由な平面によって生活を流動化させることによって、建築とヒューマニズムの関係にコルビュジエとは異なる関係を築いた。20世紀の建築はヒューマニズムをめぐる、このふたつのアフェクションを中心に、世界中にそのマイナー・バージョンを伝播していったと私は考える。もしモダニズム建築を中心の不在という観点からとらえるとすれば、その中心が何であったのかを考えることによって、見解の差異が生まれるのかもしれない。確かに60年代から70年代にかけてのアヴァンギャルドたちがそのモデルとしていたのがル・コルビュジエであるのに対して、80年代以降の脱構築派が原風景としていたのがミースであることからすれば、今の建築界の関心はミースの再解釈へ向かっているとも言える。

アンビルトの建築はドローイング建築としてジャンル化されるものではなかろう。たとえば、ミースのガラスの高層ビルを「絶対に不可能な、禁止されたもの」と解し、ミースが「このプロジェクトの本質としているのは、おそらく実現不可能性そのもの」と著者が断定するのは何故であろうか。アメリカへ移住した後のビルトされた高層ビルとの関係をいかに解するのは、私が著者に提示する論点のひとつである。だが、ロースの構築手法を「仮面の論理」と呼び、ヴィトゲンシュタインの家の扉と接続詞の関係、アインシュタイン塔を20世紀のカメラ・オブスキュラと見ることも、単純なようでもあるが、率直かつ平明に解釈された好ましい例と言える。

●はまだ・くにひろ／京都精華大学講師、建築家

Metropolitan Library

10月の評者=

橋爪紳也

ジョン・アーリーの著書は、ミシェル・フーコーが示した「まなざし」を鍵概念に用いて、「観光」というテキストを解釈する、知的刺激に満ちた観光論だ。

著者は観光客が好奇心を向ける対象が、じつは記号として文飾された産物であり、なによりも社会的な制度の所産であることを示唆する。そして現状を見渡し、「観光のまなざしのデモクラシー傾向と場の見世物化については増加傾向にある」という言葉で結んでいる。

確かに、近代人として観光対象を探し続けるぼくたちの「まなざし」は、世界のいたるところを観光地化させつつある。1980年代のポストモダンの状況は、ありとあらゆる都市施設、公共建築をテーマパーク化させた。観光のまなざしを納得させるために造形される建築、都市デザインが、あまりにも多す

ぎる。

しかし、その状況をいかに解釈しても、あるいは嘆いていても始まらない。そこに読み取れる「システム」を戦略的に、違う局面に応用することが必要なかも知れない。多木氏と今福氏の対談のなかで、アーリーの著書を引きながら物理的な旅行以上にそこで用いられている方法を、いかに戦略的に援用するかについて議論するくだりに納得した。

たとえば今福氏が指摘するように、話題になった『サラエボ旅行案内』(FAMA編、三修社)などは、ミシュランの形式を模倣することで、内戦下にある都市の危機的状況をラディカルに描き出すことに成功している。また、書名は失念したが、修学旅行生向きに書かれた沖縄のガイドブックを、地域研究の最前のテキストとして読んだ経験がある。

ガイドブックやパスポートというツール、さらに

『バウハウス叢書12 デッサウのバウハウス建築』

ヴァルター・グロピウス＝著

利光 功＝訳

B5判変形 228頁

中央公論美術出版 9500円



評者＝

梅宮弘光

説明の意志——その前衛性

バウハウス叢書全14巻の日本語版がついに完結した。本書はその最後を飾る。くしくも1930年に出版されたオリジナルが結果的に叢書の最終刊となったことと一致する。巻末の「翻訳者あとがき」は、シリーズの他書と同様に日本語版の新たな魅力である。このようななかたちでバウハウス叢書の全体に接することができるようになったことの意義は大きい。

「デッサウの——」というタイトルのもと本書に収められているのは、バウハウス校舎、親方住宅、テルテン住宅団地、公共職業安定所の建物である。いずれもグロピウスが1925年から1928年にかけて設計し竣工をみたものだが、これらは、あの膨大な資料集『Das Bauhaus』の編者ヴィングラーが、グロピウスの設計活動の頂点として指摘するものでもある。

それでは、これはグロピウスの、あるいはバウハウスの作品集だろうか。そうだとするには違和感が大きい。少なくとも、私たちが今日慣れ親しんでいる作品集のスタイルとは印象が異なる。短いまえがきと200点近い写真、要所に添えられた図面とキャプション、確かにこれらは作品集の定番である。にもかかわらず、それらが醸し出す全体の印象は何か別物である。

実は、こうした印象を、私たちは他のところでよく知っている。それは、むしろ取り扱い説明書などに見られるものである。そこではまず全体が示され、部分の名称と働きが解説され、使い方が図解される。本書の構成はこれに近い。航空写真で全体を示しておいて周囲を回り、カーテン・ウォールの全景の次にはその開閉機構の詳細を、陸屋根の効用を説いたあとにはその具体的な使用例を、家具は閉じたところと開いたところを対で……。このようにして、全体と部分の関係や、疑問とその答えが明らかにされていく。

「作品集」と「取り扱い説明書」を隔てているもの。それは説明の意志である。片や宙吊りにした曖昧さを空間の詩学に仕立てるやりかた、片や空間を細分して隔々まで白昼のもとに晒さなければ気が済まないというやりかた。本書の場合、そこにあふれている説明の意志は、収められた建築の前衛性に起因している。この点を、グロピウスは本文で次のように述べている。「ルネッサンスとバロックの典型的建築は左右対称のファサードを見せ……近づいていく観察者に示される光景は平面的、二次元的である。今日の精神から発する建築は……その建築の物体性とその部分との機能を把握するためには、その建築の周りを回って歩かなければならない」。

バウハウス以来の経過を一瞥するなら、結果として、前衛の名は、ドメスティックな視線をまわりつつかせていった「取り扱い説明書」にではなく、いささか高踏的な「作品集」の方になじむようになったようだ。逆に言えば「取り扱い説明書」というスタイルのもつ前衛性に、今日の私たちよりも当時の日本のモダニストがより敏感に反応したとしても不思議はない。本書のオリジナルが刊行された翌1931年1月には、同書をもとにして『建築時代16バウハウス・デッサウ篇』（洪洋社）が出版されているのである。

今日の私たちにとってバウハウスは作品集の中にある。経過した時間は、確かに神話化を推し進めた。しかし、その過程で転倒させられた認識を溯ってゆくならば、この取り扱い説明書然とした書物に前衛性を見い出すことができるだろう。その時に、作品集の幾重にも重なったフレームが取り払われたデッサウのバウハウス建築群が立ち現われてくるように思われる。

●うめみや・ひろみつ／神戸大学講師

は予約、ブッキングなどのシステムを「方法」として認識することから、従来とは違う地域像、都市像をあぶり出す方法が案出できるように思えるのだ。

建築や都市とは直接、関わりがないが、従前にない「まなざし」を提示した成果として、いとう氏、みうら氏の著書の評価しておきたい。独自の価値観と鑑賞方法を動員して、ガイドブックや美術書にはない仏像の「かっこよさ」「おかしさ」を示した、現代版の軽やかな古寺巡礼記である。「仏像」という文節化された対象を、「観光のまなざし」からいったんは解放することに成功している。

評者も古建築の勉強で全国の社寺を旅した時に、同じような発見をしたことをつい思い出した。「古建築」さらには「歴史的街並み」なども、制度が生み出した「まなざし」の所産である。対象化され、文節化されたこれらの記号群が、つねに解き放たれる

機会を待ちわびているテキストであることを、建築史家の大部分は理解していないように思えてならない。

「観光のまなざし」

ジョン・アーリー＝著、加太宏＝訳

法政大学出版局 2987円

「大航海」(No.4)「パスポートが作る王国」

多木浩二・今福龍太＝対談

新書館 780円

「見仏記」

いとうせいこう・みうらじゅん＝対談

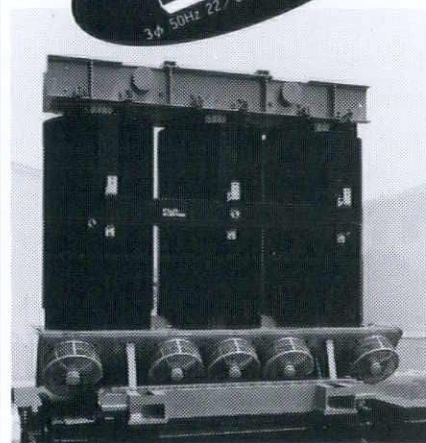
中央公論社 1400円

「秘見仏記」

いとうせいこう・みうらじゅん＝対談

中央公論社 1500円

国内最大級の モルトラ完成



ビル設備、工場設備の電気設備のインテリジェント化、近代化に欠かせないモールド変圧器。この度、富士電機では高信頼性、コンパクト化の国内最大容量のモールド変圧器を完成しました。

富士電機

富士電機株式会社
〒100 東京都千代田区有楽町1-12-1
(新有楽町ビル) ☎(03)3211-7111

お知らせ

石山修武展 「まちのスタイル いえの型紙」

石山修武の活動は建築家としての設計にとどまらない。著作から地域活性化まで幅広い活動を展開している。現在進行中のプロジェクトを集め、96年石山住宅/建築の「型紙」を一堂に紹介する。

作品展
会期：9月23日(土)～10月29日(日) 12:00～18:00
会場：GAギャラリー
渋谷区千駄ヶ谷3-12-14
講演会
日時：10月13日(金) 6:30～
会場：GAギャラリー
入場料：1000円(先着150名)
問い合わせ：GAギャラリー 担当/後藤
Tel: 03-3403-1581

建築デザイン会議'95IN YOKOHAMA 「建築の想像力 ——未来空間ミュージアム宣言」

日時：10月21日(土)～10月22日(日)
会場：横浜市開港記念会館、パシフィコ横浜メインホール、他
申し込み・問い合わせ：建築デザイン会議'95運営組織(事務局) デルファイ研究所
Tel: 03-3222-5031 Fax: 03-3222-5033

東京芸術大学美術学部主催 「自画像としての椅子」展

建築家学生による家具作品展
会場：東京芸術大学美術学部芸術資料館ギャラリー
台東区上野公園12-8
会期：9月26日(火)～10月6日(金) 10:00～17:00
問い合わせ：東京芸術大学美術学部建築科教官室
Tel: 03-5685-7618 Fax: 03-5685-7775
担当/乗富、中田

東西アス協組建築講演会

東京
講師：長谷川逸子
テーマ：「コミュニケーションが開く建築シーン」
日時：11月16日(木) 18:30～20:30
会場：有楽町朝日ホール
東京都千代田区有楽町2-5-1 有楽町マリオン11階
Tel: 03-3284-0131
大阪
講師：新居千秋
テーマ：「建築の境界～文化運動としての建築～」
日時：11月29日(水) 18:30～20:30
会場：朝日生命ホール
大阪府中央区高麗橋4-2-16 朝日生命館8階
Tel: 06-202-3919
申し込み・問い合わせ：東西アスファルト事業協同組合 Tel: 03-5821-7712 担当/牧

安藤忠雄建築展 「明日へ——震災復興と大阪湾ベイエリア」

震災復興と大阪湾ベイエリアプロジェクトをコンセプトに、安藤忠雄が深い関心をもってきた「都市の生活と文化」のありようと問うとともに、「安全で快適な都市」についての氏の考え方を示す展覧会。

作品展
会期：10月14日(土)～11月26日(日) 10:00～20:00
会場：サントリーミュージアム Tel: 06-577-0001
大阪市港区海岸通1-5-10
入場料：一般950円、学生650円、中学生以下350円
講演会
日時・会場：①10月11日 18:30～20:30
御堂会館 南御堂大ホール Tel: 06-251-5820
②11月7日 18:30～20:30
日本都市センター Tel: 03-3265-8211
定員：900人(参加無料)
問い合わせ：小泉産業広報室 担当/塚本
Tel: 06-262-1369

第7回関西4大学合同建築展 ——大阪芸術大学・京都精華大学・ 京都造形芸術大学・京都芸術短期大学

展覧会
テーマ：「復活」
会期：10月18日(水)～10月22日(日) 10:00～18:00
会場：神戸レガッタ、アンド、アスレチック倶楽部
神戸市中央区八幡通2-1-20 磯上公園内
シンポジウム
パネラー：野田俊太郎・吉松秀樹・遠藤秀平、他
司会：鈴木隆之
日時：10月21日(土) 16:00～19:00
会場：神戸レガッタ、アンド、アスレチック倶楽部
問い合わせ：京都芸術短期大学造形芸術学科インテリアデザイン研究室 Tel: 075-791-9121

大林組寄附講座 「日本近現代建築史」

①テーマ：「日本近代建築史における早稲田」
講師：近江栄
日時：10月12日 13:00～14:30
②テーマ：「今井兼次」
講師：今井兼介
日時：10月19日 13:00～14:30
③テーマ：「木村幸一郎」
講師：木村健一
日時：11月9日 13:00～14:30
④テーマ：「建築史学と早稲田」
講師：西和夫
日時：11月16日 13:00～14:30
⑤テーマ：「郊外型住宅と早稲田の系譜」
講師：山口廣
日時：11月30日 13:00～14:30
会場：早稲田大学理工学部55号館S棟 02-04教室
問い合わせ：早稲田大学理工学部建築史研究室
Tel: 03-5286-3275 担当/石原

表情多彩



照明は空間づくりの重要なポイント。
人々に、常に気持ちよく空間を利用してもらいたい・・・。
山田照明ではさまざまな条件やニーズを満たすために、
多種多様な照明器具を用意。ベストなあかりで、
ひとつひとつの空間を、個性的・機能的に演出し、
表情多彩な空間創造を力強くバックアップしています。

紀尾井ホール（東京）
設計監理：新日鐵・山下設計設計共同企業体
照明造形デザイン／設計：多田美波研究所

山田照明株式会社

本社／ショールーム 〒101 東京都千代田区外神田 3-16-12 TEL.03-3253-5161 横浜支社／ショールーム 〒220 横浜西区南幸 2-20-1 TEL.045-311-1731
仙台支社／ショールーム 〒980 仙台市青葉区二日町11-11 (ANDOビル) TEL.022-267-1630 大阪支社／ショールーム 〒542 大阪市中央区日本橋 1-21-23 TEL.06-643-3421
福岡支社 〒810 福岡市博多区店屋町 8-30 TEL.092-282-7635 名古屋支社 〒460 名古屋市中区 5-16-14 (新東陽ビル) TEL.052-252-5161 札幌営業所 〒003 札幌市白石区菊水三条 4-2-3 TEL.011-811-2215
北関東営業所 〒370 高崎市緑町 3-14-8 TEL.0273-63-1442 千葉営業所 〒260 千葉市稲毛区緑町 1-25-14 TEL.043-244-2540 静岡営業所 〒422 静岡市稲川 3-12-4 (山中ビル) TEL.054-283-9788
広島営業所 〒730 広島市中区十日市町 2-2-34 TEL.082-293-6119 鹿児島営業所 〒890 鹿児島市上之園町 4-14 (東和ビル) TEL.0992-58-0031 秋田出張所 〒010 秋田市山王 6-8-6 (アカムラビル) TEL.0188-65-2550
宇都宮出張所 〒842 宇都宮市海道町 818-2-1002 TEL.0286-60-1381 長野出張所 〒380 長野市三輪 2-9-27 TEL.0262-43-8420

“digit”展——デジタルな非物質性

“digit” 1995 SPIRAL

会期：1995年8月25日～8月29日

会場：スパイラルホール

ここ2、3年の間に、パソコンのCPUの性能が飛躍的に向上し、その操作性が格段に進歩してきている。建築の設計の分野においても、今までの製図版と定規によるドローイングからコンピュータを使った作業が増えてきている。建築の分野だけでなく、グラフィックデザインや音楽など様々な分野でこのような状況が進行中であることは、近頃マルチメディアという言葉がもてはやされていることから見てとれる。物質がデジタル化され、デジタルの情報がコンピュータに集まり、ネットワークを通して情報のやりとりが行なわれる。これらは、すでに日常の道具として我々の生活に定着しつつある。デジタル化された情報は物質性を伴わず、ヴァーチャルなものというイメージがあるが、情報検索やオンラインショッピングなど現実の生活の中でデジタル化された情報が大きな位置を占めるようになると、デジタルがヴァーチャルだけでは割り切れず、それが現実のものとなりつつある。

今回の展覧会はそのような状況を捉え、形にして見せたものである。展示内容は、現在

日本でパソコンを使って活躍している作家が、それぞれの作品を一同に展示するというものである。作品は音と映像で全てデジタルなものである。会場内は天井から半透明の白い布が垂れ下がり、そこに映像が写し込まれる。映像は布を透過し、別の布で像を結ぶ。布は会場内の空気を察し、わずかにゆらめいている。その中に、モニターが配置され、10人程の作家の作品が写し出されていた。モニターは別の布に包まれ、ブラックライトで薄明るく光っている。ここには物質性のある展示物というものは存在しない。すべてがデジタルに処理された映像のみが作品として空間に映し出され、展示されている。そのような空間が効果的に演出されていた。デジタルな情報を取り去ってしまえば、何も残らないという仕組みになっている。会場構成はARXの山口隆が監修した。非物質性を全面に押し出し、物質性をことごとく排除しようと試みられている。展示物が物質性を持たないということは、ひとつしか存在しないというオリジナルであることが意味をもたず、同じものがどこへ

も簡単に展示することが可能である。

ここで展示されている作品はイメージが先行している。そしてそれを見る人々はそれぞれに触発され、そこから新たなイメージを喚起したに違いない。フィクションがフィクションを生みだし、気が付いたらそれは現実のものとなっていたという感覚、現実と虚とを重ね合わせたような空間がこの展覧会場から感じられた。

情報のデジタル化は様々な可能性を秘めている。時間、空間を超えて新たなコラボレーションの場をつくることも出来そうである。北京、清華大学で開催されるARXの展覧会でも、模型とドローイングにあふれた従来の建築展ではなく、物質性を排除した会場構成がとられる予定である。またインターネットを接続し、世界と展覧会場をダイレクトに結びつける試みもなされる。今後、世界中のネットワークを通じた同時多発的な展覧会が世界各地で行なわれるようになるであろう。

●北村淳／建築家



Photo : S. Toyonaga

『E.T.C.J.A.——現代日本建築における新たな潮流』マレーシア展 アジアの隣人たちをもっとよく知るために

E.T.C.J.A.展マレーシア

会期：1995年7月15日～8月15日

会場：マレーシア、クアラルンプール、P.A.M.センター

主催：マレーシア建築家協会

出展および講演者：岸和郎、北山恒、トム・ヘネガン、内藤廣、原尚、古市徹雄、古館克明、村松伸

タイとマレーシアは隣国同士であるにもかかわらず、私自身を含む多くのタイ人が南の隣人について知っていることはあまり十分とは言えない。近年になって、諸外国、特に日本からの東南アジア地域に対する関心が高まってきたが、当の我々としては「なぜ今突然、『アジア』なのか？　そもそも、急速な経済成長を願う以外にどんな共通点があるというのか？」と問わずにはいられない。

このほどクアラルンプールで、P.A.M. (Pertubank Akitek Malaysia——マレーシア建築家協会) の若いメンバーと日本の若手建築家たちの協力で開催された作品展および講演会は、この疑問への答えを探る試みとなった。今回のクアラルンプールにおける作品展および展覧会は、昨年9月のベトナム・ハノイ展に引き続いて開催されたもので、『Emerging Trends in Contemporary Japanese Architecture——現代日本建築における新たな潮流』と題した展覧会と、日本の建築家たちによる7つの講演と討論会、そして『Asian Counter Point——混沌の中のアジアの秩序』と題するアイデンティティをテーマとした学生コンペで構成された。

展覧会では、内藤廣、原尚、北山恒、岸和郎、トム・ヘネガン、および古市徹雄といった日本の建築家の作品とともに、建築史家の村松伸がアジアの現代建築事情についてのコメントを寄せ、また古館克明撮影の東京の写真も展示された。P.A.M.はマレーシアの若手建築家たちにも、日本側の作品と対に並べる展示作品の出品を呼びかけた。

会議は、村松氏によるアジアの現状についての講演で始まった。彼はまた、明らかに我々全員に付きまとっている「アジアのジレンマ」、すなわち貧富間の所得配分の問題、建築教育における植民地化の問題——アジアの植民地

国がいかに解放を喧伝しようと、優秀な学生は西側諸国に送り込んで「教育」を受けさせるを得ないのが実情だ——そして、メディアの西側指向の問題等を指摘した。これらはアジアの国々が共に抱える難問であり、従って、せめて一緒に集って解決策を探ることのできる問題といえよう。

第1日目は、北山、原、ヘネガン各氏の講義であった。彼らは、言葉よりできるだけスライドを多用し、所々でプロジェクトへのコンセプト的なアプローチの仕方や考え方についての解説を加えるようにして講義を進めた。2日目は古市、岸、内藤各氏の講義とコンペの審査であった。聴衆は日本の〈鯨と海の科学館〉や〈海の博物館〉といった、我が国の人々が今まで聞いたこともないような種類の建物や、それらの作品すべてに共通する高水準の建設技術、精密な職人技などに目を見張ったようである。

ただ残念ながら、学生コンペは期待したほどには参加者が集まらなかったようで、アジア・カウンターポイントの「展望」として提示できるものはあまりない。また講義に参加した学生の数もあまり多くはなく、マレーシアの建築家のほとんどが国外で学んでいる事実と、学生組織そのものがまだまだ成長過程の段階に過ぎないことを、改めて思い知らされた感がある。

ところで聴衆は、これら日本の若手建築家の作品を、主に横や磯崎や安藤といったちょっと上の世代と関連づけて捉えたようである。そのためほとんどの作品は、モダニストのヴォキャブラリーやルーツをもとに精密さを目指して展開されたテーマやスタイルに沿った「ダイ・ハード的（容易には減じない）モダニズム」の力作あるいはバリエーションのひとつと見なされたようだ。もうひとつ際立っ

た点は、どうしても人々は、日本の現代建築に伝統建築の多大な影響を読み取りがちだということである。実際何人かの日本の建築家はそのような影響を認めているが、それにしても東南アジアの我々としては、確かに、日本の伝統建築をロマンチックに捉えすぎ、現代の作品を伝統的な作品と切り離しては考えられない傾向にある。日本の建築家たちがいかに国際的に有名になろうと、彼らの現代史の道筋は我々にはまだよく知られていないのである。もしこれらの建築家たちが「新たな潮流」であるのなら、我々としては彼らが一体「どこから、あるいは何から」生まれつつあるのかも知りたいのだ。そのためには簡単な歴史的紹介があれば、外国の聴衆が作品をより深く理解し、楽しむ上で大きな助けとなるだろう。

このイベントと展覧会は来年度、バンコクで開催される予定だが、そこでは例えば学生ワークショップといったもっと相互作用的な形で、またより明快な目標のもとに活動が行われることを切に希望する。というのも、タイ国のアイデンティティを求めて精神分裂症的な探究を行った後に、今度はアジアのアイデンティティを見出す、あるいは作り上げるなどというのは、単にまた同じ決まりきった展開になるだけだろうからである。アジアの友人たちについてもっと理解を深めること、そして相互に理解しあうことは、出発点としては非常によいのではなかろうか。何といっても「太平洋の時代」の未来は、我々がアジア諸国の類似点だけでなく相違点も同様に、敬意を持って受け入れながら生きていけるかどうかにかかっているかもしれないからである。

●クラバット・ヤントラサ／東京大学建築学科香山研究室

(翻訳＝尾崎澄子)



P.A.M.センター



P.A.M.センターの展示風景



学生コンペの審査

情報とエネルギーの ネットワークをつくる 日立電線



情報やエネルギーを伝える技術を中心に、
人と人、人と世界を結ぶグローバルなネットワークをつくり、
「私達の住む地球をまあるくつづめ」。日立電線は、いま、
快適で豊かな暮らしの創造をめざして多彩な活動を展開しています。
21世紀に向かって、ますます進展する情報化社会——
たえず革新を続ける情報・通信、エレクトロニクス、エネルギーの世界で
ひとつの大きな役割を担っているもの——
それは、ハイテク技術を駆使した日立電線の製品です。

日立電線株式会社 東京(03)3216-1616

お知らせ

「O.M.A. IN TOKYO —レム・コールハースと公共建築の場」展

1994年11月から1995年1月まで、ニューヨーク近代美術館で開催された「O.M.A. AT MoMA: REM KOOLHAAS AND THE PLACE OF PUBLIC ARCHITECTURE」の東京巡回展。展示は会場内と複数の屋外インスタレーションで構成される。展示は会場内と複数の屋外インスタレーションで構成される。屋外インスタレーションは「都市を舞台とした展示」をコンセプトに、O.M.A./コールハースの都市に対する強烈なメッセージとなっている。

展覧会

会期：10月20日(金)～1月20日(土)

11:00～19:30 (日曜、祝日休館)

会場：T.N.プロープ (入場無料)

港区六本木5-14-35 Tel: 03-3505-8800

講演会

講師：レム・コールハース、

テレンス・ライリー (ニューヨーク近代美術館

チーフキュレーター)

日時：10月21日(土) 14:00～16:30

会場：ラフォーレミュージアム飯倉

港区麻布台2-4-5 メソニック39森ビル

定員：500名 (入場無料・当日先着順)

問い合わせ：T.N.プロープ 担当/伊藤、藤山

Tel: 03-3505-8800 Fax: 03-3505-8810

日本の建築家による椅子展

会期：第1回 9月5日(火)～9月20日(水)

第2回 11月7日(火)～11月22日(水)

11:00～18:00 (日・月曜、祝日休館)

会場：ギャラリーサカ

港区赤坂9-5-12 Tel: 03-3401-6446

第1回出展建築家：坂倉準三 芦原太郎 新居千秋

石上申八郎 伊丹潤 内井昭蔵 奥村昭雄

押野見邦英 菊竹清訓 北村修一 黒川紀章

黒川雅之 柴田知彦 長大作 園紀彦 戸田一郎

中村好文 坂茂 水谷莊市 横河健 若林広幸

問い合わせ：ギャラリーサカ Tel: 03-3401-6446

多摩美術大学 建畠ゼミ主催 公開シンポジウム

テーマ：「展覧会」とは何か—肥大する欲望への問い

日時：10月6日(金) 17:00～19:00

会場：多摩美術大学上野毛校舎講堂

世田谷区上野毛3-15-34 03-3702-1141

講師：丹生谷貴志 岡崎乾二郎 粉川哲夫 建畠哲

定員：500名 (参加無料・予約不要)

問い合わせ：多摩美術大学芸術学科研究室

八王子市鐘水1723

Tel: 0426-76-8611 担当/鳥光



からだのしくみは
「骨格と筋肉」だけでは
ありません。

神経もあれば、血管もあり、あらゆるものが総合的に働いてこそ、一個の生体としての機能が発揮できるのではないのでしょうか。

ビルや建造物の場合も、これと全く同じことで、鉄骨やセメント、石材、の組合せだけでは、外見上如何に立派でも、それは単なる物体の集合です。やはり神経や血管と同じく、電気、水道、ガス、空気調和などがその機能を充分発揮できてこそ、素晴らしい居住性が生れると思います。

しかし……

それだけで終わったのでは、まだ多くの欠かんが残っております。ところがこれ等の機能を更に無駄や損失のないよう活用できたとしたら、もっと素晴らしいことではありませんか。

集中管理或は集中制御によって……省力、省エネルギー、省経費をはかることこそ、最も完備な、からだのしくみ、つまりビル全体の機能をフルに発揮できるのではないのでしょうか。

集中管理装置
NESCA



川崎電気株式会社

本社 千999-23 山形県南陽市小岩沢225番地
電話0238(49)2011大代表
営業本部 千108 東京都港区芝浦3丁目7番4号
電話03(3454)5141大代表

Kinden
CORPORATION



都市の鼓動が、
聴こえますか。

COMMUNICATION
情報

ENERGY
エネルギー

ENVIRONMENT
環境

現代社会の知力である「情報」。都市の動脈ともいふべき「エネルギー」。そして人が快適に暮らし、働くための「環境」。都市はいまやそのどれ一つが欠けても機能しないと言えるでしょう。私たちきんでんが柱として取り組んでいる分野は、まさにこうした都市に生命を吹き込むもの。たとえば、光通信やCATVなど、マルチメディア社会を実現する情報通信ネットワークシステムの構築。住まいやオフィスの快適性を向上し、心を豊かにしてくれる環境づくり…これらは、これからの都市づくりに欠かせないものです。現代の都市をいきいきと息づかせるために。未来の都市がさらに豊かで創造的なものであるために。私たちきんでんは総合設備エンジニアリングをさらに発展させたいと考えています。人・都市・地球のためにできること。きんでんは、あなたのそばで考えます。

都市に生命を吹き込む技術——きんでん

株式会社 **きんでん**

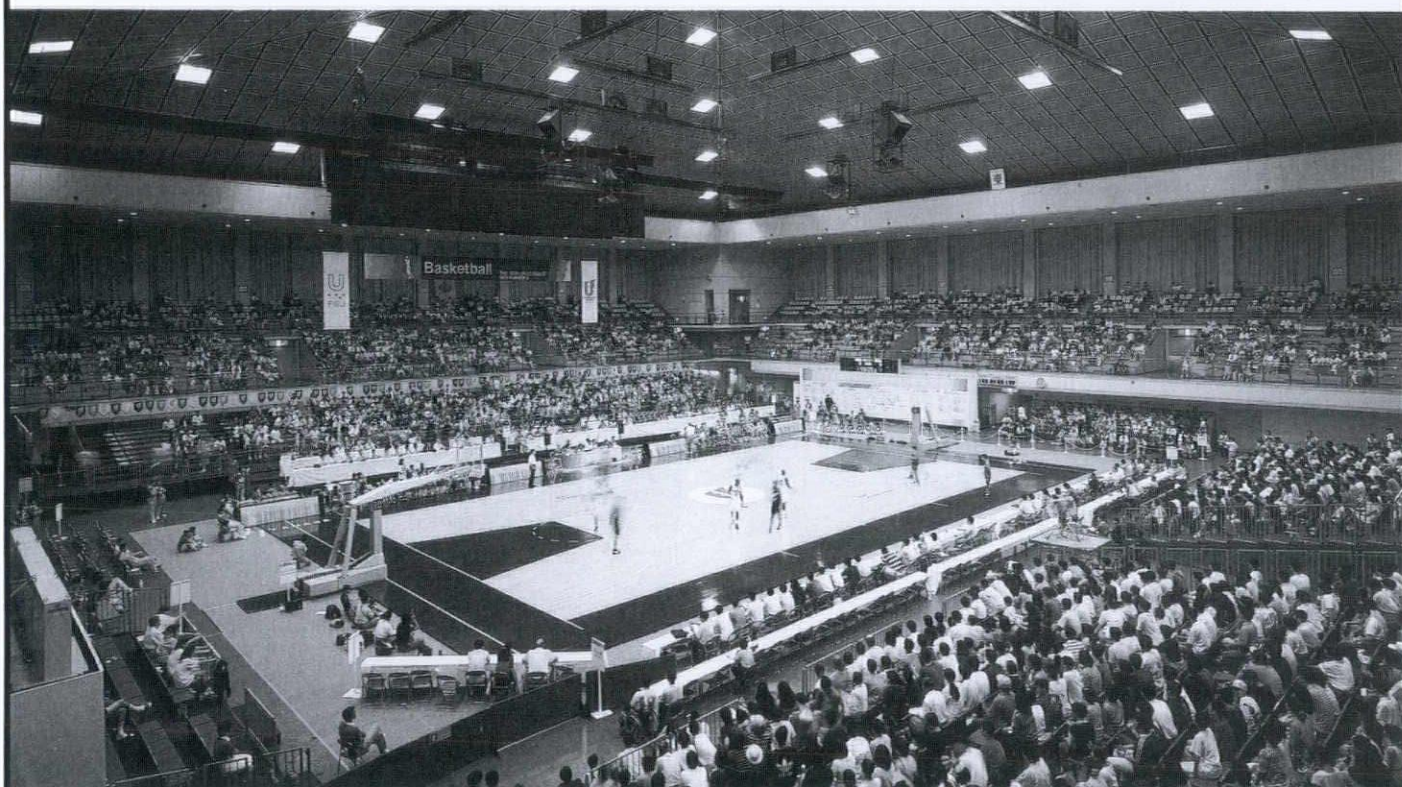
本店 大阪市北区本庄東2丁目3番41号 〒531
東京本社 東京都品川区東五反田5丁目25番12号 〒141

いいものだけを世界から



いま開幕、 スポーツ ニューステージ。

多目的スペースがスポーツアリーナに一変！



ロビンス・オールスターは、世界中で広く使われているポータブル・スポーツフロア・システム。本格的なフローリングならではのボールのバウンドの正確さと均一な反撥音はもちろん、プレーヤーへの衝撃を吸収する弾力性や永年の使用にも反りや狂いを起こさない高品質設計。独特のジョイント・ロック方法により、組立て・取外し

はきわめて短時間。しかも収納性もコンパクト。多目的コンベンション施設、インドアスタジアムなど多目的スペースに、北米産ハードメイプルによる本格的なスポーツアリーナ機能を付与することができます。ロビンス・オールスターは、バスケットのみならず、バレーボールやバドミントンにも使用することができます。

ロビンス

JBA・NBA公認コート

オールスター

ポータブル スポーツフロア システム

good new days
人間らしい楽しい未来を

ヤナセ

総輸入元 株式会社 ヤナセ
商事事業部

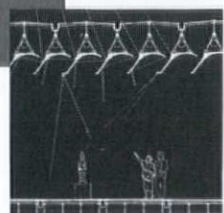
東京都港区芝浦一丁目6-38 〒105
TEL. (03) 3452-4311

本社 ■ 大阪支店 ■ 名古屋支店 ■ 福岡支店 ■ 札幌支店 ■ ヤナセ東北 ■ ヤナセ静岡
03(3452)4311 ■ 06(488)9801 ■ 052(241)2531 ■ 092(522)1331 ■ 011(231)2313 ■ 022(221)4171 ■ 054(261)4105

資料請求券
SD

詳しい資料を差しあげます。ハガキに資料請求券を貼付のうえ、ヤナセ 商事事業部までお送りください。

田中大介
永山明男
堀井義博
丸橋浩
山口賢



現代建築の屋根のコンテクストはディテールの観点から見て如何に再編可能であるか。というのが、今回の課題である。ところで、ディテールの観点で想定される部材のカテゴリーは、基本的には部位のカテゴリーと密着一体のものではない。なぜなら、ディテールを構成する部材のそれぞれは、例えば、硝子やH鋼や高力ボルトといった部材は、何ら部位との呼応関係を持たないからである。しかし、この課題が自然に見えるのは、それはひとたび屋根や壁といった部位が決まれば、部位に要求される常識的なコンテクスト（イドラといっても良い）が瞬時に想定できてしまうからである。つまり、水密性や断熱性、構造耐力といった諸機能の総和としての屋根の機能がある限り、屋根のディテールの集合はそれぞれの機能により限定されるディテールの集合より、より狭いということになる。例えば、水密性という機能だけを満足するディテールは、屋根という諸機能の総和としてのディテールよりも当然括りを持っている。だからこそ、屋根と呼びにくい、諸機能の部分集合を満足するものは、新しい屋根を造る契機となり得る。

っている！）この例とは反対に、各論の堀井氏が紹介する「ごっつい風船」は、断熱層が他の層に優位に立ちすぎている例であってまさに、ごっついわー、の世界である。風船という層の概念からはみ出るものが挿入されているところから、屋根の浮上というとんでもないアイデアに繋がっているところは見逃せない。（詳細はp.119）さらには、1回目の「表面のディテール」で述べたように、薄皮のテクスチュア（界面の状態）やその素材が、新しいテクストを発生しうる可能性もある。山口氏の紹介する「モノコック」はほぼ全ての薄皮の機能を1枚の殻に圧縮する事で、余条件に解答している。（詳細はp.117）仮に、キャンピングカーでなくとも、フューチャーシステムズは同様の解答をしている。彼らのプロジェクトの事務所建築BROBの場合、硬い殻1枚のボディに床が内部で宙吊りにされる。殻の欠点は開口が困難なことで、それがBROBの水玉模様のような多孔質の特殊な外観を生む。まとめていえば、メニルコレクション美術館の場合、断熱層を抜き去ることにより、そして、「ごっつい風船」の場合、風船の層を追加することにより、そして「モノコック」の場合、全ての層を殻で兼ねることによって新しい屋根を造る可能性を示してくれる。

結論をいえば、丸橋氏の指摘する通り、完全な屋根

Theme: ディテール研究 その3「屋根」

というイドラに対し、不完全な屋根を想定することが、そしてその不完全さを補う建築的操作に集中することが、情報量の多い魅力的な屋根を造り出すことになるのではないかということである。

このように感じるのは、これらの例が私たちが建築を造る時の処方箋になり得ると思えるからであるが、それにしても、ディテール研究で拾おうとしていたものは恐らくこの処方箋であったように思えてきた。建築をオブジェクティブに捉え、空間ではなく物体であるとすることは、建築が製作行為である限り、自然なことではないかと考える。その時に問題となるのは、どのような物体を想定するか（選ぶか）ではなく、想定した物体をどのように操作するかである。堅いモノコックの殻に穴を穿つ場合に、堅いモノコック自体が重要なわけではない。どのような穴になるかが重要なのである。操作論と手法論の違いは物体との密着の度合いである。手法論がより物体との距離から遠ざかって、人間が享受しうる空間の意味に変移していけば、修辭論となっていくが、逆に、物体との距離を縮め、物体での思考を論ずることができればそれは操作論へととなっていくはずである。物体と質量の操作を建築の効果へ転化する手法の研究＝オブジェクト指向の操作論が必要であることを痛感した。

今井公太郎

海外建築情報リミックス

床や壁や屋根のような部位はすべて、極めて単純化して言えば、皮の積層である。特に屋根の場合、その特性が普遍化されており、強い文脈の内部を作っている。この点は開口部回りや天井のような平面内の構成を特性とするディテールの文脈とは対照的である。皮の積層の問題は、構成のレベルでは、構造、断熱、耐水等に対応する層の順列組み合わせの問題に置き換わる。つまり、新しい屋根を造り得る機会は、順列組み合わせの可能性と新しい薄皮要素の可能性の中にある。

ここで、適当な作品を、いくつか挙げてみよう。レンゾ・ピアノによるメニルコレクション美術館の場合、特徴はフェロセメント性のへの字型の反射板に圧縮されている。これはリーフ（葉）と呼ばれ、面的なトラスの構造層に吊り下げられ、1枚のルーバーの層を構成する。吸気用の配管はトラス内部に納められる。その上部には建物全体にかけられたガラスの薄膜があり、自然光は反射板とボルトを兼ねたリーフにより調整されて、室内に導かれる。つまり、採光という一般的にはトップライトに集中する機能を屋根面全体に拡大するという大胆の極致をサラリとやってのけているところが素晴らしい。克服しなければならない構造、設備と光の取り合いの問題を、天井面を一切造らないで、規則的にむきだしにすることで回避している。しかし、積層される要素は、光を下まで届けるために、硝子を除くすべてが乾式のすきまだけのものである。これによって、断熱、耐湿度などの実現できない性能は屋根以外の技術的解決を迫られているのである。（ちなみに新鮮な空気の供給は床下から行

屋根の文脈は、計画的には、建築の部分と全体についての位相関係で語るのが妥当である。しかし、ディテールの視点では、屋根を構成する皮膜の積層に注目しなければならない。標準的な皮膜の積層があると仮定するなら、それを破壊し新たなテクストを生み出すアイデアが何なのかを探求しなければならない。

コア・スタッフ'95
今井公太郎
岩下暢男
アトリエ・ワン
曾我部昌史
山本想太郎

サンディエゴの青い海を滑るように渡っていく大型の競技用ヨットは、美しく滑らかな船体と大きく風を孕んだ帆がとても印象的だった。世界的なヨットレース、アメリカズカップに出場した競技用のヨットである。ジェット機やレーシングカーと同じように、速いものはみな美しい形をしているが、競技用のヨットも同じである。そして特にアメリカズカップなどに出場するようなものは、数億円の開発費と最新のテクノロジーを投入して作られ、各部分の設計や素材の選定に余念がない。まず、帆の形状。的確に風を捕え推進力に変換し、また急なターンの時や、失速時にも迅速に対応できる俊敏性を兼ね備えたもの。次にマスト。強度が厳しく要求され、なおかつ軽く、急激な動きに対応できるものが必要になってくる。そして一番重要なのが船体である。流体力学に基づいた滑らかな曲線は、抵抗を少なくスピードを出すためには必要不可欠である。コンピュータを駆使し、幾度の実験を繰り返して描き出される船体は、速さに対する追求の結果生まれた、合理的な曲線美である。この曲線美を支える構造はかなり特殊なもので、飛行機やF1のレーシングマシンにも採用されているモノコック構造というものである。軽量で、なおかつ波の強い衝撃や水圧に対して、船全体で耐えることができる。このようなモノコック構造とは、簡単に言えば卵の殻のようなものである。卵の殻の厚みは約0.25mmしかないが、50gもある中身を支えることができ、また力の加え方によってはかなりの衝撃にも耐えることができる。モノコック構造の特徴を簡単に整理すると以下のようになる。

①外力の集中を避ける滑らかな球形。②軽量で予備浮力が大きい。③その表面に継ぎ目や凹凸がない。④軽量のため慣性が少なく衝突しても衝撃が少ない。⑤構造自体が形態になる。⑥卵の殻のような一体構造による弾力のある全体などである。そして、このモノコック構造に使われる材料はFRPまたはGRPと呼ばれる強化プラスチックである。強化プラスチックは、強度材となるガラス繊維を内蔵した複合体である。一般にガラス繊維は、細くすればするほど強くなる性質をもち、直径を1ミクロンにすれば引っ張り強度は300kg/mm²にも達する。これが軽くて強いモノコック構造に利用される理由である。そして最先端の船体にはこのGRP素材に、カーボンやケブラーといったさらに軽くて強い繊維が使われている。このように競技用ヨットの船艇は最先端の技術によって作り上げられているのである。

ここまでの競技用ヨットの構造、素材についての考察を建築に対して応用していきたい。屋根にはいくつかの重要な性能が要求される。水密性、耐水性、断熱性、耐衝撃性などである。それらの性能を獲得すべくいろいろなディテールが存在する。例えば外断熱とかシームレス溶接などは、高性能な屋根を構成するために考えだされたおさまりであるが、これらを構成する各部材を組み合わせるために、様々なディテールが発生してくる。だが、こうしたディテールは部材と部材の境目であり、性能上のウィークポイントになりかねないのである。だがこのようなことを一気には解決してくれるのが、モノコック構造である。モノコック構造はその特性上、継ぎ目がなくまた滑らかなラインを描く、この2点が建築の屋根

を構成する際に非常に都合が良い。継ぎ目がないことは雨の浸入を完全に防ぐことができ、滑らかな曲線は効率よく降った雨を流す。建築の場合、窓や換気孔といった開口部が必要となるので、このような構造を採用することは簡単にはいかないが、この構造を建築に利用すると各部材とそれぞれの取り合いを考慮する必要がなくなり、なおかつシェルターとしての建築の基本的な性能はクリアすることができるのである。

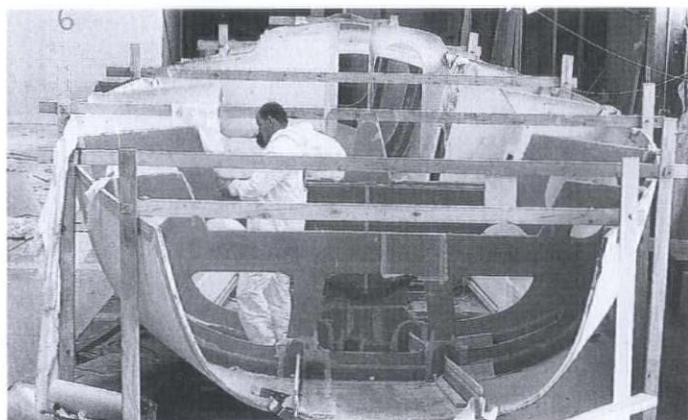
特殊な機能設定と他分野のディテールの採用により、モノコック構造を巧く利用した作品がある。フューチャーシステムズのデザインによる、セミモノコック構造を採用したキャンピングカーである。外皮には25mm厚のGRPサンドイッチ素材をラッピングし、最上部にはソーラパネルを装備、流線型のボディがキャンピングカーとしての形態に合致してとても美しい。大きな開口部を有するので完全なモノコック構造にはならないが、キャンピングカーという機能設定が、モノコック構造採用の合理性を高めている。一体成型による構成がいかに建築にとって有効な手段であるか想像するのは容易なことだろう。さらにこのキャンピングカーは屋根のディテールに関しては言うに及ばず、建築の基本的な構成要素である床や壁といった部分の境界概念も希薄にしている。これはモノコックという構造の採用がもたらす新たな契機である。

このキャンピングカーでは一般的なディテールは徹底的に消去されている。だが、ただひとつモノコックというディテールだけが存在し、同時にそれが全体を統合しているのである。

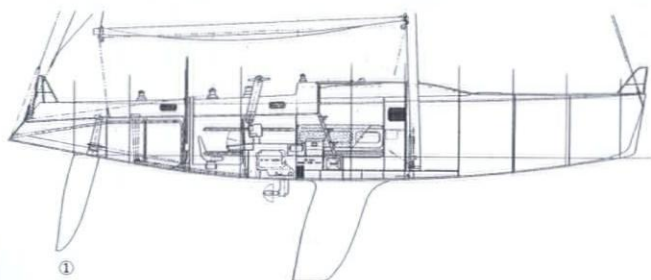
モノコック

山口賢

ヨット「Bribon」のモノコック構造製作過程——①
AB341
CARAVAN——②
architect: Future Systems
"Future Systems", Phaidon



①



①



②



②



②

屋根は雨露をしのぐといった実際的な問題を含みつつ、建築の手法論的な統一を実現させる一番の修辭的な言語であります。言うまでもありませんが、屋根は實際的にも修辭的にもほとんど不可避的に建築の環境をコントロールしているわけです。そこでのディテールとは至極具体的で實際的な機能に対応しながら、しかも無数の修辭的な意味が屋根にべっとりと付着しているがゆえに、具体的なディテール操作が様々な建築の修辭的な文脈の再編の可能性を喚起しているわけです。つまりここでディテールは単なるオサマリのウマサといった次元にとどまるものではなく、建築の修辭的な問題までも言及するものだといえるでしょう。大袈裟なことを言ってしまうと、建築に屋根がある限り建築は修辭的な問題に終始すると言ってもいいでしょう。ロージェの「原始の小屋」などはそのことを極めて象徴的に表しています。

ただし、空間を統御する装置としての屋根が、単に完璧な環境を実現するために環境を抑圧し均一化するものとして作動するときには、ディテールは単にオサマリの問題でしかなくなり、その結果、建築は退屈ななにも起こらない密室でしかなくなります。果たしてそんな密室でなにが起こるのでしょうか。そういえば推理小説では密室の殺人というのが定番でよく登場しますが、みなさんよく考えてみて下さい。そうした密室のうち、果たしていくつ本当に密室で殺人が行われたのでしょうか。恐らくかつて一度も密室では殺人は行われていないでしょう。なぜならそれら登場するどんな部屋も決して密室ではないからです。推理小説の醍醐味とは密室が殺人という文脈を形成することではなく、何

の変哲もない部屋が密室という特殊な文脈に変質する（密室というトリックが形成される）ことであり、さらに殺人の文脈がそれに重ね合わされること、そうした文脈の縫いを解きほぐすことでありましょう。完璧な環境を実現させるというのが屋根に我々が普通望む機能でしょうが、そのことだけに屋根の意味を求めることは屋根を本当に生かすことではないのではないのでしょうか。

ところで、とかく雨漏りなどは罪悪として嫌われますが本当にそれは罪悪なのでしょう。岩手地方には「ふるやのもり」という民話が伝わっており、それは日本狼の尻尾が短く顔が赤い理由を雨漏りが原因でストーリー展開する話なのです。このように昔は雨漏りでさえも、文化的な意味の生成を行っていたわけです。別にここで私は雨漏りを賛美しようというわけではございません。雨漏りを受けるための洗面器や鍋に落ちる雨音のアンサンブルは、ジョン・ケージの不確定性の音楽よりもはるかにエロティックでスリリングだ！なんて言う屁理屈を述べなくても、かの有名なパンテオンなど、あの建築のすばらしさを作り出しているものは、純粋な幾何学性はさておいて、そのドームの中央に空いた、光そして雨の浸入さえも許すあの巨大な穴だと言っても過言ではないでしょう。密室をつくるための屋根はあまりにも多くの文脈を切り捨てているのではないのでしょうか。

ダリは申しました。「未来の建築は、柔らかく毛深いものになるだろう」。この言葉は建築に対して多大な示唆を与えてくれています。誤読覚悟で分析してみれば、「柔らかい」とは建築の文脈形成が単一的で硬直したものではなく、様々な可能性をはらんだ自

由なものであり、建築の修辭的な再編を可能とするものであるということ、また「毛深い」は容易にレヴィ・ストロースの「野生の思考」を喚起させます。このダリの言葉と同名の住宅が日本に建っています。建築家はクライアントから提案されたこのダリの言葉をもとに建築を組み立てているわけですが、その形態もさることながらこの言葉の本質は建築の組み立て方（考え方）の中に明確に表れています。それは例えば、この建築家のその他の作品にも共通して見られる、曲線あるいは螺旋形状の人の動きを軸に空間が展開してゆく空間の組み立て方などに見られましょう。屋上庭園（屋根）もその流れの中に位置付けられており、近代建築におけるそれが自立したひとつのスラブ（フラットなプレート）であったのとは明らかに異質なものであるのがわかります。この住宅において屋根は柔らかく解きほぐされ、新たな文脈によって見事に再編されているといっているでしょう。

また、緑化された屋根は、屋根としてアンヴィバレンツな状態（雨水を防ぐこと。そして草の根を防ぐこと。その反面、植栽のため保水を行うこと）におかれております。しかし、考え方を変えるならば、緑化された屋根は内部の環境をコントロールするのみではなく、外部の環境をもコントロールする（緑化によって）と言えるのではないのでしょうか。その時に、屋根はヴィジュアルなイメージのみならず、アンヴィバレンツな文脈の境界として、それらを止揚し、既存の枠組み（現実）を超えているといえるでしょう（＝シュールレアリズム！）。

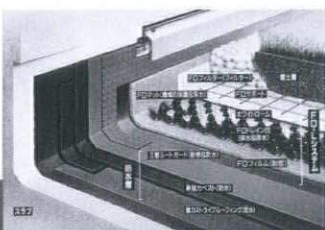
柔らかく毛深いもの

丸橋浩

「原始の小屋」——①
マルク・アントワヌ・ロジェ作
〈Soft and Hairy House〉——②
設計＝ウシダ・フィンドレイ・パートナーシップ
「住宅特集9410」
Gウェーブ、田島ルーフィング——③



①



③



②

少々大胆に論を進めるならば空間を規定する構成要素は柱、壁、屋根の3つがあれば十分でしょう。柱に関して、何もない空間に柱が一本あるというだけで、エリアーデ風に言えば均質な空間の中にヒエロファニーによってひとつの絶対的な不動点＝中心が現出し、その中心から構造化された空間＝コスモスが発生し（これが人間にとって唯一の現実となる）、その周りの果てのない拡がりである非現実＝カオスに対して原始的に空間差異が発生するという説明だけで必要十分条件を満たすと思われる。柱はコスモスとカオスの差異化の端緒であるので人々はカオスの再侵入におびえ、ヒエロファニーの瞬間を疑似的に反復シミュレーションする。つまり、それが柱状なものになされることが多いので、列柱をみると何か尊厳とか、神聖さを与えられてしまい、意味論的にそれ以上でもなくそれ以下でもなくなってしまうという意味である（少々暴論であることは話を単純にするので勇気を奮ってそう言おう）。それに対して「壁」や「屋根」はその空間的な現出に関して「柱」ほどには原始的構造および存在論的な性格をあらわにしないので、より自由なその意味を構成でき、空間アルゴリズムの再編成の際により、重要な概念を提出することが可能である。そして今回屋根の考察にあたって取り上げるのはマッシミリアーノ・フクサスによる〈New Chamber of Commerce and Industry Building〉である。この掘破りな屋根を頭の片隅において考察を進めていこう。

ところで先ほどの「壁」と「屋根」の話に戻るが、

「壁」と「屋根」の最大の違いは（壁も屋根もトポロジカルには同じなんだよという議論は置いて）、従来の言う「壁」が空間を限定していくように働くのに対して、「屋根」はそうではないということである。例えばパンテオンの壁は空間を切り取っているが、その屋根は閉鎖的な印象を与える前に垂直的な上昇性を醸し出し、「壁」が空間を限定していくようには機能しない。皮膚としての「壁」は空間を切り取る。いや、それだけではなく、切り取る側の「壁」が切り取られる側の空間と一体化して空間が認識される。一体化しているので「壁」の自由な曲線がそのまま空間に密着してその領域性を表わす。つまり、「壁」の変形と空間の変形は一对一の対応である。しかし、「屋根」はそうではない。「屋根」は空間を限定するのではなく、諸空間を統合する働きをもつ。例えばコールハースのコングレスポ、チュミのブレノワ・メディアセンターやヌーヴェルによるトゥールのコングレの「屋根」はすべて相似した機能や異機能を空間的に、もっと言えば象徴的に統合する働きをもつ。その統合するという意味合いにおいて「屋根」は決して空間と密着せず、常に余白を含みながら諸機能、諸空間をやさしく包み込む。空間原論的に言えば、つまるところ「壁」は、諸機能を整序＝差異化(differentiate)しながら空間を微分化(differentiate)するならば、「屋根」は諸機能を統合(integrate)しながら空間を積分(integrate)すると言えるか。

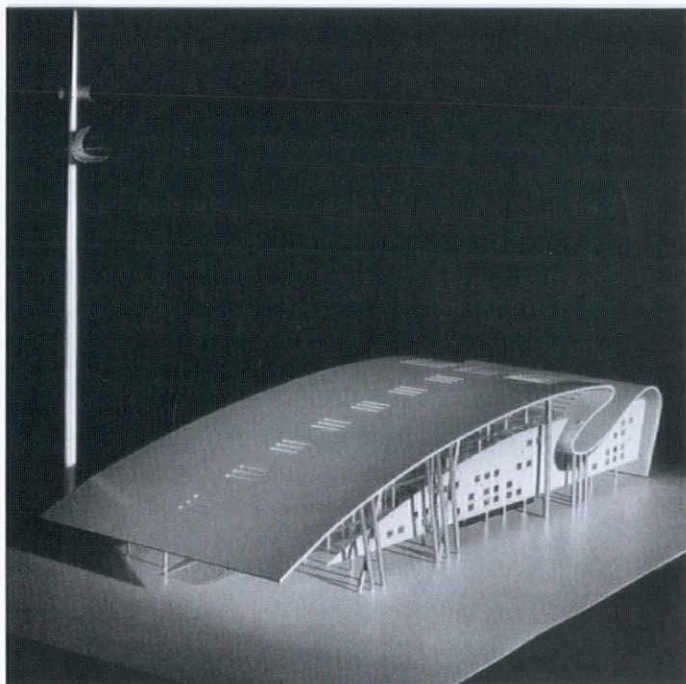
しかし、である。マッシミリアーノ・フクサスに

よる〈New Chamber of Commerce and Industry Building〉は、そのような「屋根」概念とは全く相容れないものである。彼は建築を開放的でダイナミックな都市の中で折り合いをつけていくべき「アーバンオブジェクト」と考える。そして「アーバンオブジェクト」である、建築のinterior＝内部性は都市のinterior＝内部性より二義的な意味合いを帯びる。それゆえ、必然的に建築のinterior＝内部性ははその皮膚に支配されることになる。ここで限定と支配とは意味が違うということを理解しよう。限定では空間は無理じいされて歪まないものである。それに対して支配とは、本来人々が住みやすく、機能的に矛盾なく連結されていることが建て前である建築の「神聖にして侵すべからざる」内部に侵入するという意味である。マッシミリアーノ・フクサスの「屋根」は内部空間を統合する合同結婚式場であるところから明らかに内部空間に侵入し、機能の分断を謀っている。もはや「屋根」が本来持っている余白というものとは存在せず、先ほど上段で述べていたような「壁」の機能がその「屋根」に引き起こされる。つまり「壁」ではなく「屋根」によってホールとそれ以外が分けられている。「屋根」は空間を差異化し、かつ空間と密着して「屋根」の変形がそのまま空間の変形となっている。まあすべての機能／空間が屋根によって分けられていることも想像できるが、それを頭に描くと気持ち悪くなったのでこの辺で筆を置こうと思う。

侵入する屋根

田中大介

New Chamber of Commerce and Industry Building
architect: Massimiliano Fuksas
"Tecnologia", l'ARCAEDIZIONI



William Alsopが出した1992年セヴィリヤ博のイギリス館の案つちゅうたら、^{*1}けったいな屋根持つる建物の代表選手みたいなやっチャ。図^{*2}見てもうたら解るやろし、ほんまなんも説明すつことあらへんにやけど、まあ仕事やしいちおう書いとくわな。パツと見ただのチューブ型やろ、^{*3}せやけど^{*4}ぜんぜん^{*5}ほんなん^{*6}ちやうねんで。けっさくなんは、まず何ちゅうても断面のど真ん中にある、^{*7}ごっつい^{*8}風船や。ソーラーバルーンみたいなやつでな。高校生時代の学祭とかで作ったことある人おるやろ。あつーい日にあほれが^{*9}ぶわーと浮かんで、ほんまの屋根押し開けて、上のほおー上がって行っさよるわけや。んで、外断熱みたいお陽さん避けんの^{*10}に効く^{*11}にやて。ほんまかいな。笑かしおんで。おっさん真面目にヤツとんのか！いやいや、わしもそなんめっちゃ好っきややねん。ほんでまだまだあるで。曲面のほおーの屋根つちゅうか壁つちゅうたら、上のほおーから水流して冷やすんやて。ほんで水が建物の真ん中、真下のところへんに流れてきて、流水で床下冷房しようつちゅうわけや。おもしろいやろ。おもしろいけど重くないやろ。軽しい、明るしい、ほれに充分笑えるし。セヴィリヤいうたら暑しい乾燥してつとこやろ。まあ、批判的地域主義とかほんーなややこしいこと別に言わんでも、これでわかし地域に対応しとるわけや。ほれに^{*12}けっこうエコロやろ。まあ環境に優しい建物めざしとんやな。おもしろいさけ、なおええわな。なんちゅうてもおもしろいのが肝腎や。ものごとええかげんに考えん^{*13}のようないけど、深刻になりすぎて「うんーっ」とか気張ってんのしんどいし、だいたいそなん便所行ってるみたいやろ。深刻で、どうしようものうて、遣り切れんようなことやったらなおさら笑うた^{*14}ほう^{*15}がええん^{*16}ちやうか。そやなかったら、ほんーまに遣り切れへんで。「バブ

ルの崩壊以後、建築、あるいは建築家には一体何が可能か！？」とか言うたかて、もともとバブルの時から建築家先生とかいうてよいしょされてるだけやろ。あんな時期に出てきたもん^{*17}にろく^{*18}なもんあらへんわ。まあこの建物も博覧会もんやし似たようなもんやけど、笑えるさかい許したてえな。まあ、基本的に建築家先生とかいうても所詮猿回しの猿みたいなもので、どんだけ愛想よう踊って笑かすかつちゅうだけのことや思うんやけどな。なんぼ言うても、雨漏らしたらあかんの^{*19}が屋根やけど、セヴィリヤはええわな。あんまり雨降らへんやろし。雨漏った^{*20}ほう^{*21}が気持ちええくらいとちやうか。日本ではあかんやろけどな。

ほんでついでに言うとかなあかんにやけど、このおっさん、この仕事の前にも風船式の屋根使った案出しとん^{*22}にやて。サン・クレール（つてどこや？）のごっチャごっチャの施設の計画で、Nouvel, Fuksas, Steidleと共同でな。あと、巻頭の今井はんから聞いたんやけど、竹山実も昔やつとんねんでなあ。まあ、みんなよう考えはるわ。William Alsopなんか、ちよっとマッチョなおっさんやけど、Cedric Priceんとこで一緒にやつとった人やし、結構マジやで（←たぶんな）。ほんでも、テーマはディテールとかいうてんのに、いっこもディテールの話しとらへんがな……わからへんし、まあええか。

どうでもええけど、この文読む人は、べつにマネでええさかい、ちやんと「関西語」の発音で声出して読んでや。内容おもんないさかい、せめて音ぐらいおもしろいほう^{*23}がええかなあ^{*24}思て、わざわざ関西語で書いたんやで。ワープロなんか変換してくれへんし、めっちゃめんどくさいわ。聞いたらわかるけど読んだらわかりにく^{*25}そう^{*26}なこは、いっちおう注釈つけといたし、サービスええやろ。頼むで、ほん

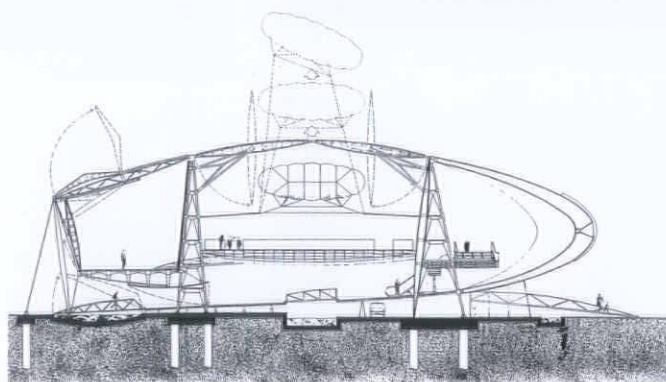
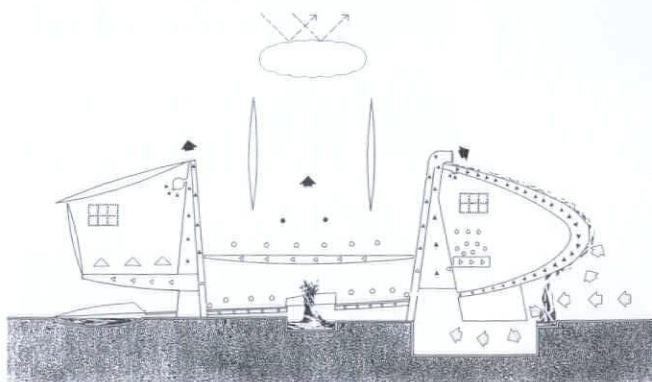
ま。（←読みにくいし、めっちゃサービス悪いっちゃんに！）

- *1:「おかしい」「奇妙な」「風変わりな」という意味の形容詞。
- *2:「一応」という言葉の関西発音。
- *3:文法的には「せ」（＝「それ」「そう」などの指示詞）、「……や」は「……である」という断定形語尾、「……けど」（＝「……が」という意味の接続詞）の3つの語からなる複合語で、合わせて「そうであるが」とか「しかしながら」という意味になる。
- *4:「ほんな」（＝「そんな」という指示詞）、「……な」（＝名詞や代名詞を形容詞化する際に付属する語尾）、「ん」（＝関西語で「もの」とか「こと」を意味する「もん」「……なん」という語の変形）による複合語。このように、関西語では、仏語のリエゾンに似た単語間の音の連鎖が頻りに用いられる。
- *5:「大きな」「厳しい」など、形状的なものと換喩的な表現とにまたがって用いられる形容詞。どちらかと言うと、英語の「great」という語に近い用い方をするが、ここでは「大きな」という意味で読んでよい。
- *6:「それ」。
- *7:しばしば他地域の人のトラブルの種になるこの語は、関西では必ずしも侮蔑的な意味ではない。「彼」という3人称単数指示代名詞の男性形に近い用い方をし、必ずしも年上の「おじさん」を指すとは限らない。（それゆえ、本人に向かって用いられることはかえって少ない）
- *8:「それに」。
- *9: *4、*6の例からも解るように、関西語では、指示詞の「こ・そ・あ・ど」の内、「そ」系のもの（それ、そこ、そのetc.）をしばしば「ほ」と発音することがある。
- *10: 通常では「標準語」に対する地方語を「……弁」と呼ぶが、日本語で海外の地方語を呼ぶ際の習慣（スペイン・カタルーニヤ地方の「カタラン語」、中国・広東地方の「広東語」など）に倣って、「関西語」と表記した。もちろん仙台や横浜や博多、それに関西内でも神戸や大阪、京都も、「……語」と呼ぶべき言語を保有している。ちなみに音声としての「標準語」は、NHKのラジオのニュース番組の中にもみ存在し、それ以外にはどこにも存在しない。「標準語」は、せいぜいさまざまな地方語相互の互換機にすぎない^{*11}と考えるのが妥当だろう。

ごっつい風船やね

堀井義博

British Pavilion, Seville Expo'92
architect: William Alsop
"William Alsop—Buildings and Projects", Phaidon



1960、70年代の日本の建築雑誌を見ると、作品ひとつひとつにディテール（主に鉅計図）の情報が掲載されているが、現在は、そうした情報の量が極端に少なくなっている。

海外の雑誌が、日本の雑誌のこうした状況とバラレルかどうかは知らないが、そして、もしかしたらディテール専門誌などを含めると、全体の情報量は増大しているのかもしれないが、そうした状況（すぐにまねされてしまうという状況）も含めて、個々の建築作品が差異化されていく上で、ディテールの相対的な重要性は、低下しているように思う。（昔も今もそれほど変わらないものかもしれないが）

ここで取り上げた作品は、〈軽井沢高原教会・内村鑑三記念堂〉である。（私が今まで見た中で、屋根のディテールがもっとも印象に残った建築であるので）

この建築の外観は、ほとんど屋根（重なり合ったアーチ）である。RCの各々自立したアーチが、入口付近では大きく傾いており、徐々に大きくなり、起きあがりながら荒い石積みの土台から立ち上がっている。

内部空間は、そうした構成のストレートな表現に

なっているが、壁面の石壁や手の込んだ扉や椅子は、きれいに作り過ぎて、そして、壁面に流れる滝やプラントが「いかにも」という感じがする。また、このチャペルの前まで水路がひかれており、この建築を人に連れて行かれて見た時（それまでこの建築を知らなかった）、たまたま結婚式を終えて出てきた新郎新婦が、ゴンドラに乗って去って行った（しかも神父の「新しい人生の船出です」という取って付けた様な言葉に送られて）のを見てしまったということもあってか（?）、この手の施設の言葉にありがちな、少々ベトついた印象を受けた。

しかし、シンプルなディテールの屋根（アーチとアーチの間にはめ込まれたガラス）、そしてそのアーチとガラスを通過してくる光の作り出す空間は新鮮であった。

基本設計のケンドリック・バングス・ケログ氏から送られてきた図面と模型を見て、構造設計者は、「これは不合理だ。こんな何ら幾何学的相関性もない構造物は不経済だし、構造解析をしたところで面白くない」と述べたそうであるが、内部造作（下部）のディテールが、工芸的に洗練されているのに対し、

上部は素人的、非建築（家）的ではある。

しかし、少々対比的な分析にはなるが、下部がそのディテールの工芸的な緻密さに比例して、空間が建築から遠ざかって行ったように思えるのに対し、上部はそのシンプルなディテールによって、全く非建築的な構成のこの教会が、建築的な力を持った空間を獲得することに成功しているように思える。

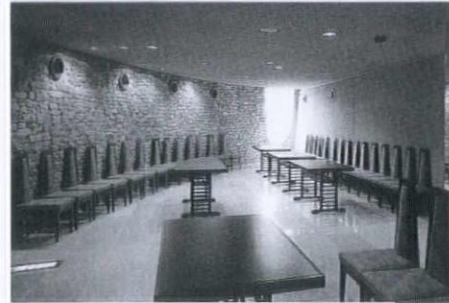
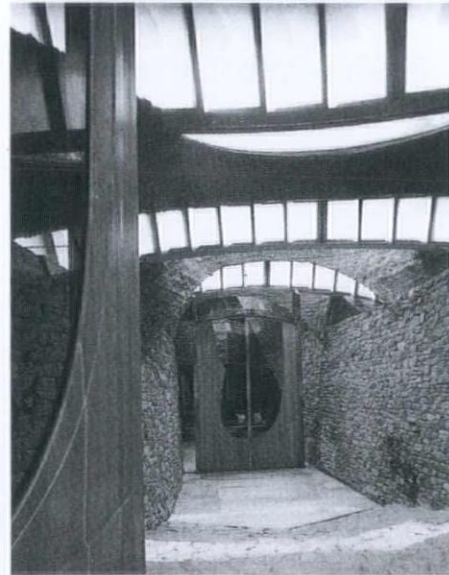
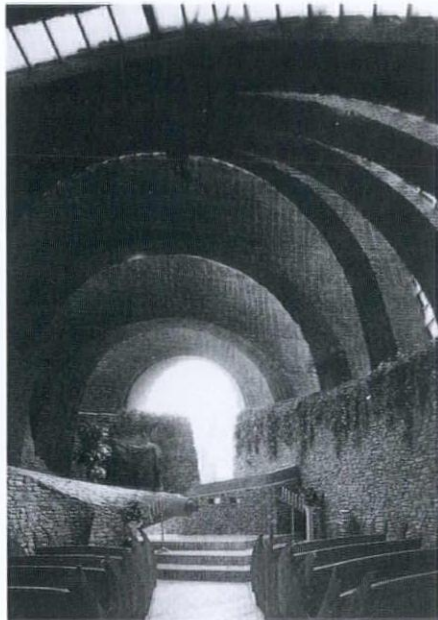
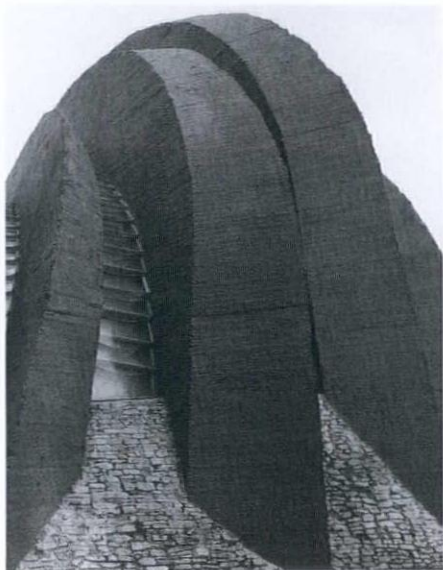
このアーチとガラスの屋根のディテールが新鮮に感じられるのは、恐らくそれが極めてシンプルなものであるからというだけでなく、この建築をリアライズしてゆく時、ディテールを突きつめてゆく作業が、建築でないものを建築（的空間）化してゆく過程そのものであったからであり、そうした空間統辞論の記述としてのディテールの力は、空間統辞機能の重要なエレメントである屋根において、最大に発揮されるからではないだろうか？

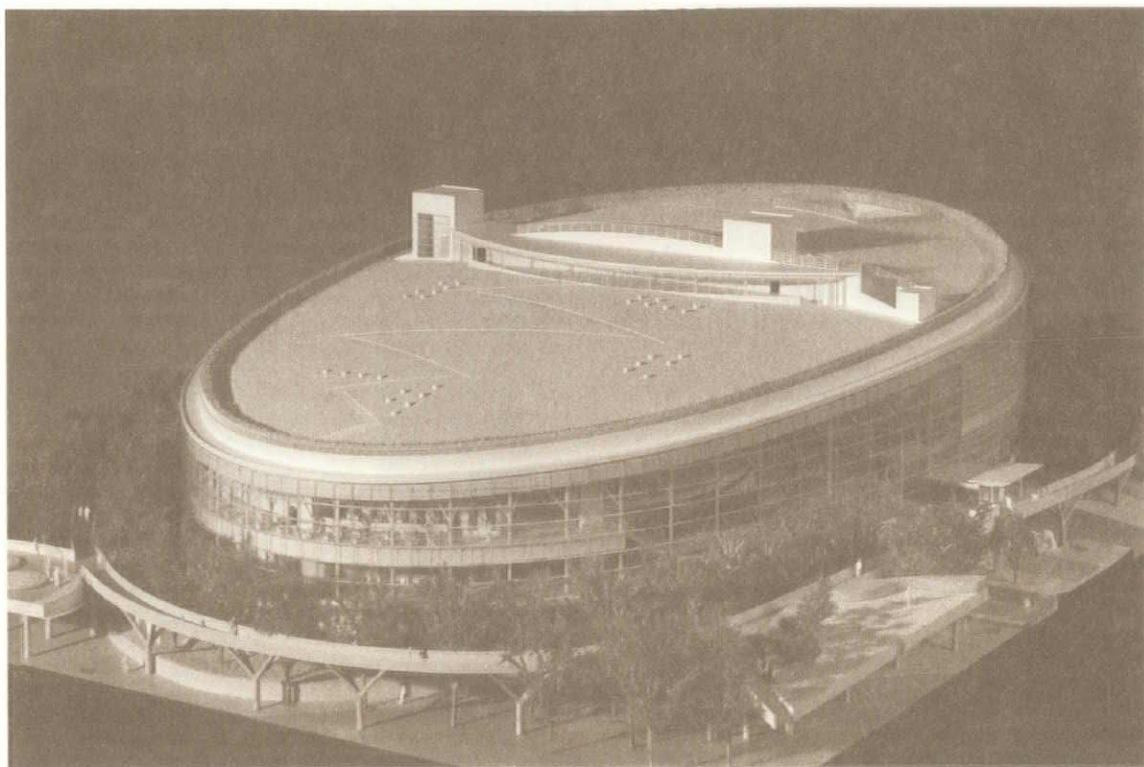
建築でないものを建築化してゆく時（新しい建築表現を獲得しようとするとき）、ディテールという極めて建築的な作業の、建築の像を意識のなかに可視化していくためのインターフェイスの道具としての有効性が見出されるように思う。

非建築的屋根

永山明男

〈軽井沢高原教会・内村鑑三記念堂〉
設計＝ケンドリック・バングス・ケログ
『新建築8811』





新潟市民文化会館／撮影：大橋富夫

9511

特集

長谷川逸子 1986—95

1990年の湘南台文化センター竣工を機に、長谷川逸子の建築は規模も徐々に大きくなり、また公共のものを多く手掛けることとなった。それらの作品には従来の、自立する建築を追求していた時代とは違った、建築の公共性を重視しようという現在の意識が込められている。本特集では、過去10年に渡る主要作品を網羅し、長谷川逸子の現在を紹介する。

[作品]

山梨県フルーツミュージアム、すみだ生涯学習センター、大島町絵本館、氷見市海浜植物園、氷見市立仏生寺小学校、熊本市営託麻団地、フットワークコンピュータセンター、新潟市民文化会館、他、全30作品。

[論文]

ピーター・クック、クリスティーヌ・ホーレイ、小嶋一浩、長谷川逸子、他

[対談]

多木浩二×長谷川逸子

[撮影]

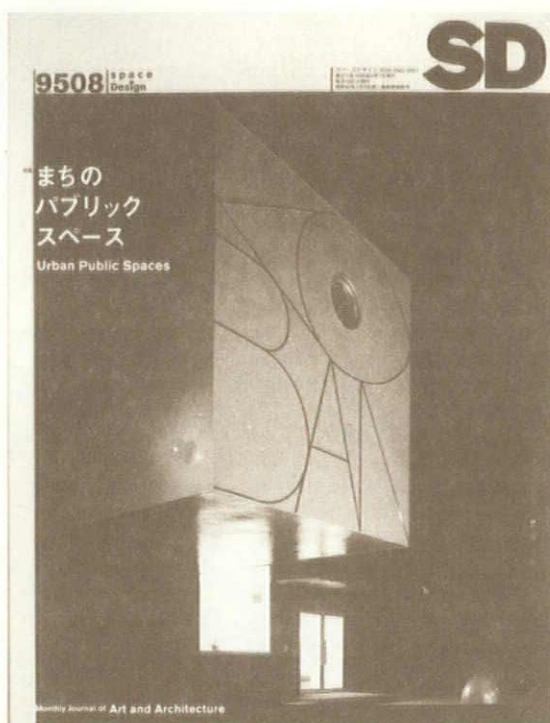
大橋富夫、他

連載：apple tomology トムの時空形象学 2

[文] 戸村浩

SD

バックナンバー



9508

特集

まちのパブリックスペース

——小さな公共施設たち

派出所、公衆トイレ、橋、公園などの公共的・日常的な施設が、近年、アトリエ系の建築家によって手掛けられてきている。これまで彼等があまり扱ってこなかった、これらの社会的あるいは現実的と言える領域での、デザインの展開を紹介する。

【作品】

桜田門の交番、調布駅北口交番、KANBAN KOBAN、Cycle Station 米原、つくば南駐車場、ゆうステーション屋外トイレ、中村冒険パーク、白川橋景観整備プロジェクト、他。

【文】

中川 理、仙田 満

【座談会】

青木 淳＋中川 理＋花田佳明

【アンケート】

伊東豊雄、岸 和郎、北川原 温、黒川哲郎、妹島和世、長島孝一、平倉直子、藤江和子、藤木隆男、葉 祥栄、横河 健、六角鬼丈、若林広幸、他。

デジタル・アーバンデザイン

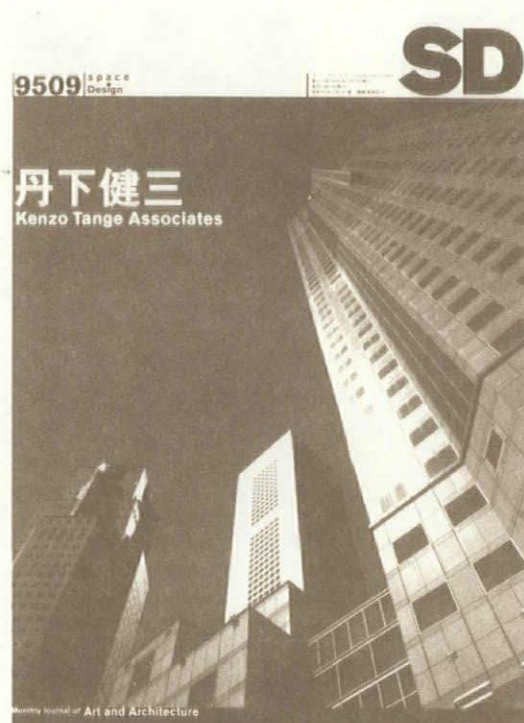
コンピュータによる景観シミュレーションから都市デザインへの可能性を探る。

【文】

石塚雅明＋柳田良造

連載：時分の花／ディテール写真館11——シュレーダー邸、バルセロナ・バビリオン
写真＋文＝下村純一

定価＝1,950円／本体1,893円



9509

特集

丹下健三

国内、海外にと精力的な活動を展開する巨匠、丹下健三。本特集では、最新作シンガポールの超高層ビル [UOBプラザ]、東京都庁者に続き新宿の新たなスカイラインを構成する [新宿パークタワー] を中心に、東南アジア、ヨーロッパ、国内の新作、プロジェクトを通して丹下健三の現在を紹介する。

【作品】

UOBプラザ、サイゴン・サウス・プロジェクト、台中市千城商業地区マスタープラン、テレテック・パーク、UEスクエア、パリ・イタリア広場、パリ・セヌ左岸計画、ナポリ市新都心計画、新宿パークタワー、国連大学本部施設、幕張プリンスホテル、日光東照宮宮殿・社務所、山口県立萩美術館、香川県新庁舎、東京ファッションタウン、FCGビルディング、他。

【論文】 丹下健三

【撮影】 村井 修、他

連載：時分の花／ディテール写真館12（最終回）

写真＋文＝下村純一

特別定価＝3,800円／本体3,689円

新宿西口に完成した「新宿アイランド」は、超高層ビルを中心に、幾つかの棟が寄り集まった複合建築群を形成している。その足元の公共空間に、現代抽象美術の重要なムーブメントを代表する国内外の10人のアーティストによる、空間に呼応して制作された作品が、覇を競うように設置されている。本別冊では、建築設計者とアートコンサルタントによる緊密な共同作業や、彼らとアーティストとの綿密なコラボレーションの過程を追い、制作から設置までの作業を記録し、完成した作品と建築空間、都市空間との関わりを多くの写真で伝え、この類まれなプロジェクトの全貌を伝えようとするものである。

SD誌では、美術評論家南條史生をゲスト・エディターに、「現代美術のための空間——1991年3月号」、「アートがつくる公共空間——1992年11月号」、「アートがつくるワークプレイス——1994年6月号」の3号の、現代アートと建築空間のかかわりに焦点をあてた特集号を発行してきたが、本号はその続編にあたる。

[アーティスト]

ダニエル・ビュラン、ルチアーノ・ファブロ、ロバート・インディアナ、ソル・ルウィット、ロイ・リキテンスタイン、長沢英俊、西川勝人、ジュリオ・パオリニ、ジュゼッペ・ペノーネ、ジルベルト・ゾリオ

[解説・批評]

六鹿正治、南條史生、児島やよい
柏木博、松葉一清、酒井忠康、峯村敏明、
国吉直行、松岡拓公雄

[写真]

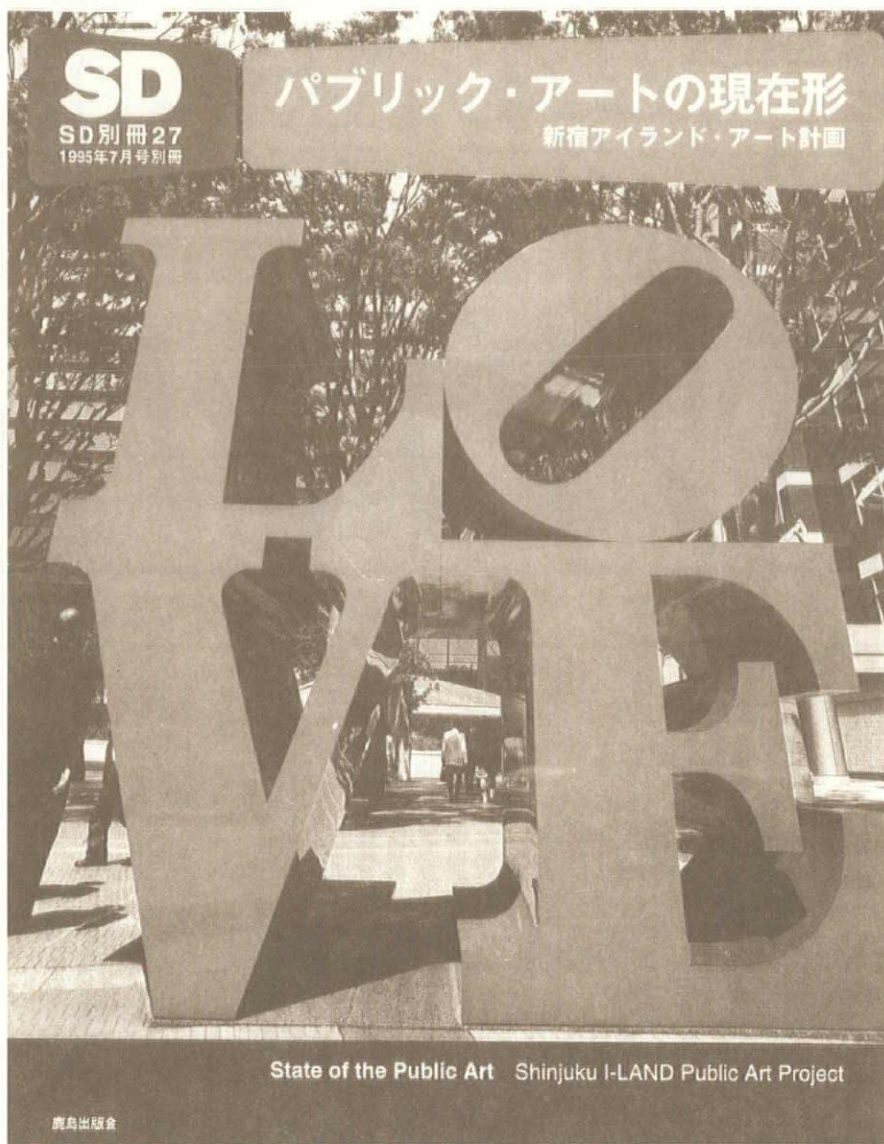
村井修

総頁：130頁

判型：A4判変形

定価：4050円

好評発売中



SD別冊27号

パブリック・アートの 現在形

新宿アイランド・アート計画

SD

建築関連雑誌

ARCHITECTURAL MAGAZINES' BACK NUMBER FAIR

バックナンバーフェア

'95.10/1(日) ~ 10/31(火)

建築関連雑誌出版社 8 社の協賛により、バックナンバー
17誌を一堂に出品。全国主要都市の31書店で同時開催。

■出品出版社・出品予定誌

(株)エー・アンド・ユー [a+u]

(株)鹿島出版会 [SD]

(株)建築技術 [建築技術]

(株)建築資料研究社 [住宅建築・CONFORT]

(株)建築知識 [建築知識・建築知識スーパームック]

(株)彰国社 [建築文化・施工・ディテール]

(株)商店建築社 [商店建築・別冊・増刊・Wind]

(株)新建築社 [新建築・住宅特集・JA]

全国31書店
同時開催

北海道

■札幌 丸善 札幌南一条店 4階
TEL.011-241-7251
東京旭屋書店 札幌店 B1階
TEL.011-241-3007

東北地方

■仙台 丸善 仙台一番町店
TEL.022-224-8018

中部地方

■静岡 静岡谷島屋本店 1階 TEL.054-254-1301
■長野 平安堂 長野店 2階 TEL.0262-26-4545
■松本 平安堂 南松本店 1階 TEL.0263-86-8585
■名古屋 丸善 名古屋栄店 2階 TEL.052-261-2251
■新潟 紀伊國屋書店 新潟店 2階 TEL.025-241-5281
■富山 BOOKSなだ 本店 1階 TEL.0764-92-1192
(9/15~10/31)
■金沢 うつのみや本店 3階 TEL.0762-34-8111

関東地方

■宇都宮 宇都宮ブックセンター 2階
TEL.0286-27-7700
■千葉 千葉そごうブックセンター 8階
TEL.043-245-8331
■東京 八重洲ブックセンター 本店 3階
(10/2~10/31) TEL.03-3281-1811
紀伊國屋書店 新宿本店 4階
TEL.03-3354-0144
三省堂 神田本店 5階
TEL.03-3233-3312
大盛堂書店 5階
TEL.03-3463-0511
■横浜 有隣堂 本店 3階
TEL.045-261-1231
■藤沢 有隣堂 藤沢店 4階
TEL.0466-26-1411

中国地方

■岡山 丸善 岡山シンフォニービル店 B1階
(10/7~11/5) TEL.086-233-4640
■広島 丸善 広島本店 3階
TEL.082-245-1869

近畿地方

■京都 丸善 京都河原町店 3階 (11/1~11/30)
TEL.075-241-2168
■大阪 旭屋書店 本店 4階
TEL.06-313-1191
紀伊國屋書店 梅田店 1階 (10/4~10/24)
TEL.06-372-5821
■神戸 ジュンク堂書店ブックセンター 3階
TEL.078-252-0777
■姫路 ジュンク堂書店 姫路店 7階
TEL.0792-21-3167

四国地方

■高松 宮脇書店 本店 2階 TEL.0878-51-3733
■松山 紀伊國屋書店 松山店 3階 TEL.0899-32-0005

九州地方

■福岡 紀伊國屋書店 福岡店 6階 TEL.092-721-7755
■北九州 黒崎井筒屋ブックセンター 2階 TEL.093-643-5520
■熊本 紀伊國屋書店 熊本店 2階 TEL.096-322-5531 (10/5~11/5)
■大分 本町晃星堂書店 2階 (10/1~12/30) TEL.0975-33-0231

※一部の書店では開催期間が異なります。

テクノスケープ 都市基盤の技術とデザイン

片木篤著
四六判・248頁 定価2,987円

鉄道、水路、上下水道、ガス等近代都市基盤を構成する要素を、移動する物、経路、起点・終点の3点に着目して、その技術とデザインを分析する。近代技術が生み出した新たな都市空間の特性を概観し、近代の枠組を問う試み。

庭園の詩学

C.W.ムーア、W.J.ミッチェル、
W.ターンブルJr共著 有岡孝訳
A5判・304頁 定価4,841円

主に中国、日本、イスラムの庭園を取り上げ、庭園の空間を構成する基本的な手法を解明する。目次：①場所の精神、②デザイナーによってつくられる場所、③過去の場所(しつらい・収集・巡礼・パターン)、④私たちの場所

ビルディング・エンベロプ 建物の外装のデザインと技術

アランJ・ブルックス、クリス・クレグ共著
難波和彦・佐々木睦朗監訳
B5判・148頁 定価4,635円

本書は、建築デザインの今日の潮流と、先進的工法を新しい技術とともに紹介し、ここ10年の技術的な発展に関する総合的な最新情報を提供している。話題の33事例のデザインとディテールを豊富な写真・図面と簡潔な説明で概観する。

超級アジア・モダン 同時代としてのアジア建築

村松伸著
四六判・272頁 定価2,575円

本書はアジア各都市で活躍するアジアの若手建築家達の紹介を通して、急激に変貌を遂げつつある隣国の都市、建築界の状況を述べるもの。筆者は数年をかけて現地取材し、足で歩いたアジア現代都市論にもなっている。

[SDライブラリー]②0

建築と非建築のはざままで

ロバート・ハーピソン著 浜田邦裕訳
A5判・208頁 定価3,193円

本書は、建築を分析していくための新しいシンタックスを「建築の意味性」「虚構性」に見いだそうという視点から建築を語る建築論である。庭園、モニュメント、要塞、廃墟、絵画空間、イマジナリーな建築に言及する。

かたちに見る造形の構成

イメージ・ジェネレーターの展開
島田良一編著 B5判・146頁 定価3,502円

造形のイメージを発想し、三次元で展開した造形教育の教材として編集。素材の基礎形態のシステム化、形の連続・断片的活用を、コンピュータ・グラフィックス処理し、建築の部分・全体・パターン考案の補助手段にて解説。

都市と建築の解剖学

形態分析によって[設計戦略]を読む

ジェフリー・ペイカー著 富岡義人訳 B5判・296頁 定価5,974円

歴史的な町並や集落の成立を探り、また現代建築の巨匠であるアアルト、マイヤー、スターリングの作品の設計過程を分析する豊富なイラストによって構成された本書は、建築を学ぶものにとって貴重なテキストである。

ハイテック・コンストラクション3 スーパーシェッズ 大空間のデザインと構法

クリス・ウィルキンソン著 難波和彦・佐々木睦朗監訳
B5判・144頁 定価4,635円

本書は大架構建築の歴史と今後の可能性について、具体的な事例を中心にまとめており、単に技術的な視点からだけでなく建築的視点からも論じている点が特異である。19世紀の博覧会展示場、鉄道駅舎、工場などからはじまり、最近の空港、競技場、展示場にいたるまで、多種多様な大架構建築の事例を機能別に分類し、それぞれについて過去から現在までの歴史の変遷をコンパクトにまとめている。写真・図版多数。

インテリアデザイナーのための 住宅設備設計の知識

石崎清士著 四六判・182頁 定価2,266円

技術開発の著しい住宅設備の設計について、インテリアデザイナー向けに解説。コンセントやスイッチの配置、空調や照明、給排水設備の留意点、さらにマンション等に設置されるホームオートメーションなどにも言及。

人気急上昇

予約申込殺到!!

年間予約購読、郵送制

書店ではお求めになれません

月刊

ダルトンレポート

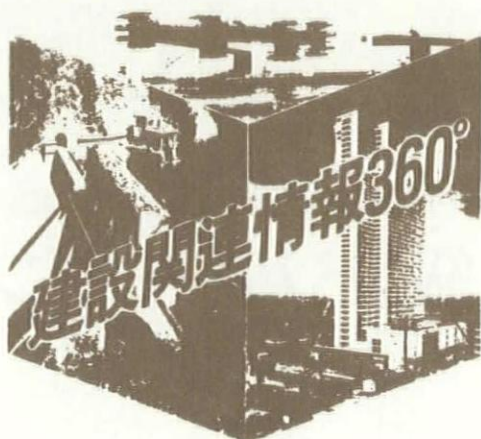
DALTON REPORT

9509号 目次

●特集●建設業のイメージ調査「技術力」や「貢献度」に高い評価を受ける

- わいどあぐる ●情報化ワープロ普及は2世帯に1台/えっ! あなたの星座はズレています/あなたの場合は? 「37.9歳」で“おじさん”実感
- 霞が関ホットライン ●なぜ増えぬ一公共事業、6ヵ月連続で減少/新防災基本計画決定
- 阪神復興 ●再生めざし約1,000事業盛り込む―神戸市復興計画/復興へ660事業―兵庫震災復興計画案決定
- 列島を拓く ●不動産不況で都市農業復活―生産緑地追加申請増加/首都高速道路公団耐震補強、今年度は2,000基発注
- ビッグ・プロジェクト進行中 ●臨海副都心見直しへ新体制
- 学会・協会・業界 ●業法改正受け、1級技術検定試験申込み急増/大手建機メーカーが共同配送開始
- こんな方法考えました ●風速・風向予報サービス開始/堆積軟岩の変形特性を解明―剛性大きく岩盤構造物構築可能
- こんなモノつくりました ●廃タイルから防音パネル/鉄製なみー網なし透明防火ガラスを開発
- コンピュータ ●経審ソフト大幅改定
- ハウジング ●特殊金物で木造住宅強度5倍/ミサワホームが住宅工期を3分の1に短縮

▶ 今月の「拾出し」 ◀ 加速する情報化戦略



建設マンのための気楽に読めるユニークな建設情報誌です。

- 忙しいあなたに代って必要な情報を収集・整理してお届けします。
- これさえ読んでいけば高度情報化社会で遅れをとることはありません。

購読のお申し込みは今すぐに!
大変割安な定期購読料金です。

ただいま定期購読のお申込みを受付けています。
申込書用紙をきりとり、もれなくご記入のうえ、ハガキに
全面のり付け貼付し、下記までお送りください。
※お申込みは個人名でおねがいします。

購読申込書の送り先

〒107 東京都港区赤坂6-5-13

㈱鹿島出版会 情報システム事業部

ダルトンレポート読者係 ☎(03)5561-2553

●定期購読料 1年購読(12冊) 4,900円(税込)
(送料共) 3年購読(36冊) 9,800円(税込)

※購読料金のお支払いは、ダルトンレポート本誌に添付の
郵便振替用紙でお近くの郵便局からお払込みください。

□新規購読申込

SD

フリガナ
お名前

ご自宅 〒
住所

お勤め先

(職種)

該当の
ものに
○印を

ご専門
ご担当

建築 土木 機械 電気 事務 ほか
設計 施工 管理 営業 経理 ほか

購読期間(☑印をつけてください)

□ 1年

□ 3年



9406 Art in the Workplace: Observes and verifies 'Space for Contemporary Art' SD9103 and 'Art and public Space' SD9211, this is the third in the series investigating relationships between art and space. Text: Fumio Nanjo, Dana Friis-Hansen. Interview: Marjory Jacobson. ¥2,500



9407 The Works of Peter Walker: Minimalism and Landscape Architecture; Introduces Peter Walker William Johnson and Partners' main works and future projects: Tokio Marin Oyama Training Center, Center for the Advanced Science and Technology, Marugame Station Plaza, IBM Japan Makuhari, Solana, Hotel Kempinsky, Europa-Haus, Longacres Park, etc. ¥2,200



9408 Massimiliano Fuksas: His recent works; School Saint-Exupery, Graffiti's Museum of Niaux's Cave, Brest City Center university, Sports Complex, Housing, Parking, etc. Text; Dorian O. Mandrelli, Otto Steidle, Hideto Horiike. **Rumanian Orthodox Churches in Mordovia:** Four churches built 16th century. Photos; Takeshi Taira. Text; Yoshi Yamazaki, Riichi Miyake. ¥1,950



9409 Ideas and Approaches to Architecture and the City: A New U.S. East Coast Movement; Introduces 11 architects. B. Shirdel / J. Kipnis, Michael Sorkin Studio, S. de Martino, A. Wall, RAAUm, W. Jones, A. Zago, Pollari X Somol, G. Rynn, D. Garofalo, M. Rakatansky. Texts; Tsuyoshi Matsuhata. **Recent Work by TAO ARCHITECTS / Shuntaro Noda:** Photos; Kouji Horiuchi, Text; Youichi Iijima. ¥1,950



9410 Torroja's Legacy of Structure and Space: The contemporary meaning of Eduardo Torroja. Works; Madrid Racecourse at Zarzuela, Market at Algeciras, Pont de Suert Church, etc. Discussion; Norihide Imagawa, Keiichi Irie. **Rebirth As a City of the Arts: Gibellina Nuova, Italy:** Urban development and architecture in Italy. Photos, Texts and Interviews; Masaru Miyawaki. ¥1,950



9411 Airport Architecture as the Nexus of the City: Featuring Kansai International Airport Passenger Terminal Bldg. And 21 airport terminal buildings in the world; Stansted, Denver, Chicago O'Hare, Stuttgart, San Pablo, King Abdul Aziz in Jeddah, New Seoul Metropolitan, Chek Lap Kok in Hong Kong, etc. Texts; Deyan Sudjic, Paul Andreu, Hiroyoshi Yamada, Noriaki Okabe, etc. ¥3,500



9412 SD Review 1994: Featuring SD Review 1994: The 13th Exhibition of Winning Architectural Models and Drawings. Text: Naoyuki Takashima, etc. **International Collaboration Project: The Children's Village in Oswiecim:** Architect: Mario Botta, Fumio Maki, etc. **Projet pour La Chapelle de St. Vigor de Mieux par Takubo 2.** ¥1,950



9501 Riken Yamamoto: Introducing his works for last 5 years. Ryokuentoshi=Inter-Junction City, Takashimacho Gate of the Yokohama Expo'89, Day Care Center for the Geriatric Patients, Junior High School in Iwadeyama, House in Kamakura, House in Okayama, etc. Text by Riken Yamamoto, tom Heneghan, Motomu Uno. ¥3,000



9502 Baroque Architecture in Sicily and Lecce: Features the distinctive Baroque style resulting from the mingling of Roman Baroque and the indigenous ancient Grecian and Hellenistic cultures. Introduces Palazzo Spadaro, etc. Photos: Ichiro Ono. Text: Hirohide Yakeyama, Masanobu Hasegawa, Satoshi Okada. ¥1,950



9503 Multi-unit Housing Today: Introduce architects who have made many multi-unit housing recently and their works. Masahiko Araki: Living Alley, Takao Endo: Higashi-Osaka Yoshita Public Housing Complex, Hidetoshi Ohno: YKK Namerikawa Dormitory, Yuzuru Tominaga: Shinchi Housing-C, Yasumitsu Matsunaga: Project 951, Makoto Motokura: Seikousou. ¥1,950



9504 Scenes from the Technoscape: Focus some scenes or landscape constructed by industrial facilities, civil engineering structures, etc. Introduce Wind Firm, The Thames Barrier, The Arcibo Observatory, The Kurobe Dam, Shiobara Hydro-Electric Power Station, Kasai Sewage Processing Plant, Trans-Tokyo Bay Highway, Drilling Platform, Japan Microgravity Center, Circular Farm, etc. ¥3,000



9405 Mega Architecture: Recent Works of Paul Andreu: Introduces some of Andreu's many monumentalscale buildings, railway stations, sports stadiums, and other works. Feature on **The Creation of the Foreign Settlement in Kobe and Its Development.** ¥1,950



9506 The Potential for Using Computers in Architecture: Examines how architecture is being influenced by the use of computers. Architects: Neil Denari, Peter Eisenman, Keiichi Irie, Toyo Ito, Hani Rashid, ARX, Kengo Kuma, Makoto Sei Watanabe, etc.. **Mysterious Design Drawing Exhibition:** T.Ara, F.Enomoto, S.Hisada, N. Iijima, E. Sottsass, S.uchida, etc.. ¥1,950



9507 Takahiko Yanagisawa: Art Museum Space and Detail: Features five museums by Takahiko Yanagisawa, who won the competition for the Second National Theater in 1986. Museums introduced: Utsubo Kubota Memorial Museum; Museum of Contemporary Art, Tokyo; Kazumasa Nakagawa Art Museum, Manazuru; Kiriya City Museum of Art; etc.. ¥2,700



9508 Urban Public Spaces: Features small public facilities designed by architects. Architects: Atsushi Kitagawara, Naoko Hirakura, Shuichi Kitamura, Toyo Ito, Waro Kishi, Kazuko Fujie, Atelier Zo, Koichi Nagashima, Mitsuru Senda, etc. **Digital Urban Design: The New Language for Design Cities:** Introduces new methods by Yanagida Ishizuka & Associates. ¥1,950



9509 Kenzo Tange: Kenzo Tange Associates: Focus on UOB (United Overseas Bank) PlazaTange's last skyscraper, and on the Shinjuku Park Tower which transforms the Shinjuku skyline. Introduces Makuhari Prince Hotel, Bay Square Yokosuka, Hiroshima Peace Center Complex, FCG (Fuji-Sankei Communications) Building, Gran Ecran (Place d'Italie), etc. ¥3,800



Space Design
Hardcover Edition
and Order Form

Space Design published its first issue in 1965 as a monthly journal for a general readership introducing noteworthy achievements and leading works in the fields of architecture, urban problems, design, and the fine arts. The journal has established a solid reputation over the years in the fields of architecture and design. It enjoys the support of a broad readership in an age when up-to-date information on contemporary design, urban planning, and architecture is in heavy demand. **SD** endeavors to make its features and articles ever richer in content, focusing attention on the methodological, and aesthetic themes of modern architecture, the city, design, and the arts. The text of **SD** is mainly in Japanese, but in certain cases English translations or summaries are provided for feature articles.

Send your order for subscriptions to **Space Design** and/or for back issues or hardcover editions by:

Filling in the order card below and faxing it to:
Space Design: 81-3-5561-2560

Or mail the card to:

Subscriptions Department
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka, Minato-ku,
Tokyo 107, Japan
tel: 81-3-5561-2550

An invoice will be sent immediately. Upon receipt of the invoice, you may pay by check or international money order or bank check.

Order Card

Name (in block letters please):

Address:

Fax number (if available):

Occupation:

Please check one of the options below:

☐ Please enter my SUBSCRIPTION to
Space Design,
starting in _____, 1994

	sea mail	air mail
12 issues	¥30,000	¥55,000
24 issues	¥50,000	¥80,000

Price includes postage and bank charges.

☐ Please process my order for the following BACK ISSUES and/or HARDCOVER EDITIONS of **SD**:

The invoice includes:

1. Price of the publication
2. Bank charges (¥1,500 per order)
3. Postage (determined upon receipt of order)

Alvar Aalto

A special comprehensive collection of celebrated architect Alvar Aalto's major works. Aalto's Design Vocabulary, by Akira Mutoh / Chronological Review of A. Aalto's Life : 1898-1976 / Worldwide Distribution of Alvar Aalto's Works ¥3,090

Tadao Ando 2

His 21 works since 1981 including Church with the Light are classified into five categories and introduced at once here. The 10-meter long drawing of Nakanoshima Project lets the readers feel his vigorous approach to architecture. ¥4,800

Arata Isozaki 2

Introduces whole of Isozaki's major works, 1976-1984, especially his shocking work : Tsukuba Center Building, Ministry of Foreign Affairs of Saudi Arabia, MOCA, Blick of Flats, Berlin, Okanoyama Graphic Art Museum, ¥4,944

Kiyonori Kikutake

Collection of Metabolist Kiyonori Kikutake's works from the early years to 1980 : Architecture of The Third Generation, On the Notion of Replaceability, Phase of Methodological Search, Data, Location of Works ¥3,090

Kisho Kurokawa 2

13 major works for these 10 years, including Hiroshima City Museum of Contemporary Art which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan, and 2 other Museums are introduced. ¥4,300

Seiichi Shirai

Introduces a collection of the gem-like works by Seiichi Shirai, an architect of proud loneliness. Kaisetsu-kan, Noa Building, Sei-Akira-kan, Sasetsuken, Kohakuan, etc. Essays by Arata Isozaki, Ichiro Haryuu, Ikuma Shirai ¥ 3,605

Atelier Zo

Presents the first collection of the works by Atelier Zo who has continuously brought forth fresh works by their original formative ideas. Nago City Hall, Shinsyukan Community Center, etc. Essay by Hiroshi Aramata ¥4,000

Kenzo Tange 3

29 projects are introduced at a stroke so that his footwork in 1980's can be seen. Also, the noticeable new Tokyo City Hall is introduced through many drawings and photographs of new model. Full English text. ¥4,100

Fumihiko Maki 2

Presents the second collection of Maki's works which show his activities in 1980s. Spiral, Keio University Hiyoshi Library, Fujisawa Municipal Gymnasium, Hillside Plaza, Tokyo Metropolitan Gymnasium, etc. ¥4,326

Toyo Ito

9 projects of his semi-permeable architectures such as restaurant NOMAD and Silver Hut and 11 projects of Transformations by Light are introduced. The Shinorama Space by Kishin Shinoyama shows White U. ¥3,900

Shin Takamatsu

All of his major works including Kirin Plaza Osaka which won 1988 The Prize of the Architectural Institute of Japan are introduced. His working field in which he has continuously been creating his sharp works can be observed. ¥3,800

Kunihiko Hayakawa

His original pastel-colored works such as ATRIUM and STEPS give the architectures allegro rhythm and feast one's eyes. His works and projects for 10 years since 1978 show his world. ¥4,300

Kazuhiro Ishii

His Sukiya-village which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan and 51 other works introduce his method of composition. ¥4,300

The Expressionist Architecture of Germany

Meaning of the Expressionism which is the mother of the modern architectures and has influence on the contemporary ones is introduced by 12 architects' works. ¥3,300

Wooden Architecture Today 1989

Introduces works of Europe, mainly German, Swiss, and French, as well as of the United States, Australia, and Japan. Works in Japan include those by Shoel Yoh, TAKE-9, Hideaki Katsura and others. ¥3,708

Bruno Taut

Introduces his activities mostly while staying in Japan 1933-36. Features in memory of Taut in 40th year of his death. Architect's Own House Istanbul, Housing on Erich-Weinert Strasse, etc. Taut's Handicraft and Books ¥2,575

Ecole des Beaux-Arts and its Glorious Tradition

Updated: Essays: History and Credo, Thought Backbone/ On the Grand Prix : List of Recipients and their Presentations/ Genealogy of its Ateliers/ Collections : Notre-Dame at Lorette, Opera Theater, Paris, etc. ¥2,575

Details by Maki & Associates

Shows detail at Forum TEPIA, a showcase of high technology using a variety of new materials. The work features studies in surface, point, and line and develops numerous types of detail. ¥6,800

Kim, Swoo Geun

Introduces his 30 projects, mainly in Korea. Masan Cathedral, Korean Overseas Development Corporation Building, Art center of Korean Cultural and Arts Foundation, Seoul Sports Complex, Nam Dae Mun Market Redevelopment Plan, etc. ¥3,090

Architects Own Houses of the World

Introduces famous architects' own houses of the World. Architects: Richard Foster, Frank Gehry, Don Hisaka, Wilhelm Holzbauer, Michael Hopkins, Barton Myers, Christopher Owen, Arthur Erickson, Ulrick Franzen, Paul Gray, etc. ¥4,944

システム天井

VIEW GRID

株式会社イトーキ



イトーキでは、オフィスや商業環境のニーズに対応する新しいシステム天井、VIEW GRID（ビューグリッド）を新発売した。

特長

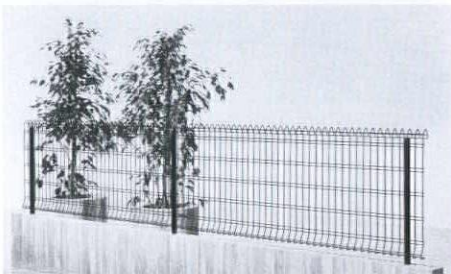
- ①アルミ押出型材のグリッド・フレーム（基本モジュール1,600mm、1,800mm）を一つの単位とし、このフレームに照明や空調など各種設備機器を組み合わせるというシンプルで機能的な構造になっている。
- ②グリッド・フレーム間の目地部分を利用し、パーティションやスプリンクラー、空調、配線ダクトを、またフレーム内の多機能パネルには、非常灯や煙感知器、スピーカーなどの各種機器を自由に取付けられ、目地などを傷つけることなく施工できるので、オフィスのレイアウト変更や店舗の改装などに簡単かつフレキシブルな対応が可能である。
- ③グリッド・フレームは、工場で完成品として生産され、設備工事完了後に天井材を落とし込むため、現場での作業に無駄がなく簡単で、工期の短縮を実現する。
- ④グリッドには、照明のパターンや機能の違いにより、パラレル、パラレルエア、バイアス（およびクロス）、クォーター、スケルトンの5種類ある。天井パネルとして、岩棉吸音板、化粧板などあらゆる天井材を自由に選択でき、多様なデザイン要望に対応する。

株式会社イトーキ 建築商品部
中央区銀座1丁目8番19号
〒104 Tel 03-3206-6371

ドア・フェンス

多連引戸 マイアミ4型

新日軽株式会社



新日軽では、景観エクステリア商品としても使えるアルミ製の多連引戸とスチール製のメッシュフェンス、マイアミ4型を新発売した。

多連引戸の特長

- ①片引きタイプで、最大約12mの開口まで対応、（片引きタイプで最大12.5m=5連結まで対応できる。）
- ②収納巾が狭い、省スペースタイプである。
- ③転倒防止装置付の安全設計である。
- ④開閉時の走行音が小さい上、スムーズな開閉感が得られるゴムキャスターを採用している。
- ⑤高級感のあるセビアブラックとステンカラーの2色。

価格（写真タイプ） 637,600円

マイアミ4型の特長

- ①スチール製のメッシュフェンスで経済的である。
- ②幅2,000mm、高さ600mm～1,800mmまで、幅広く用意。
- ③メッシュパネルの上下端部を三角形に曲げ加工したスマートな印象のフェンスで、一般住宅用からアパート・マンション周りなど様々な場所に対応できる。
- ④流行のブラック・ブラウン・ホワイトの3色。
- ⑤柱に取付けた固定フックにメッシュ本体をかけて、ボルトを締めるだけの簡単施工である。

価格（フェンス本体1枚+自在柱1本） 9,800円

新日軽株式会社 エクステリア事業本部商品企画課
東京都江東区本場2丁目7番23号
〒135 Tel 03-3820-2552

シャッター

スムーザーRS-1

株式会社ユニフロー



ユニフローでは、従来から扱ってきたシートシャッター、スムーザーRS-2/RS-3/RS-4に加え、家庭用100V電源を使用し、狭い開口部に対応したシートシャッター、スムーザーRS-1を新発売した。

特長

- ①家庭用100V電源を使用するので、いかなる場所にも設置可能である。
- ②シートの開閉速度は、スムーザーの各シリーズ中最も速い、0.94m/秒を実現した。
- ③駆動開始時と終了時には、速度を制御して減速する「スロースタート・スローストップ」機構の採用で安全である。
- ④新設計の機密性が高いレール部により、断熱性と空調の効率化、低騒音を実現した。
- ⑤特殊シートエッジによる高い耐風圧性を実現した。
- ⑥インテリア性の高い、「ラウンド・シェイプ」のドラムカバーが、開口部をモダンに演出する。
- ⑦本体、フレーム共にアルミを用いることで、総重量も抑え、低価格を実現した。

株式会社ユニフロー
東京都渋谷区富ヶ谷1丁目9番16号
〒151 Tel 03-3469-9251

●

敷物

ピカソ・ラグコレクション

●
株式会社サンゲツ



株式会社サンゲツでは、新見本帳ピカソ・ラグコレクションを新発売した。ラグとは一般的に、住宅などのフローリングが普及したことにより、テーブル下や椅子の前面にポイントとして置かれる敷物のことであるが、芸術性豊かなデザインだけに、床に敷くのはもとより、タペストリーとして壁に飾ることもできる。「暮らしにアートを」という当社のコンセプトに基づくこの商品により、トータルインテリアの幅をさらに広げる。ピカソ・ラグコレクションは、巨匠パブロ・ピカソの作品の色彩と筆さばきを忠実に再現した毛100%のラグマット5点を収録している。「ピカソ・ラグ」は、ヨーロッパにおいて超高級品として扱われているが、日本国内では当社だけがその販売権を獲得し、お値打ちな価格(220,000円~250,000円)に設定した。収録内容は、「鳩とグリーンピース」「人物」「3人の音楽家」「キッチン」「アルカンと首飾りの女」以上5点である。

価格(写真タイプ)

250,000円

株式会社サンゲツ

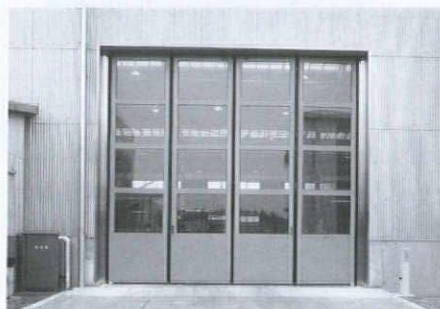
名古屋市西区幡下1丁目4番1号

〒451 Tel 052-564-3314

●
超大型扉

しゅもん

●
菊川工業株式会社



菊川工業株式会社では、ドイツ・ガートナー社により超大型扉「しゅもん」の国内販売を開始した。

特長

- ①ワンタッチで約8秒のスピード、約60デシベルの静かな音でなめらかに開閉。停電などの緊急時には、ハンドル操作約10秒の速さで、一人でも簡単に開閉できる。開けたままにしておく必要がない。レール式のように、埃がたまりたり湾曲するなどによる故障もなく、開閉機能の耐久性が高い。
- ②続いて何台もの車両が通過したり、扉の中で急停車、或いは、閉まりかけた扉に駆け込み入場をした場合は、タッチセンサーが感知して扉を開く。また、強風防風の設計、網入り複層ガラス、自動ロック方式の施錠機能。全面ガラスにより、安全確認ができる。
- ③全面ガラスから自然光が入り、室内は明るく爽やかで、機密性がよいので、風や埃が入りにくく、空調効果も高まる。また、100色以上のカラーパレットから、建物や周辺環境にあった色彩をセレクトできる。
- ④用途としては、大型車両・フォークリフト出入口、電車・ヘリコプター格納庫出入口、美術館・劇場・ホール出入口、消防署・警察署など特殊車両の出入口、機密・断熱が必要な工場・倉庫出入口など。

菊川工業株式会社

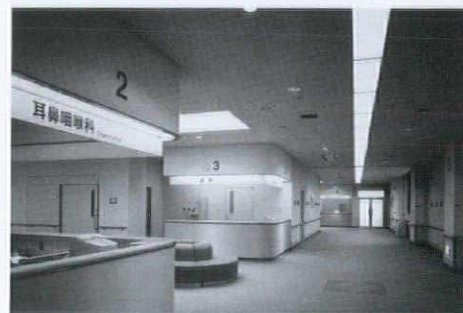
東京都墨田区菊川2丁目18番10号

〒130 Tel 03-3634-3231

●
内装化粧材

ルミディア抗菌タイプAZ

●
リンテック株式会社



リンテック株式会社では、内装化粧材シート、ルミディアに優れた抗菌効果をプラスした、ルミディア抗菌タイプAZを新発売した。

特長

- ①MRSA、大腸菌、緑膿菌などシート表面に付着した菌の繁殖を、また各種かびの発育を制御する。
- ②汚れがつきにくく清掃も簡単でメンテナンスが容易である。アルコールなどの各種消毒薬に侵されない。
- ③耐水性に優れているため、調理場や洗面所、トイレなど水回りでの使用に適している。
- ④耐性試験後の抗菌効果も良好で、持続性に優れる。
- ⑤使用している抗菌剤は、急性経口毒性、皮膚一次刺激性、変異原性の各試験で高い安全性を確認。
- ⑥デザイン(色・柄)は、カラーセラピーの手法を取り入れて選定した3ジャンル・30点でコーディネートされている。
- ⑦各種防火認定を取得している。
- ⑧各種の下地基材に対応できる粘着シートのため、乾式工法による簡便施工が可能。
- ⑨用途としては、病院、老人保健施設、ホテル、飲食店、病院、美容院、理容院、オフィス、ショールーム、研究施設、食品工場など。

リンテック株式会社

東京都板橋区本町23番23号

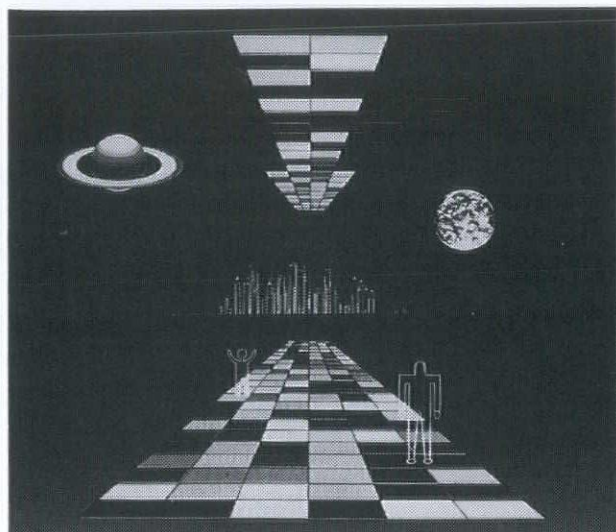
〒173 Tel 03-5248-7741

快適な環境を
つくります。

営業種目 設計・施工・監理

●電気設備

受変電、幹線
動力、制御装置
電話、放送、インターホン
防犯、防災
中央監視制御
システム計装



●空調・給排水・衛生設備

空調調和
工場配管
水処理
コージェネレーション
クリーンルーム

●プラント

プラント計装
システムエンジニアリング

●情報通信設備

情報通信ネットワーク
情報処理
通信システム
放送システム

●電力流通設備

受変電
架空送配電
地中送配電

人と都市の

活力と魅力にあふれるクリエイティブカンパニーをめざす。

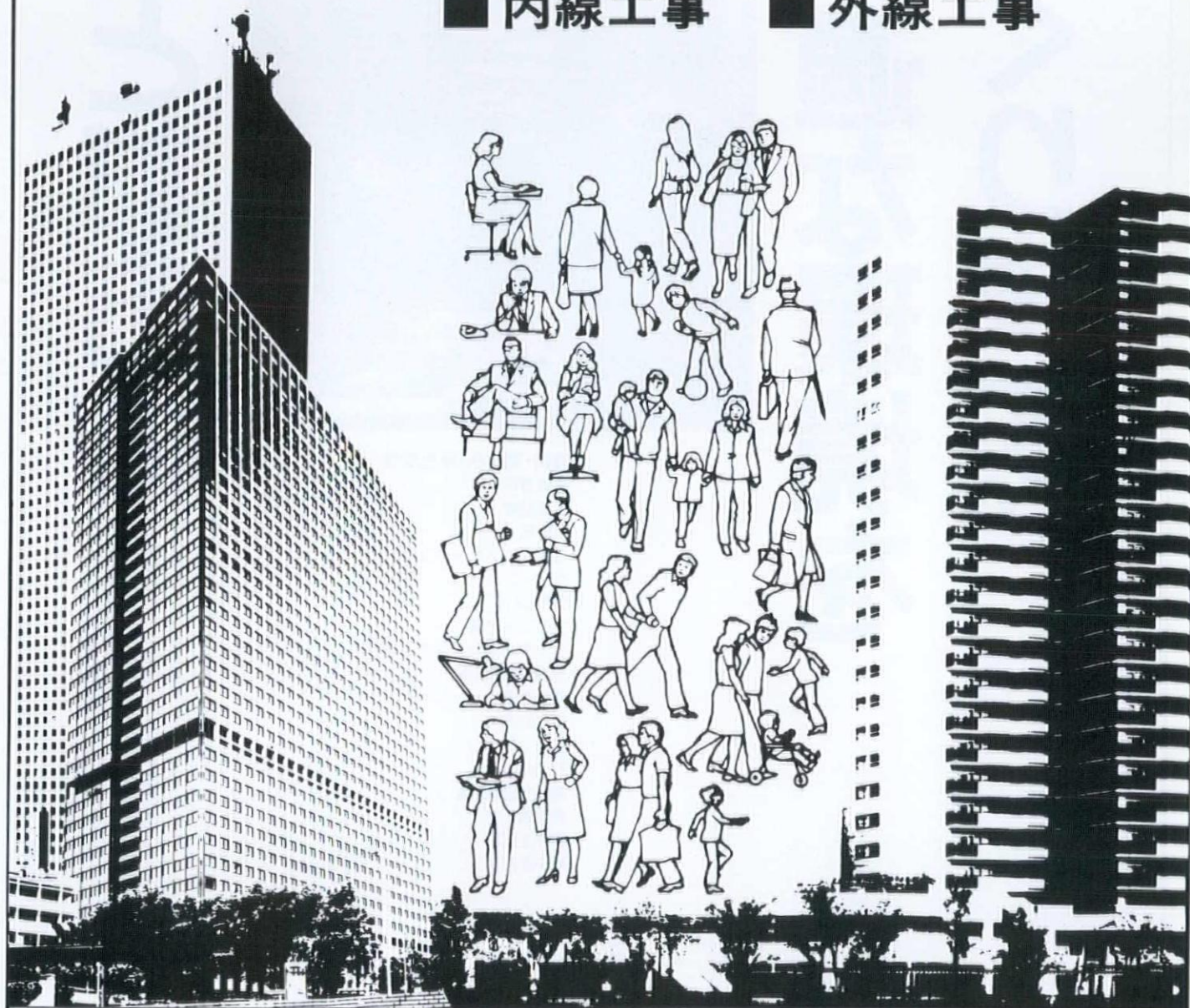


住友電設株式会社

大阪本社 〒550 大阪市西区阿波座2-1-4 ☎(06) 537-3400
東京本社 〒105 東京都港区芝2-2-17 ☎(03) 3454-7311

技術と伝統の...

■ 内線工事 ■ 外線工事



東光電気工事株式会社

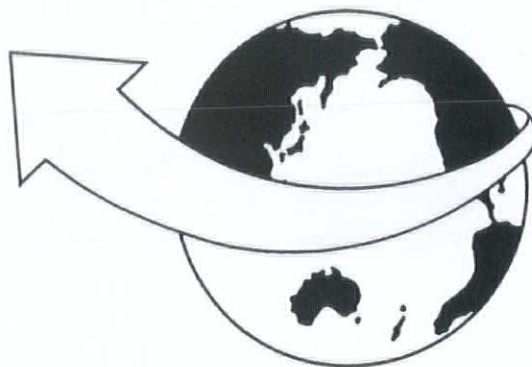
取締役社長 江 原 景

東京都千代田区西神田 1 - 4 - 5 千101 電話/東京 3292-2111

支社所在地/札幌・仙台・千葉・丸の内(東京)・新宿(東京)・横浜・名古屋・大阪・福岡

未来に向って...

限りある資源
限りある空間の中で
より快適な環境づくりの
ために努力しています。



●営業品目

空気調和・冷暖房・給排水・衛生設備・設計施工



株式会社朝日工業社

本社・東京支社 〒105 東京都港区浜松町 1-25-7 電話 03(3434)5 7 1 1
大 阪 支 社 〒532 大阪市淀川区加島 1-58-59 電話 06(302) 2 2 7 3
支 店 北海道／東北／北関東／横浜／名古屋／中国／九州



奥山化学工業株式会社

本 社 東京都中央区銀座8-4-9 奥山ビル TEL 03(3571)2703 代 FAX 03(3571)0264
大阪事務所 TEL 06(391)1081-2 FAX 06(395)2109 名古屋出張所 TEL 052(811)3660
横浜営業所 TEL 045(320)4832 FAX 045(320)4765 厚木出張所 TEL 0462(21)1761 FAX 0462(23)1341
埼玉営業所 TEL 048(774)2845-6 茨城出張所 TEL 0292(28)0878 FAX 0292(28)2614

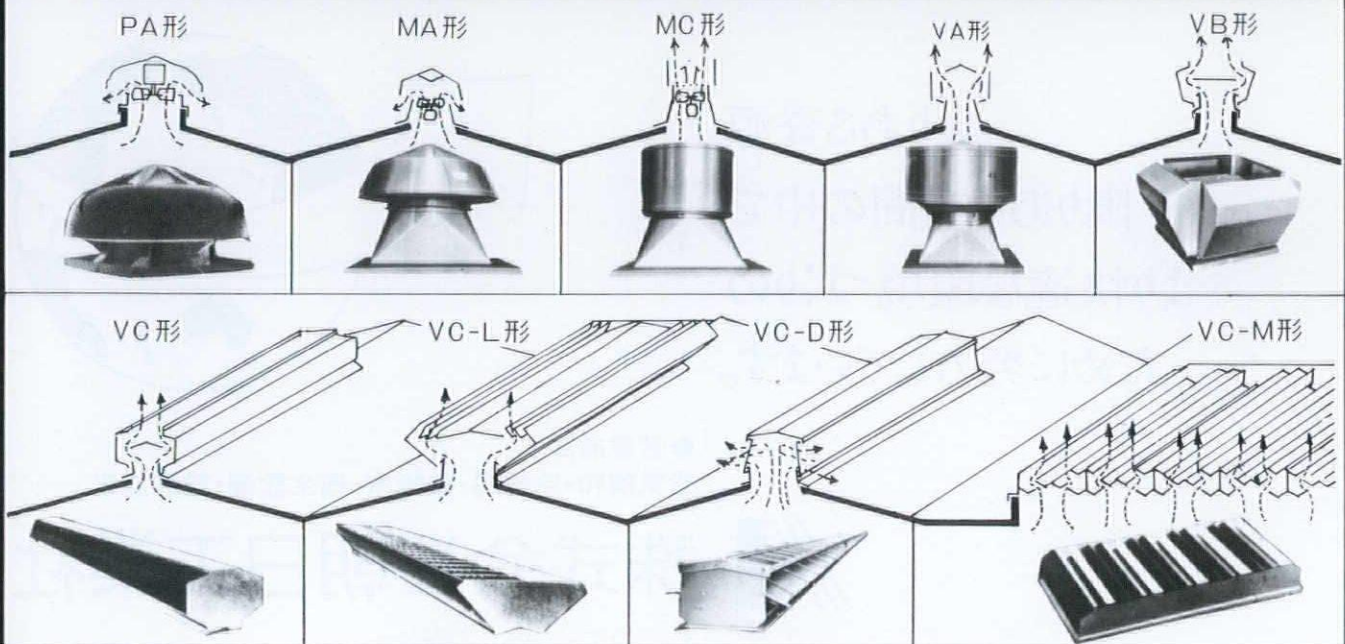
テトカッパー防水層

カッパー防水帯

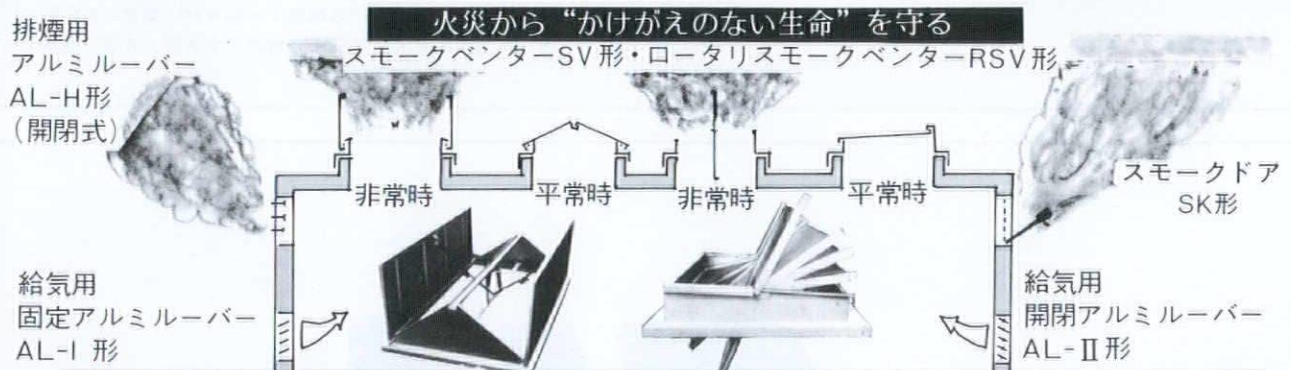
コーパータイト・オクロン防水帯

“自然の風”を効率よく招く坂本式ルーフベンチレータ群

強制換気・自然換気装置

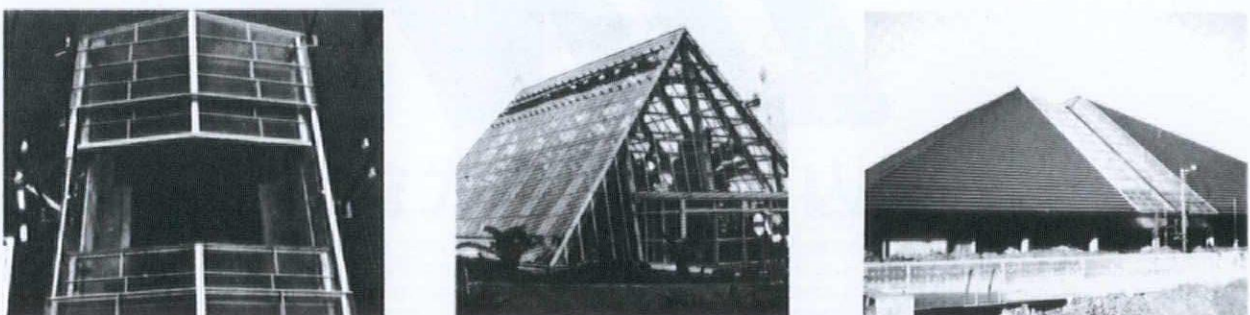


排煙・ルーバー装置



採光装置

“太陽の恩恵”を全身でウケとめる坂本式スカイライト



株式会社 坂 本 商 会

本 社	東京都中央区日本橋2-16-12(江戸ニビル)	〒103 電話 東京 (03)3271-5591(代)
松戸工場	千葉県松戸市松飛台420番地	〒270 電話 松戸 (0473)87-6595(代)
技術研究所	千葉県松戸市松飛台217番地	〒270 電話 松戸 (0473)87-3148
施工部	東京都墨田区東向島2丁目15番11号	〒131 電話 東京 (03)3619-2221(代)

SD誌に広告をお申込みの際は下記広告代理店にご用命ください(五十音順)

●共栄通信社

東京——東京都中央区銀座8-2-1

新田ビル (3572) 3381

FAX (3572) 3590

大阪——大阪市北区西天満3-6-8

笹屋ビル06 (362) 6515

FAX 06 (365) 6052

●建報社

東京——東京都文京区湯島2-30-8

(3818) 1961

FAX 03(3818)1968

大阪——大阪市中央区淡路町1-4-9

昭栄ビル06 (231) 4548

FAX 06 (227) 0268

●新建社

東京都中央区八丁堀2-1-10

ハヤシビル (3552) 8247(代)

FAX (3552) 8249

●中外

大阪——大阪市北区浪花町14-25

日本生命天六ビル06 (379) 1791

東京——東京都千代田区岩本町2-5-12

神田ポンビアンビル (3863) 6011(代)

名古屋——名古屋市中区錦2-2-13

名古屋センタービル052 (221) 7641(代)

ア	(株)朝日工業社	A21
エ	(株)エフ・アール・シー	表2
	NTT	102・103
オ	奥山化工業株	A21
カ	(株)関電工	A3
	鹿島	A4・A5
	軽井沢ホテル鹿島ノ森	A6
	川崎電気株	112
キ	(株)きんでん	113
サ	三機工業株	100
	(株)坂本商会	A22
シ	新日軽株	表4
	新菱冷熱工業株	A13
	昭和銅機株	A14
	昭和アステック株	105
ス	住友電設株	A19
タ	高砂熱学工業株	表3
	大興物産株	A7
	ダイダン株	A15
ト	(株)東芝	A24
	(株)トーエネック	A15
	東洋熱工業株	104
	東光電気工事株	A20
ナ	中立電気株	A12
ニ	日本電気株	A9
	日新工業株	A10
	(株)西原衛生工業所	A11
ヒ	日立電線株	112
フ	(株)ブリヂストン	A1
	富士電機株	108
ホ	ホテルイースト21	A8
マ	松下電器産業株	A2
ミ	三菱電機株	97
ヤ	矢崎総業株	A16
	山田照明株	109
	(株)ヤナセ	114

TOSHIBA

エネルギー・エレクトロニクス
E&Eの東芝

優しくされて、人は輝やく——
人と環境のあたたかなふれあい。
ルミナスの美学が、ここにある。

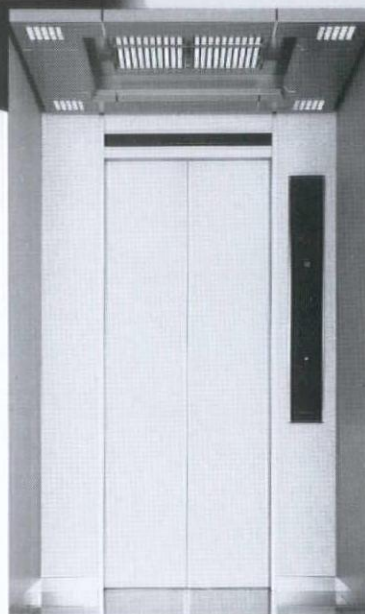
ルミナス・アメニティ。

- 人と環境の美しい調和をモチーフに設計された、ゆとり感覚あふれるニューデザイン。
- 快適な移動のために情報システムで制御された数々のインテリジェント機能を搭載。
- ヘリカルギヤを新採用し、大幅な省エネルギー化とランニングコストの低減化を実現。
- IGBTの採用と制御回路のデジタル化により、より静粛で滑らかな走行性能を発揮。

——人と環境のあたたかなふれあい——

——東芝ニューコンセプト標準形エレベーター——

エレメイト ルミナス◆
Luminous



●お問い合わせは… 株式会社 **東芝** 昇降機事業部 本社 〒105-01 東京都港区芝浦1-1-1(東芝ビルディング) ☎(03)3457-4613

北海道支社(011)214-2451 東北支社(022)264-7640~1 東関東支社(043)299-1017 神奈川支社(045)664-8611 北陸支社(0762)24-2815 中部支社(052)564-8510~4
関西支社(06)440-2261~3 中国支社(082)246-3090~1 四国支社(0878)25-2440~2 九州支社(092)735-3056